

殿山遺跡

殿山古墳群

1982年3月

岡山県教育委員会

文化課



殿山古墳群11号墳第4主体部出土の変形四獸鏡



殿山古墳群11号墳の全景（北から）

序

岡山県は、全国的に見ましても埋蔵文化財の多い所であります。なかでも総社市一帯は、県下有数の遺跡密集地として知られております。このため、文化財の保護保存については特に慎重に対処しており、その一部は吉備路風土記の丘として整備し、活用いただいております。

しかし、周辺の目につかない所では小規模な開発事業が進行しており、文化財の保護保存上各種の問題を生じております。三輪山の南端に位置する殿山遺跡と殿山古墳群の発掘調査は、企業による土取り計画地域にかかるため、昭和55・56両年度の国庫補助事業として、やむなく実施し記録保存の措置を行ったものであります。

発掘調査の結果、殿山遺跡からは弥生時代の集落の姿の一端が明らかとなり、また、殿山古墳群では弥生時代の墳丘墓や古墳時代前期の小規模古墳の実態が明らかになりました。こうした成果が今後の文化財の保護保存に活用され、また、考古学の研究資料として役立てば幸いでございます。

調査にあたっては、専門委員をはじめ総社市教育委員会、地権者である有限会社金池産業等、関係各位から多大の御指導と御協力をいただきました。さらに地元の方々には発掘作業にお骨折りいただきました。あわせて厚くお礼申し上げます。

昭和57年3月

岡山県教育委員会

教育長 佐藤 章一

例　　言

1. 本書は、岡山県教育委員会が国庫補助を受けて実施した「殿山遺跡、殿山古墳群緊急発掘調査」の報告である。
2. 遺跡は総社市三輪に所在する。
3. 発掘調査は平井 勝が担当し、専門委員の指導助言を得ながら、1980年4月21日から9月19日、1981年4月20日から7月2日まで実施した。
4. 出土遺物の整理は文化課分室にて行い、報告書作成後は同所に保管している。
5. 本報告書の執筆・編集は専門委員の指導助言を得ながら平井 勝が行った。
なお付載1は川中健二岡山理科大学助教授より玉稿をいただいた。また付載2は島崎東の執筆によるものである。
6. 遺物整理、報告書作成にあたっては下記の方々の協力を得た。記して感謝の意を表したい。
山本悦世（文化課分室・現岡山大学）、北村智子（文化課分室）、清水恵子（文化課分室）、龟田菜穂子（文化課分室）、網本善光（筑波大学）、武田恭彰（中央大学）、長谷川一英（奈良大学）

7. 凡　例

- a. 第2図の地形図は国土地理院の25,000分の1の地図（総社西部、総社東部、箭田、倉敷）を複製したものである。
- b. レベルは海拔高度を示す。
- c. 方位は第1図と第2図以外磁北を示す。

目 次

序 文

例 言

第Ⅰ章 調査の経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的景観	4
第Ⅲ章 調査の経過	11
第Ⅳ章 殿山遺跡	15
第1節 調査の概要	15
第2節 遺構と遺物	17
第Ⅴ章 殿山古墳群	25
第1節 位置と現状	25
第2節 8号墳の調査	27
第3節 9号墳の調査	36
第4節 10号墳の調査	46
第5節 11号墳の調査	53
第6節 12号墳の調査	65
第7節 13号墳の調査	69
第8節 14号墳の調査	73
第9節 15号墳の調査	77
第10節 16号墳の調査	81
第11節 21号墳の調査	84
第12節 古墳以外の墳墓	89
第13節 その他の遺構	93
第Ⅵ章 古墳の考察	95
第1節 墳形と規模	95
第2節 埋葬施設	96
第Ⅶ章 古墳出土遺物の考察	99
第1節 土器	99
第2節 鑄造鉄斧	103

第3節	副葬品	106
第VII章	詰語	115
第1節	古墳の年代と墳丘墓	115
第2節	殿山古墳群と地域集団	119
付載1	殿山古墳群出土人骨について	121
付載2	殿山東尾根表探の埴輪について	127

図 目 次

第1図	遺跡の位置	1
第2図	三輪丘陵周辺の遺跡分布図 (S=1:25000)	5
第3図	三輪丘陵の古墳分布図 (S=1:7500)	7
第4図	殿山遺跡・殿山古墳群地形図	12
第5図	殿山遺跡・殿山古墳群全体図	15
第6図	殿山遺跡全体図	16
第7図	1号住居址	18
第8図	1号住居址出土の土器(1)	19
第9図	1号住居址出土の土器(2)	20
第10図	2号住居址	22
第11図	2号住居址出土遺物	23
第12図	土 墓	24
第13図	土壤出土の土器	24
第14図	殿山古墳群全体図	26
第15図	8号墳調査前の墳丘	27
第16図	調査後の墳丘	28
第17図	墳丘縦横断面図	29
第18図	周溝内遺物分布図	30
第19図	周溝内出土の鋳造鉄斧	30
第20図	周溝内出土の土師器(1)	31
第21図	周溝内出土の土師器(2)	32
第22図	主 体 部	33
第23図	主体部の鉄製品	34

第 24 図	主体部の玉類	34
第 25 図	9号墳調査前の墳丘	36
第 26 図	調査後の墳丘	37
第 27 図	墳丘縦横断面図	38
第 28 図	周溝内出土遺物	39
第 29 図	第 1 主体部	40
第 30 図	鏡と玉の出土状態	41
第 31 図	第 1 主体部出土の鏡	41
第 32 図	第 1 主体部出土の玉類	42
第 33 図	第 1 主体部出土の鉄製品	42
第 34 図	第 2 主体部	44
第 35 図	第 2 主体部副葬品分布図	45
第 36 図	第 2 主体部副葬品	45
第 37 図	10号墳調査前の墳丘	46
第 38 図	調査後の墳丘	47
第 39 図	墳丘縦横断面図	48
第 40 図	墳丘の遺物	49
第 41 図	第 1 主体部	49
第 42 図	第 1 主体部玉類	50
第 43 図	第 1 主体部剣	50
第 44 図	第 1 主体部鏡	50
第 45 図	第 2 主体部	51
第 46 図	第 3 主体部	52
第 47 図	11号墳調査前の墳丘	54
第 48 図	調査後の墳丘	55
第 49 図	墳丘縦横断面図	56
第 50 図	周溝内出土の遺物	57
第 51 図	第 1 主体部	58
第 52 図	第 2 主体部	59
第 53 図	第 2 主体部小玉	59
第 54 図	第 3 主体部管玉	59
第 55 図	第 3 主体部	60

第 56 図	第 4 主 体 部	61
第 57 図	第 4 主体部南端遺物分布図	62
第 58 図	第 4 主体部の鏡	62
第 59 図	第 4 主体部の鉄製品	62
第 60 図	第 4 主体部の玉類	63
第 61 図	12号墳調査前の墳丘	65
第 62 図	調 査 後 の 墳 丘	66
第 63 図	墳丘縦横断面図	67
第 64 図	墳丘出土の遺物	68
第 65 図	副葬品 分 布 図	68
第 66 図	副 葬 品	68
第 67 図	13号墳調査前の墳丘	69
第 68 図	調査 後 の 墳 丘	70
第 69 図	墳丘縦横断面図	71
第 70 図	第 1 主 体 部	72
第 71 図	第 1 主体部副葬品	72
第 72 図	第 2 主 体 部	72
第 73 図	14号墳調査前の墳丘	73
第 74 図	調査 後 の 墳 丘	74
第 75 図	墳丘縦横断面図	75
第 76 図	第 1 主体部（右）と第 2 主体部（左）	76
第 77 図	15号墳調査前の墳丘	77
第 78 図	調査 後 の 墳 丘	78
第 79 図	墳丘出土の遺物	78
第 80 図	墳丘縦横断面図	79
第 81 図	第 1 主体部（右）と第 2 主体部（左）	80
第 82 図	第 2 主体部副葬品	80
第 83 図	16号墳調査前の墳丘	81
第 84 図	調 査 後 の 墳 丘	82
第 85 図	墳 丘 の 遺 物	82
第 86 図	墳丘縦横断面図	83
第 87 図	21号墳調査後の墳丘	84

第88図	墳丘断面図	85
第89図	墳丘・周溝出土遺物	85
第90図	第1主体部	86
第91図	第2主体部	88
第92図	1号箱式石棺墓	89
第93図	2号箱式石棺墓	90
第94図	2号箱式石棺墓の遺物	91
第95図	配石土壙墓	92
第96図	土壙墓	92
第97図	土壙の位置図	93
第98図	1号土壙	94
第99図	2号土壙	94
第100図	3号土壙	94
第101図	主体部計測分布図	96
第102図	鋳造鉄斧編年図	104
第103図	管玉計測値分布図	110
第104図	殿山東尾根採集の埴輪実測図(1)	128
第105図	殿山東尾根採集の埴輪実測図(2)	129

表 目 次

表 1	三輪丘陵の古墳群一覧表	8
表 2	8号墳第1主体部玉類計測表	35
表 3	9号墳第1主体部玉類計測表	43
表 4	11号墳第4主体部玉類計測表	64
表 5	殿山古墳群出土土器対比一覧表	101
表 6	古墳時代の鋳造鉄斧出土地名表	105
表 7	岡山県の玉類一覧表	111
表 8	前期古墳の時期区分と土器対比表	115
表 9	殿山古墳群調査結果一覧表	120
表 10	頭蓋骨計測値および示数	125
表 11	四肢骨計測値および示数	126

図 版 目 次

- 図版 1 殿山遺跡・殿山古墳群全景（南から）
- 図版 2 1. 三輪丘陵遠景（西から）
2. 三輪丘陵遠景（南から）
- 図版 3 1. 殿山遺跡・殿山古墳群遠景（東から）
2. 殿山遺跡近景（東から）
- 図版 4 1. 殿山遺跡調査風景（北から）
2. 殿山遺跡全景（北から）
- 図版 5 1. 1号住居址（南から）
2. 1号住居址（南西から）
- 図版 6 1号住居址出土の土器(1)
- 図版 7 1号住居址出土の土器(2)
- 図版 8 1. 2号住居址（西から）
2. 土壙（西から）
- 図版 9 2号住居址出土の土器(1)
- 図版10 1. 2号住居址出土の土器(2)
2. 土壙出土の土器
- 図版11 1. 1号住居址出土の石器
2. 2号住居址出土の石器
- 図版12 1. 殿山古墳群昭和55年度調査風景（13号墳墳丘測量）
2. 昭和55年度調査風景（8号墳表土剝ぎ）
- 図版13 1. 昭和55年度調査風景（21号墳主体部検出作業）
2. 昭和55年度調査風景（11号墳第2主体部の実測）
- 図版14 1. 昭和56年度調査区全景（南から）
2. 昭和56年度調査完了後の全景（北から）
- 図版15 1. 昭和56年度調査風景（14号墳）
2. 昭和56年度調査風景（13号墳周溝）
- 図版16 1. 8号墳調査前の墳丘（北東から）
2. 主体部（北東から）

図版17 1. 調査後の墳丘（北東から）

2. 周溝断面（東から）

図版18 1. 周溝内土師器出土状態（北東から）

2. 周溝内鋳造鉄斧出土状態（南東から）

図版19 1. 8号墳周溝内出土の鋳造鉄斧

2. 8号墳周溝内出土の土師器

図版20 副葬品（鉄製品<上>, 玉類<下>）

図版21 1. 9号墳調査前の墳丘（北東から）

2. 第1主体部<向う側>と第2主体部<手前>（北東から）

図版22 1. 第1主体部の鏡出土状態（東から）

2. 第1主体部（北から）

図版23 1. 第1主体部北端遺物出土状態（西から）

2. 第2主体部検出状態（東から）

図版24 1. 第2主体部蓋石除去後（南西から）

2. 調査後の墳丘（北東から）

図版25 第1主体部の副葬品（鏡<上>, 玉類<下>）

図版26 1. 第1主体部の副葬品（鉄製品）

2. 第2主体部の副葬品

図版27 1. 10号墳調査前の墳丘（北東から）

2. 第1主体部<右>と第3主体部<左>（南から）

図版28 1. 第1主体部（南から）

2. 第1主体部北端遺物出土状態（東から）

図版29 1. 第2主体部検出状態（北東から）

2. 第2主体部蓋石除去（北東から）

図版30 1. 第3主体部（南西から）

2. 調査後の墳丘（北から）

図版31 第1主体部の副葬品

図版32 1. 11号墳調査前の墳丘（北から）

2. 調査後の墳丘（北から）

図版33 1. 周溝（東から）

2. 列石と西側周溝（北から）

図版34 1. 第1主体部検出状態（北から）

2. 第1主体部（北から）

図版35 1. 第2主体部（南から）

2. 第3主体部検出状態（北西から）

図版36 1. 第3主体部蓋石除去（東から）

2. 第3主体部床面（南から）

図版37 1. 第4主体部（北から）

2. 第4主体部北端（北から）

3. 第4主体部南端（東から）

図版38 1. 西側の周溝と配石土壙

2. 周溝内出土の土器

図版39 1. 第2主体部副葬品

2. 第3主体部副葬品

3. 第4主体部副葬品(1)

図版40 第4主体部副葬品(2)

図版41 1. 12号墳調査前の墳丘（北から）

2. 調査後の墳丘（北から）

図版42 1. 墳頂部の枕石と副葬品出土状態

2. 副葬品

図版43 1. 13号墳調査前の墳丘（北から）

2. 表土除去後の墳丘（北から）

図版44 1. 調査後の墳丘（北から）

2. 第1主体部<向う側>・第2主体部<手前>（北から）

図版45 1. 第1主体部（東から）

2. 第1主体部（東から）

図版46 1. 墳丘断面<S線>（北東から）

2. 墳丘断面<N線>（北東から）

図版47 1. 周溝断面（東から）

2. 第1主体部副葬品

図版48 1. 14号墳調査前の墳丘（北から）

2. 14号墳調査後の墳丘（南から）

図版49 1. 表土除去後の墳丘（南から）

2. 調査後の墳丘（北から）

- 図版50 1. 第1主体部<向う側>と第2主体部<手前>（北から）
2. 周溝断面（東から）
- 図版51 1. 15号墳調査前の墳丘（北から）
2. 15号墳調査前の墳丘（南から）
- 図版52 1. 表土除去後の墳丘（南から）
2. 調査後の墳丘（北から）
- 図版53 1. 第1主体部と墳丘断面<S線>（北東から）
2. 第2主体部（北東から）
- 図版54 1. 周溝断面（東から）
2. 墳丘出土の土器
3. 第1主体部副葬品
- 図版55 1. 16号墳調査前の墳丘（南から）
2. 調査後の墳丘（南から）
- 図版56 1. 周溝<北側>断面（東から）
2. 墳丘出土の土器
- 図版57 1. 21号墳全景（北から）
2. 第1主体部<右>と第2主体部<左>（西から）
- 図版58 1. 第1主体部検出状態（西から）
2. 第1主体部蓋石除去直後（右は東から、左は西から）
- 図版59 1. 人骨出土状態（西から）
2. 床面の状態（西から）
- 図版60 1. 第2主体部横断面（西から）
2. 第2主体部（北から）
- 図版61 1. 第2主体部墓壙（西から）
2. 調査後の墳丘（北西から）
- 図版62 1. 1号箱式石棺墓検出状態（北東から）
2. 蓋石除去後（北西から）
- 図版63 1. 2号箱式石棺墓検出状態（北から）
2. 蓋石除去後（北から）
- 図版64 1. 墓壙（北から）
2. 墓壙内出土遺物
- 図版65 1. 配石土壙墓検出状態（東から）

2. 配石除去後（東から）

図版66 1. 1号土壤

2. 2号土壤

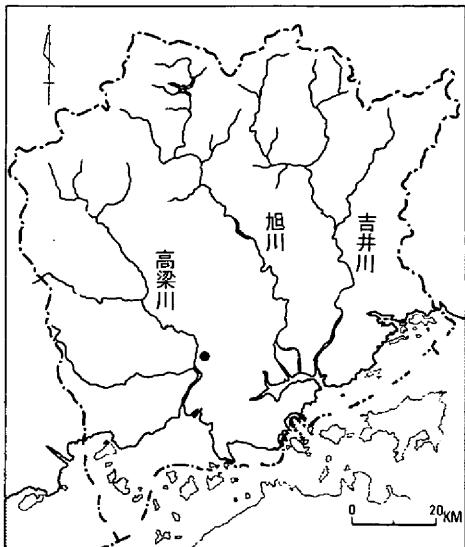
図版67 9号墳第2主体部出土頭蓋骨

図版68 21号墳第1主体部第1号人骨

図版69 21号墳第1主体部第2号人骨

第Ⅰ章 調査の経緯

I 調査に至る経過



第1図 遺跡の位置

岡山県の南西部、高梁川から足守川にいたる総社市、山手村、岡山市新庄下の地域は、造山古墳、作山古墳、こうもり塚古墳などの大形古墳を含む県下有数の古墳密集地である。殿山古墳群はその一角、総社平野南部の三輪丘陵南端に位置する。この三輪丘陵には弥生時代終末から古墳時代初頭の宮山墳墓群、鎧物師谷墳墓群をはじめ、天望台古墳、三笠山古墳など4～5世紀の前方後円墳や小規模な古墳、さらに横穴式石室を主体とする後期古墳まで多くの古墳が認められる。

ところが、この一帯の丘陵は質の良い真砂土であることから、いたる所で虫食い状態に土砂採取が行われており、埋蔵文化財の保護、保存上苦慮しているところもある。

殿山古墳群の所在する丘陵も東側から土取りが進行し、さらに県道清音真金線を隔てた山手村側一帯は無残にも山肌をさらけ出している。こうした中で昭和54年7月に総社市教育委員会より「かねてから殿山の東側で進行していた土取りが古墳群にまで及ぶ計画であり、現在一部中腹までブルトーザーが走っている」との連絡が文化課にあった。さっそく7月16日に総社市教育委員会の案内で現地踏査を行ったが、一部尾根中腹までブルトーザーが走っており、円筒埴輪片や弥生式土器の散布が認められた。このことからすでに破壊されてはいるが、古墳が所在したこと、さらに弥生時代の遺跡が残存している可能性が考えられた。また尾根稜線上の古墳群についても立木伐採途中ではあったが5基の古墳を確認した。

この結果をもとに土取り業者の金池産業と協議を行い、とりあえず確認された遺跡の範囲をロープで明示しておくので、その中に重機を入れないよう申し入れた。そして遺跡（総社市三輪1578）については新発見であることから、文化財保護法第57条の6に基づき昭和54年7月6日付で有限会社金池産業代表取締役金池涉より遺跡発見届を提出させた。つづいて昭和54年

8月27日付けで殿山遺跡・殿山古墳群の発掘届（文化財保護法57条の2第1項）が金池産業より提出された。これをうけて文化課と総社市教育委員会及び金池産業の三者で協議を重ねた。その結果このまま放置しておけば自然に崩壊してしまう可能性もあり、また金池産業の経済的事情からも、やむなく全面発掘調査を行うこととなった。

II 調査の体制

発掘調査は昭和55年度国庫補助（一部原因者負担）事業として、岡山県教育委員会が専門委員の指導助言のもとに実施することとなった。

調査は昭和55年4月23日より開始したが、土取り計画区域内の立木伐採中に4期の古墳が、発掘調査中にさらに1基が確認され合計10基になった。このため昭和56年度は8号墳から12号墳の5基と21号墳の計6基を調査し、残り4基（13号墳から16号墳）は昭和56年度に行うこととした。

昭和56年度の調査は昭和55年度と同様の体制で、昭和56年4月20日より開始し7月2日まで実施した。なお調査にあたっては文化庁記念物課河原純之主任文化財調査官の現地指導を得たほか、総社市教育委員会をはじめ、地権者等関係各位には終始温かい援助をいただいた。また発掘作業については地元住民の方々に協力を得た。記して厚くお礼申し上げます。

調査組織

昭和55年度（1980年度）

専門委員 鎌木義昌（岡山理科大学教授、岡山県文化財保護審議会委員）

近藤義郎（岡山大学教授、岡山県文化財保護審議会委員）

中田啓司（矢掛高等学校教諭）

間壁忠彦（倉敷考古館館長）

水内昌康（岡山女子看護専門学校教頭、岡山県文化財保護審議会委員）

教育庁文化課 課長 近藤信司

課長補佐 吉光一修

文化財二係長 河本 清

主任 田中建治

文化財保護主事 松本和男

〃 柳瀬昭彦

〃 平井 勝

〃 江見正己

調査員 平井 勝

調査補助員 山本悦世（文化課分室、現岡山大学）

調査参加者 高田明人（広島大学、現総社市教育委員会），網本善光（筑波大学），武田恭彰（中央大学），長谷川一英（奈良大学），木田律子（大谷大学），宇垣匡雅（岡山大学、現岡山大学助手）

作業員 横田武夫，木口秀市，牧野勘一，阿部辰雄，中島稔，新谷悦雄，梶谷武志，横田勝子，近藤清子，渡辺好子，近藤佐知子，山本トヨ，中村多喜，中村常子，久保八重子，江口重子，江口八重子，若林菊江，風早喬子，那須幸子

昭和56年度（1981年度）

専門委員 鎌木義昌（岡山理科大学教授、岡山県文化財保護審議会委員）

近藤義郎（岡山大学教授、岡山県文化財保護審議会委員）

中田啓司（矢掛高等学校教諭）

間壁忠彦（倉敷考古館館長）

水内昌康（岡山女子看護専門学校教頭、岡山県文化財保護審議会委員）

教育庁文化課 課長 早田憲治

課長代理 吉光一修

埋蔵文化財係長 河本 清

主任 田中建治

文化財保護主査 松本和男

“ 柳瀬昭彦

文化財保護主事 平井 勝

“ 江見正己

調査員 平井 勝

作業員 阿部辰雄，中島稔，新谷悦雄，久保八重子，若林菊江，風早淑子

なお発掘調査にあたっては総社市教育委員会社会教育課（課長茅野健二）より多大な協力を得たほか、秋山律郎主事には現地との連絡調整等多大な協力を得た。また下記の方々からは温かい援助・御指導を得た。あわせて厚くお礼申し上げます。

教育庁文化課 伊藤 晃（現県史編纂室），浅倉秀昭，平井泰男，亀田菜穂子（分室）

県史編纂室 葛原克人

総社市教育委員会 村上幸雄，高田明人，谷山雅彦

総社市市史編纂室 加藤信二

第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的景観

I 遺跡の位置と地理的景観

岡山県三大河川の一つである高梁川は、県西部を北から南に流れる。この高梁川は中国山地に源を発し、山合を縫うように南流する。中流域の新見市と高梁市で若干沖積地が形成されるが、それ以外は両側に山が迫っており、極めて視界が悪い。この高梁川の視界が一気に拡がるところに総社市は位置し、ここより下流域は広い沖積地が両岸に形成されている。

総社市の市街地は高梁川の東岸に形成された広い沖積地上にある。この沖積地の北側は低丘陵が連なっており、さらに北側は標高500m前後の吉備高原となる。東側は小独立丘陵があるものの岡山市まで沖積地が続く。南側には福山、仕手倉山など標高200～300mの山が連なり、その南側は倉敷市となり瀬戸内海まで沖積地が続く。

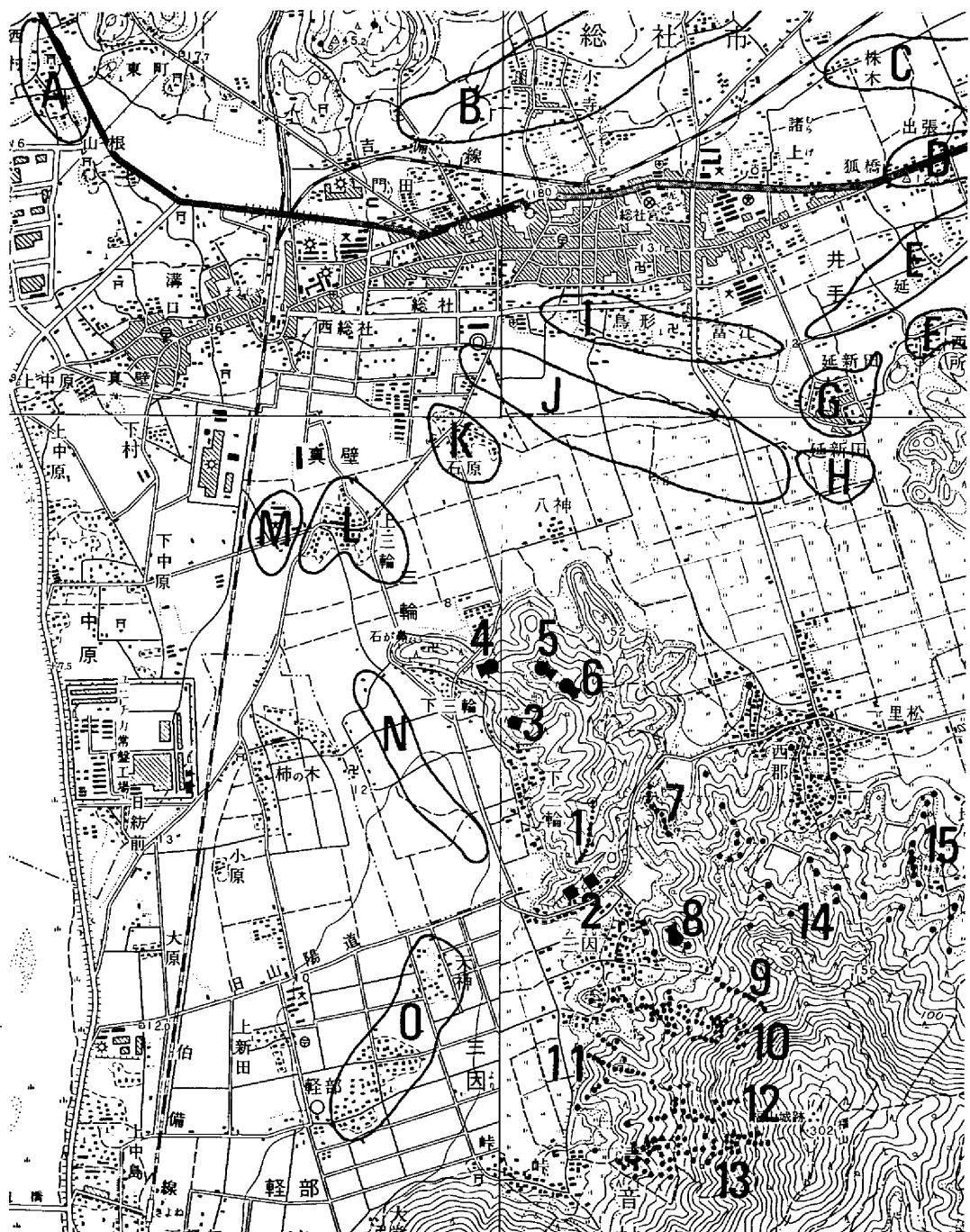
遺跡の所在する三輪丘陵は、巨視的に見れば南側の福山から北に派生した低丘陵であるが、総社平野に張り出していることから一見独立丘陵に見える。この丘陵は行政区画上は大部分が総社市三輪に含まれるが、東側の一部が山手村に、南側の一部が清音村に属する。

ここでいま少し詳細に三輪丘陵を見てみよう。丘陵の最高峰は中央から南に寄った大師で、標高96.3mを測る。ここから北へはいくらかの高まりや小尾根を派生させながら、北端に細長く突出した船山にいたる。一方北西へも大きな尾根が延びており、宮山からさらに西へ細長く突出している。また南側へ派生しているのが遺跡の所在する殿山で、南端は清音村に入り西へ折れながら沖積地に突出している。この殿山の最高所は標高81mで、視界は若干北東へも開けるが、西側から南側の高梁川方面への視界が一番良好である。

殿山の東側山裾には旧山陽道が通っており、その側を旧県道真金清音線が福山の山裾と三輪丘陵を分断するように通っている。この旧県道の両側では真砂土の採取が大規模に行なわれており、その一つが今回調査の契機となった殿山東斜面の土取りである。また現在は旧県道真金清音線が改良され、殿山南端の総社市と清音村の境を通る新県道真金清音線が開通した。

II 歴史的景観

三輪丘陵の北側、あるいは西側の沖積地にはかつて高梁川の分流が網目状に南流、あるいは東流していたと考えられる。今日その痕跡は水田の区画、水路等に残されており、これをもとにさらには微細な土地の高低により旧河道の復元がなされつつある。その一つに高梁川本流か



- | | | | | |
|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|
| 1. 殿山古墳群 | 2. 鎔物師谷古墳墓群 | 3. 柳坪遺跡 | 4. 宮山古墳 | 5. 天望台古墳 |
| 6. 三笠山古墳 | 7. 持坂古墳群 | 8. 妙蓮寺古墳群 | 9. 山地古墳群 | 10. 天神古墳群 |
| 11. 万葉古墳群 | 12. 堂屋敷古墳群 | 13. 峠古墳群 | 14. 西郡古墳群 | 15. 地頭古墳群 |
| J. 真壁遺跡 | A~O. 微高地 | | | |

第2図 三輪丘陵周辺の遺跡分布図 (S = 1 : 25000)

ら「鳥形」「富江」を通り「井手」から三輪丘陵の北側を東流し、やがて足守川と合流する「宮瀬川」（註1）と言われている大きな河道がある。この河道から北はおおよそ古代の賀夜郡となり、南側が殿山遺跡の位置する窪屋郡となる。

こうした郡境になったとも考えられる大きな河道の存在は、それ以前の社会、とりわけ古墳時代の集団を区分する大きな要素となりうる。こう考えると殿山古墳群、あるいはもっと大きな単位で言えば三輪丘陵上に展開された首長墓の造営と深くかかわるのは、前述した河道より南側を生産の場とした集団と考えられる。よってここでは主に南側の歴史的環境を述べることとする（註2）。

縄文時代・弥生時代

縄文時代の遺跡は三輪丘陵の北側沖積地に位置する真壁遺跡（註3）がある。遺跡は縄文時代から中世に至る複合遺跡で、早期の押型文土器、あるいは後晩期の土器が出土しているが遺構は明確でない。現在調査中であり詳細についてはまだ明らかにされていない。

弥生時代になると三輪丘陵周辺の微高地上には人が住みはじめたと考えられるが、現在確認されているのは前述した真壁遺跡のみである。前期からほぼ全般にわたる遺構遺物があるものと思われるが、現在調査中でその全貌は明らかでない。真壁遺跡の所在する微高地（自然堤防）は三輪丘陵周辺では一番大きく、この北辺を「宮瀬川」が東流している。

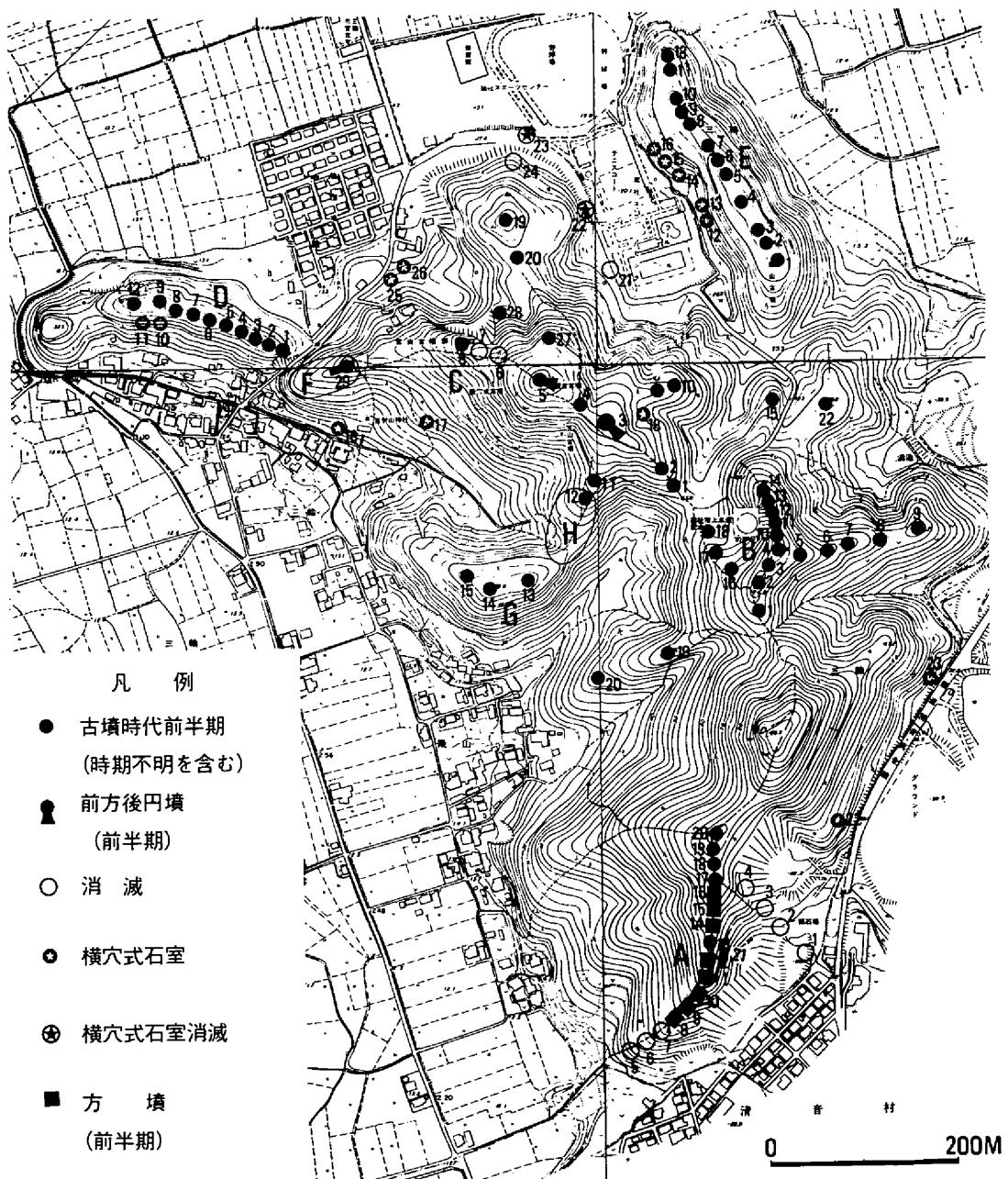
このような沖積地の遺跡に対し、弥生時代の後期末になると低丘陵上に墳墓がつくられるようになる。三輪丘陵ではこうした墳墓が多く確認されている。総社平野を眺望する尾根上には宮山墳墓群（註4）が、その南側尾根上には柳坪遺跡がある。またその中間の宮山南東側には、後期中頃から後半にかけての丹塗り土器が出土しており、埋葬遺構が推定される。

丘陵南端尾根上にはすでに破壊されてしまったが、鎌物師谷墳墓群（註5）が所在した。こうした墳墓群中には土壙墓や箱式石棺墓などもあるが、中には方形、あるいは前方後円形状の墳丘を有するものなどがあり、古墳出現前夜の複雑な様相を示している。

古墳時代

古墳時代の集落の様相は全くといって良いほど明らかではなく、現在調査中の真壁遺跡で断片的に遺構遺物が検出されているにすぎない。

これに対し古墳は周辺の丘陵上に多数見い出される。まず三輪丘陵を見ると、前述した宮山墳墓群の東側、標高80mの眺望の良い尾根頂部に全長約40mの天望台古墳がある。かつて壺形埴輪が出土し、また古墳の外形などから4世紀中頃の築造と考えられる。その南側尾根稜線上に築造された全長約75mの三笠山古墳は三輪丘陵では最大である。時期はザル形土器、家形埴輪が出土していることから4世紀末、あるいは5世紀初頭と考えられる。こうした同一尾根上に形成された宮山墳墓群中の宮山古墳、天望台古墳、三笠山古墳は三輪丘陵周辺の微高地を生



第3図 三輪丘陵の古墳分布図 (S = 1 : 7500)

表1 三輪丘陵の古墳群一覧表

A 殿山古墳群

番号	古墳名	所在地	古墳概要
1	1号墳	殿山	箱式石棺
2	2	"	?
3	3	"	横穴式石室、西川氏発掘
4	4	"	?
5	5	"	畠地開墾
6	6	"	消滅
7	7	"	消滅、箱式石棺
8	8	"	方墳
9	9	"	"
10	10	"	"
11	11	"	"
12	12	"	方形
13	13	"	円形
14	14	"	方形
15	15	"	"
16	16	"	"
17	17	"	?
18	18	"	?
19	19	"	?
20	20	"	?
21	21	"	方形

B 岩屋古墳群

番号	古墳名	所在地	古墳概要
1	1号墳	三須	円墳(径6m, 高1m)
2	2	"	"(径17m, 高2m)
3	3	"	"(径9m, 高2m)
4	4	"	"(径13m, 高4m)
5	5	"	"・1965年盗掘
6	6	"	"
7	7	"	"・箱式石棺
8	8	"	"
9	9	"	箱式石棺
10	10	"	円墳(径10m, 高1m)
11	11	"	"(径13m, 高2.5m)
12	12	"	"(径6m, 高1.0m)
13	13	"	"(径6.0m, 高1.2m)
14	14	"	"(径8.0m, 高1.0m)
15	15	"	"(径12.0m, 高1.0m)
16	16	"	箱式石棺の石材確認
17	17	"	"
18	18	"	?
19	19	"	"
20	20	"	(径12m, 高2m)
21	21	"	墳丘平坦化
22	22	"	"

C 宮山古墳群

番号	古墳名	所在地	古墳概要
1	1号墳	宮山	円墳・石材散乱
2	2	"	墳丘流失
3	三笠山古墳	"	前方後円墳(長75m)
4	4	"	円墳(径16m, 高2m)
5	天望台古墳	"	前方後円墳(長40m)
6	6	"	円墳(径5m, 高0.5m)
7	7	"	"(径7m, 高0.5m)
8	8	"	"(径8m, 高1.5m)

番号	古墳名	所在地	古墳概要
9	9号墳	宮山	円墳(径12m, 高3m)
10	10	"	"(径10m, 高2.5m)
11	11	"	"(径10m, 高1m)
12	12	"	円墳・箱式石棺
13	13	"	"(径11m, 高1.5m)
14	14	"	円墳?・開墾のため平坦化
15	15	"	"?
16	16	"	円墳・横穴式石室
17	17	"	"?
18	18	"	"?
19	19	"	円墳(径15m, 高2m)
20	20	"	"(径5m)
21	21	"	"
22	22	"	"(径6m, 高2m)
23	23	"	"・横穴式石室
24	24	"	箱式石棺? 鎌木氏発掘
25	25	"	横穴式石室
26	26	"	"
27	27	"	円墳
28	28	"	円墳(径7m, 高3m)
29	宮山古墳	"	竪穴式石室

D 下三輪古墳群

番号	古墳名	所在地	古墳概要
1	1号墳	下三輪	円墳(径7m, 高1.5m)
2	2	"	"・平坦化
3	3	"	円墳・平坦化
4	4	"	箱式石棺
5	5	"	墳丘流失
6	6	"	"
7	7	"	"
8	8	"	箱式石棺の可能性大
9	9	"	墳丘流失・石室の存在は不明
10	10	"	"
11	11	"	横穴式石室(玄室長4.9m)
12	12	"	墳丘平坦化

E 船山古墳群

番号	古墳名	所在地	古墳概要
1	1号墳	三須	箱式石棺
2	2	"	墳丘流失
3	3	"	"
4	4	"	円墳(径12m, 高2.0m)
5	5	"	"(径6.0m, 高1.0m)
6	6	"	墳丘流失(径10m, 高0.5m)
7	7	"	"(径10m, 高2m)
8	8	"	"(径8m, 高1.5m)
9	9	"	墳丘平坦化
10	10	"	?
11	11	"	墳丘平坦化
12	12	"	横穴式石室
13	13	"	横穴式石室
14	14	"	横穴式石室
15	15	"	"
16	16	"	"
17	17	"	?
18	18	"	箱式石棺 自然崩壊?

産基盤とした地域集団の首長が系列的に築造したものであろう。これに続く前方後円墳はこの三輪丘陵上には見い出しえない。

ところでこうした首長墓とは異なる小規模古墳が丘陵上には多数認められる。今回調査を行なった殿山古墳群の北側には岩屋古墳群が、その北側の細長い尾根上には船山古墳群、この西側は宮山古墳群、さらに西側に細長く張り出した尾根上にある下三輪古墳群などである。各古墳の内容は明らかでないが、主体部は箱式石棺や木棺直葬と考えられ、4世紀から6世紀中葉の横穴式石室が導入され一般化するまで築造されたものが多いと推定される。概してこれらの古墳群中には横穴式石室を有する古墳は少ないが、かつて三輪山6号墳として報告された（註6）古墳は、初期の横穴式石室として注目されるもので、須恵器から6世紀の前半と考えられる。したがってこの時期にこの地域では横穴式石室が導入されたものと考えられる。

次に三輪丘陵を離れて東側の山手村の低丘陵に目を転じてみよう。福山の北側山裾であるが、ここにも小規模古墳が多く認められる。まず殿山に接する所には持坂古墳群（註7）が、その東には西郡古墳群が続く。これらの古墳群も多くは横穴式石室出現前のものが多く、横穴式石室を有する古墳は若干点在するにすぎない。

これに対し、三輪丘陵の南側、福山の西斜面には三囚千塚と総称される後期群集墳が所在する。しかしこの中にも万貫古墳群などのように箱式石棺を内部主体とする、横穴式石室出現前の古墳も認められる。また妙蓮寺古墳群の中には全長約35mの前方後円墳も存在するが、その時期は不明である。

奈良時代

古墳時代以後の遺跡は北東3kmに備中国府が推定されており、また東3kmには備中国分寺・尼寺が所在する。しかし三輪丘陵周辺では全く知られていない。したがってここでは三輪丘陵周辺の郡郷について若干記しておく。これは現在遺跡が発見されてはいないものの、推定した微高地と対応して古代郷名を推定さす地名が分布しており、微高地上を中心とした古代の集落が存在したものと考えられるからである。

当初記したごとく三輪丘陵一帯は備中国窪屋郡に属する。「和名抄」によると窪屋郡には大市、阿智、美和、御簾、真壁、輕部の6郷（註8）が記されている。このうち三輪丘陵周辺の地名と付合するのは美和と真壁、そして輕部の3郷である。美和郷は三輪丘陵を含む一帯で、微高地は丘陵の西側に認められ、さらにこの北側の上三輪にも微高地がある。したがって美和郷は大略三輪丘陵を含む北西から西にかけての地域と考えられる。真壁郷は丘陵の北側一帯と考えられ、「宮瀬川」にそって大きな微高地が認められる。輕部郷は丘陵の南側、清音村の輕部一帯と考えられ、南北に長い微高地が認められる。

なお丘陵の東側には広い沖積地が広がっているが、古代においては湿地帯であり、集落を考

えるとすれば福山の北山裾が考えられる。

註

- 註1 葛原克人「古代吉備豪族の誕生」『歴史手帖4巻6号』1976年
- 註2 三輪丘陵の遺跡分布図は基本的には岡山県の遺跡台帳によったが、筆者の踏査により一部修正した所もある。また微高地の復元には村上幸雄氏から御教示を得たほか、下記の文献を参考にした。
正岡陸夫「総社平野の微高地群」『瀬戸内考古研19号』1980年
- 註3 現在総社市教育委員会が発掘調査を行なっており、その概要是村上幸雄、高田明人、谷山雅彦の3氏から御教示を得た。
- 註4 高橋 譲「三輪山墳墓群の調査から」『岡山総合文化センター館報4639』1963年
- 註5 春成秀爾、葛原克人、小野一臣、中田啓司「備中清音村鎌物師谷1号墳墓調査報告」「古代吉備第6集』1969年
小野一臣、間壁蘋子「岡山県清音村鎌物師谷2号墳出土の土器」「倉敷考古館研究集報第13号』1977年
- 註6 西川 宏「備中三輪山第6号墳」「古代吉備第5集」1963年
- 註7 小野一臣「備中清音村持坂古墳群概報」「古代吉備第6集」1969年
- 註8 池邊 優『和名類聚抄郡郷里驛名考證』1981年

第Ⅲ章 調査の経過

三輪丘陵からほぼ南に長く派生した殿山の尾根稜線上には古墳群が所在し、またその東側斜面部に新たに発見された弥生時代の遺跡がある。土取り計画は当面古墳群の所在する尾根稜線から東側で、北は16号墳までであるが、いずれは尾根稜線西側まで行うということであった。このため計画地内には8号墳から16号墳と弥生時代の遺跡が係ることとなった。

調査はまず計画地内の立木を伐採し、全面に10m方眼の基準線を設定した。この基準線の主軸は尾根稜線とほぼ平行となるように設定し、それより東の線をR10, R20……、西をL10, L20……と標示した。また10号墳近くの主軸線上をM0とし、それより北側を順次M1, M2……とし、南側をM-1, M-2と標示した。

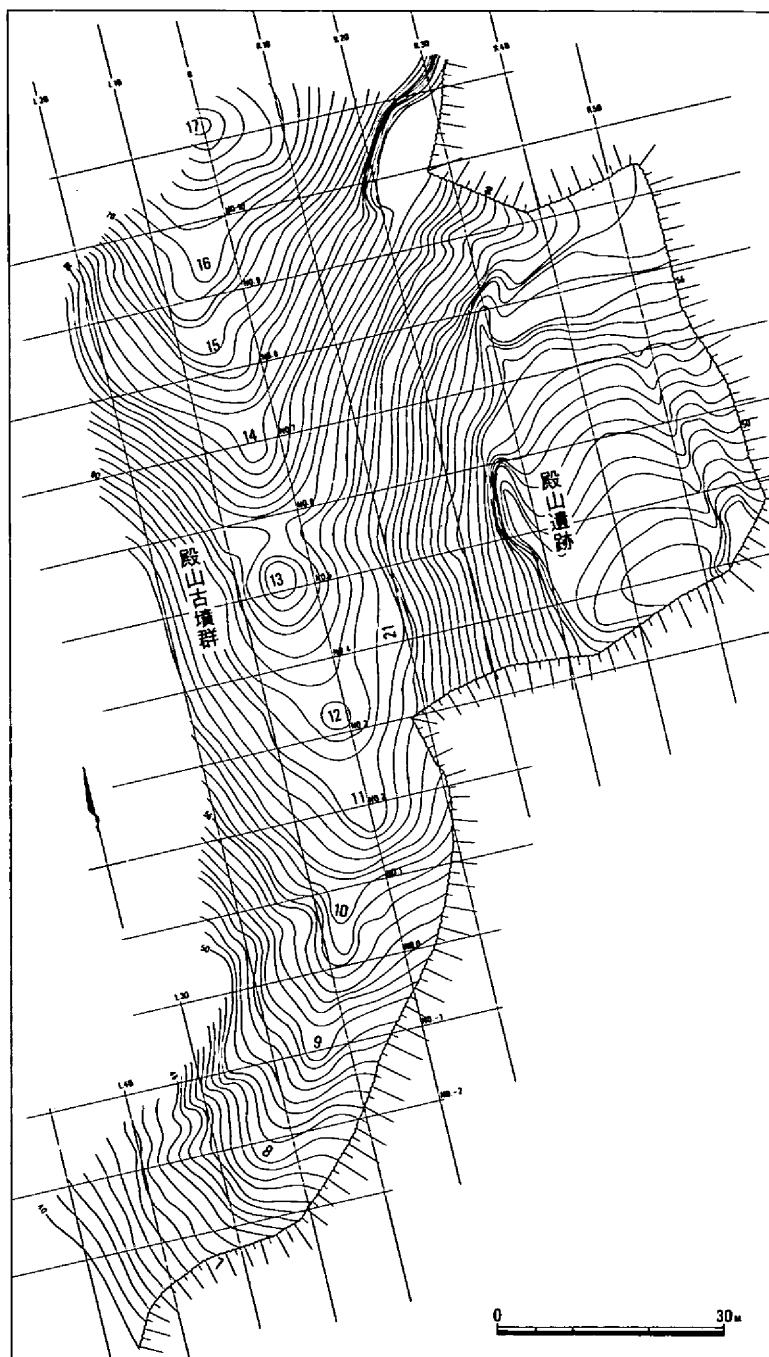
この基準線をもとに250分の1の地形図と、さらに各古墳の墳丘測量図（50分の1）を作成後、弥生時代の遺跡確認を行った。確認調査は幅1mのトレンチを、M6の基準線にそってR20からR50まで、約30mを設定して行った。その結果R30までは急斜面で表土直下は地山となり、遺構遺物は全く認められなかった。R30より東は地山までの深さが増し、東端（R50）では1.5mにも達したが、ここでは住居址が検出され、弥生時代中期後半の土器が出土した。このことからM4 R30からR50, M7 R30からR50の間には遺構が広がる可能性が考えられたが、遺跡の全面調査は調査工程から考えて古墳の調査後に行うこととした。

古墳の調査は現存する尾根稜線南端に位置する8号墳から開始し、順次北側の高い方へ9号墳、10号墳と進めて行った。途中12号墳と13号墳間の東側で埋葬施設が発見され、殿山古墳群の番号を継続させ21号墳とした。つづいて11号墳、12号墳と調査を進めていったが、調査前の推定とは異なり、墳形はすべて方形を呈していた。さらに21号墳にいたっては弥生時代後期後半頃と考えられる土器が出土した。こうしたことから殿山古墳群は弥生時代後期後半から古墳時代前期の墳丘墓や小規模古墳を考える上で貴重な資料となった。

21号墳の調査と併行して遺跡の表土剥ぎと遺構の調査が行われた。約700m²の調査区内で弥生時代中期後半の住居址2軒と土壙1基を検出し、昭和55年度の調査を終了した。

昭和56年度の調査は13号墳より開始し、土取り計画地内北端に位置する16号墳まで行った。いずれも主体部は浅く、残存状態が悪いこともあったが、副葬品が少ないことが注目された。また僅かに墳丘から出土した土器は、昭和55年度に調査した21号とほぼ同様の時期であり、尾根の高い方から低い方へ順次築造されたことなどを明らかにし、すべての調査を終了した。

日 誌 抄
昭和55年度（1980年度）



第4図 殿山遺跡・殿山古墳群地形図

4月21日，調査開始。土取り計画地内の立木伐採と基準線を設定した。

5月1日，各古墳の墳丘測量を開始する。

5月6日，遺跡の確認調査を開始する。

5月9日，墳丘測量を完了する。墳形はすべて円形を呈すると考えられた。

5月12日，遺跡の確認調査完了。弥生時代中期後半の住居址2軒を検出。立木の伐採完了。

5月13日，8号墳に調査用の基準杭を設定し，墳丘の表土剥ぎを開始した。

5月14日，墳丘中央部で主体部を確認。すでに盗掘

されているようであった。

5月19日、9号墳の表土剥ぎを開始。8号墳の主体部からは管玉、小型算盤玉等が出土。

5月20日、8号墳の周溝掘り下げ開始。

5月23日、8号墳周溝内から土師器壺と鋳造鉄斧が出土。

5月28日、8号墳周溝がコの字形に検出されたことから方墳と考えられた。

5月29日、8号墳主体部調査完了。9号墳第1主体部検出。検出作業は困難を極めた。

5月30日、9号墳第2主体部を検出。

6月3日、10号墳の表土剥ぎを開始する。8号墳は調査後の墳丘測量を行い、調査完了す。

6月5日、9号墳の周溝掘り下げを開始する。

6月11日、9号墳第1主体部調査完了。9号墳も周溝検出が完了し、方墳と判明した。

6月13日、10号墳第2主体部を検出。

6月17日、10号墳第1主体部を検出。

6月18日、岡山理科大学川中健二助教授の指導で9号墳第2主体部の人骨を取り上げる。

6月19日、10号墳周溝掘り下げ開始。

6月23日、10号墳の北東側に箱式石棺が検出され、1号箱式石棺墓とした。

6月24日、10号墳第3主体部を検出。

6月27日、11号墳表土剥ぎ開始。

7月4日、12号墳表土剥ぎ開始。

7月8日、11号墳周溝掘り下げ開始。10号墳第2主体部調査完了。

7月16日、11号墳西側で箱式石棺を検出し、2号箱式石棺墓とする。

7月17日、専門委員会を開催。現地で指導助言を得る。9号墳第2主体部の調査完了。

7月21日、11号墳第2主体部検出。1号箱式石棺墓調査完了。遺跡の表土剥ぎ開始。

7月24日、11号墳第3主体部検出。

7月25日、11号墳第1主体部と第4主体部を検出。

7月28日、11号墳第1主体部と第2主体部の調査を完了する。

7月31日、11号墳西側墳端で配石土壙墓を検出。

8月1日、2号箱式石棺墓の調査完了する。

8月8日、11号墳第4主体部調査完了する。

8月11日、11号墳第3主体部調査完了。12号墳周溝掘り下げ開始。21号墳表土剥ぎ。

8月12日、12号墳東側墳端で土壙墓を検出。10号墳調査後の墳丘測量を行い調査を完了す。

8月13日、配石土壙墓、土壙墓の調査完了す。9号墳と11号墳の調査後の墳丘測量を行い調査を完了す。10号墳第2主体部を解体する。

8月19日，12号墳主体部は流失したものと考えられた。21号墳の表土剥ぎ開始。

8月21日，21号墳周溝掘り下げ開始。また第1主体部を検出。

8月24日，21号墳第2主体部検出。

8月27日，21号墳調査後の墳丘測量を行う。

9月2日，遺跡の遺構検出作業を開始する。2号住居址の掘り下げ開始。

9月3日，21号墳第1主体部，第2主体部調査完了。

9月4日，11号墳と12号墳の調査完了する。

9月5日，1号住居址の掘り下げを開始する。

9月17日，1号住居址，2号住居址，土壙の調査を完了す。

9月19日，補足調査と機材運搬を行い，昭和55年度の調査を終了した。

昭和56年度（1981年度）

4月20日，調査開始。調査用機材運搬。13号墳から表土剥ぎを開始する。

4月24日，13号墳周溝掘り下げ開始。

5月1日，13号墳調査後の墳丘測量を行う。14号墳表土剥ぎを開始する。

5月6日，13号墳第1主体部と第2主体部を検出する。

5月11日，13号墳主体部検出完了，両主体部とも木棺直葬であった。

5月12日，13号墳第1主体部，第2主体部の調査完了。14号墳表土剥ぎ開始する。

5月14日，14号墳周溝掘り下げ開始。

5月18日，14号墳調査後の墳丘測量を行う。

5月19日，15号墳表土剥ぎを開始。

5月20日，14号墳の第1主体部，第2主体部を検出するが，残存状態は悪い。

6月1日，15号墳周溝掘り下げ開始。若干の土器片が出土。

6月2日，現地で専門委員会を開催し，指導助言を得た。

6月4日，16号墳表土剥ぎを開始する。

6月10日，16号墳周溝掘り下げ開始。

6月16日，15号墳第1主体部，第2主体部を検出。

6月19日，15号墳調査後の墳丘測量を行う。

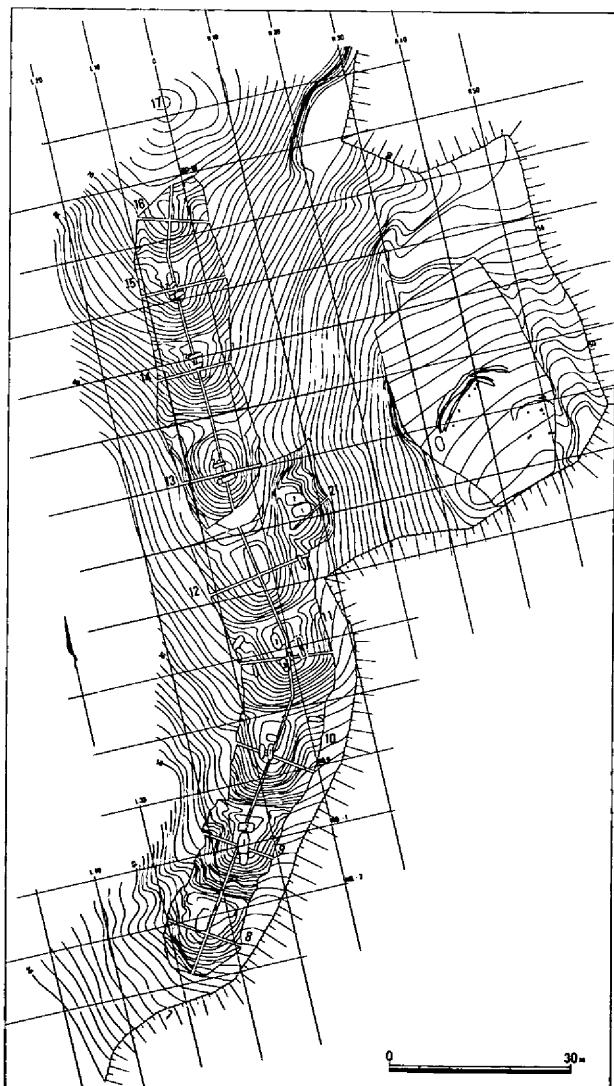
6月23日，16号墳は主体部の検出作業を行ったが，遺構は検出されなかった。

7月2日，補足調査と機材運搬を行い，土取り計画地内の調査をすべて完了した。

第IV章 殿山遺跡

第1節 調査の概要

I 遺跡の立地



第5図 殿山遺跡・殿山古墳群全体図

遺跡は、三輪丘陵では一番高い大師（標高96.3m）から南にむかって派生した尾根（殿山）の東側斜面に立地する。詳細に見れば、大師から南に派生した尾根は一度高くなり、ここからさらに尾根が西と南に派生する。そのうち殿山は南にむかって派生した大きな尾根で、いくつかの高まりをもっている。この尾根の分岐点から一番最初の小さな高まりでは、さらに西側と東側に小さな尾根が派生している。遺跡はこの東側に派生した小さな尾根と殿山の主尾根間の谷地形を呈した斜面に立地する。

遺跡の位置する斜面は北と東と南の三方が土取りによる崖となっている。この残された斜面の一部にブルトーザーが進入し、遺物が散乱したことから遺跡の存在が確認されたもので、

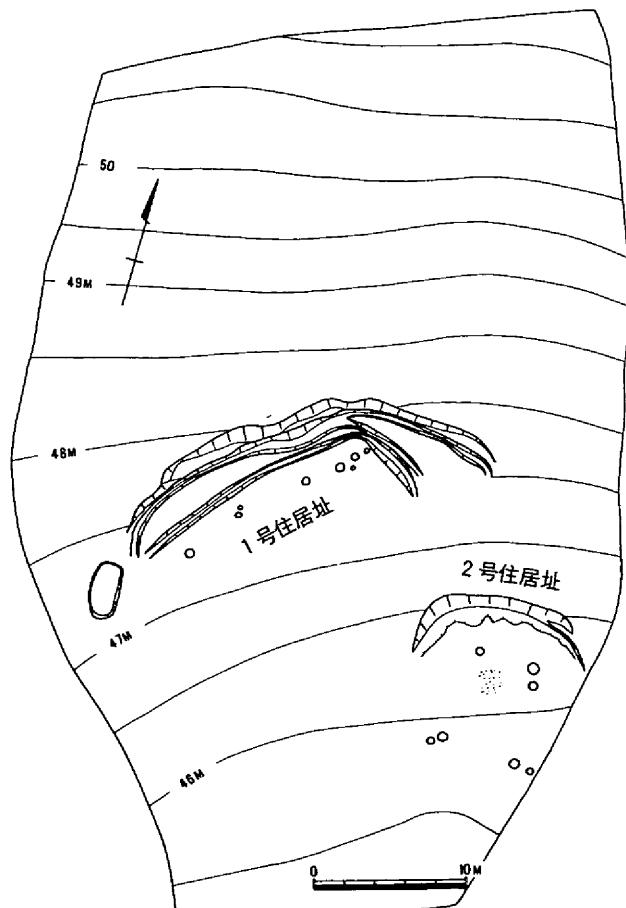
本来は東側や南側にも拡がっていた可能性が強い。

II 調査の方法

遺物が出土したことから遺跡であることが確認されたものの、その範囲や性格については不明であるため、調査開始後ただちにトレンチによる確認調査を行った。これにより住居址が検出され、弥生時代中期後半の集落と想定された。また西側の急斜面には遺構も遺物もなく、北側もN7の線より北はブルトーザーにより削平されて遺構は認められなかった。

これらのことから遺跡はR30の線からR50間で、N7より南側に広がるものと考えられた。この遺構の想定される面積は約700m²で、全面調査をすることになった。

III 遺構の概要



第6図 殿山遺跡全体図

全面調査は確認調査の所見から、遺構面までの土砂堆積が厚く人力による表土剥ぎは困難であるとの判断にたち、表土下約1mまでをブルトーザーで除去し検出作業を行った。

その結果、調査区のはば中央と南東端で住居址が検出された。いずれも弥生時代中期後半のもので、前者の1号住居址は斜面部のため高い方だけが検出された。平面プランは略長方形ないし隅丸長方形を呈すると考えられる。後者の2号住居址も高い方の一部が検出され、平面プランは略隅丸方形を呈すると考えられた。その他1号住居址の東側では同時期の土壙が検出された。

第2節 遺構と遺物

I 1号住居址

1号住居址としたものは長方形、あるいは隅丸長方形の平面プランを呈すると考えられるもので、住居址と判断するにはやや躊躇するが、ここでは一応住居址としておく。

住居址は数回の建替が認められるがその先後関係は明瞭でなかった。一番外側の壁は比較的緩やかで、平面プランはゆるやかな円弧を描いている。その内側の幅広な溝は外側の壁に一応は接してはいるが、両端、あるいは中心部では離れている所がある。

外から2番目の溝は東側で分れ、隅丸長方形的な平面プランが想定される。一番内側の溝と一部接しているが、その前後関係は明らかにし得なかった。

一番内側の溝は南西端が不明であるが、北東端はほぼ直角に折れることから、長方形の平面プランを呈すると考えられる。溝の内側にはピットがほぼ溝と平行して一列検出された。このピットは大きいもので径30cm、小さいもので径15cmある。柱穴と考えられるこのピットと各々の溝との関係は不明である。

1号住居址出土の遺物（第8・9図、図版6・7・11—1）

住居址内からは土器と石器が出土した。土器は細片となっており、完形に復元し得るものは認められなかった。石器は意外に少なく、サヌカイト製の石庖丁が1点のみで、他にサヌカイトの剝片が数片出土している。

土器（第8・9図、図版6・7）

1から5は壺形土器である。1は肩の張る胴部にくの字状に外反する口縁部がつく。端部は下方にややつまみ出し、端面は平坦となる。頸部外面には強く押しつけた刷毛目痕跡が段になって残る。調整は口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は不明、内面はナデにより仕上げる。色調は赤褐色を呈し、胎土に2mm程度の砂粒を含む。

2は上に向って開きぎみになる長い頸部から、ほぼ外方へ水平に開く口縁部をもつ。端部は上下に拡張され、端面には3条の凹線がめぐる。また頸部には断面三角形凸帯が貼り付く。調整は口縁部内外面が横ナデ、頸部外面を刷毛目で仕上げる。色調は茶褐色を呈する。

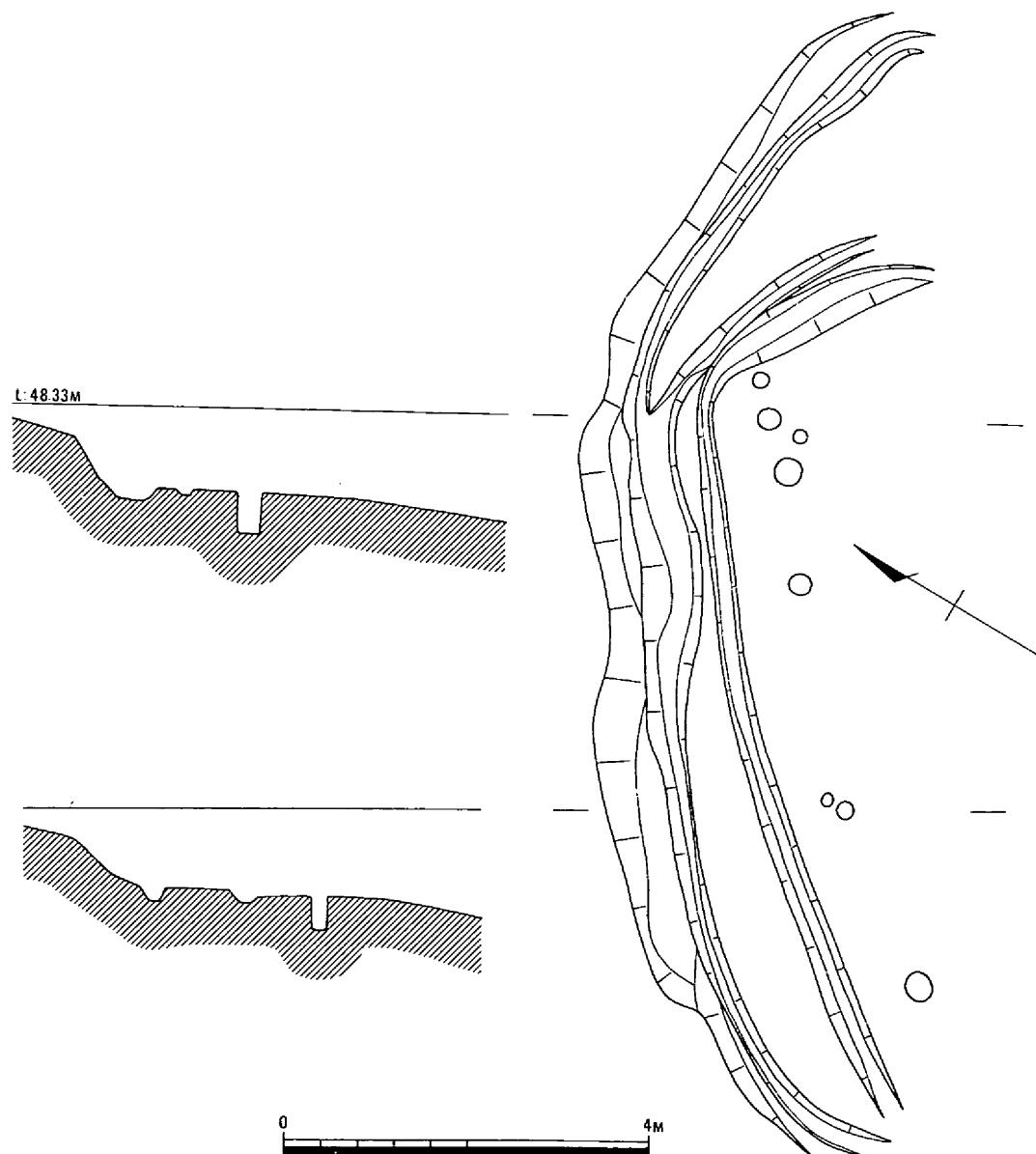
3は2と同様の形態で、口縁端面には4条の細い凹線がめぐる。内外面とも横ナデにより調整し、色調は淡赤褐色を呈し、胎土には1mm程度の砂粒を含む。

4は断面三角形の貼付凸帯を頸部にめぐらし、口縁部は強く外反する。口縁内面は強く横ナデを行い、端部を上方へつまみ上げている。端には凹線が3条めぐり、さらに斜めに刻目が施

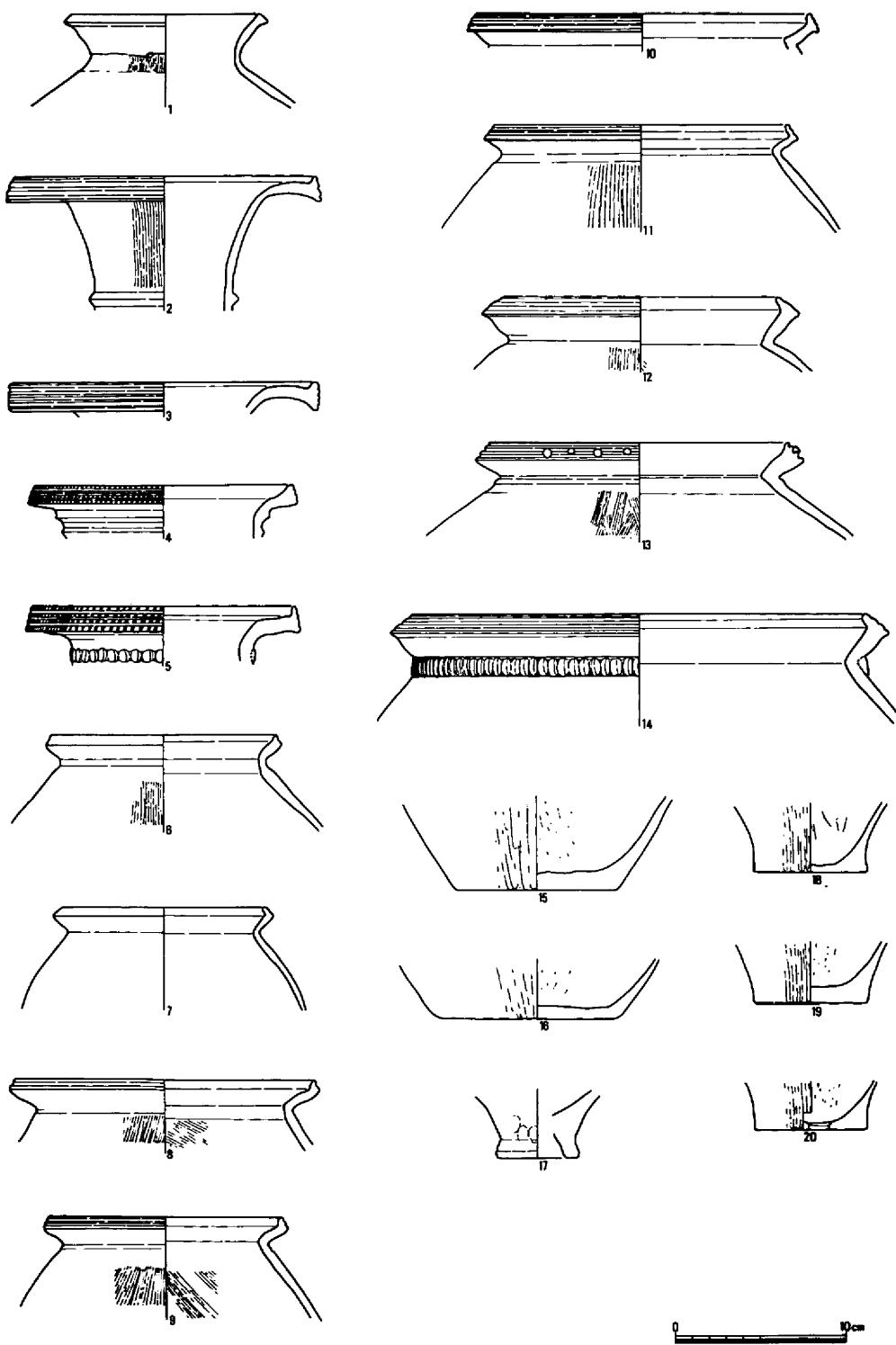
される。調整は内外面とも横ナデにより仕上げる。色調は淡赤褐色を呈し、胎土に砂粒含む。

5は頸部に爪形刻目凸帯を貼付け、口縁部は外方へ水平に開く。端部は上方への拡張が著しく、広い端面には3条の凹線がめぐる。その上をさらに斜めの刻目を施す。調整は口縁部内外面は横ナデ、頸部外面を刷毛で仕上げる。色調は明赤茶褐色を呈し、胎土に砂粒含む。

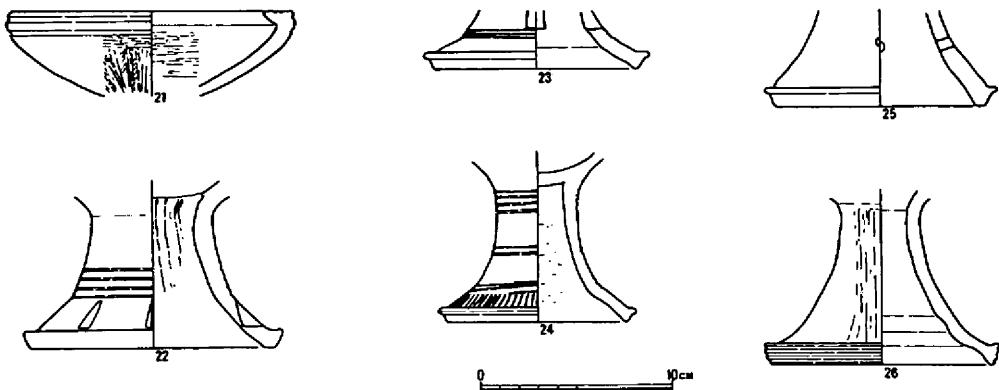
6から14は甕形土器である。6は胴部からくの字状に外反する口縁部をもつ。端部はやや上



第7図 1号住居址



第8図 1号住居址出土の土器(1)



第9図 1号住居址出土の土器(2)

方への拡張がみられ、端面には横ナデによる凹部がめぐる。調整は口縁部内外面が横ナデ、胴部外面はくびれ部から1.5cmは横ナデでそれから下が刷毛目となる。色調は明赤茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。

7もくの字状に外反する口縁部をもつ。端部は上方へ拡張され、端面は平坦となる。調整は磨滅が著しくて不明。色調は淡茶褐色を呈し、胎土に砂粒多い。

8は胴部からくの字状に鋭く外反する口縁部をもつ。端部は上方へ拡張され、端面には凹線が一条めぐる。口縁部内外面は横ナデ、胴部も内外面とも刷毛によって仕上げる。色調は明赤茶褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。

9もくの字状に鋭く外反する口縁部をもつ。端部は上方へ拡張され、端面には二条の凹線がめぐる。調整は口縁部内外面は横ナデ、胴部外面はくびれ部から2cmまで横ナデを行い、それより下を刷毛で仕上げる。色調は淡赤茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。

10はくの字状に外反する口縁部で、端部は上下、特に上方への拡張が強い。端面は3条の凹線がめぐり、調整は内外面とも横ナデを施す。色調は暗茶褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。

11もくの字状に外反する口縁部をもち、端部は上方への拡張が著しい。端面には凹線が2条めぐる。調整は口縁部内外面を横ナデ、胴部は外面刷毛、内面はナデにより仕上げられる。

12は胴部からくの字状に外反する口縁部をもち、端部は上方へ拡張される。端面は浅い凹線が2条めぐる。口縁部内外面は横ナデ、胴部内外面は刷毛により仕上げられる。

13は肩の張る胴部にくの字状に外反する口縁部がつくもので、端部はやや上方へ拡張する。端面には深い凹線が3条めぐり、その上に円形浮文が貼付く。口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は刷毛、内面はナデにより仕上げられる。色調は赤茶褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。

14はくの字状に外反する口縁部をもち、くびれ部には爪形刻目凸帯がめぐる。口縁端部は上

方へ拡張され、端面には凹線が3条めぐる。調整は口縁部内外面が横ナデにより仕上げられる。胴部は不明である。色調は茶褐色を呈し、胎土には2mm程度の砂粒を含む。

15から20は底部で、20は焼成後の穿孔が施されている。17以外は外面がヘラ磨き、内面はヘラ削りにより調整されている。

21から26は高杯形土器である。21は杯部で、口縁部は内湾ぎみに立上り、端部は内方へ拡張される。上端面には4条の凹線文がめぐる。口縁外面にも2条の凹線がめぐる。

22から26は脚部で、脚端は外方へ拡張され端面には横ナデによる凹部がめぐる。26は拡張された端面に3条の凹線がめぐるものである。

さて以上の土器は住居址の重複関係からも若干の時期差が予想される。この差は当然土器にも認められ、それは凹線文の発達しているものとそうでないものに分れる。しかしその差は僅かなもので、全体的には本地域で弥生時代中期後半とされている前山Ⅱ式の中に含まれるであろう。

II 2号住居址

2号住居址は1号住居址の南東に位置する。隅丸方形状の平面プランを呈すると考えられるが、斜面のため北側の一辺しか壁は残っていない。壁の立上がりは普通の住居址に比較して緩やかな傾斜となっている。壁に接しては幅広の溝が掘られている。床面は二点鎖線で示した範囲が堅くしまっており、その中央からやや北に寄った所には火所がある。火所はよく焼けており、約5cmの厚さに焼土が認められた。

柱穴は対応関係が明確でないが、台形状に4本が並ぶものと考えられる。北西の柱穴はトレンチにより1本が破壊されたものと思われ、本来は2本づつ、すなわち2回の建替が推定される状態であった。

2号住居址出土の遺物（第11図、図版9・10—1・11—2）

2号住居址埋土からは弥生時代中期後半の土器と磨製石庖丁の小片、サヌカイト製の石鏸、太形蛤刃石斧2、楔状の石器、サヌカイト剝片等が出土している。土器はいずれも完形に復元できるものではなく、石器も欠損したものが多い。

土器（第11図、図版9・10—1）

1から3は壺形土器である。1は上にむかってやや開きぎみの長い頸部から、外方へほぼ水平に外反するラッパ状の口縁部をもつ。口縁端部は上下に拡張され、端面には4条の凹線がめぐり、その上に3本1単位の棒状浮文が貼付けられる。口縁部内面には櫛描の波状文と刻目がめぐっている。調整は口縁部内外面が横ナデ、頸部は内外面とも刷毛目が認められる。色調は黄茶褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。

2も長い頸部がつくもので、口縁端はやや肥厚する。端面には1条凹線がめぐり、その上に刻目が施される。調整は内外面とも横ナデにより仕上げている。

3はほぼ直立の口縁部で、2条の断面三角形貼付凸帯がめぐる。この凸帯の上下を櫛描の波状文で飾っている。

4から11は高杯である。4は脚台付の鉢とも考えられる。杯底部から内湾ぎみに立上がる口縁部外面には、刻目と凹線が4条めぐる。端部はやや内方へ拡張され、端面は平坦である。

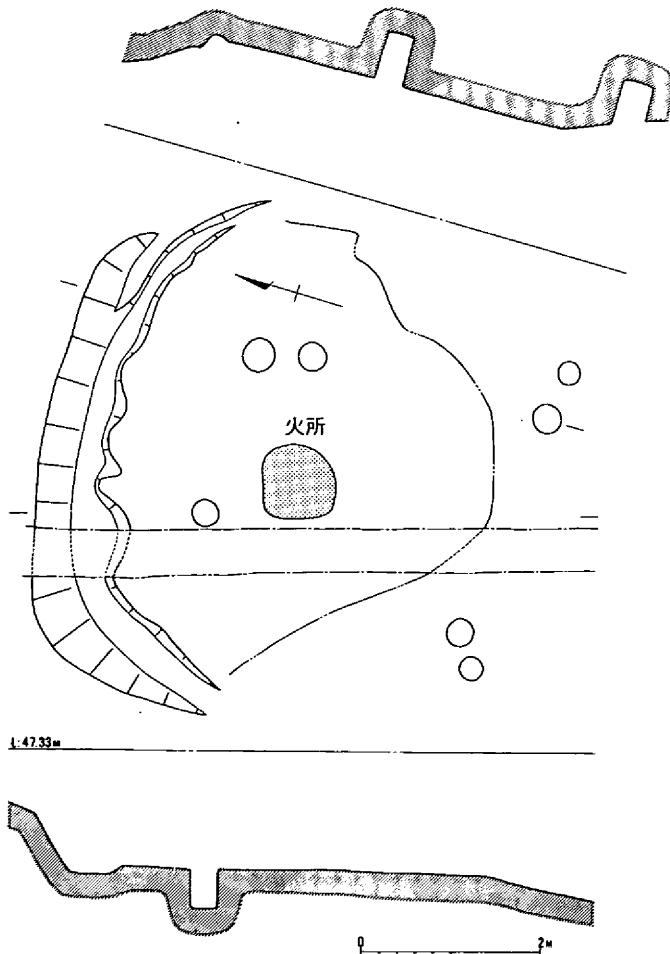
5・6は杯部の口縁部が内湾ぎみに立上がるもので、端部は内外に拡張される。6は端面に櫛描による格子目が施される。

7から11は脚部で、いずれも長い脚柱部から脚裾にむかってツラバ状に開く。端部は外方へ拡張され、端面には横ナデによる凹部、あるいは凹線がめぐる。10と11は円形刺突や刻目、あるいは鋸歯文で脚裾を飾る。

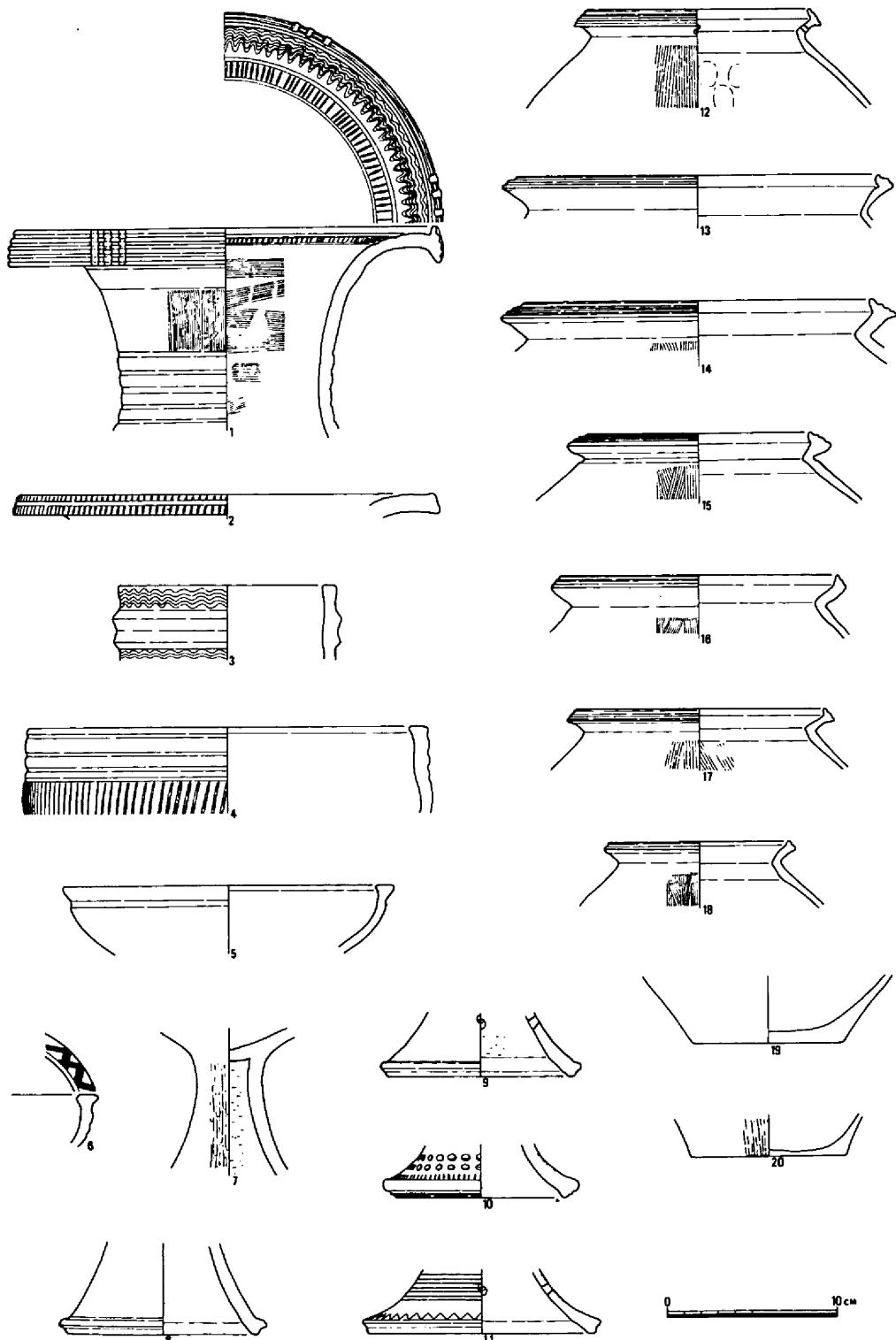
12から18は甕形土器である。いずれも胴部からくの字状に外反する口縁部をもつ。口縁端部は上下に拡張されるが、18は若干肥厚する程度である。端面には1から3条の凹線文がめぐっている。12は口縁部に小穴が穿たれる。調整は口縁部は内外面とも横ナデ、胴部外面は刷毛により仕上げられる。

19と20は壺、あるいは甕形土器の底部である。調整は外面がヘラ磨きであるが、内面は不明である。

以上の土器は1号住居址同様中期後半の前山II式の範疇で捉えられるものである。



第10図 2号住居址

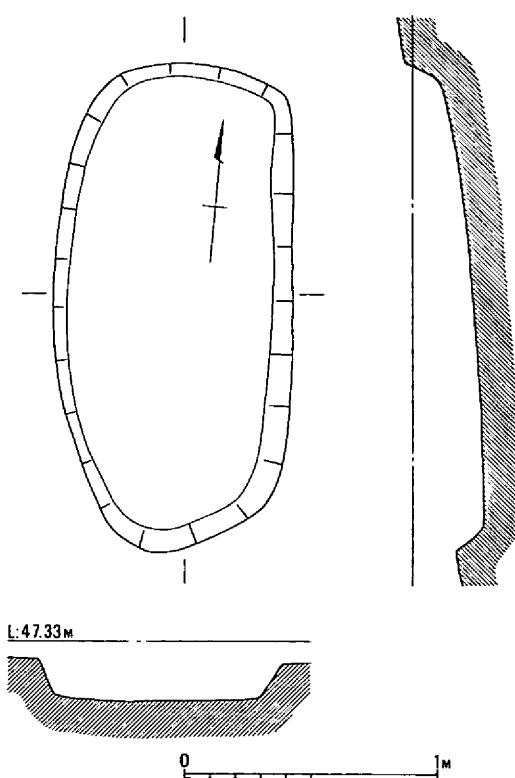


第11図 2号住居址出土遺物

III 土 壤

土壙は1号住居址壁体の南西端で検出した。平面プランは隅丸長方形状を呈し、長さ1.97m、幅97cmを測る。床面は平坦であるが、全体的に南が低くなっている。壁の立上がりは急峻である。埋土は暗褐色土で、炭化物や灰を含んでいた。土壙内からは土器片が出土したが、それ以外の遺物は認められなかった。

土壙出土の土器（第13図、図版10—2）

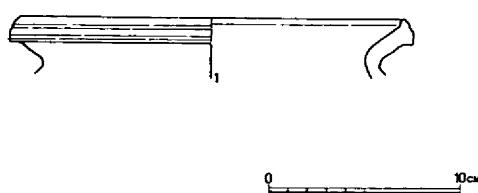


第12図 土壙

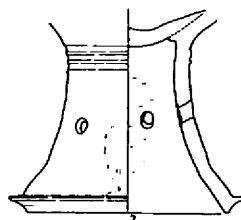
1は甌形土器の口縁部である。胴部からくの字状に外反する口縁部は、端部を上下に拡張する。端面には2条の凹線がめぐる。調整は内外面とも横ナデによって仕上げられる。色調は淡赤褐色を呈し、胎土には1mm前後の砂粒を含む。

2は脚台部で、太い脚柱部からやや開く梶部となる。脚柱部上部外面には3条の凹線がめぐり、中位には小穴が5個穿孔される。据端部は外方へ拡張され、端面は強い横ナデによる凹部がめぐる。調整は外面がヘラ磨き、内面はヘラ削りで、端部は内外面とも横ナデを施す。色調は淡赤褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。

以上の土器は2軒の住居址と同じく前山II式と考えられる。



第13図 土壙出土の土器



第V章 殿山古墳群

第1節 位置と現状

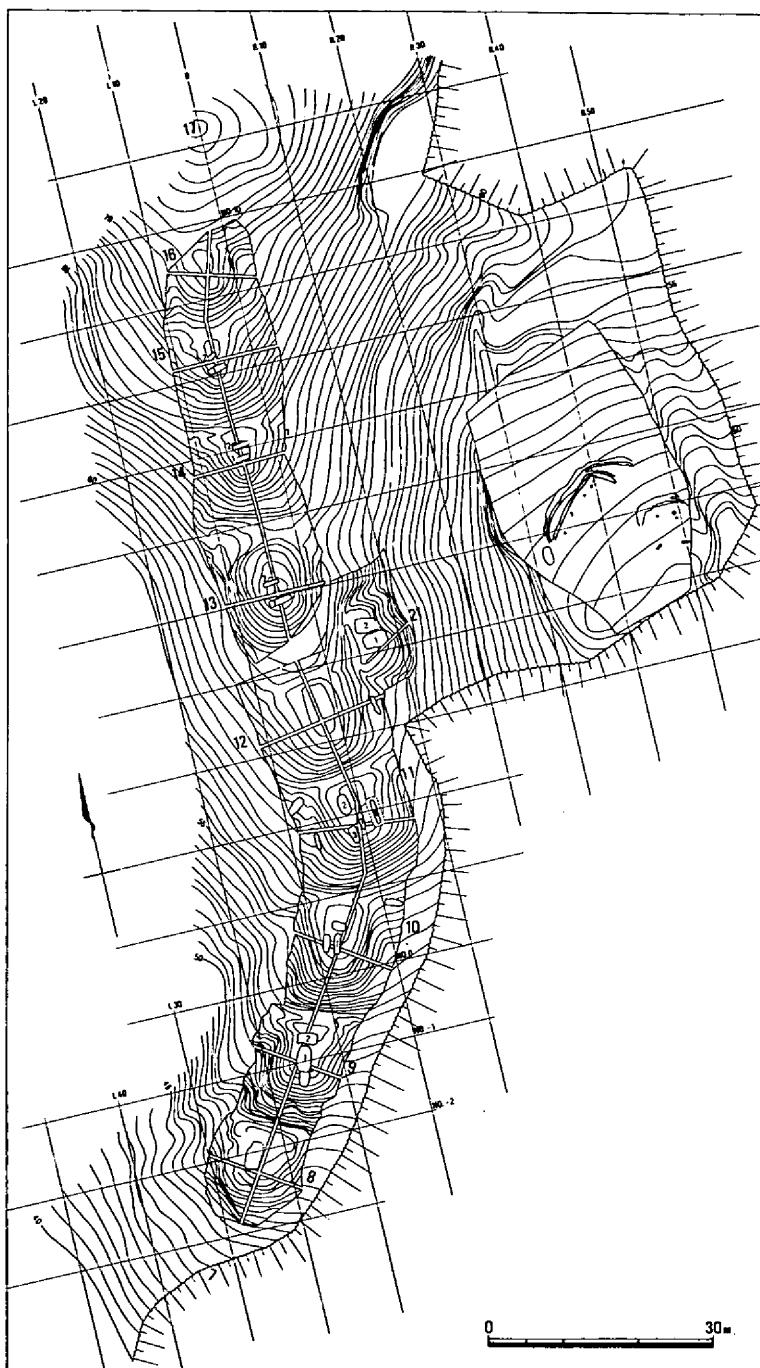
三輪丘陵の最高峰である大師（標高96.3m）から南にむかって派生した長い尾根を殿山と言う。殿山も詳細にみればさらに小さな尾根が派生している。殿山の最高所からは西へ、さらに南側のやや高まった所からは西と東に小さな尾根が派生している。ここから南は清音村との境までほぼ直線的な尾根で南端は断崖となる。かつては尾根がさらに南に延び、清音村側で西に折れ、西側に広がる沖積地に張り出していたが、土取りにより削平され、住宅地となっている。また総社市と清音村との境界には、新県道清音真金線が開通し、殿山の山裾にあった旧山陽道も全くといってよいほど破壊されてしまった。

殿山の尾根最高所（標高81m）は比較的広いが、南は馬背状になっており、東西とも急斜面である。東側の山裾は土取りが進行しており、旧状を窺い知ることはできないが、17号墳の位置するところから南東に小さな尾根が派生していた可能性がある。この尾根は、新県道清音真金線から旧県道清音真金線の間にある新興住宅が山を削平して建てられていることから、ここまで尾根が広がっていたものと考えられる。

かつてはこの尾根にも数基の古墳が所在したようである。昭和48年の分布調査の記載を見ると、殿山古墳群の1号墳から4号墳までが、ここに所在したようで、5号墳からが殿山主尾根稜線上に所在したと思われる。消滅した古墳の中にはかつて三輪山6号墳として報告された古墳も含まれているものと考えられる。

すでに破壊されてしまった東尾根の古墳については詳細な検討が加えられないが、埴輪が採集されており、付載1の報告によれば古墳は6世紀後半のものであり、また三輪山6号墳も6世紀前半のものである。こうしてみると東尾根に位置する古墳は6世紀代を主体とするものとなり、主尾根稜線上に位置する古墳に後続する可能性も考えられる。

さて遺跡台帳によると殿山の尾根稜線上には5号墳から21号墳までが所在したことになるが、調査開始後分布調査を実施した結果13基が現存した。これと台帳の古墳とを照合したが、台帳の番号の古墳が現存するどの古墳に該当するか判断できなかった。そこで尾根稜線南端から8号墳、9号墳…とし、最高所にあるものを20号墳とした。8号墳より南側尾根上に古墳があったかどうかは、土取りで削平された現在では確認のしようがない。ただ8号墳の南でブル



第14図 殿山古墳群全体図

トーザーに押され
て箱式石棺の石材
が散乱していたこ
とから、7号墳が
存在した可能性が
強い。

かかる殿山の尾
根稜線上に連続し
て築造された古墳
は、同一集団によ
る継続的な古墳の
築造によるものと
推定される。した
がって東尾根とい
う立地条件のこと
なった所に点在す
る古墳を含めて殿
山古墳群と総称す
ることはやや合理
性を欠くことにな
りはしないだろう
か。その当否は歴
史的な性格づけと
も関係することで
もあり直に結論は
出ないが、東尾根
に位置するものは
殿山東古墳群とで
もする方がより適
切であろうかとも
思われる。

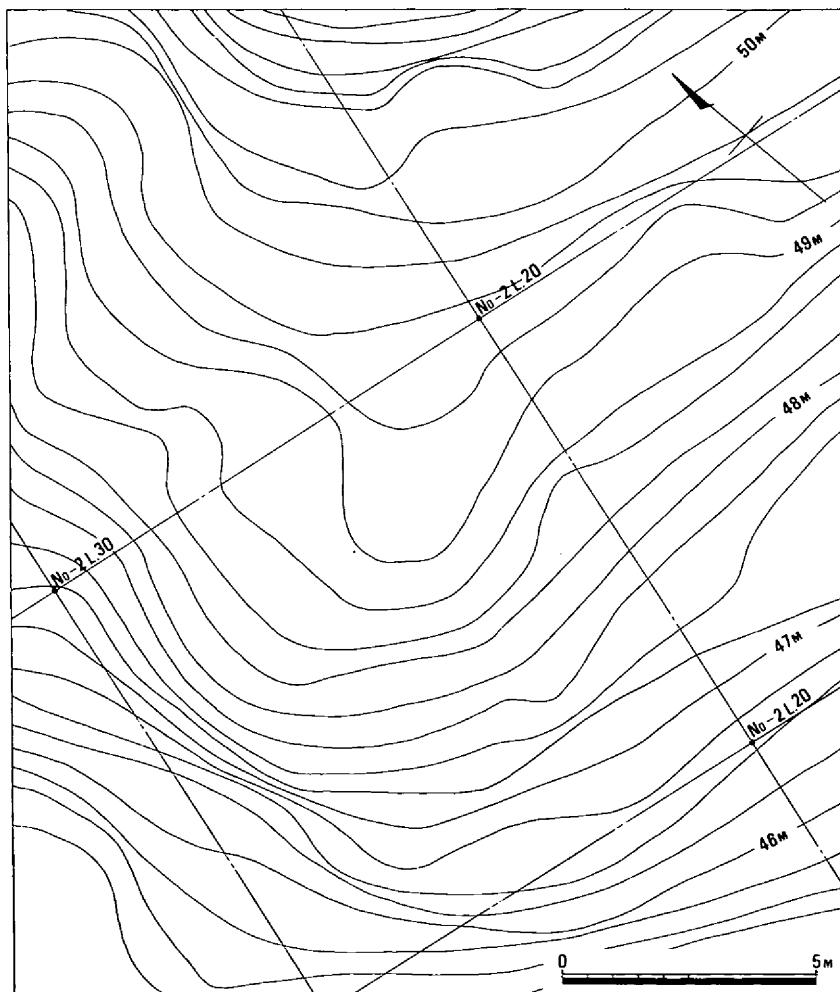
第2節 8号墳の調査

I 調査前の状況

8号墳は尾根稜線上に現存する古墳としては、南端の一番低い所に位置する。南側と東側は土取りにより断崖となっており、崖端から少しづつ自然崩壊が進行している。

墳丘は南側から見ると尾根が急傾斜なこともあって、随分大きく感じられるが、9号墳側から見れば、南に幾分傾斜する舌状の狭い平坦部が認められるにすぎない。墳丘は花崗岩のバイ

ラン土であるため流失が著しく、また西側墳端には山道が通るなど墳形はかなり変貌している。さらに東西両墳端とも自然に尾根斜面に移行するため、その墳域は明確でない。南側墳端はやや緩やかな斜面から、急傾斜となる標高46mの付近が考えられる。



第15図 8号墳調査前の墳丘

のことから調査前は12m前後の円墳ではないかと推定された。

II 墳 丘

古墳には発掘に先立ち、墳丘のほぼ中心を0とし、十の字形に基準線を設定した。さらに0を中心の大略東西南北と言うことで、E-1, E-2等の基準杭を打った後、全面調査を行った。

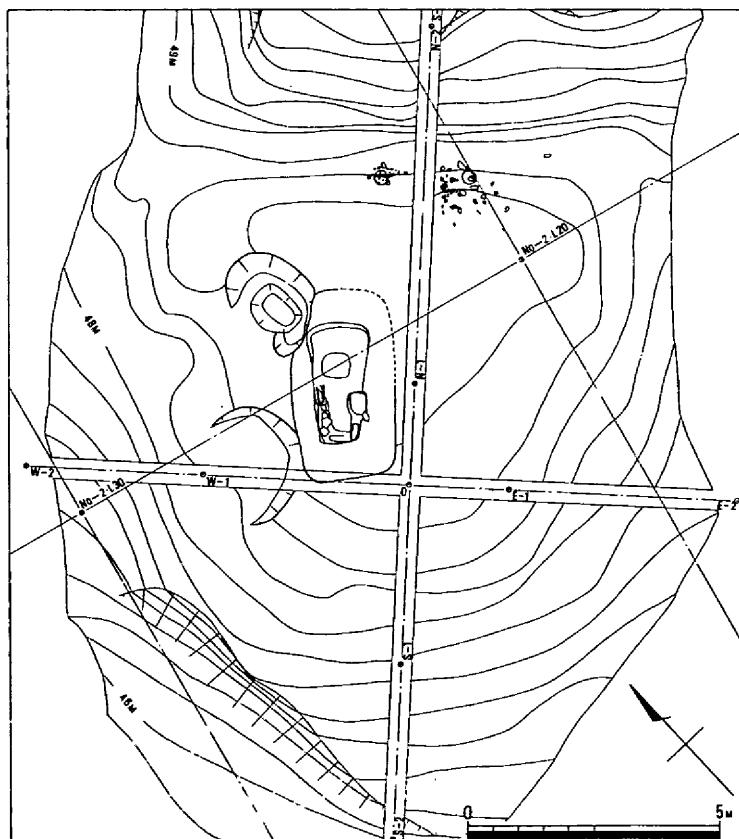
墳丘は表土直下で検出され、特に墳頂から墳丘斜面部は僅かに表土が認められる程度であった。

墳頂は広い平坦面となり、その中央からやや西に偏して主体部が検出されたが、この主体部内とその北側、さらに西側には盗掘穴が認められた。当初、主体部が西に偏していることから、東側にも主体部が推定されたが、トレンチによる確認を行った結果、何ら埋葬施設は検出されなかった。また主体部が西に偏していることも、西端の山道によって墳丘が変形していることによるもので、北西側墳端はもう少し北西に寄るものと考えられた。こう考えると主体部

はほぼ中心に位置することになる。

墳丘の北東側、9号墳との間に周溝が検出され、その両端が「」形に屈曲することから方形を呈する墳丘と考えられた。

墳丘の規模は東西の墳端が明瞭でないことから、大略で示せば約12m前後と推定される。北側は周溝により明確で、南はS-Zあたりで斜面の傾斜が変化するのではほぼ問題ないものと思われる。すると南北は約13mとい



第16図 調査後の墳丘

うことになり、やや長方形となるが、これは馬背状の尾根に立地するという地形的条件によるものと考えられる。

墳丘の築造状態を観察するため、十の字形に設定した基準線にそってトレンチを設定しようと思ったが、土取りによる断崖に近いことから墳丘に縫割れが生じ、きわめて危険な状態となったので断念した。ただ主体部を確認するトレンチで見る限りであるが、中央部では1m近い盛土が認められた。

III 周 溝

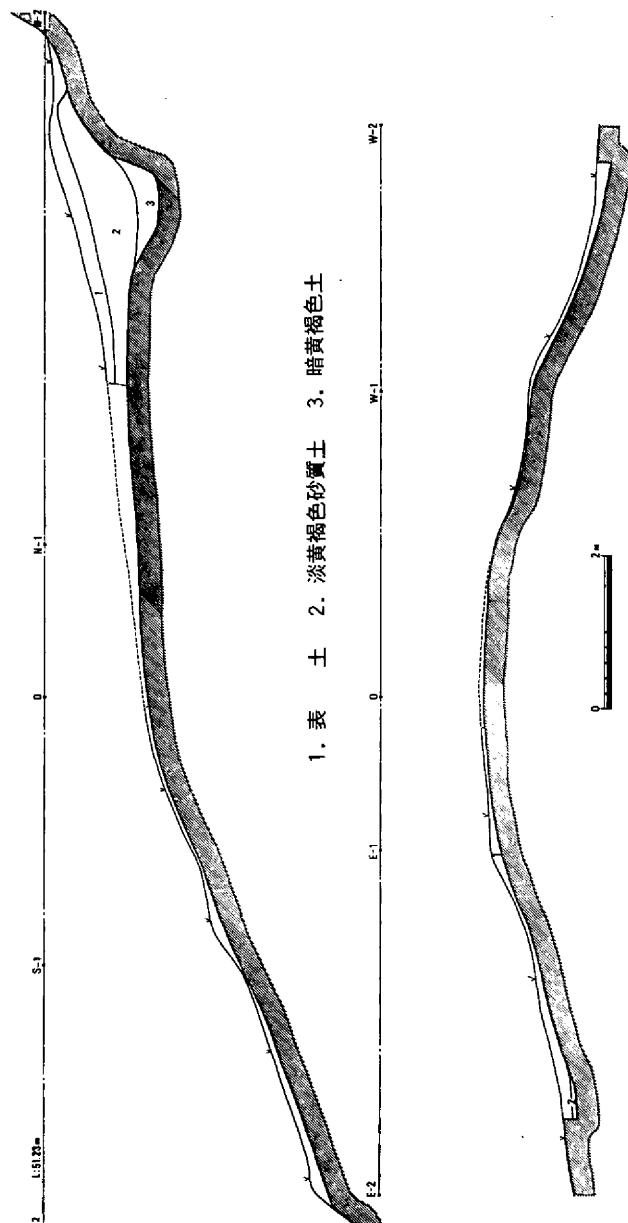
8号墳の周溝は9号墳の墳端に接しており、結果的には9号墳の南側を区画する役割を担っているようでもある。

周溝は中央部で幅1.3m、深さは30cmを測る。

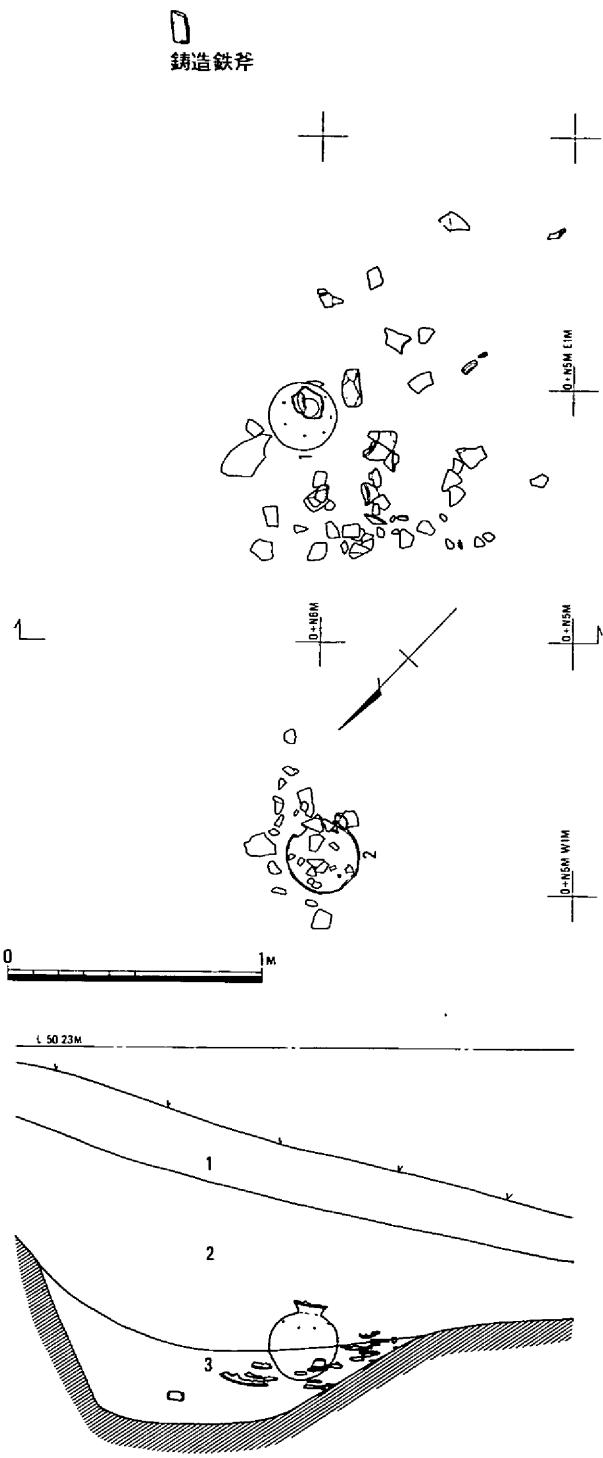
両端はしだいに浅く不明瞭となりながら「フ」形に屈曲し消滅する。同時に尾根の傾斜にそって溝の底部も下がってゆく。

周溝の掘り込みは9号墳墳端側は急傾斜に削り、8号墳の墳丘側は緩やかである。底は平坦に仕上げられている。

周溝内の土層は最下層に土師器を含む暗褐色土が堆積し、その上に砂質の黄褐色土が厚く認



第17図 墳丘縦横断面図



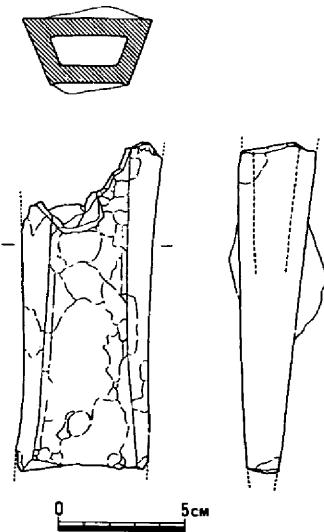
第18図 周溝内遺物分布図

められる。

周溝内からは土師器の壺と鋸造の鉄斧が出土した。土師器は周溝の底より浮いており、暗褐色土層の上部からもっとも多く出土した。これらの土師器は周溝全体から出土するのではなく中央部から集中して出土した。特にN線の東側が多く、口縁部を一部欠くがほぼ完形の壺が出土した。またN線の西側にもほぼ完形に近い壺が認められた。

鉄斧は土師器よりさらに東側の周溝底に接して出土した。周囲には他に何も検出されず、廃棄されたような状態であった。

周溝出土の遺物



第19図 周溝内出土の鋸造鉄斧

铸造鉄斧（第19図、図版19—1）

先端部と基部を欠くため全長は不明であるが幅は5cmを測る。ほぼ長方形を呈するが、基部および先端部にむかってやや幅広くなると思われる。先端近くまで中空につくられ、断面は台形を呈する。上面両端には縦に突線が鋲出されている。

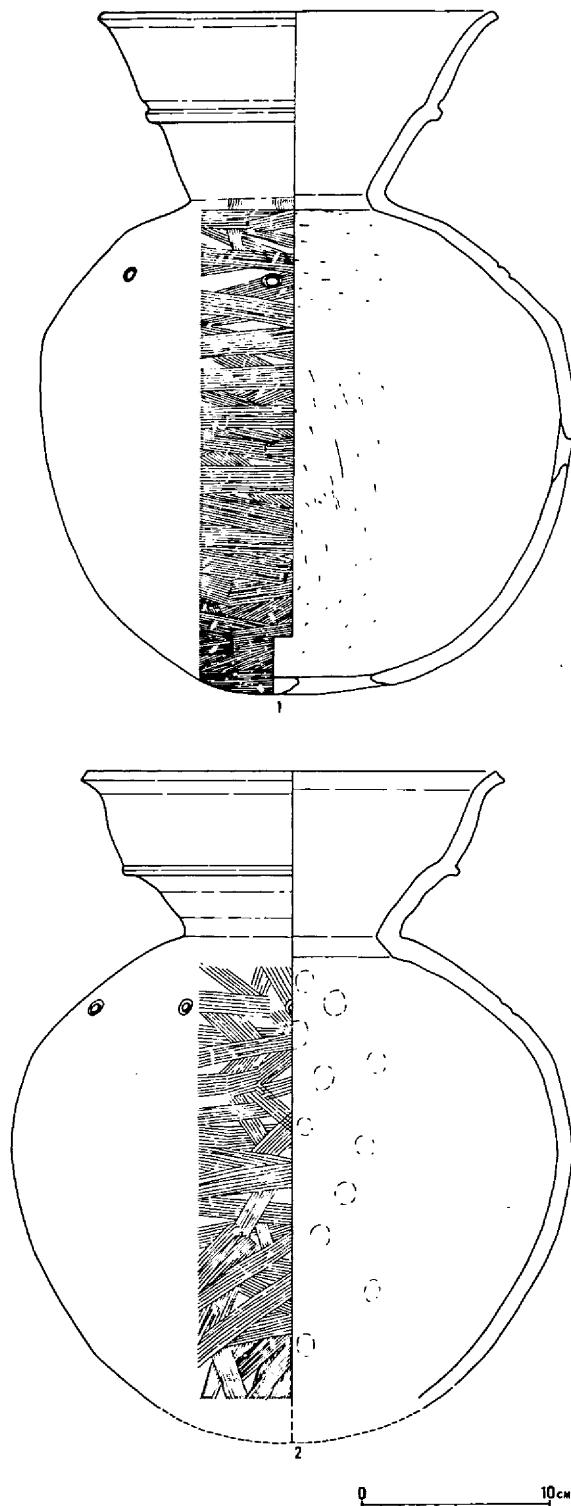
錆化が著しいが、鍛造の鉄製品と異なり、錆膨れや板状の剥離が認められず、ブロック状に無数のヒビが生じている。調査後鉄器処理を行ったが、結局、石が風化して砂になるのと同じような現象で紛々に壊れてしまった。

土師器（第20・21図、図版19—20）

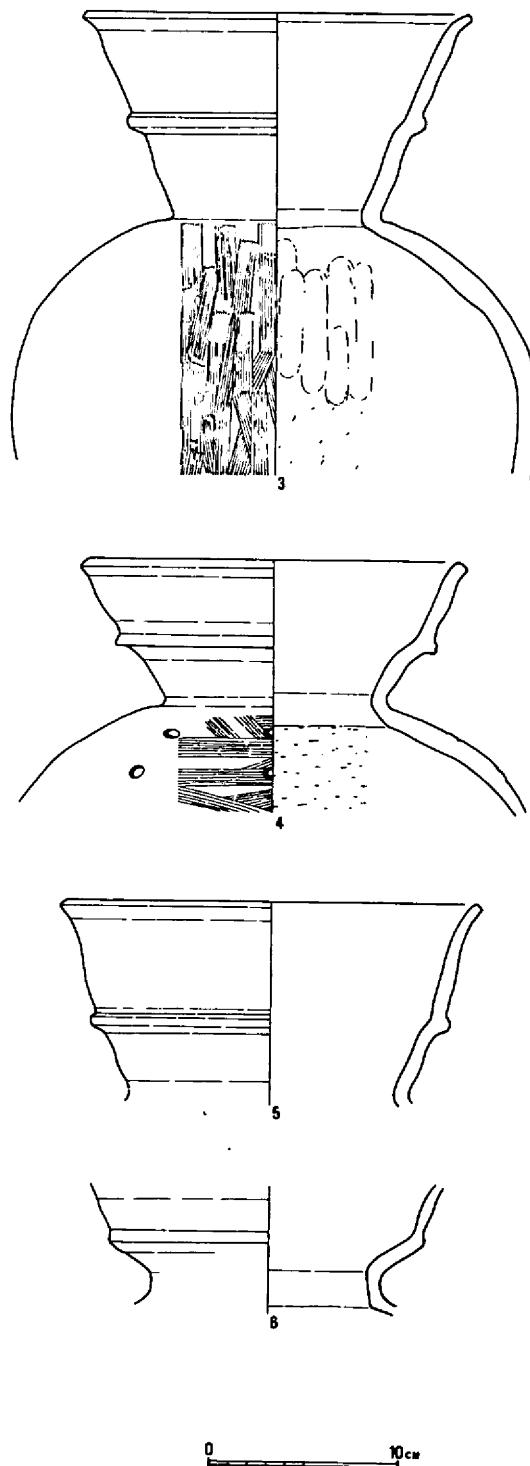
すべて周溝内から出土したもので、1と2は完形に近い状態で出土した。いずれも壺形土器であるが、壺形埴輪と称してもよいものである。

1はほぼ球形の胴部に、逆八の字状の二重口縁がつく。口縁部は胴部からくの字状に外反し、その先端部はやや強く外方へ屈曲し、先端は断面台形の凸帯となる。口縁はここからさらに外反しつつ立上り、その先端部はやや強く外反する。口縁端部は横ナデによる面をもつ。

胴部は肩に円形刺突文がめぐり、最大径よりやや下位には外からの穿孔が認められる。底部も内側より焼成後の穿孔が施されている。



第20図 周溝内出土の土師器(1) — 31 —



第21図 周溝内出土の土師器(2)

調整は口縁部の内外面は横ナデ、胴部外面は刷毛目、内面はヘラ削りで仕上げている。

2も1とほぼ同様であるが、口縁部はより二重口縁らしい。1に比べ重厚で、胴部内面は指頭圧痕が認められる。

3は胴部下半が欠けている。胴部は球形を呈すると考えられ、口縁部は逆八の字状に開く。全体に重厚である。

調整は口縁部が内外面とも横ナデ、胴部外面は刷毛目、内面は肩部が強く抑えながらナデしており、下半はヘラ削りで仕上げる。色調は赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。

4も球形の胴部と考えられるが、肩から上しか残存していない。口縁部は胴部からくの字状に外反し、ここからさらに角度を変えて外反ぎみに立上るもので、1や3の直線的に開く二重口縁とはやや異なっている。

胴部は重厚で肩には二段に円形刺突文がめぐる。

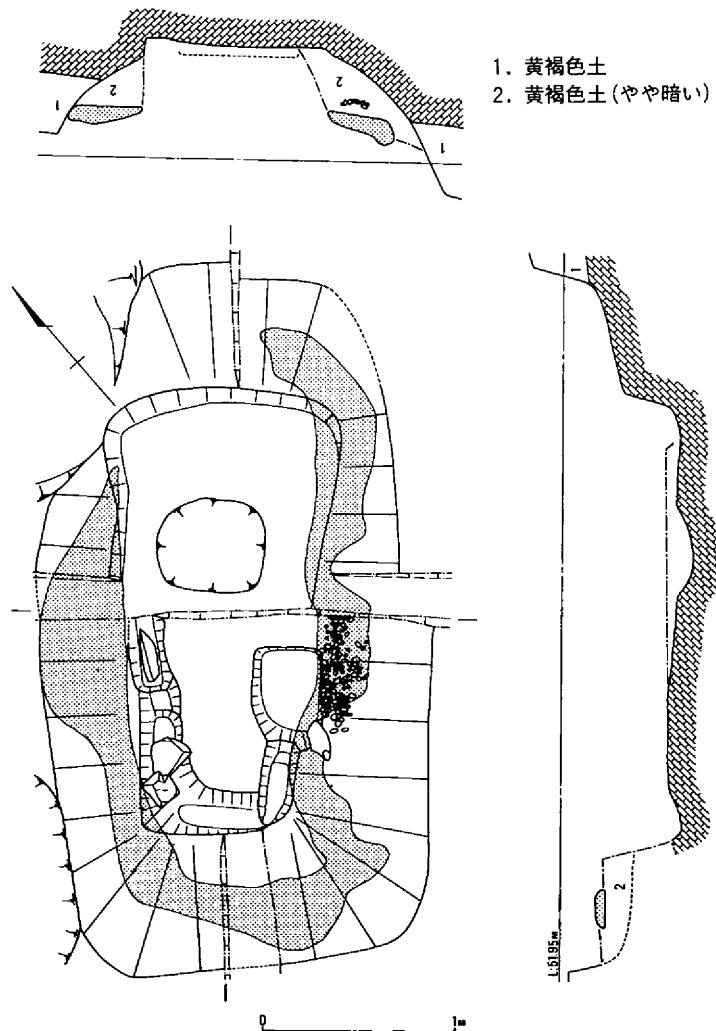
調整は口縁部内外面とも横ナデ、胴部外面は刷毛目、内面はヘラ削りにより仕上げている。色調は赤褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。

5は口縁部だけである。逆八の字状に開く口縁部で一重めと二重めとの境には断面台形の凸帯がめぐる。口縁部先端はやや強く外反し、端部は横ナデにより面をもつ。調整は内外面とも横ナデにより仕上げている。

6も二重口縁の壺であるが、1から5までの土器とは異なり、器壁は薄くやや丁寧な作りである。また口縁外面にはタガ状の凸帯がなく、僅かに段が認められるにすぎない。

IV 埋葬施設

主体部は墳頂中央部から僅かに西へ寄った所で、尾根と平行する墓壙を検出した。主体部検出面は盛土であるため、墓壙内の土との区別が困難であることから、墓壙の中心と考えられる所から十の字形に小トレンチを設定し墓壙を確認した。またこのトレンチと併行して墓壙内を少し掘り下げたところ、粘土が認められたのでこれをたよりに検出作業を行った。

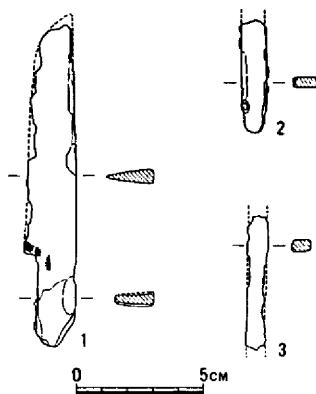


第22図 主体部

墓壙内は床面に近い所まで盜掘を受けしており、一部は床まで掘り下げていた。このため墓壙内の遺構を明確にし得なかったが、玉砂利が多量に認められたので、床面には玉砂利を敷いていた可能性が強い。墓壙の東側では粘土の下に玉砂利が一部確認された。これは断面で観察するとやや中央が凹んでいるが、どのような施設であったかは不明である。

床面は北側が盜掘で明確でないが、南側では板石（木板）を立てた痕跡が検出された。このことからこの墓壙内には箱

式石棺あるいは箱式木棺があった可能性が強くなった。



第23図 主体部の鉄製品

以上の調査から主体部は尾根と平行につくられ、長さ3.7m、幅2.1mの墓壇内に長さ約2mの箱式石棺あるいは箱式木棺が置かれたものと推定される。

副葬品の出土状態

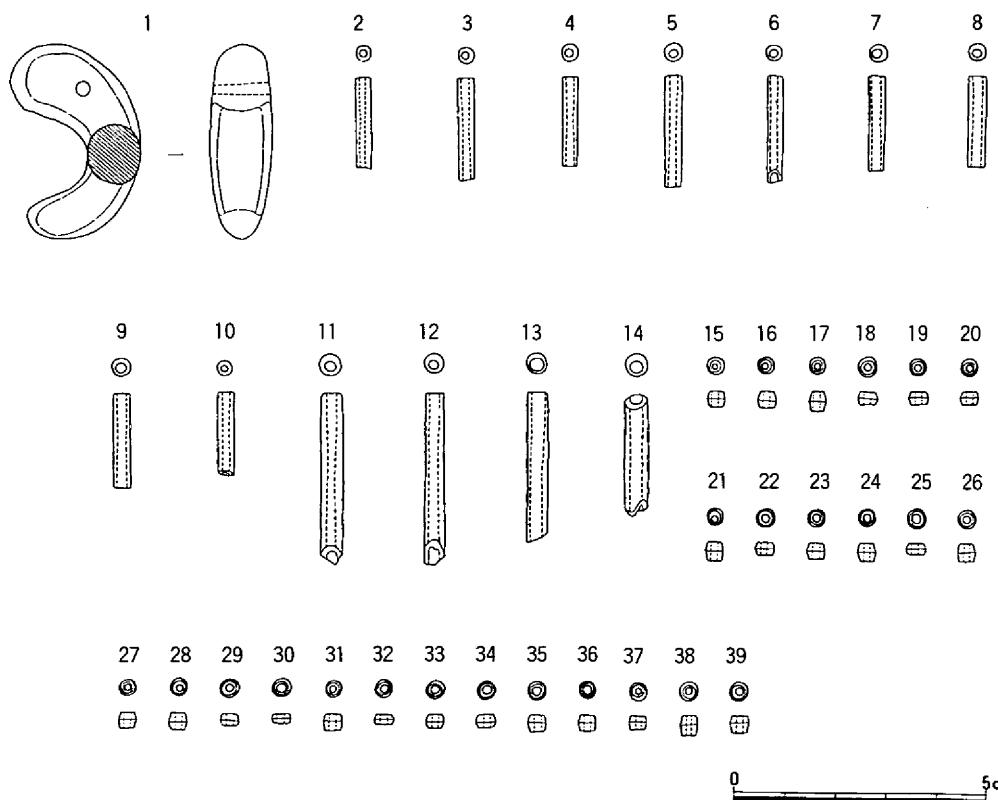
主体部内の副葬品は、盗掘による搅乱をうけているため原位置を保ったものはない。搅乱土中には多くの玉砂利が含まれ、副葬品はそれらの中に混ざって出土したが、特に管玉は軟質なことあって破損しているものが多かった。

副葬品（第23・24図、図版20）

鉄製品（第23図）

刀子（1）

床面近くの搅乱層から出土。概して長さに比べ幅広で刀



第24図 主体部の玉類

身もやや厚みがある。長さ13cm、幅2cmを測る。刃闊周辺には布が付着している。

不明鉄器(2, 3)

いずれも断片で、器種は断定できないが、鉈の可能性が強いものである。

玉類(第24図)

勾玉(1)

碧玉製の大きな勾玉で、盜掘穴の底から出土した。全長3.9cm、厚みは1.2cmを測る。

管玉(2~14)

図示したものは完形に近いものばかりであるが、小破片が多数出土している。石材は二種類認められ、軽くこすっただけで表面が摩滅するほど軟質で砂質の緑色凝灰岩と、やや硬い緑色凝灰岩とがある。長さは、やや硬い石材を使用したもののが2cm前後、軟質の石材を使用したものはすべて端部を欠損しているため不明であるが、現存部が3cmあるので、それ以上の長さである。径も長さに比例し、前者が3~3.5mmと細く、後者は4~4.5mmとやや太くなっている。しかし長さの差に比較すれば径の差は僅かなもので、これらの管玉が概して細身で長くなる特徴を示していると言える。穿孔については管玉が長いため断定はできないが、すべて両側からの穿孔と思われる。

小型算盤玉(15~39)

材質は不明であるがやや軟質なものである。いずれも丁寧な作りで表面は光沢をおびる。中央部が最大径となり両端が狭くなる。最大径となる稜線は鋭い。長さは2~4mmで、最大径は3.5~3.9mmを測る。穿孔はすべて一方からなされたものと考えられるが、両端の孔径は大きく異なることがない。

表2 8号墳第1主体部玉類計測表

勾玉							(単位 mm)								
No	全長	幅	厚さ	孔径	穿孔方向	材質	色調	No	長さ	径	孔径	穿孔方向	材質	色調	
1	39.2	24.6	12.95	2.65	一方	碧玉	深緑色	8	18.7	3.9	1.40	1.30	両方?	緑色	
管玉							(単位 mm)								
2	18.5	3.5	1.12	1.12	両方?	緑色凝灰岩	淡緑色	9	19.0	4.0	1.50	1.50	"	"	
3	20.6	3.8	1.25	1.25	"	"	"	10	16.5	3.55	1.35	1.35	"	"	
4	18.5	3.5	1.30	1.25	"	"	"	11	23.8+α	4.9	2.05	2.05	"	"	
5	22.3	4.0	1.45	1.50	"	"	"	12	34.1+α	4.9	2.20	1.95	"	"	
6	21.4+α	3.65	1.40	1.35	"	"	"	13	29.9+α	4.8	2.15	2.35	"	"	
7	19.2	3.9	1.50	1.50	"	"	"	14	23.2+α	4.95	1.85	1.85	"	"	
小型算盤玉							(単位 mm)								
No	長さ	径	最大	最小	孔径	材質	色調	No	長さ	径	最大	最小	孔径	材質	色調
15	3.15	3.65	2.85	1.15	軟質な石	淡灰緑色	"	27	3.05	3.55	3.00	1.40	軟質な石	淡緑色	
16	3.10	3.80	3.00	1.50	"	"	"	28	3.15	3.70	2.90	1.45	"	"	
17	4.00	3.35	2.55	1.15	"	"	"	29	2.20	3.55	2.95	1.55	"	"	
18	2.60	3.75	3.35	1.35	"	"	"	30	2.00	3.80	3.40	1.55	"	"	
19	2.50	3.60	3.15	1.35	"	"	"	31	3.20	3.50	2.85	1.35	"	"	
20	2.45	3.50	3.00	1.40	"	"	"	32	2.00	3.70	3.25	1.60	"	"	
21	3.75	3.30	2.80	1.25	"	"	"	33	2.80	3.65	2.75	1.65	"	"	
22	2.40	3.70	3.30	1.55	"	"	"	34	2.55	3.90	3.20	1.50	"	"	
23	3.25	3.60	2.90	1.45	"	"	"	35	3.15	3.85	3.15	1.50	"	"	
24	3.75	3.65	2.75	1.70	"	"	"	36	3.05	3.65	3.15	1.35	"	"	
25	2.00	3.50	3.50	1.45	"	"	"	37	2.80	3.50	2.70	1.65	"	"	
26	3.20	3.80	2.70	1.10	"	"	"	38	3.70	3.50	2.55	0.95	"	"	
								39	3.05	3.65	2.65	1.10	"	"	

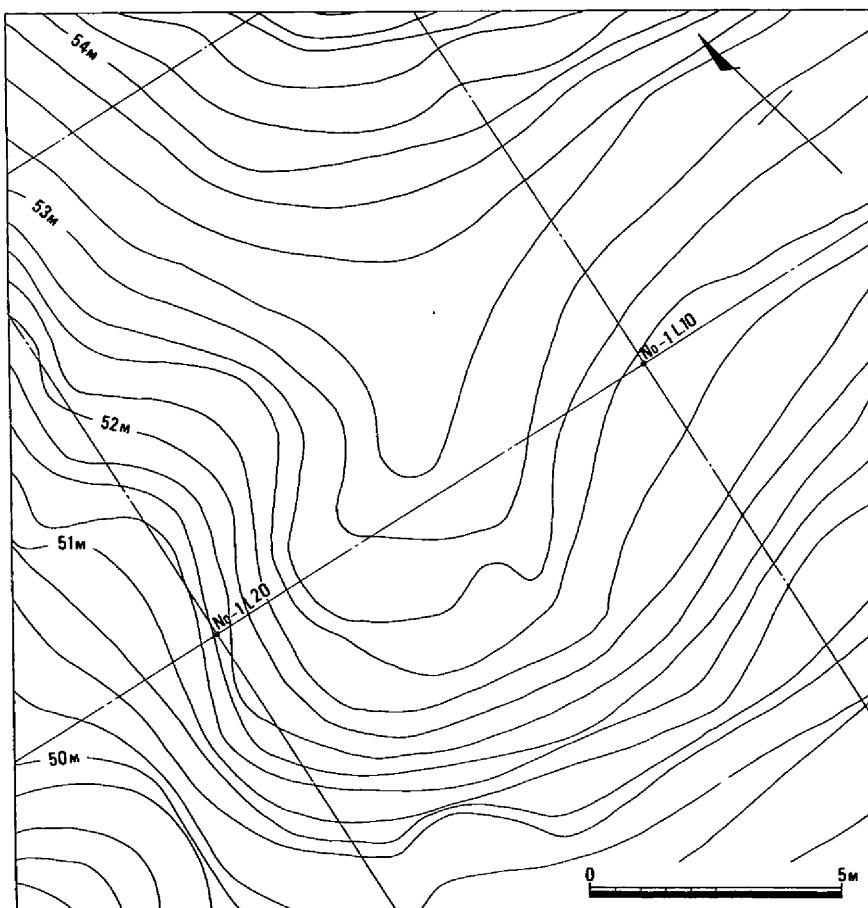
第3節 9号墳の調査

I 調査前の状況

9号墳は8号墳に接して北側の尾根の高い方に位置する。

位置する所は尾根が急峻なことから、南側から見ると8号墳と9号墳の比高差が4mにもなり、大きな墳丘に見える。しかし北側から見れば、墳丘と言うより平坦部が僅かに認められるにすぎない。西側には山道が通っていることもあり、東西の墳端は明瞭でない。

墳形は墳頂の平坦部が長方形状になっていることや、南側墳丘斜面部が比較的直線となっていることから、方形を呈すると考えられた。またその規模は一辺が約13m前後と推定された。



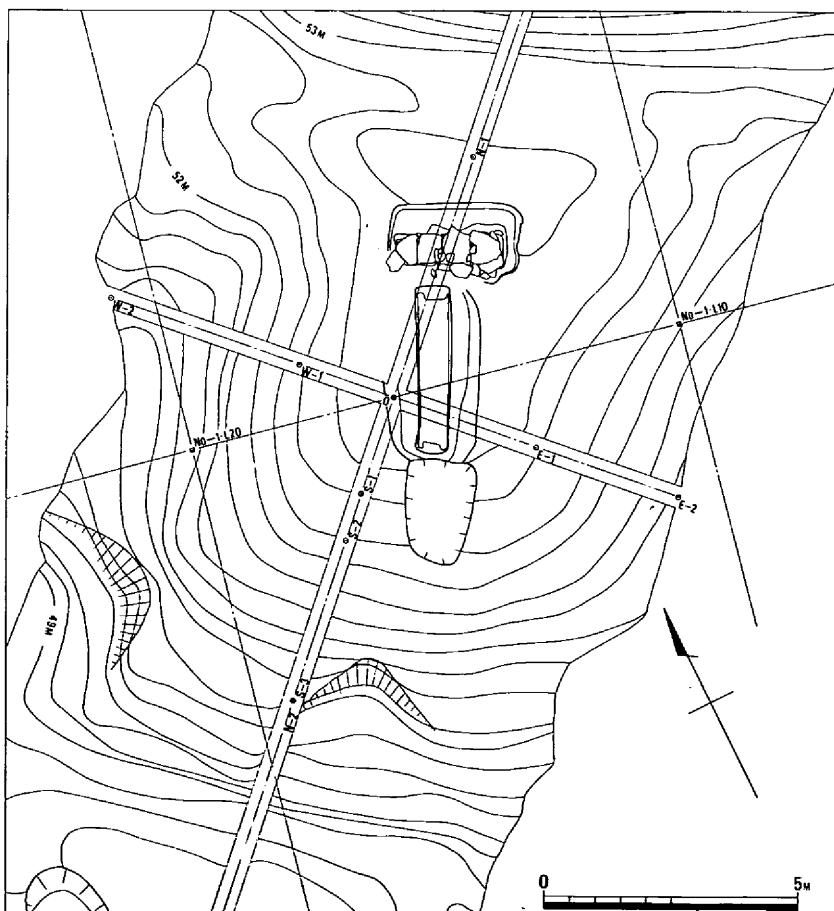
第25図 9号墳調査前の墳丘

II 墳丘

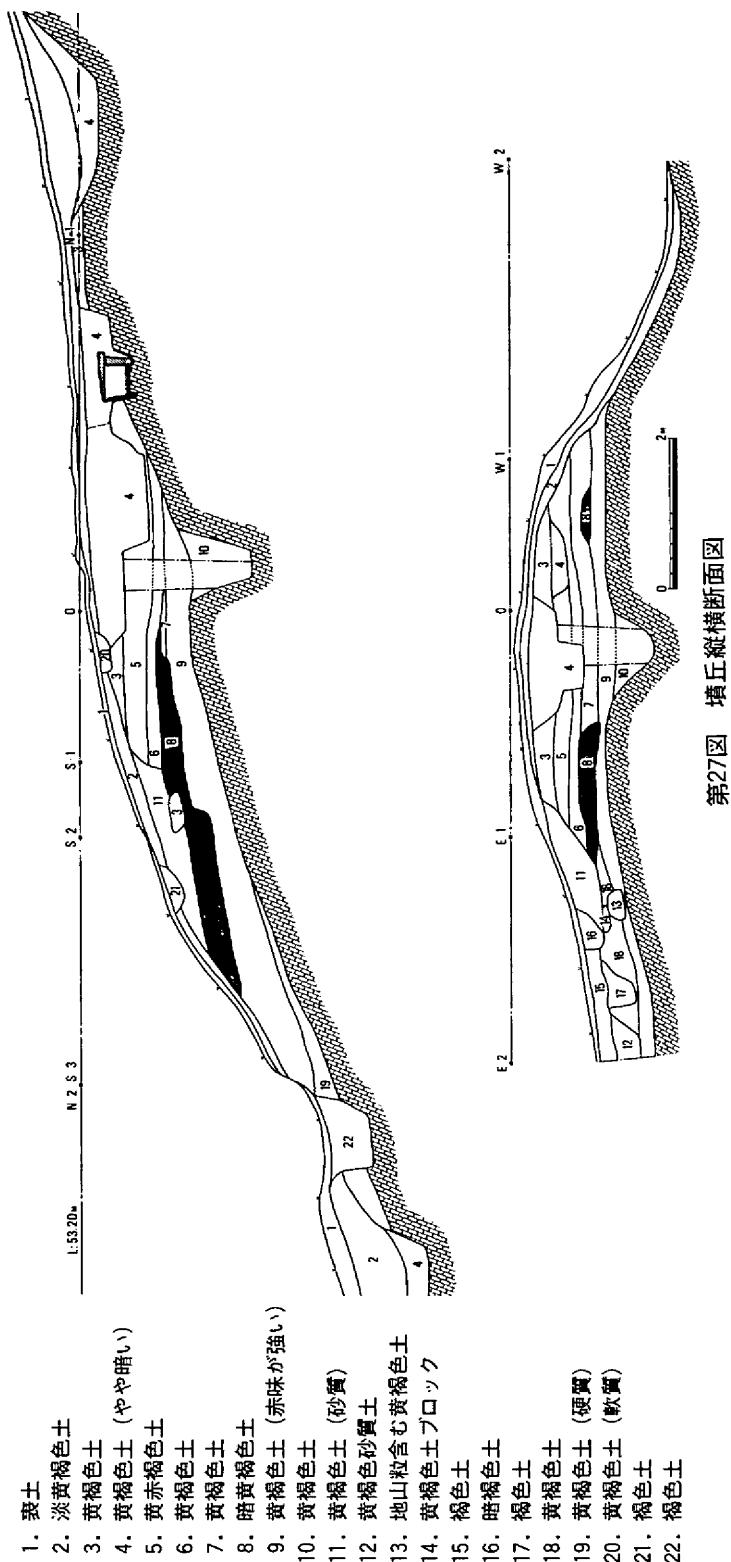
9号墳の墳丘上には表土除去に先立ち、8号墳S—N線延長上の墳頂を0とし、そこから十の字形に基準線を設定した。この基準線上に基準杭を打ち、大略東西南北であることから、E—1, E—2……と標示した。

調査は各基準線にそって土層観察用の畦を残しながら、墳丘全面の表土を除去した。墳丘上の表土は薄いが、その下に10~20cmの淡黄褐色砂質土が堆積しており、その下が盛土となる。したがって調査はこの淡黄褐色砂質土を除去し、墳丘を検出した。

その結果、墳頂部は南北約6m、東西約5mの長方形の平坦面となり、北側には直線的で両端が「」形に屈曲する周溝が検出された。このことから方形を呈する墳丘であることが判明した。墳端は北が周溝により、南は8号墳の周溝から明らかであるが、東西については明瞭で



第26図 調査後の墳丘

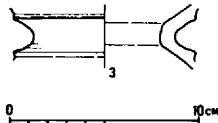
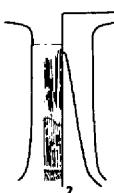
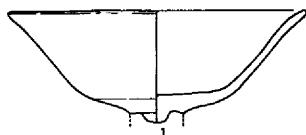


第27図 墳丘縦横断面図

ない。したがって北側周溝両端との関係から推定する以外はない。そうすると南北約14m、東西約12mのやや長方形を呈する墳丘が想定される。なお西側墳端近くの谷地形は新しい山道によるものである。

次に墳丘の築造状態を見てみよう。断面図はN—S線とE—W線に接して設定したトレーニチのものである。これで見ると自然に傾斜した地山(真砂土)上に、ほぼ水平に近い状態に土を何段にも積み上げていたことが看取される。全面ではないが途中に黒色土層が認められ、中には若干の炭、あるいは灰が含まれる。旧地表と考えられなくもないが、地山面の傾斜度に合わないばかりか、黒色土層そのものがほぼ水平であることから人工的にもたらされたものと考えた方がよいであろう。

III 周溝



第28図 周溝内出土遺物

9号墳の周溝は北側に位置する10号墳の墳端に接してコの字状に掘られている。周溝の規模は中央部で幅1.7m, 深さ30cmを測る。両端は斜面にそって低くなっている。屈曲するあたりから掘り込みが浅く不明瞭となる。

周溝内には暗黄褐色土が堆積し、その上に淡黄褐色砂質土が厚く覆っている。

周溝内出土の遺物（第28図）

周溝内からは土器が若干出土した。いずれも復元しても完形とはならないもので、本来この古墳に伴うものかどうかは断定できず、10号墳の墳丘からの転落ということも考えられる。

1は高杯の杯部で、ほぼ水平な杯底部から外反しながら立上がる口縁部がつくものである。底部と口縁部の境はにぶい曲線状を呈しながら折れ曲がっており、口縁部は斜め外方へ立上がり、端部近くでさらに強く外方へ開く。口縁端部は横ナデにより丸くおさめている。底部外面は脚柱部に嵌め込むように、中央にヘソ状の突起がつくられ、その周囲を凹ませている。

調整は不明であるが、底部内面には指頭圧痕が認められる。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には1mm以下の砂粒を多く含む。

2は高杯の脚柱部である。別個体であるが、1のような杯部がつくものと考えられる。

脚部は長い柱部からラッパ状に開いて脚端にいたると考えられる。杯部との接合はおそらく嵌め込みと思われ、接合後強い横ナデにより調整している。柱部の調整は外面は刷毛目、内面はナデにより仕上げている。

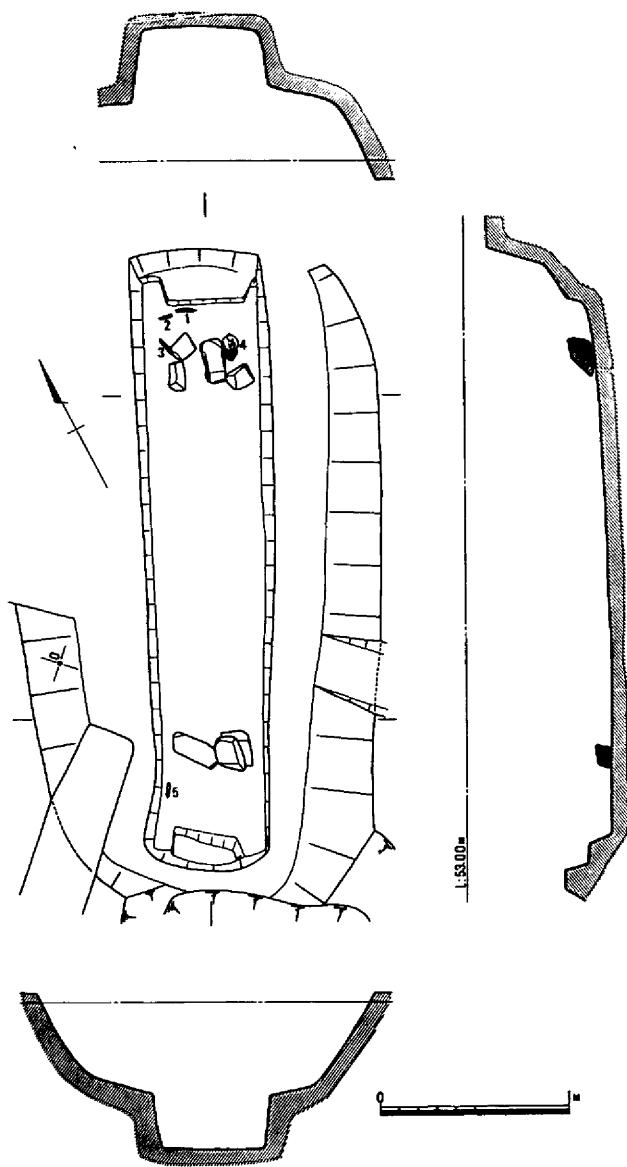
色調は淡黄褐色を呈し、胎土には1mm以下の砂粒を多く含む。

3は鼓形器台で、くびれ部を残して受け部と脚部を欠損している。外面には丹が塗られている。調整は外面が横ナデ、脚部内面はヘラ削りがなされている。

色調は赤茶褐色を呈し、胎土には1.5mm以下の砂粒と微細な金雲母を多く含む。

IV 埋葬施設

主体部は平坦な墳頂から2基検出された。南側に位置し、尾根稜線と平行している埋葬施設を第1主体部とし、その北側に尾根稜線と直交している埋葬施設を第2主体部とした。いずれ



第29図 第1主体部

その結果、隅丸長方形を呈する長さ約3.7m、幅1.9mの墓壙を検出した。

墓壙内には木棺痕跡が検出された。木棺は箱式の組合せ木棺と考えられ、外口板は両側板で挟んでいる。底に板が敷いてあったかどうかは確認できなかった。しかし鏡と一部枕石の下にまで残っていた板材は厚みが2cmもあり、鏡を収めた箱と考えるより、底板が残ったものと考えられないだろうか。

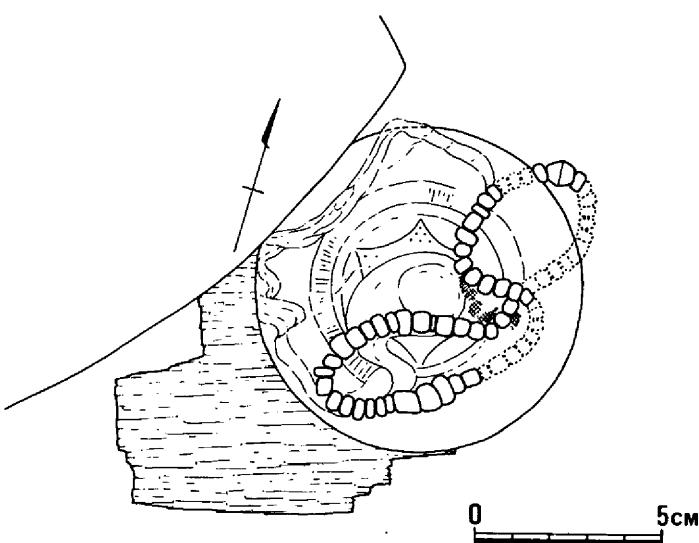
木棺の規模は内法で長さ2.8m、幅60cmを測る。棺の中には南北両端に自然石を配した枕石

も盛土上面で検出したが、その前後関係は明確にし得なかつた。ただ断面で観察した結果では、自信はないが第2主体部が第1主体部の墓壙を切っているようにも見えた。

第1主体部

第1主体部は墳丘のほぼ中央につくられているが、墳頂平坦部だけを見ると南に寄っている。

当初盛土上面で検出作業を行なったが、墓壙埋土と同じ土であることから、平面では明瞭に確認することができなかつた。そこでS-N線にそって小トレレンチを設定したところ鏡が出土した。さらにE-W線にも小トレレンチを設定し、墓壙の輪郭をつかもうとしたが、明瞭な線は決めることができなかつた。そこで概略的な輪郭線の内側から掘り下げてゆき、比較的明瞭である木棺痕跡の部分から逆に上へ壁を検出しながら掘りあげた。



第30図 鏡と玉の出土状態

が置かれている。

副葬品の出土状態

副葬品は木棺の両端、すなわち枕石のある被葬者の頭部に集まっている。

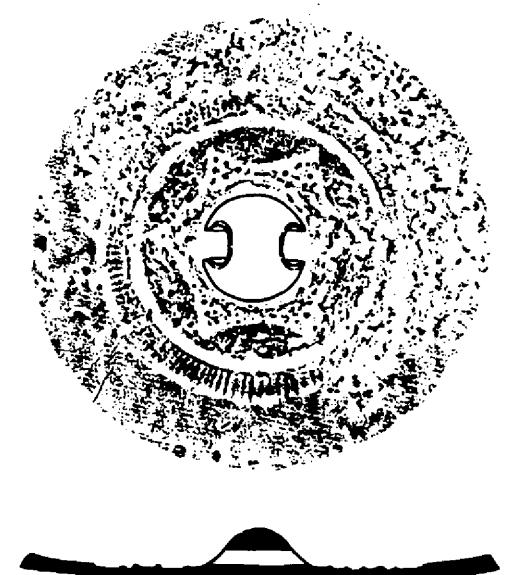
北側の枕石周辺には鏡と鉈が副葬されていた。鏡は最初の墓壙を確認する小トレンチで確認されたもので、枕石の下に一部入り込むような形で鏡面を下に向けて置かれ、その上に8の字状に連鎖した玉を重ねていた。この連鎖した玉は、1個の水晶製算盤玉と

多くの水色を呈したガラス小玉、そして若干のあい色を呈したガラス小玉よりなっており、総長26cmを測る。いかんながら細心の注意を払ったものの、トレンチにかかったということもあり、著しく軟化していたガラス小玉の一部が、検出時あるいは取り上げの段階で壊れてしまった。

鉈は枕石の北側で出土した。いずれも破片となっているが、1と2は同じものが折れたと考えられるが、3については別のものと思われる。これらの副葬品はすべて床面に接着していた。

南側の枕石周辺は刀子が1点副葬されていた。刀子は枕石の南側で、床面に接して出土した。

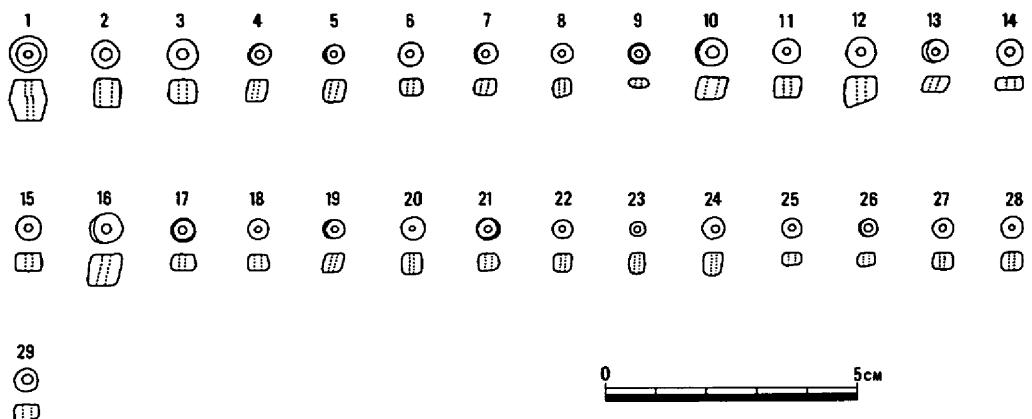
第1主体部の副葬品



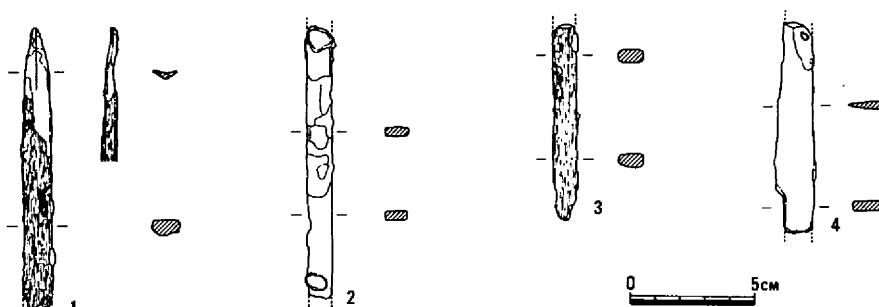
第31図 第1主体部出土の鏡

鏡（第31図、図版25）

仿製の内行花文鏡で、径9cmを測る。鏡面は若干凸面となっている。鏡背は縁が若干厚くな



第32図 第1主体部出土の玉類



第33図 第1主体部出土の鉄製品

る平縁で、外区には櫛歯文がめぐり、内区には六花文が配されている。花文間には珠文が三角形状に頂点が1個、中間が2個、底辺が3個置かれ、さらに底辺から花文間を連ぐように3個の珠文が一列に配される。鉢は円形で、外側に凸線がめぐっている。

鏡面には布が付着し、また鉢から縁をめぐるように紐状のものが青銅によって堅くなつて残っていた。概して保存状態は良く、鋳あがりのよいものである。

玉類（第32図、図版25）

算盤玉（1）

水晶製で長さ 8.1 mm、最大径 7.2 mm を測る。穿孔は両面から行なつてある。

小玉（2～29）

すべてガラス製で色調がスカイブルーのものとコバルトブルー、さらに淡青緑色を呈するものがある。コバルトブルーと淡青緑色のものは概して大きく、平均値は長さ 4.8 mm、幅 5.3 mm

を測る。スカイブルーの平均値は長さ 3.6 mm, 幅 4.2 mm を測る。

鉄製品 (第33図, 図版26—1)

鉈 (1~3)

1 は幅狭で先端部がとがりぎみの短い刃部をもつ。茎部は刃部と同じ幅で、木質が付着している。3 は同一個体と考えられるが、直接は接合しないことから推定復元長は 18.5 cm 以上となる。

2 は茎部の一部であるが、1 と同様の形態をとるものと考えられる。

刀子 (4)

刃部先端と茎部の端を欠損している。現存長 8 cm, 刃部中心幅 1.4 cm を測る。

第 2 主体部

第 2 主体部は第 1 主体部の北側に位置し、主軸は第 1 主体部に直交する。

墓壙の検出は困難を極めたが、表土を除去した段階で箱式石棺の蓋石が一部露呈したので、それをよりどころに小トレーナーを併用しながら検出作業を行なった。その結果、第 1 主体部側

表 3 9号墳第1主体部玉類計測表

算盤玉

(単位 mm)

No	長さ	径 最大	径 最小	孔径	穿孔方	孔向	材質	色調
1	8.10	7.20	4.50	1.15	両方	水品	透明	

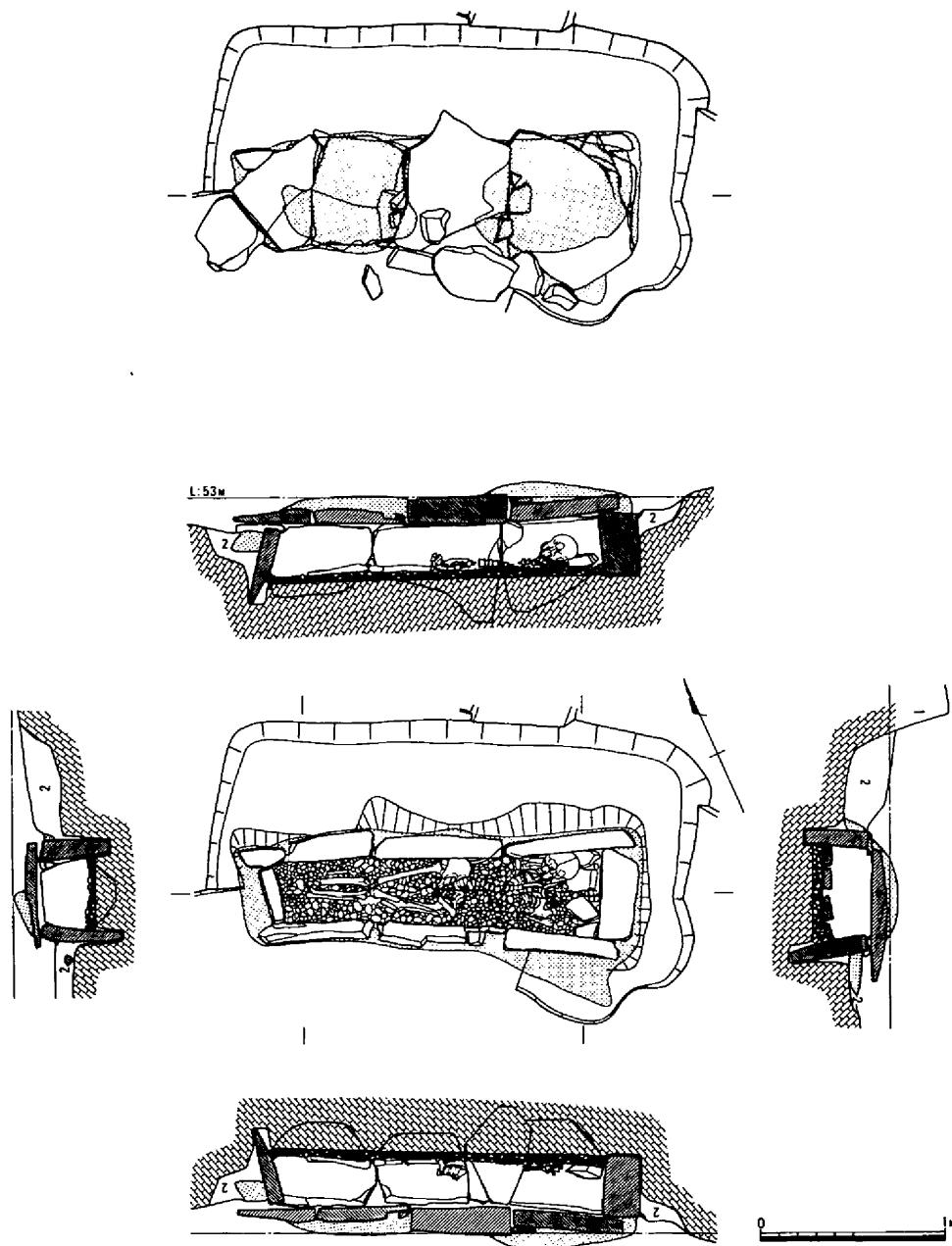
小玉

(単位 mm)

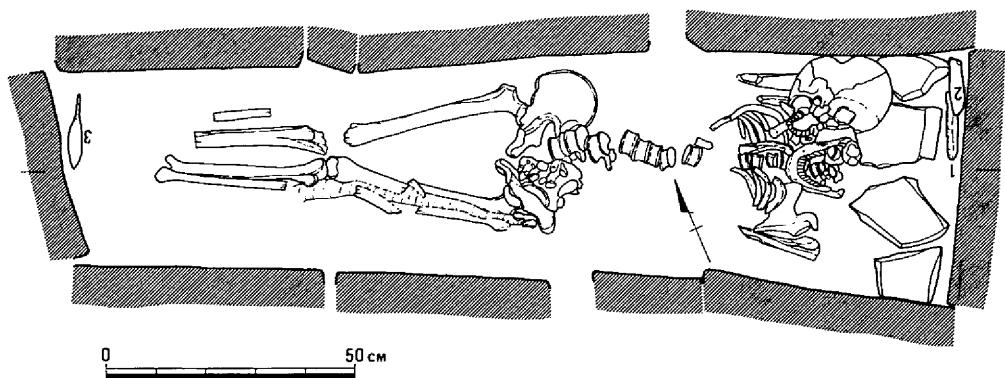
No	長さ	径	孔径	材質	色調	No	長さ	径	孔径	材質	色調
2	5.20	5.30	2.10	ガラス	濃青色	16	6.25	5.65	1.90	ガラス	濃青色
3	4.45	5.95	1.95	"	"	17	3.05	4.35	1.15	"	淡青色
4	4.40	4.00	1.10	"	淡青色	18	3.10	4.00	1.65	"	"
5	4.40	4.00	1.70	"	"	19	3.70	3.90	0.90	"	"
6	3.15	4.50	1.50	"	"	20	4.20	4.20	0.85	"	"
7	3.10	4.20	1.50	"	"	21	3.20	4.20	1.30	"	"
8	3.80	4.10	1.10	"	"	22	3.40	3.90	0.85	"	"
9	1.85	4.00	1.25	"	"	23	4.10	3.50	1.10	"	"
10	4.15	5.25	2.10	"	淡青緑色	24	4.80	3.90	1.00	"	"
11	4.05	4.40	1.70	"	"	25	2.85	3.65	1.35	"	"
12	6.10	5.60	1.80	"	淡青色	26	2.90	4.25	1.40	"	"
13	3.10	4.70	1.40	"	"	27	3.15	4.00	1.00	"	"
14	2.80	5.00	1.80	"	"	28	3.75	4.15	0.90	"	"
15	3.55	4.40	1.25	"	"	29	3.30	5.00	1.90	"	"

は明確にし得なかつたが、長さ 2.6 m、幅 1.6 m の墓壙を検出した。中央はさらにもう一段深く掘られ、箱式石棺が築かれている。

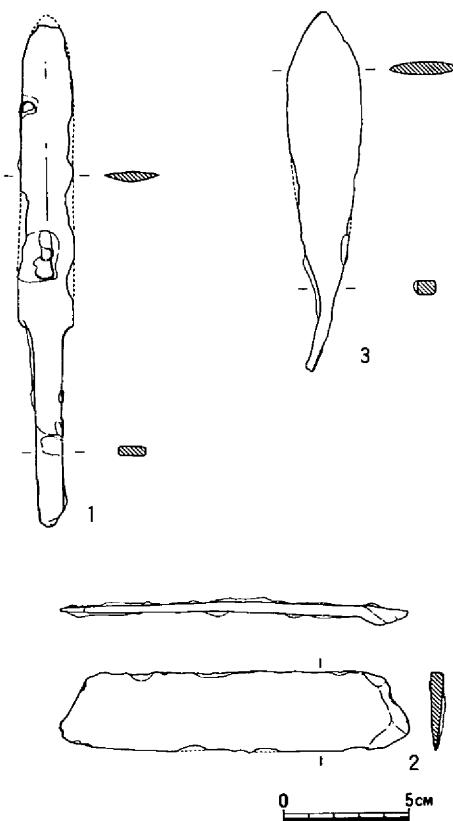
箱式石棺は内法で長さ 1.8 m、幅 40 cm を測る。蓋石と側壁間は粘土により密封してあつた。



第34図 第2主体部



第35図 第2主体部副葬品分布図



第36図 第2主体部副葬品

床面は地山上に玉砂利を厚く敷いており、東端には板石4個を配して枕石となし、それに頭をのせた人骨1体分が完存していた。

人骨は頭蓋骨から下腿骨まで残存しており、骨格から男性と推定された。

第2主体部の副葬品（第36図、図版26—2）

剣（1）

刃部先端を一部欠損するが全長20cmの短剣である。刃部長12cm、幅2cm、茎部長8cm、幅1cmを測る。

鎌（2）

刃部は直線的で、背部が刃部より狭い長台形を呈する。一方の短辺の背部側を斜に若干折りまげている。長さ13.8cm、幅3.2cm、厚さ5mmを測る。

鉄鎌（3）

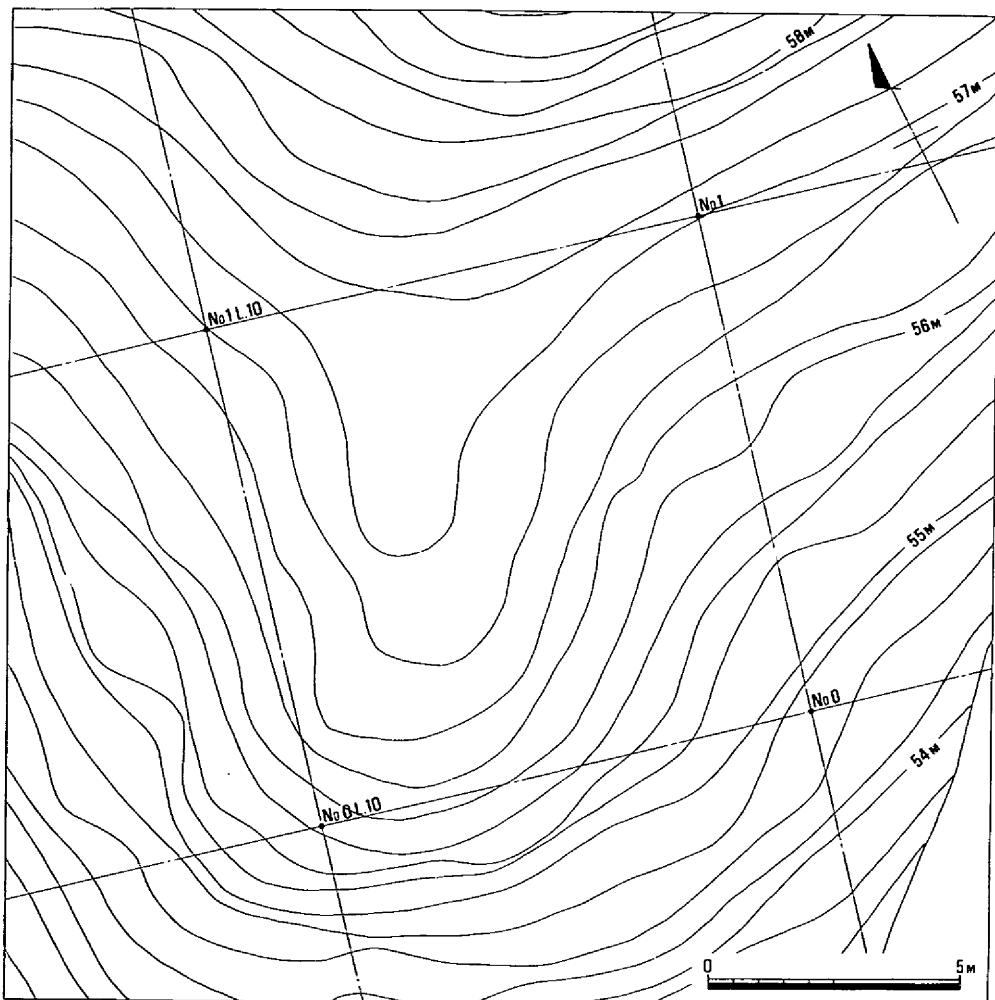
尖根式で柳葉形を呈している。先端近くが一番幅広になり基部にむかってしだいに幅を減じてゆき茎となる。鎌の断面は両丸である。長さ14.3cm、最大幅3cmを測る。

第4節 10号墳の調査

I 調査前の状況

10号墳は9号墳に接して北側に築造されている。やはり尾根が急峻なこともあり南から見ると大きな墳丘に見える。9号墳との比高差は3.5mある。

墳頂には僅かに平坦部が認められ、長方形を呈するように見える。墳丘斜面は南側が急傾斜であるが、東西はやや緩やかである。



第37図 10号墳調査前の墳丘

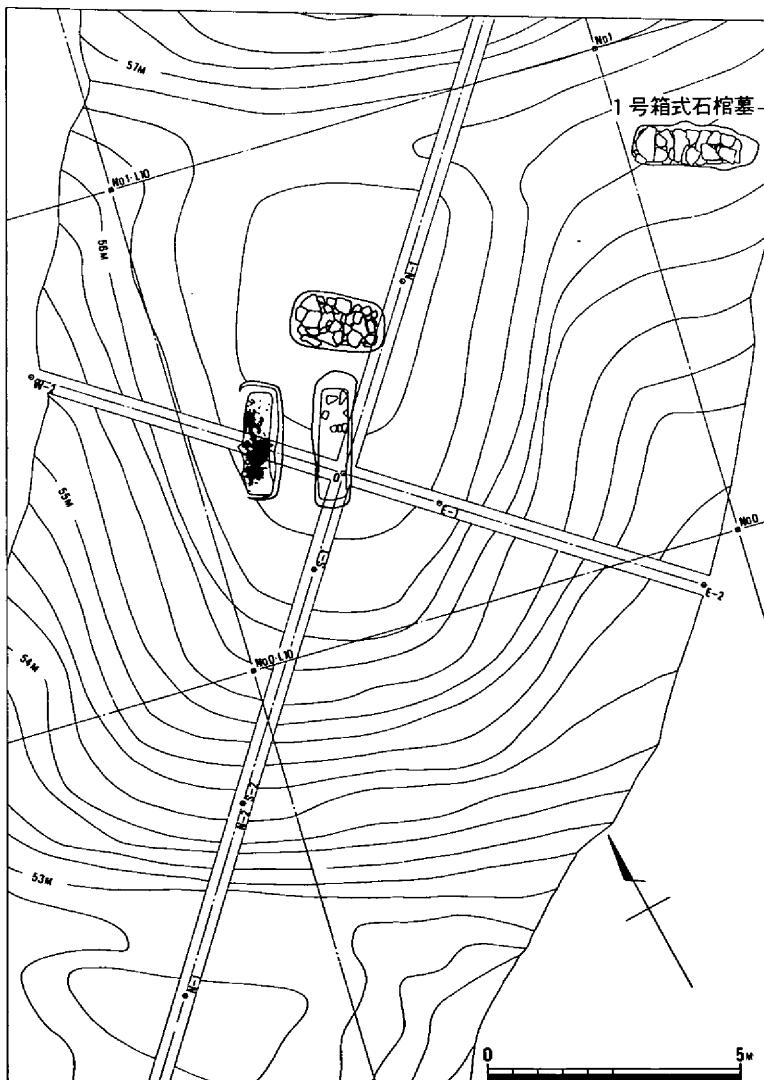
II 墳丘

10号墳も表土を除去する前に、9号墳のS-N延長線上で、10号墳の墳頂を0とし、十の字に基準杭を設定した。これらは大略東西南北ということで、E-1, E-2……と標示した。

土層観察用の畦はこの基準杭を結ぶ線を中心に設定され、その他の場所は表土を除去し、墳丘を検出した。

墳丘上には表土の下に淡黄褐色砂質土が堆積しており、特に墳端には厚く認められた。この

土を除去した結果、北側の11号墳との間に直線状に周溝が検出され、さらに周溝は東端で南に折れた。また東側墳端は周溝の続きがやや谷地形を呈し、傾斜角度が変化する点に求めた。南側は9号墳の周溝で区画され、西側墳端はもう少し調査外へゆくものと思われた。このことから墳丘規模は南北15m、東西13mで、やや長方形の平面プランを有することが判明した。



第38図 調査後の墳丘

墳頂部は南北

8 m, 東西6

mの平坦部が認められ、ここで3基の主体部が検出された。

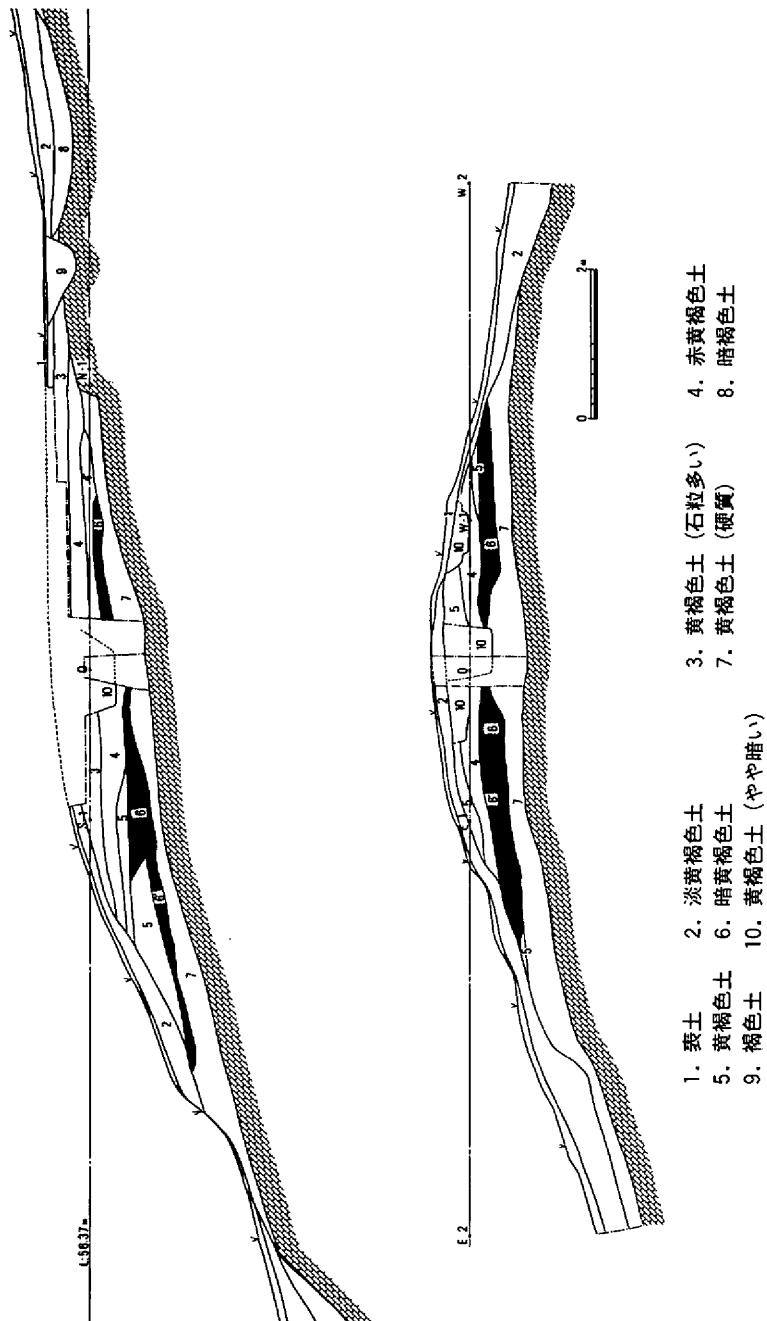
また周溝の東側では表土を除去した際に箱式石棺が検出され、1号箱式石棺墓とした。

築造状態

墳丘は地山上に30 cmから、厚いところでは1 mもの盛土により築造しているが、地山に手を加えることなく、その上に土を盛っている。盛土は傾斜を修復するように南側には厚く盛り、上層では

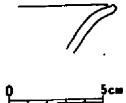
ほぼ水平に盛られる。

ここでも9号墳の墳丘盛土に認められた炭や灰を含む黒褐色土層があり、厚い所では40cmにも達する。



第39図 墳丘縦横断面図

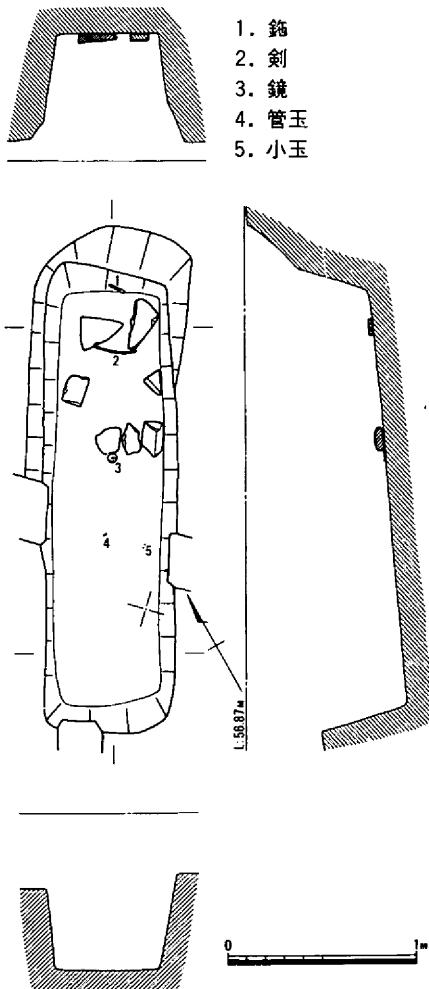
墳丘出土の遺物（第40図）



図示したものは西側墳端から出土したもので、甕形土器の口縁部である。

洞部からくの字状に外反する口縁部で、端部はやや上方へつまみあげている。調整は内外面とも横ナデにより仕上げている。色調は暗茶褐色を呈している。

第40図 墳丘の遺物



III 周 溝

周溝は墳丘の北側、10号墳の墳端に接して掘られている。8・9号墳の周溝とは異なり、地山への掘り込みが浅い。

周溝内には最下層に暗黄褐色土が、その上に墳丘全体を覆っている淡黄褐色砂質土が堆積している。遺物は全く出土しなかった。

IV 埋 葬 施 設

10号墳の埋葬主体部は3基検出された。第1主体部は墳丘平坦部の南寄り中央部に主軸を尾根と平行してつくられていた。第2主体部は、第1主体部の北側、墳頂平坦部のほぼ中央に位置し、尾根と直交する。また第3主体部は第1主体部の西側に平行してつくられていた。

第1 主体部

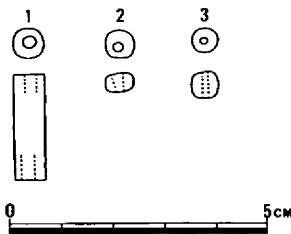
第1主体部の輪郭は盛土上面では不明確であったので、一部盛土を削り取って、小トレンチの土層観察と合せて検出作業を行った。

墓壙は盛土上面から掘り込んでおり、地山まで達していない。このため盛土と墓壙内埋土を峻別することが困難ではあったが、長さ2.65

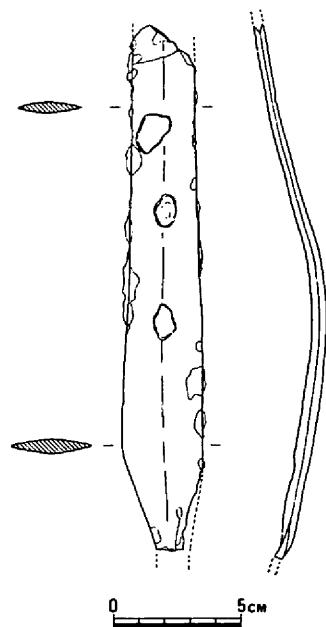
第41図 第1主体部

m、幅80cmの墓壙を検出した。墓壙の床面は平坦で南に傾斜している。おそらく箱式木棺が置かれたものと考えられるが、その痕跡は検出し得なかった。

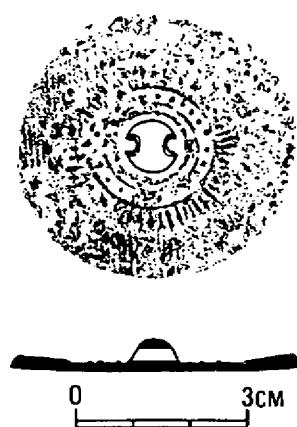
床面上には枕石と思われる板石が配されているが、中央寄りの3個からなる一群と、北端の4個からなる一群とに分れる。あるいは後者の一群はさらに北側の大きな板石2枚と、そのや



第42図 第1主体部玉類



第43図 第1主体部剣



第44図 第1主体部鏡

や南側の両側に分れた小さな石とに分れるかも知れない。いずれにしても副葬品との関係から言って、どちらの一群に頭をおいても不思議ではない。

ただ南側の三個からなる枕石に鏡を有する一群に頭を想定すれば、墓壇の端までが1.4mしかなく、やや短い気もする。

副葬品の出土状況

墓壇内からは鉈（1）、剣（2）、鏡（3）、管玉（4）、小玉（5）が出土した。鉈は墓壇の北端上層より出土した。おそらく墓壇上に副葬されたものであろう。この鉈は残念ながら現地で盗難にあった。剣は北端の枕石南側に接して床面に置かれていた。鏡は中央寄りの枕石南側に接し、鏡背を上にして置かれていた。管玉と小玉は中央よりやや南寄りの所、ちょうど手の位置と考えられる場所から出土した。手飾りの可能性が強い。

副葬品

玉類（第42図、図版31）

管玉（1）

小玉と連鎖され手飾りにしていたものと考えられる。表面は光沢がなく、白灰緑色を呈する緑色凝灰岩製で、長さ21mm、径は6mmを測る。孔は両方からの穿孔と考えられるが、孔径は上下とも2.5mmである。

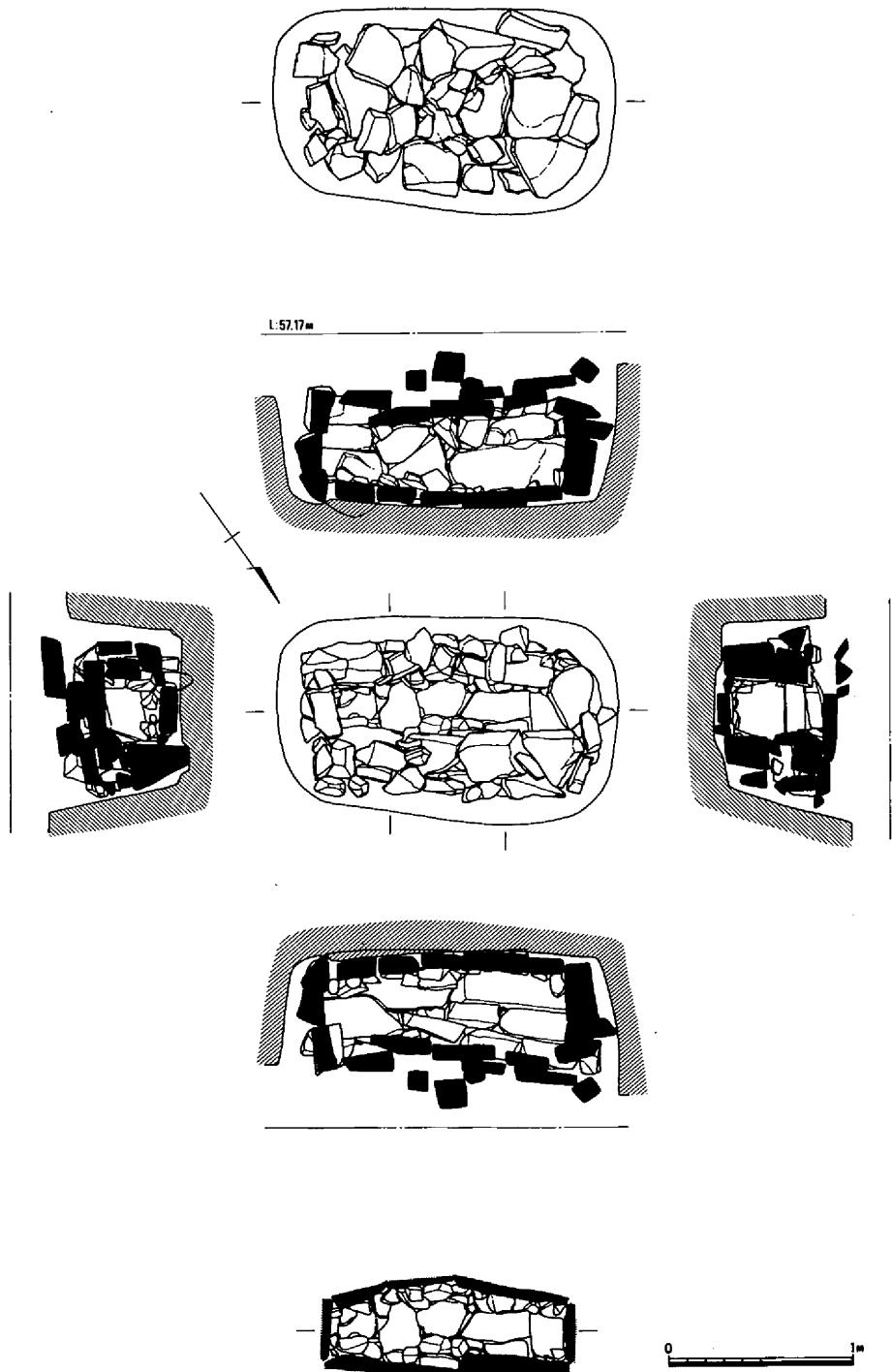
小玉（2、3）

青緑色を呈するガラス製の小玉である。1は長さ3.5mm、径5.5mm、2は長さ5mm、径5.5mmを測る。

鉄製品

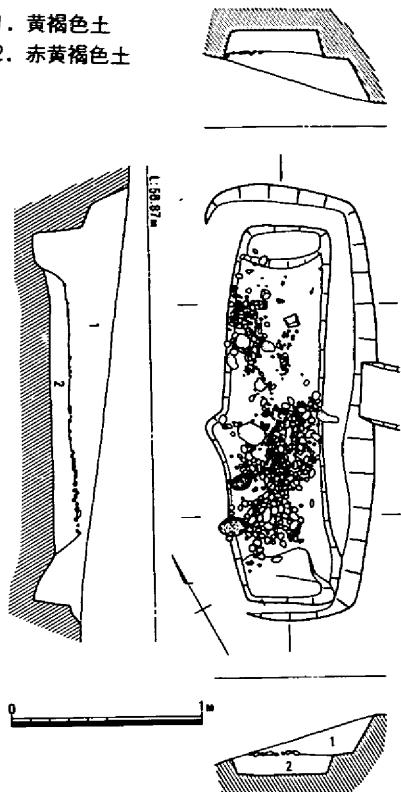
剣（第43図、図版31）

剣身は曲り、先端部と茎を欠いている。身の基部幅が最も広く、先端にむかって少しづつ幅を狭めている。関部も身から直角に幅を狭めるのではなく、斜めに幅を狭めて茎となる。現存する長さは21cm、身中央部幅3cm、同厚さ6mmを測る。



第45図 第2主体部

1. 黄褐色土
2. 赤黄褐色土



第46図 第3主体部

に間隙を小石で埋めている。石室の平面プランは胴張りを呈し、規模は内法で長さ 1.3m 、中央部幅 40cm 、東端 25cm 、西端 30cm を測る。

石室内は墓壙底部に板石を敷いて床面となし、東西両端には小礫を 1 個ずつ側壁に接して置いている。これを両方とも枕石とすると二人の埋葬が考えられる。しかし確実に枕石であるという証拠はなく、ここではそのような石が配されていたことだけを指摘するに留める。

また石室床面には両側壁に接して小礫が並べられているが、どのような機能をもつかは不明である。なお副葬品は全く出土しなかった。

第3主体部

第3主体部は第1主体部の西側に平行して築かれている。墳丘盛土の流失が著しいことから、表土直下で玉砂利が検出され、主体部の存在が推定された。墓壙は二段に掘り込まれているが、西側では一段目は残存しない。一段目の墓壙は平面プランが長方形を呈し、長さ 2.3m 、幅は推定で 90cm を測る。

2段目はほぼ垂直に掘り込まれ、南北両端には外口板の痕跡が認められた。両端の外口板よ

鏡 (第44図、図版31)

仿製の珠文鏡で、径 5.1cm を測る。概して銹化が著しい。鏡面は若干凸面となっている。鏡背は縁がやや厚くなる平縁で、外区に櫛齒文をめぐらしている。鉢は円く、内区との間にさらに凸線をめぐらしている。

第2主体部

第2主体部は第1主体部の北側に位置し、第1主体部と直交する。蓋石までが浅く、表土を除去する際に蓋石が露呈した。墓壙の検出は盛土上面で行い、第1主体部に比べ比較的容易に検出できた。

墓壙は隅丸長方形のプランを呈し、長さ 1.86m 、幅 1.1m を測る。墓壙と石室との間隙は少なく、ほぼ垂直に掘り込まれている。

墓壙内には小規模な竪穴式石室が築かれている。側壁は板状、あるいは長方形状の石を 3 段ないし 2 段積み上げ、石と石の間隙は小さな石で塞いでいる。蓋は板石で 2 重、3 重にも覆い、さら

り内側には墓壙底部に赤黄褐色土を敷き、その上に玉砂利を敷いていた。また玉砂利に混ざつて粘土塊も認められた。玉砂利は一様ではなく粗密があるが、浅いことから後世の攪乱も推定される。副葬品は全く出土しなかった。

本主体部に外口痕跡があり、箱式石棺か木棺が推定されるが、箱式石棺であれば側壁の痕跡が認められてもよいと思われる所以、一応箱式木棺の可能性が強いものと言える。

第5節 11号墳の調査

I 調査前の状況

11号墳は10号墳の北側、尾根の高い側に位置し、10号墳墳頂からの比高差は3mを測る。

墳頂には広い平坦部が認められた。墳丘南側は急峻で、等高線は直線的である。東西の墳丘は比較的緩やかで、そのまま尾根の斜面に移行してゆく。北側は平坦部から緩やかに12号墳墳丘となる。

以上のことから墳丘の平面プランは一辺約14m前後の方形を呈する古墳と推定された。

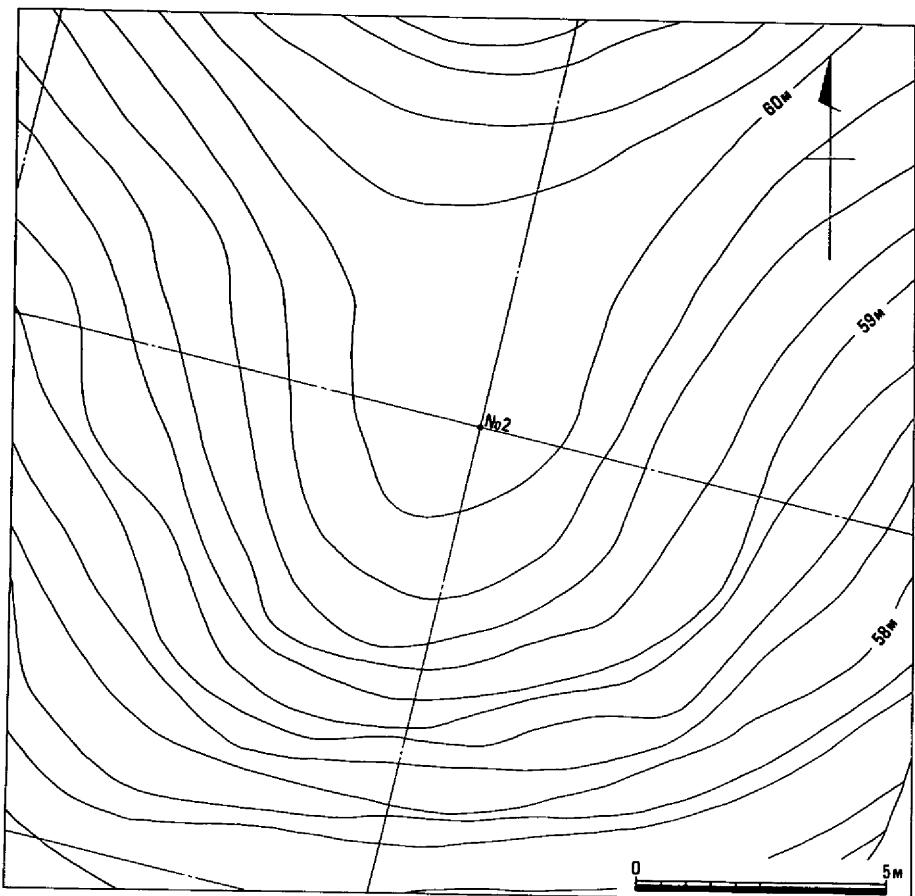
II 墳丘

11号墳の墳丘上には表土除去に先立ち基準杭を設定した。基準杭は10号墳S—N線延長上の11号墳南側墳端をS—2とし、ここからS—N線を西へ $27^{\circ} 30'$ 振った。この線上の墳頂に0を設定し、そこから十の字形に基準杭を設定した。そしてこれらは大略東西南北を示すことからE—1, E—2……と標示した。また北側のN—1からはS—N線をさらに西へ $18^{\circ} 30'$ 振った。

調査は基準杭の線を中心に畦を残し、その他はすべて表土を除去した。表土は薄い腐植土と、その下に淡黄褐色砂質土が堆積している。これを除去すると墳丘が検出され、北側から西側にかけては周溝も認められた。

墳頂には広い平坦部があり4基の埋葬施設が検出された。また平坦部が緩やかな傾斜で下がり始めた所に、一部ではあるが、列石が検出され墳頂端と判断された。この列石から推定される墳頂は一辺が8.5mとなる。

墳丘は南側が急傾斜で、等高線は直線的である。東西は深い周溝が認められ、墳頂端から緩やかに周溝につづく。したがって本墳の墳丘は南北が15m、東西13mの長方形を呈すると判断される。



第47図 11号墳調査前の墳丘

なお11号墳の西側墳端では配石土壙が検出され、また北西の周溝外では2号箱式石棺墓が検出された。

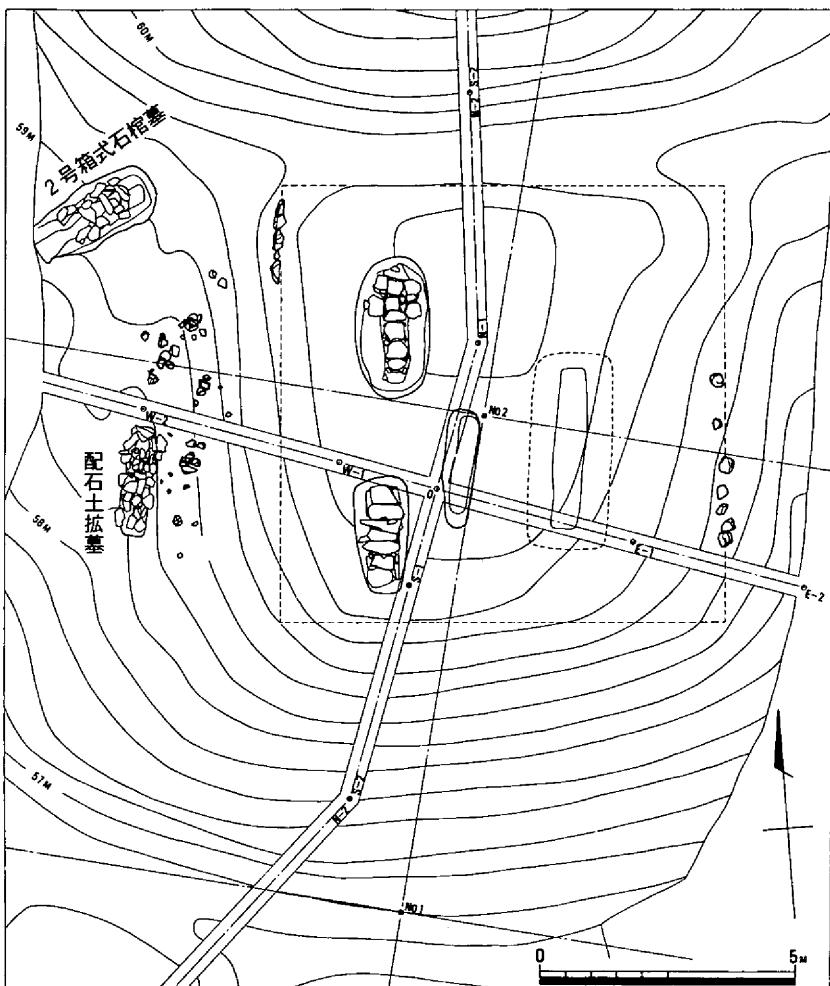
墳丘築造状態

墳丘は尾根に手を加えることなく、その上に土を盛ったもので、薄い所で40cm、厚い所で1.3mの盛土が認められる。盛土中には黒褐色土層が認められ、炭や灰を含んでいた。南側ではその上に何回かにわたって土を積み、ほぼ水平にした後黄褐色土を厚く盛っている。

列石

墳頂平坦部が東西に緩やかに下り始めた地点で列石が確認された。西側の列石は北西角から1.7m程残っており、長方形形状の石を横にして盛土に埋め込むようにして並べている。レベルはほぼ一定している。

東側の列石は南東部に点々と3.5mにわたって残っている。使用されている石は西側のものと異なり四角ばったものである。列石のレベルは南に下がっている。



第48図 調査後の墳丘

これらの列石は位置から考えて、墳頂端を区画するものと思われ、その主軸は南北を示す。

III 周 溝

周溝は墳丘の北側、12号墳の墳端に接して検出された。北側の周溝は東西に直線となり両端が南に曲がる。西側の周溝は深いが、W線の少し南まで残っていた。周溝内には列石の一部が土器とともに転落していた。またW線の南側では周溝底部に近い墳端から配石土塚墓が検出された。

東側の周溝も北側からしだいに浅くなつてゆき、尾根の傾斜と相俟つて不明瞭となる。

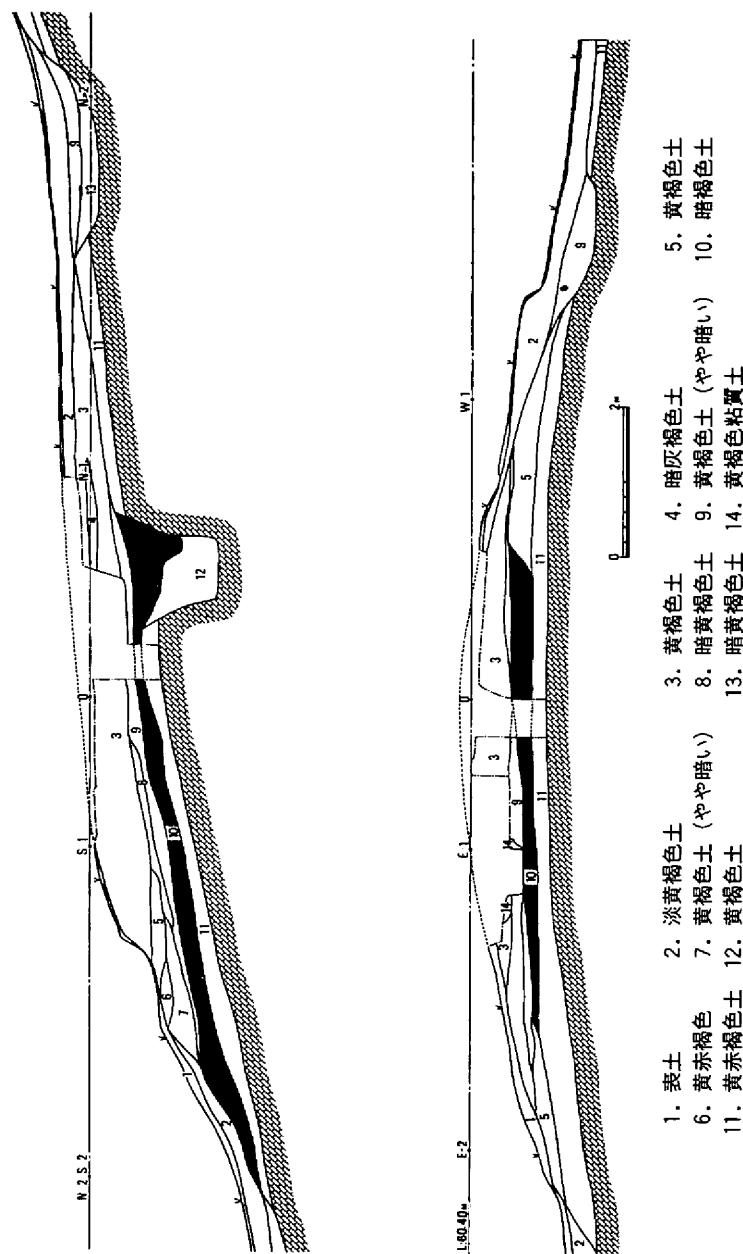
周溝内出土の遺物（第50図、図版38—2）

周溝内からは土師器が出土した。1と2は西側の周溝から出土したもので、11号墳の墳丘か

ら転落したもの
と考えられる。

3～6は北側の
周溝内で、12号
墳からの転落と
いうことも考
られる。

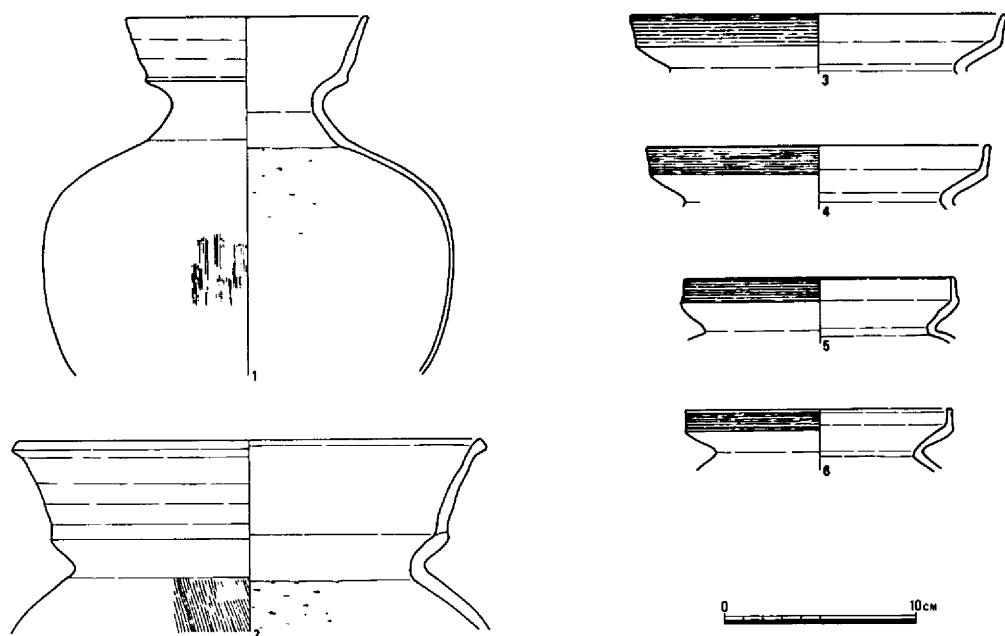
1は壺形土器
で、外面丹塗り
の丁寧なつくり
をしている。底
部がないため胸
部下半は不明で
あるが、肩が張
り、そこに最大
径が求められ
る。肩から少し
づつすぼまって
ゆくが、底部に
近いところで急
激にすぼまると
考えられ、底部
は丸底に近いも
のと推定され
る。口縁部は
ハの字状の短い
頸部に、くの字



第49図 墳丘縦横断面図

状に強く外反した後やや外反しながら長く立上がる二重口縁である。調整は口縁部内外面は横ナデ、胸部外面は細い刷毛目、内面はヘラ削りによって仕上げている。色調は赤茶褐色を呈し、胎土に細砂粒を含む。

2も壺形土器で、胸部からくの字状に外反した後上方に外反しながら長く立上がる二重口縁を有する。口縁端部はやや外方へ肥厚している。調整は口縁部内外面が横ナデ、胸部外面は刷



第50図 周溝内出土の遺物

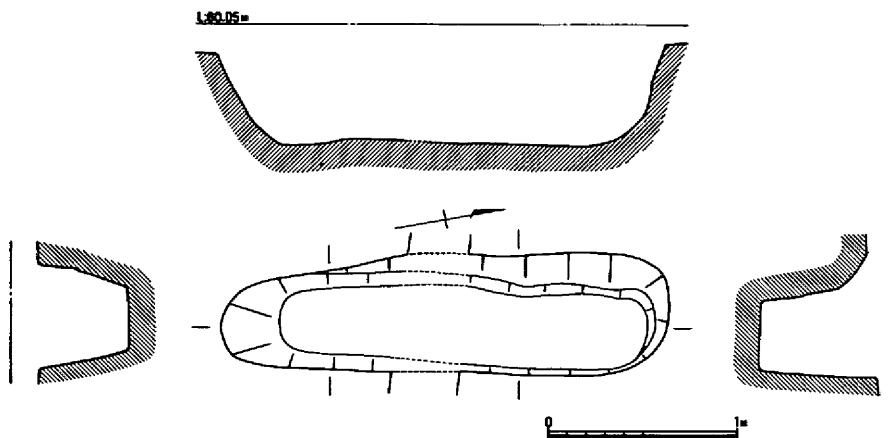
毛目，内面はヘラ削りを施している。色調は茶褐色を呈し，胎土に2mm以下の砂粒を多く含む。

3～6は甕形土器である。いずれも胴部からくの字状に外反した後上方に立上がる二重口縁を有するものである。立上がり方もやや内傾ぎみのもの（5），垂直のもの（6），外反ぎみのもの（3・4）が認められ，また端部も丸くおさめるもの（3・4）と，内側に若干つまみ出すもの（5・6）とがある。口縁外面には櫛描き沈線が施されているが，浅くて細いもの（3・4）とやや太くて深いもの（5・6）とが認められる。調整は口縁部内外面とも横ナデ，胴部内面はヘラ削りが施される。色調は淡茶褐色（4・6），赤茶褐色（3），暗黄褐色（5）を呈し，胎土にはいずれも細砂粒を含む。

IV 埋 葬 施 設

11号墳の主体部は墳頂平坦部で4基検出された。第1主体部は墳頂部南西寄り地点で，尾根と平行につくられている。第2主体部は第1主体部の北西に，これも尾根と平行につくられる。第3主体部は第1主体部の南西に，第4主体部は東側に，それぞれ尾根と平行につくられている。これらの主体部の配置を見ると第1主体部が中心的な位置を占めているようである。しかし規模・副葬品のあり方から考えると東に偏しているが，第4主体部が中心的な被葬者を埋葬したと推定される。

第1 主 体 部



第51図 第1主体部

第1主体部は盛土上面で検出した。墓壙内の土と盛土との岐別が難しく、輪郭はつかめたものの検出作業は困難を極めた。東西に小トレンチを設定し断面においても確認を試みたが満足のいくものではなかった。その上これまでの多くの主体部は何らかの施設があり、たとえ木棺直葬であっても枕石が存在していたことなどを考えれば、主体部であると断定できない点も指摘できる。しかし、表現できない土の感じをたよりに掘り下げた部分もあるが、一応主体部と考えて間違いないものと思われる。

墓壙は隅丸長方形で、長さ2.4m、幅60cmを測る。箱式木棺の直葬と考えられるが、副葬品は全く出土しなかった。

第2主体部

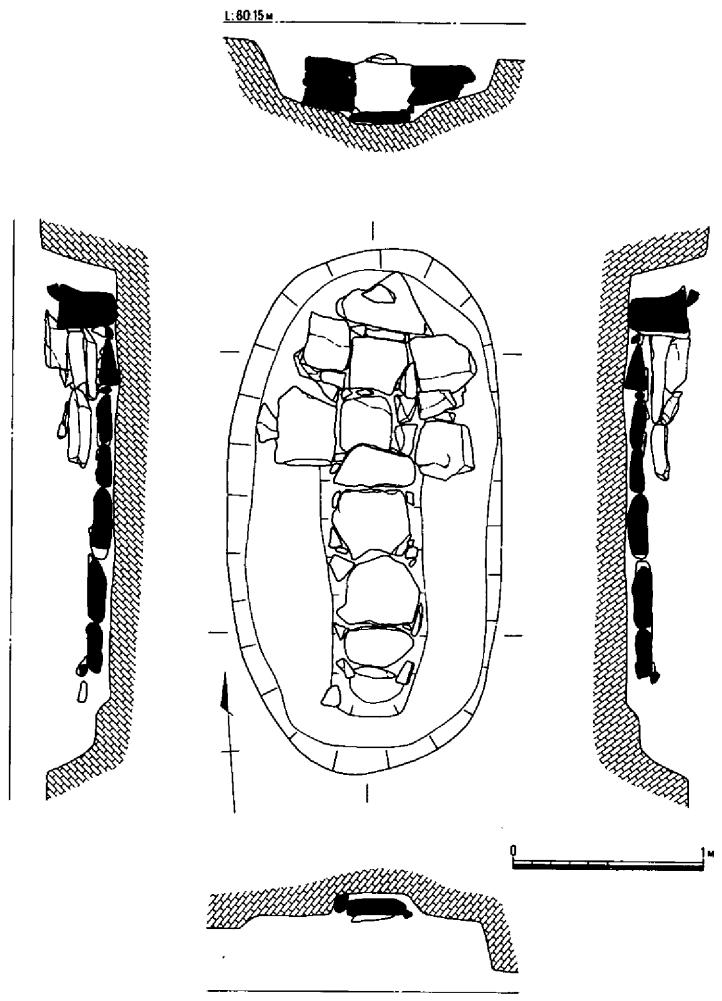
第2主体部は墳頂の北西寄りに位置し、主軸はほぼ南北となる。表土を除去した段階で側壁の一部が露呈し、その存在が確認された。

墓壙の検出は露呈した石を中心に行なった。その結果、長さ2.8m、幅1.5mの長楕円形を呈する墓壙を確認した。

墓壙中央には竪穴式石室が一部残存していた。石室は墓壙中央部を浅く一段掘り下げ、そこに板石を一列に敷き、床としている。その両側の墓壙底部に板石を3段前後積み上げ側壁となし、外口は板石を立てて囲む。側壁の高さは現存する側壁に近いものと思われ、あったとしてももう一段ぐらいであろう。石室の規模は南端が残っていないことから確定し得ないが、敷石の南端までとすれば、内法で長さ1.85m、幅28cmとなる。

副葬品はガラス小玉が1個、敷石の間から出土した。

副葬品（第53図、図版39—1）



第52図 第2主体部

形状の平面プランを呈するが、北側が幅広く掘られており、長さ $2.3m$ 、北側幅 $1.1m$ 、南側幅 $65cm$ を測る。墓壙掘り込みは上部はやや広めであるが下部では箱式石棺の側壁に接している。

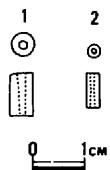
箱式石棺は板石を1板づつ立てて並べ、壁をつくっている。側壁上面は揃えられ、その上に蓋石が並べられる。間隙は小礫で埋めているが、粘土は使用していない。床面は板石を敷き、北端には礫3個を配した枕石が認められ、人骨が一部残存した。

人骨は枕石上に頭蓋骨がのり、その南には肋骨、上腕骨、脊柱などが散在し、中央部には仙骨が残っていた。

副葬品としては、頭蓋骨の周辺で管玉が2個出土した。

副葬品（第54図、図版39—2）

第53図
第2主体部小玉



第54図
第3主体部管玉

小玉

青緑色を呈するガラス製で、長さ $3.5mm$ 、径 $4.5mm$ を測る。

第3主体部

第3主体部は第1主体の南西側に平行してつくられている。

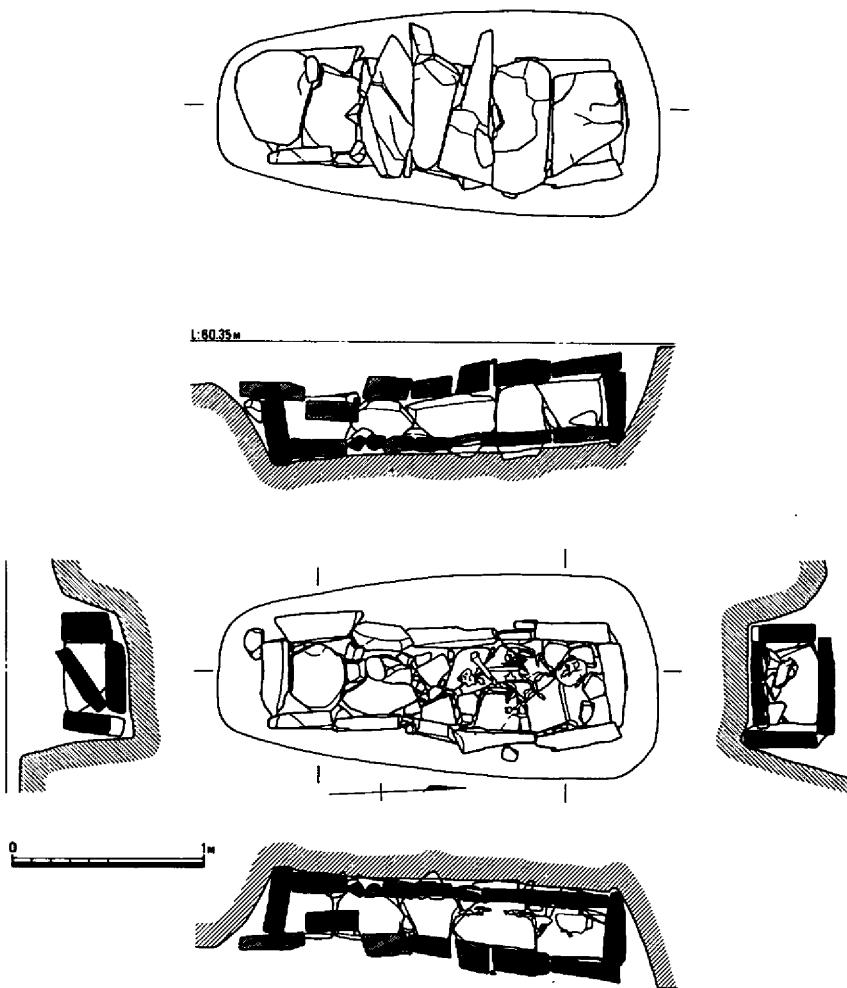
墓壙は盛土上面で検出した。隅丸長方

形

を呈する。

墓壙は盛土上面で

検出した。隅丸長方



第55図 第3主体部

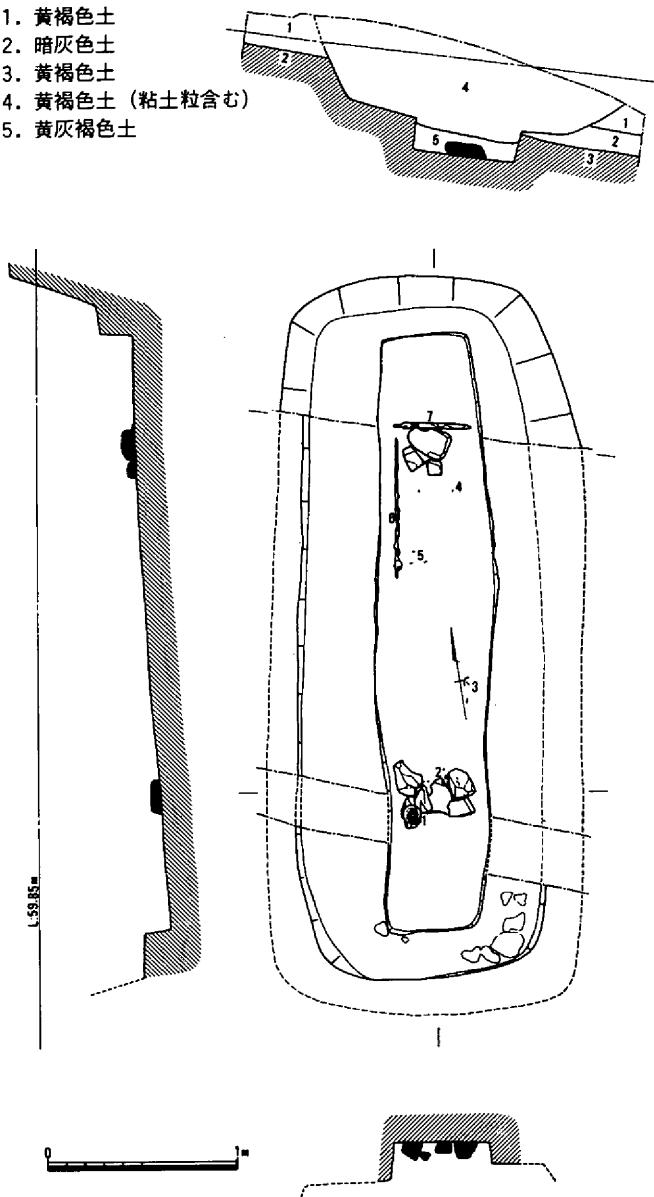
管 玉

白灰緑色を呈する緑色凝灰岩製の管玉で、表面は光沢がない。1は長さ9mm、径4.5mm、2は長さ7mm、径2.8mmを測る。穿孔は1が一方向から、2は孔径が上下同じであり、両方向からと思われるが、中が見えないので推定の域を出ない。

第4主体部

第4主体部は第1主体部の東側に平行につくられている。第1主体部の小トレンチを東に延長した際に発見されたもので、盛土上面では全く検出することができなかった。このため主体部が想定される位置を全体的に40cmほど掘り下げ検出を試みた。その結果中央部に木棺痕跡がある、長さ3.7m、幅1.5mの長方形状を呈する墓壙が認められた。また墓壙内南側では若干で

1. 黄褐色土
2. 暗灰色土
3. 黄褐色土
4. 黄褐色土（粘土粒含む）
5. 黄灰褐色土



第56図 第4主体部

が点在した。玉類は首飾りとして連鎖されていたものと思われ、勾玉と管玉から構成される。またさらに北側の右腕にあたる位置にも管玉の一群が認められる。これは腕輪と考えられた。北側の一群は枕石の北側に剣（7）が棺と直交して置かれ、その少し南から西壁際に棺と平行に大刀（6）が副葬される。首の位置からは若干の小玉（4）が出土した。また右腕の位置

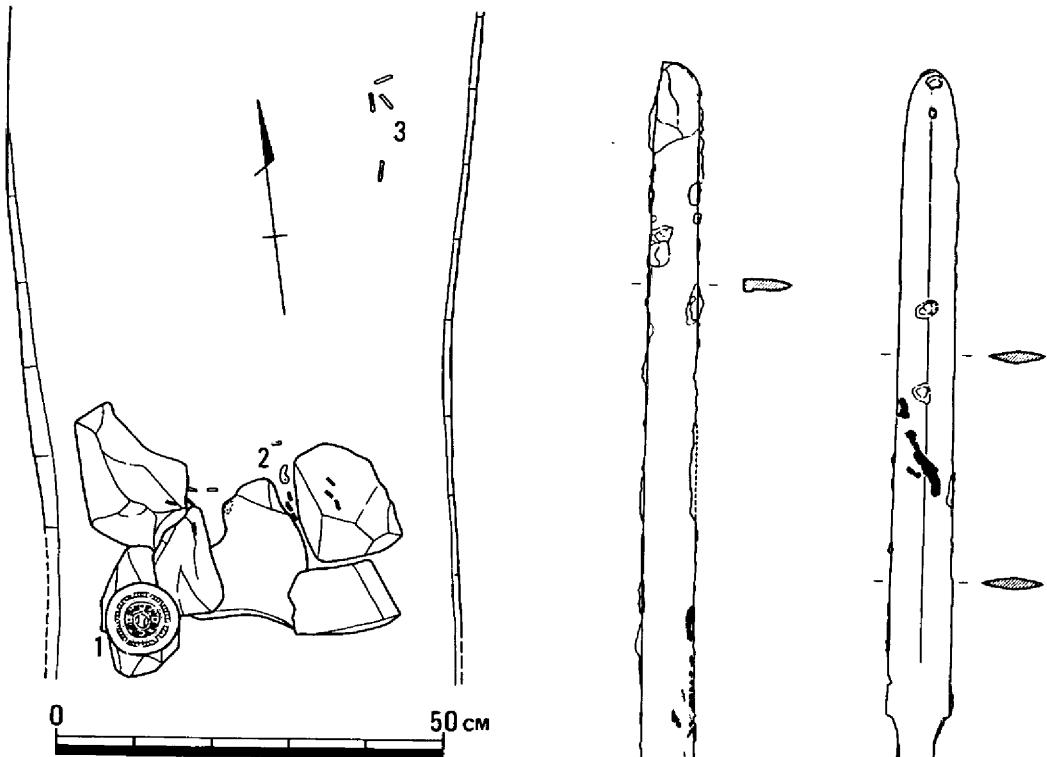
はあるが粘土が点在した。

墓壙内の木棺痕跡は側壁が垂直をなし、床面は平坦で南が低くなっている。このことから箱式の木棺と考えられる。木棺内には南北両側に磔を配した枕石が置かれている。北側の枕石は3個の石を重ねることなく配しており、周辺には朱が認められた。南側の枕石は6個の石を使用し、中央に比較的大きく上面の平坦な石を置き、その両側は一部石を重ねながら高くし、頭が安定しやすくしている。また周辺には朱が散布していた。

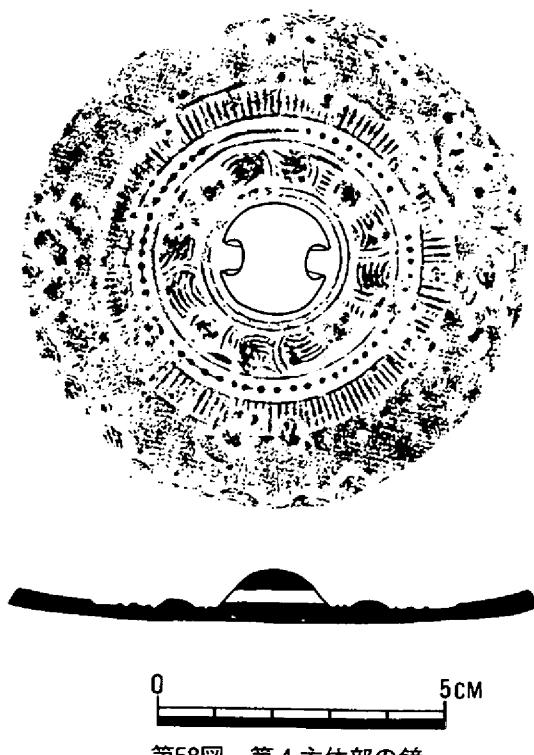
副葬品の出土状態

副葬品は南の一群と、北の一群とに分れる。このことは枕石が両端にあることと対応し、二人の埋葬があったことを物語っている。

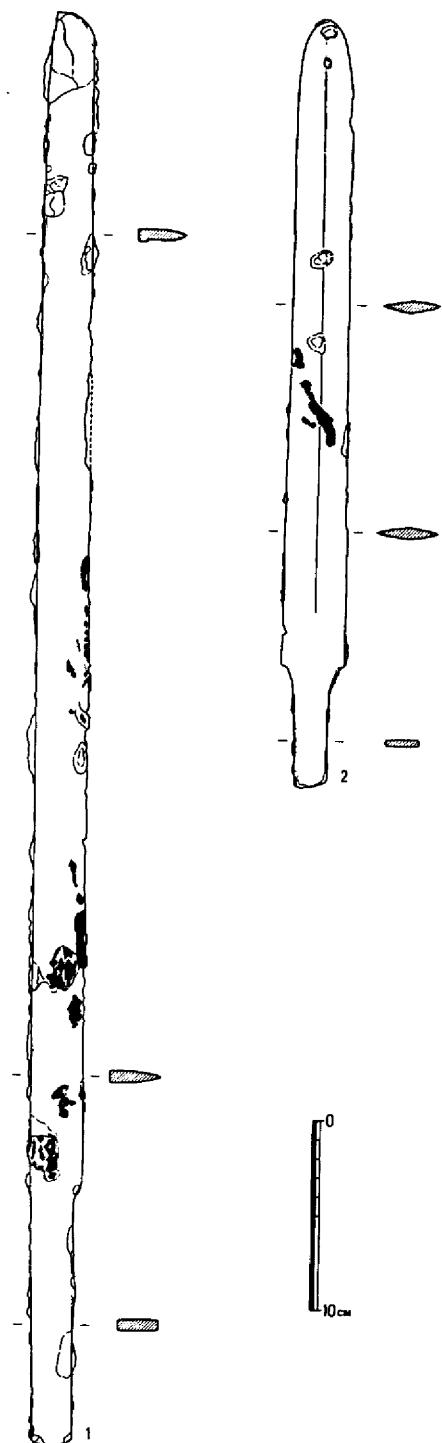
南側の一群は枕石の上に鏡（1）が鏡背を上にして置かれ、その北側、ちょうど首の位置には玉類（2）



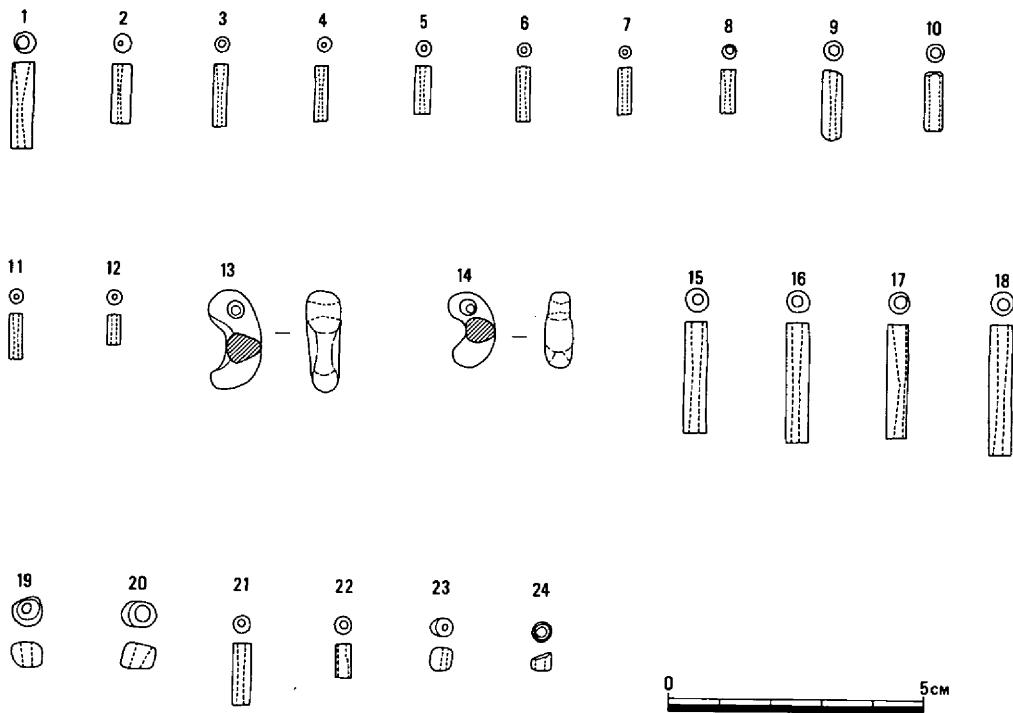
第57図 第4主体部南端遺物分布図



第58図 第4主体部の鏡



第59図 第4主体部の鉄製品



第60図 第4主体部の玉類

からは管玉と小玉が出土している。

副葬品（第58・59・60図、図版39—3・40）

鉄製品（第59図、図版40・59）

大刀（1）

やや内ぞりの大刀で、全長76cm、刀身長さ62cm、身幅2.8cm、厚さ7mmを測る。刀身には布が付着している。刃関部は直角をなさず斜めに茎に移行する。

剣（2）

剣は身基部が最も幅広く、先端にむかって少しづつ狭くなつてゆく。保存状態は良好で、身には布が付着している。全長40.5cm、身長34cm、中央身幅2cmを測る。

鏡（第58図、図版39—2）

仿製の変形四獸鏡であるが、内区の獸文が省略され獸毛だけが配されていることから、獸毛鏡とも言える。

鏡面はやや凸面をなし全面に布が付着していることから、布に包まれていたものと考えられる。

鏡背は周縁が一段厚くなる平縁で、外区には櫛齒文が、その内側には凸線で連結した珠点が

めぐっている。内区には乳文が四個配され、その間に怪獣の獣毛だけを表現した文様がくりかえされる。したがって一見すると捩文鏡に似ているが、獣毛に尻尾状のものが残っており、さらに乳文の存在など、いまだ獸形鏡の範疇にあるものと考えられる。

鉢は円形で、内外区とを区画する凸線の内側にさらに凸線がめぐる。なお鏡背には一面朱が付着している。

玉類（第60図、図版40）

玉類は出土状態からそれぞれがまとまっており、本来連鎖して被葬者に着装されていたものと考えられる。したがってここでは群ごとに説明を加える。

南側枕石の一群（1～14）・首飾りとも考えられ、管玉12個と勾玉2個より構成される。連鎖しても約15cmしかなく、首にかかるすべてに玉がめぐっていたとは考え難い。

管玉は1が暗緑色を呈する碧玉製、9と10がガラス製である以外は灰緑色あるいは青緑色を呈する緑色凝灰岩製である。規格は1がやや太くて長い他はすべて細く短い。前者は長さ17.5mm、径4.5mm、後者の平均値は長さ10.7mm、径3.1mmを測る。穿孔はすべて両方向からと考えられるが断定し難いものもある。

勾玉は両方ともヒスイ製で、淡緑色を呈するが、表面はやや風化して光沢がない。長さは1が20mm、2は14.5mmを測る。いずれも両方からの穿孔である。

南側右腕の一群（15～18）・暗緑色を呈する碧玉製管玉4個より構成される。規格は平均値で長さ23.5mm、径4.4mmを測る。穿孔はすべて両方向からと考えられる。

北側右腕の一群（19～22）・ガラス製小玉2個と灰緑色を呈する碧玉製管玉2個より構成される。

北側枕石周辺の一群（23～24）・ガラス製小玉2個しかないことから首飾りとするには問題がある。しかし他の遺物が大きく動いていないこともあり、本来この位置にあったものと思われる所以、これだけで独立した飾りが推定される。

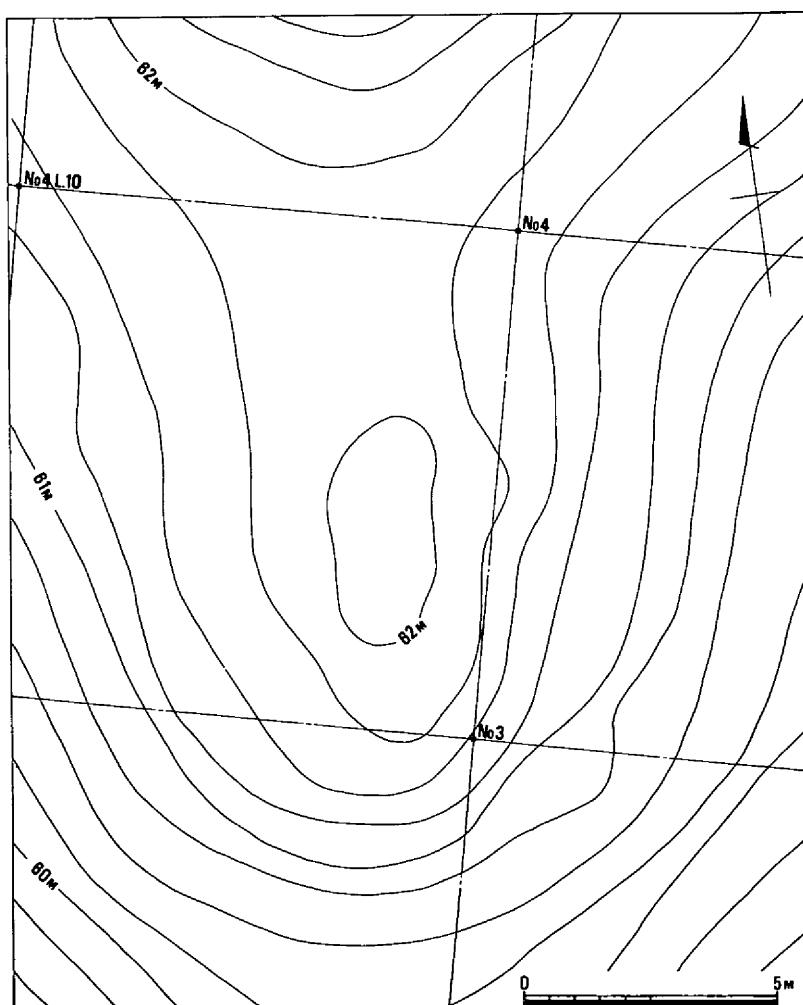
表4 11号墳第4主体部玉類計測表

勾 玉										小 玉									
No	全 長	幅	厚 さ	孔 径	穿 孔 方 向	材 質	色 調	No	長 さ	径	孔 径	材 質	色 調						
13	20.0	10.3	6.2	3.2	両 方	ヒスイ	淡 緑 色	19	4.5	6.5	2.0	ガラス	暗青緑色						
14	14.5	8.9	5.0	3.2	"	"	"	20	5.0	6.5	2.5	"	淡 青 色						
管 玉										（単位 mm）									
No	長 さ	径	孔 径	穿 孔 方 向	材 質	色 調	No	長 さ	径	孔 径	穿 孔 方 向	材 質	色 調						
1	17.5	4.5	2.0	1.0	両 方	碧玉？	暗 緑 色	10	12.0	3.5	2.0	2.0	ガラス	青 緑 色					
2	12.0	3.5	1.1	1.1	"	緑色凝灰岩	淡灰緑色	11	9.0	2.6	1.1	1.1	ガラス	暗 緑 色					
3	12.5	3.0	1.2	1.0	" ?	"	"	12	6.0	2.6	0.9	1.0	ガラス	淡青緑色					
4	11.0	2.5	1.0	1.0	"	"	"	15	22.0	4.5	1.5	2.0	ガラス	青 緑 色					
5	9.7	3.0	1.2	1.2	"	"	"	16	23.5	4.5	2.0	2.0	ガラス	暗 緑 色					
6	11.0	2.8	1.5	1.2	" ?	"	"	17	22.7	4.2	2.5	2.0	ガラス	青 緑 色					
7	9.0	2.5	1.2	1.0	" ?	"	"	18	26.0	4.5	2.0	2.0	ガラス	青 緑 色					
8	8.5	2.6	1.3	1.5	" ?	"	"	21	12.5	3.5	1.5	1.5	ガラス	青 緑 色					
9	13.5	4.0	1.5	1.2	ガラス	青 緑 色	22	6.5	3.5	1.5	2.0	ガラス	白灰緑色						

第6節 12号墳の調査

I 調査前の状況

12号墳は11号墳の北側に位置し、墳頂からの比高差は2mを計る。これまでの古墳は尾根がやや急傾斜であったため墳丘南側は急斜面となり、各古墳間の比高差は大きかった。しかし尾根は11号墳の位置する所から緩やかになったため、比高差は小さくなり、墳丘の傾斜も緩やかとなっている。



第61図 12号墳調査前の墳丘

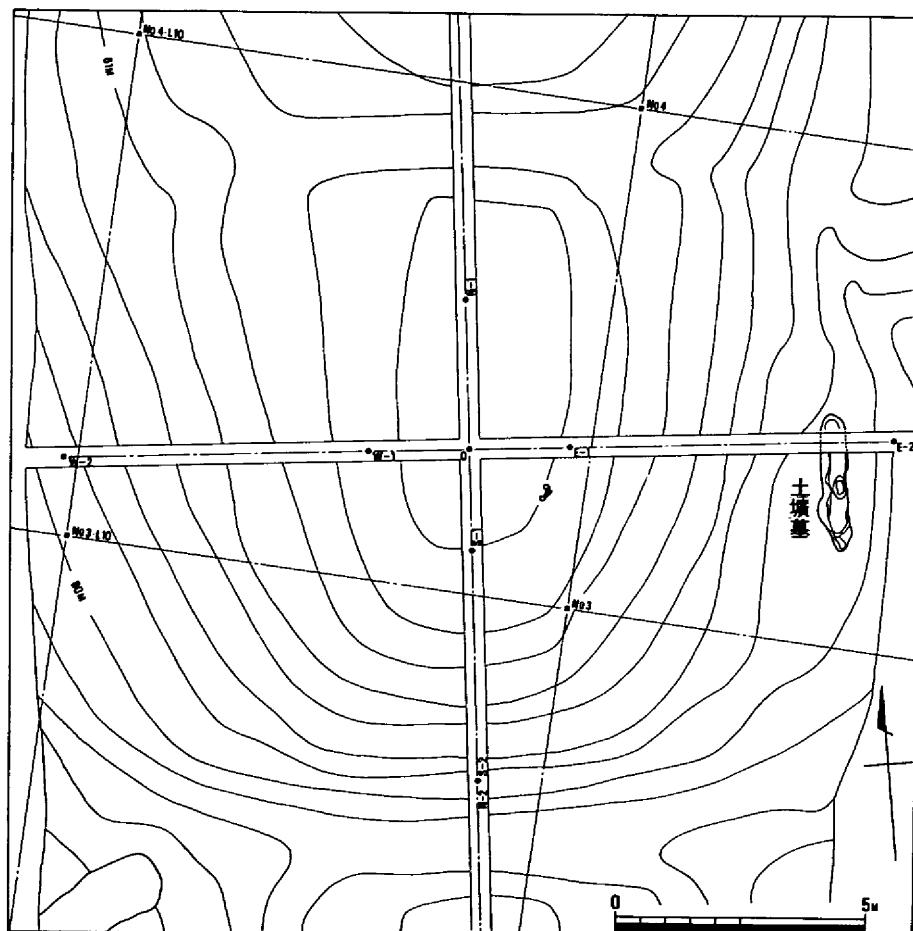
墳頂は広い平坦部が認められるが、南側が一段高くなっている。外観ではこれまでの古墳とは異なり等高線が曲線的であり、さらに墳頂が長円形状に高くなっていることなど、円墳を想定さすものであった。しかし調査の結果は方形を呈しており、尾根上での長い年月にわたる土砂の移動には驚かされた。

II 墳丘

12号墳墳丘上には表土除去に先立ち基準杭を設定した。0は11号墳N-1からN-2杭の延長線上のほぼ墳丘中央部にとり、ここから東西に90°振り、それぞれに基準杭を打ち、E-1, E-2……と標示した。また土層観察用の畦はE-W, S-N線を中心に40cm幅で残し、その他は表土を除去した。

墳丘は5cmから10cmの表土を除去すると現われ、これまでの古墳に認められた淡黄褐色土の堆積もなく、さらに表土もない所があることから、かなり頻繁に土砂の流失があったと推定される。

北側では墳丘北端を画する周溝が検出された。東西の墳端は明瞭でないが、東側は60.25m



第62図 調査後の墳丘

付近から東に傾斜が緩やかになっており、ここに墳端を求め、墳丘中央で折り返せば西は 60.50 m 付近となり東西は約 13m 前後の墳丘となる。南側墳端は 11 号墳の周溝で区画されしており、12 号墳周溝まで 13m を測る。こうしたことから 12 号墳は 1 辺が 13m の方形を呈する古墳と推定される。

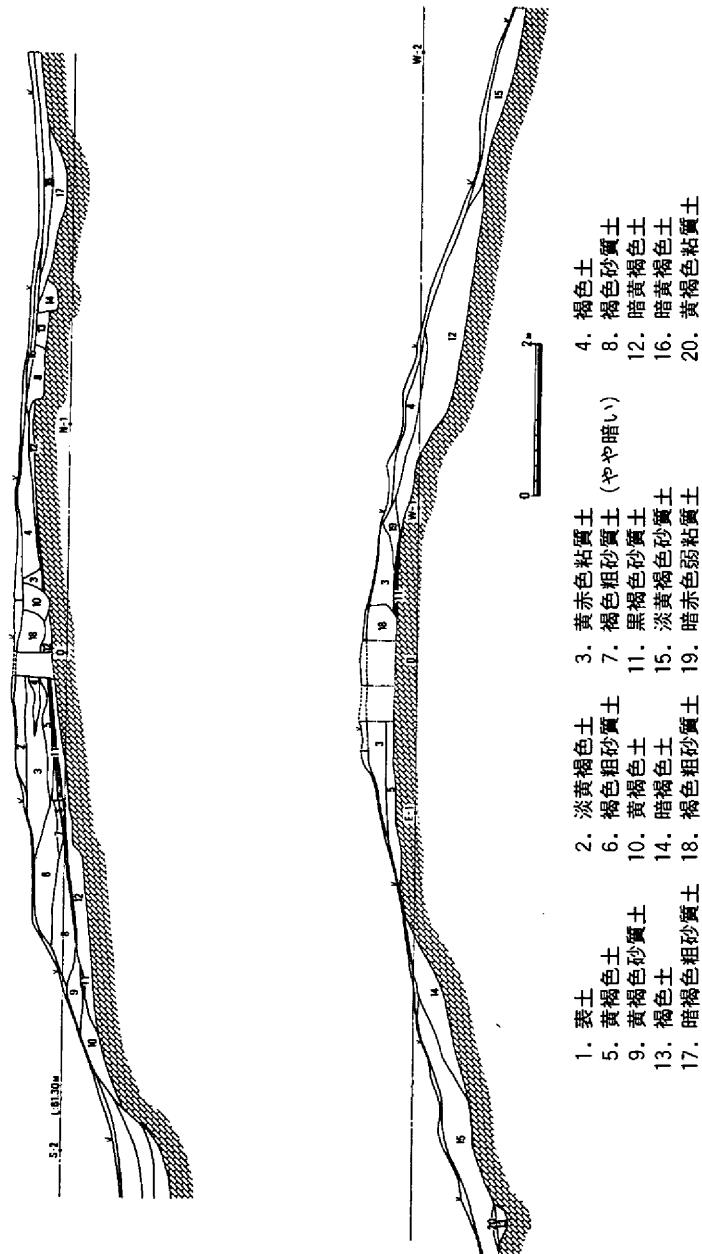
墳丘築造状態

墳丘は地山上に薄い所で 20cm、厚い所で 70cm の盛土を行なっている。断面で観察すると南側の低い方から順次積み上げて墳丘を整えている状態が認められる。

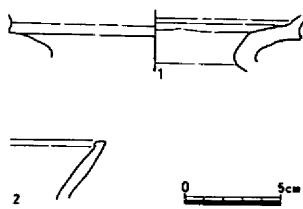
墳丘出土の遺物

墳丘からは若干の土器が出土した。いずれも細片であり、2 点が図示できた。

1 は壺形土器の口縁部と考えられる。外面は丹塗りである。口縁部は胸部からくの字状に強く外反した後、斜め上方へ立上る二重口縁である。色調は淡赤褐色を呈し、胎土に細砂粒を多く含む。



第63図 墳丘縦横断面図

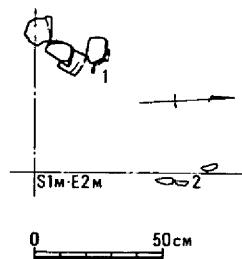


第64図 墳丘出土の遺物

2は変形土器の口縁部である。胸部からくの字状に外反するもので、端部は横ナデにより平坦面をもち、内側に若干つまみ出される。色調は淡褐色を呈し、胎土に細砂粒を含む。

III 周 溝

周溝は墳丘北側で検出された。ほぼ東西に直線的に浅く掘られており、両端は「匁」形に屈曲するあたりで消えてしまう。



第65図 副葬品分布図

IV 埋 葬 施 設

主体部は詳細に確認したが検出することができなかつた。しかし墳頂南東側で枕石と考えられる礫が4個認められ、その石に接して鉈が1点、さらにその北東側で剣が出土した。このことから浅い位置に主体部があり、すでに流失しかろうとして枕石と副葬品の一部が残存したと推定される。

副葬品

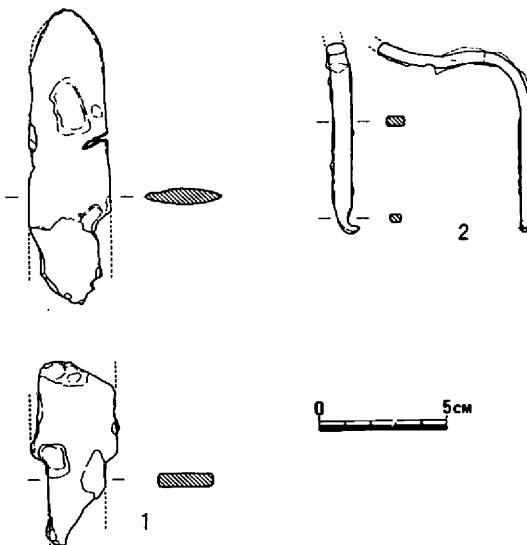
鉄製品（第66図、図版43—2）

剣（1）

剣は原位置ではないが、枕石の東側で出土した。身の中間と茎端部を欠損していることから全形は不明であるが、身基部が3.3cmと最大幅を示し、先端にむかって少しづつ狭くなっている。断面をみると明瞭な鎬ではなく、中心が丸みをもって厚くなる。関部は身から直角に幅を狭め茎となる。

鉈（2）

鉈は枕石に接して出土した。刃部を欠損しており、茎部は直角に折れ曲る。茎の先端は鉤状になっている。現存長は12cmで断面は長方形を呈する。



第66図 副葬品

第7節 13号墳の調査

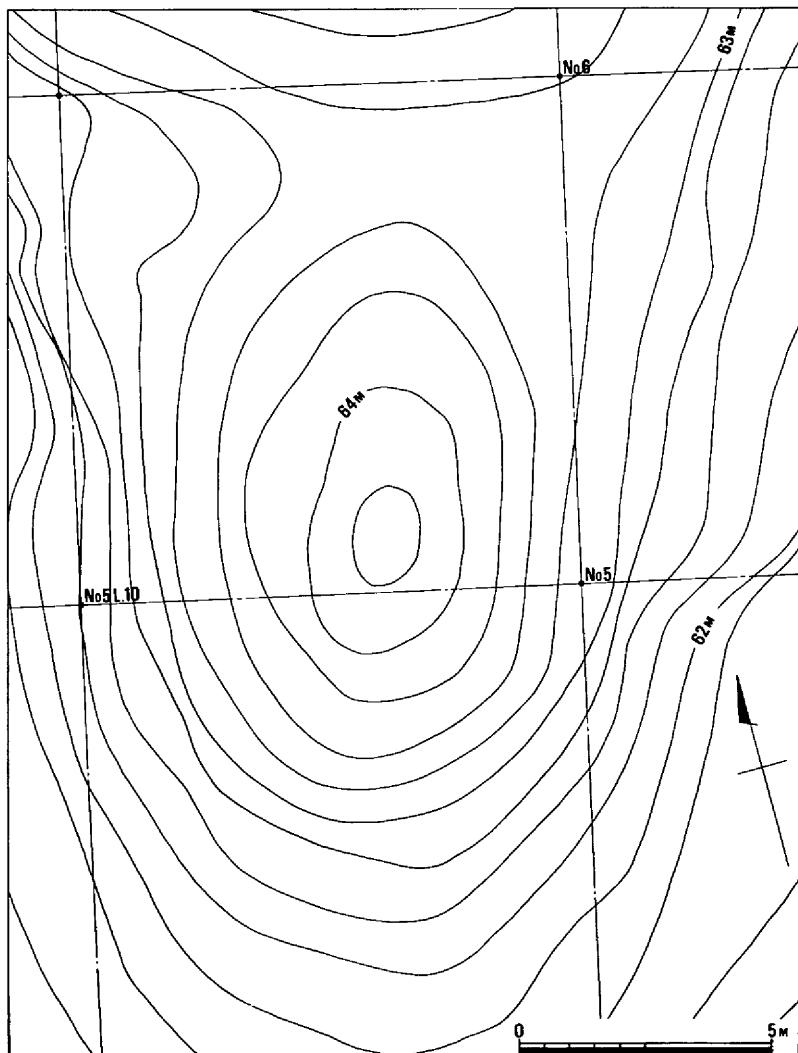
I 調査前の状況

13号墳は12号墳の北側、12号墳とすこし距離をあけて位置する。ここは尾根が少し高まった所で、墳丘も立派なことから一番目立った古墳である。

墳丘は橢円形状を呈し、墳頂は尖りぎみに盛り上がっている。東西は急斜面となり、その傾

斜は変ることなく尾根斜面へと続く。南は62mの等高線あたりから傾斜が緩やかとなることから、ここが墳端と推定される。また墳丘上は禿げたような状態で盛土がさらされている場所もある。

北側に位置する14号墳からはまた尾根が急傾斜になるため、13号墳との間が周溝状に低くなっている。



第67図 13号墳調査前の墳丘

II 墳丘

墳丘上には表土除去に先立ち基準杭を設定した。基準杭は墳頂を0とし、12号墳S—N線上にあるN—2の基準杭と結ぶ線を中心 90° 振った。これはほぼ東西南北の方向にあたり、E—1, E—2……と標示した。また土層観察用の畦はこの基準線を中心に残した。

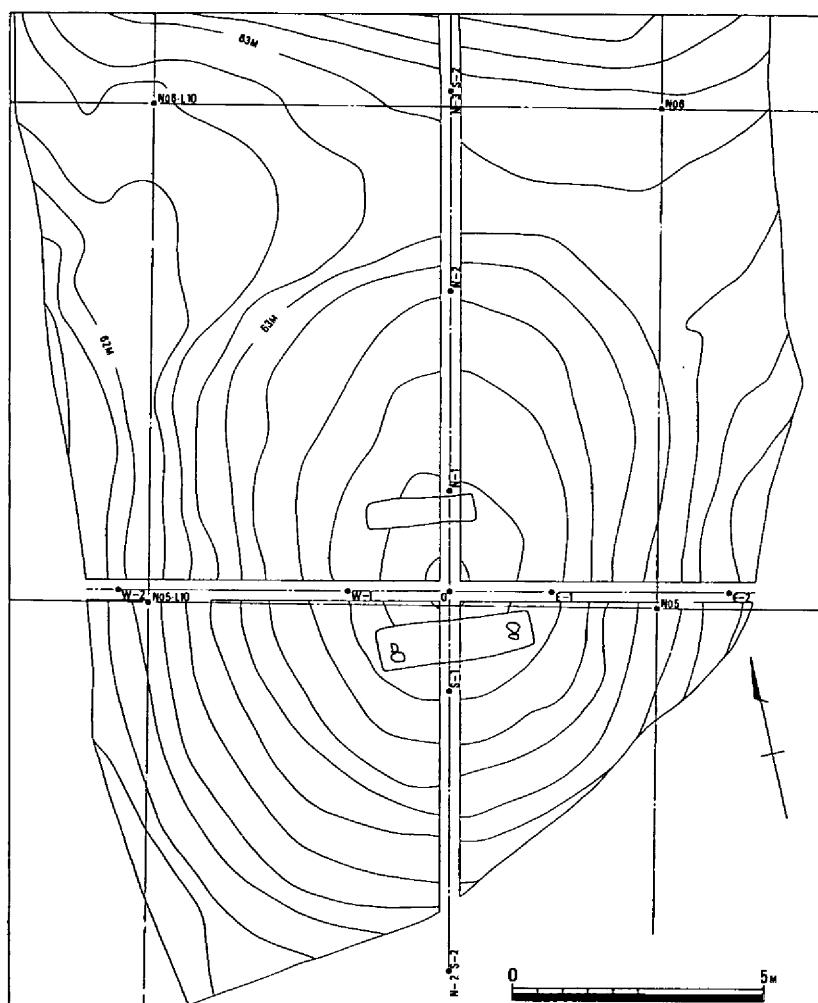
墳丘上は禿げた所もあり、表土は薄いことから検出作業は比較的容易であった。したがって北側で幅広い周溝が検出された以外は調査前と異なるところはない。

墳形は周溝が円弧を描くことや、等高線も曲線的であることから、南北に長い円形を呈すると考えられる。規模は、東の墳端が明瞭ではないが、西と南は61.75mで傾斜が変化すること

から、ほぼ東西12m、南北15mとなる。高さは南側から見れば2.5m、北は1.25mを測る。

13号墳は調査された古墳中唯一円形を呈するもので、墳丘もこれまでの古墳のような偏平なものでなく、高く盛り上がり、墳頂は尖りぎみであることなど、特異な存在である。

墳丘築造
状態



第68図 調査後の墳丘

墳丘は北側の薄い所で40cm、中央部で1.4mの盛土が認められる。北側墳端は周溝が地山を掘り下げることにより整えられ、墳丘部は手を加えることなく土を積み上げてゆく。盛土下層には地山の傾斜にそって炭や灰を含む黒褐色土層が認められた。

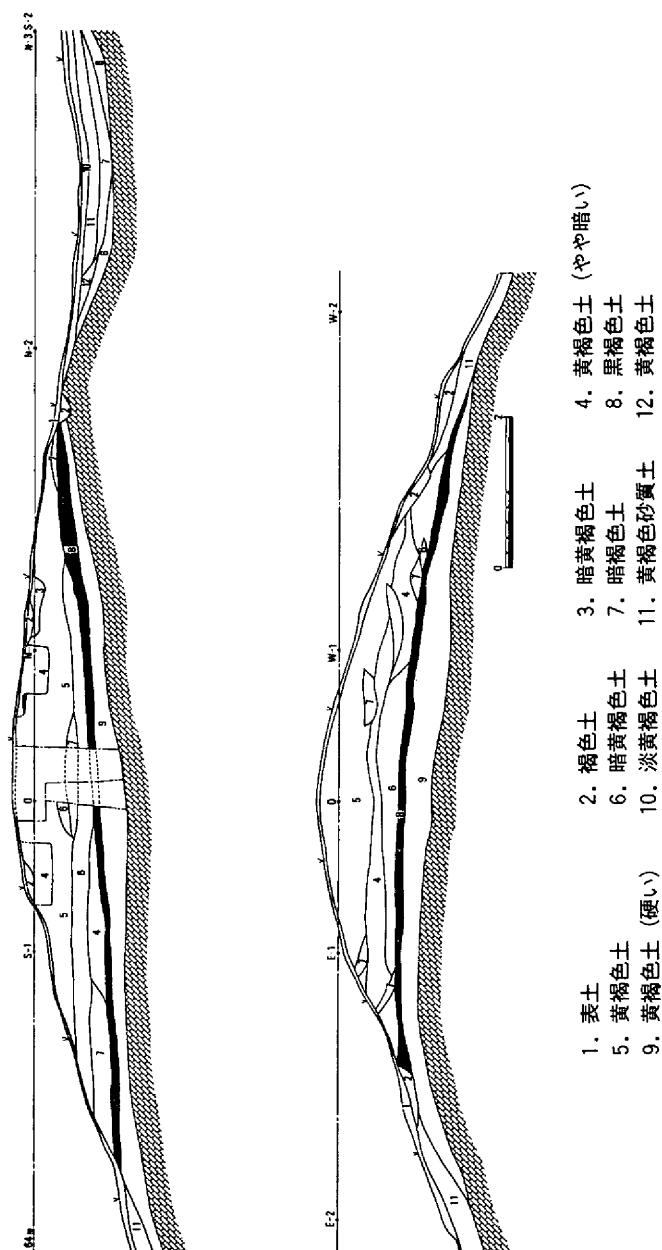
III 周 溝

周溝は墳丘北側で検出された。調査前から周溝状を呈していた所で、14号墳の墳端に接している。

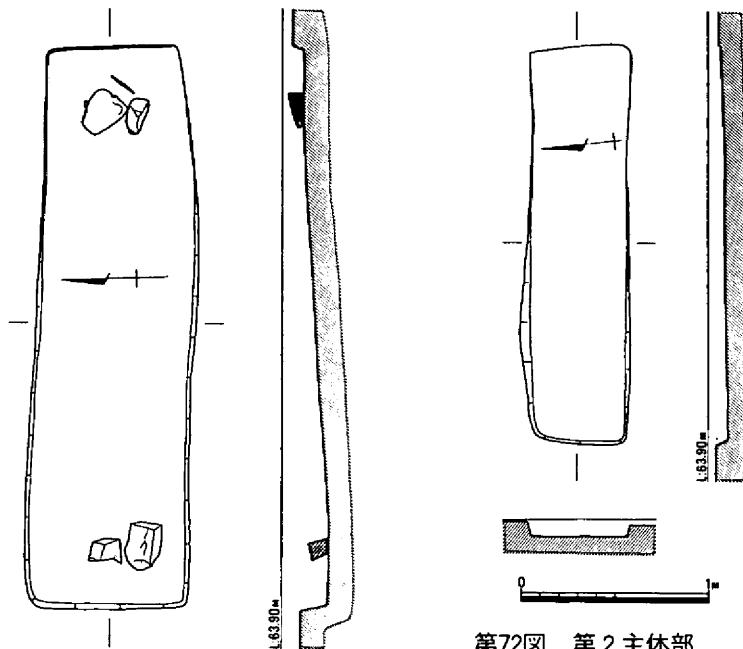
平面ではほぼ半円形に残っているが、その両端は尾根斜面に移行し明瞭でない。中央部での断面は地山を緩やかに幅広く掘り下げており、底はほぼ平坦である。なお周溝の西北が広いのは直接周溝とは関係なく、後世の掘り込みである。

IV 埋 葬 施 設

墳頂部で2基の主体部を検出した。いずれも盛土上面で検出を試みたが、その輪郭をつかむ



第69図 墳丘縦断面図

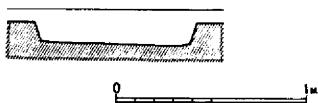


第72図 第2主体部

ことができず、やむなく墳頂を30cmほど削平した。この面で検出作業を行い、第1主体部は枕石が、第2主体部は若干の粘土粒が存在したことからやっとその所在が確認できた。

第1主体部

第1主体部は墳頂の南に位置し、尾根と直交、すなわち東西に主軸をむけている。



第70図 第1主体部

墓壙は東西3m、南北84cmを測る。掘り込みはほぼ垂直、床面は平坦で、若干西に傾斜している。おそらく、箱式木棺が置かれたものと推定される。

墓壙内両端には礫を2個配した枕石が認められ、そのうち東側の枕石後方に鉈が一点副葬されていた。また西側の枕石周辺には朱の散布が認められた。

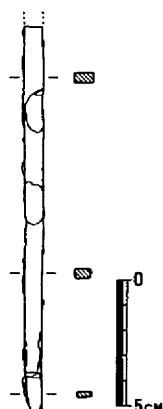
副葬品

鉈（第71図、図版47—2）

東側枕石後方から出土したもので、刃部を欠損している。茎部先端は細くなり尖りぎみとなる。現存長15.5cm、幅は8mmを測る。

第2主体部

第1主体部同様検出は困難を極めたが、北側で平行する墓壙を認めた。畦で詳細に検討すると2段掘りの墓壙と考えられるような若干の粘土粒の面を確認し得たが、すでに掘り下げており平面で検出できなかった。



第71図
第1主体部
副葬品

墓壙は基底部を僅かに検出したのみで、長さ2.1m、幅54cmを測る。中には箱式木棺が置かれたものと推定される。枕石や副葬品は全く認められなかった。

第8節 14号墳の調査

I 調査前の状況

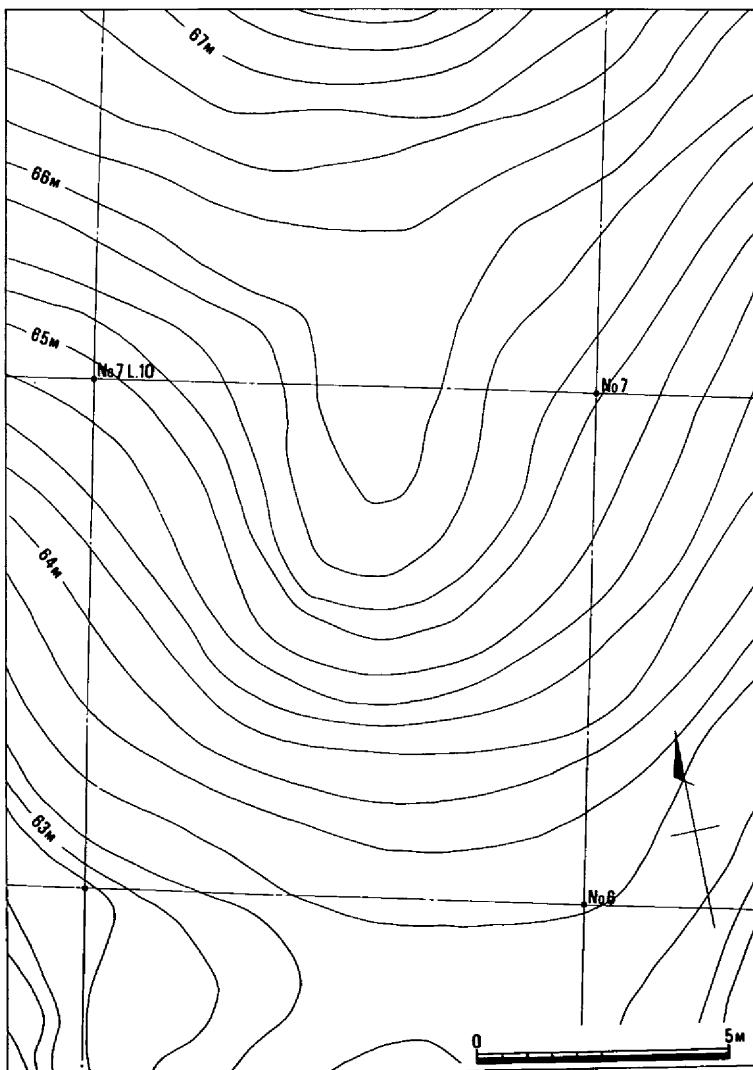
14号墳は13号墳の北側、尾根の高い方で急傾斜になった所に位置し、その比高差は1.75mを測る。

南側から概観すると僅かに墳丘らしい高まりが認められるが、少しでも樹木が生えていると

見のがす程度のものである。墳頂には僅かな舌状の平坦面が認められ、その北側は15号墳の墳丘となる。

墳丘の東西は尾根の傾斜と同じで、墳端は明確にし難い。南側はやや急斜面で、等高線は直線的となる。このことから調査前においては一辺約13mの方墳と推定された。

また墳丘上には木が少なく、一部地肌が露呈するなど、流出が著じるしいものと考えられ、墳形の変貌を余儀なくされてい



第73図 14号墳調査前の墳丘

II 墳 丘

墳丘上には表土剥ぎに先立ち基準杭を設定した。基準線は13号墳S-N線のN-3から西へ $2^{\circ}60'$ 振り、その延長線上の墳頂に0を設定した。ここから 90° に振り分け、杭を打った。これらは大略東西南北を示すことから、0を中心向外側へE-1, E-2……と標示した。なお土層観察用の畦は各基準杭を十字に結ぶ線を中心に約40cmの幅で残した。

一部盛土が露呈する程度の表土を除去すると墳丘が検出されたが、墳端および墳丘北側には淡黄褐色土が厚い所で40cmも堆積しており、この土も同時に除去した。その結果、北側の15号墳との間に直線的に周溝が検出され、方形状の墳丘を呈することが判明した。

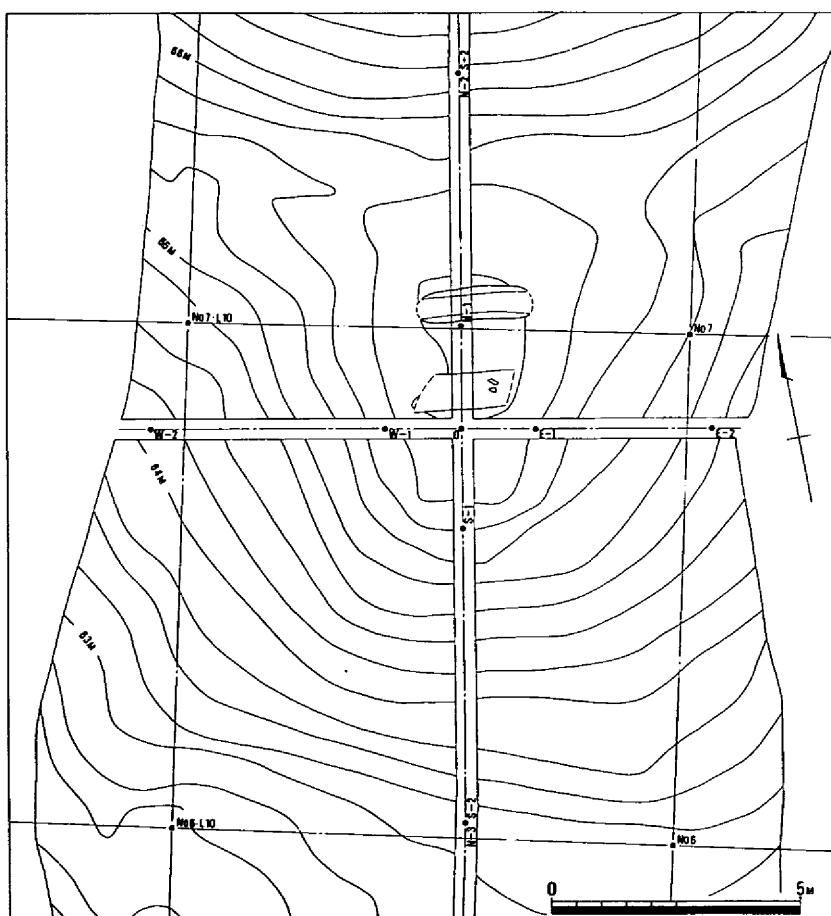
墳丘は、墳頂に南北に長い台形状の平坦面をもち、標高 65.50m から急斜な斜面部に移行する。斜面は直線的であり、南側が狭くなる長台形状の墳形を呈するが、これは南側の盛土流出

が著しい結果と思われる。

墳端は東西が明瞭でないが、北側周溝西端の曲がり具合から約13m程度と考えられ、南は 63.25m の等高線までとすると 12.5m が得られる。

墳丘の
築造状
態

墳丘は地
山上に薄い



第74図 調査後の墳丘

所で40cm, 厚い所で70cm程度の盛土を行なっている。

盛土中層には厚い黒褐色土層が認められる。この層は南北では地山の傾斜にそっていり、東西では水平に積まれている。

盛土の範囲は先に推定し得た墳丘規模より小さく、南北では8m, 東西では5.8mを測る。

III 周 溝

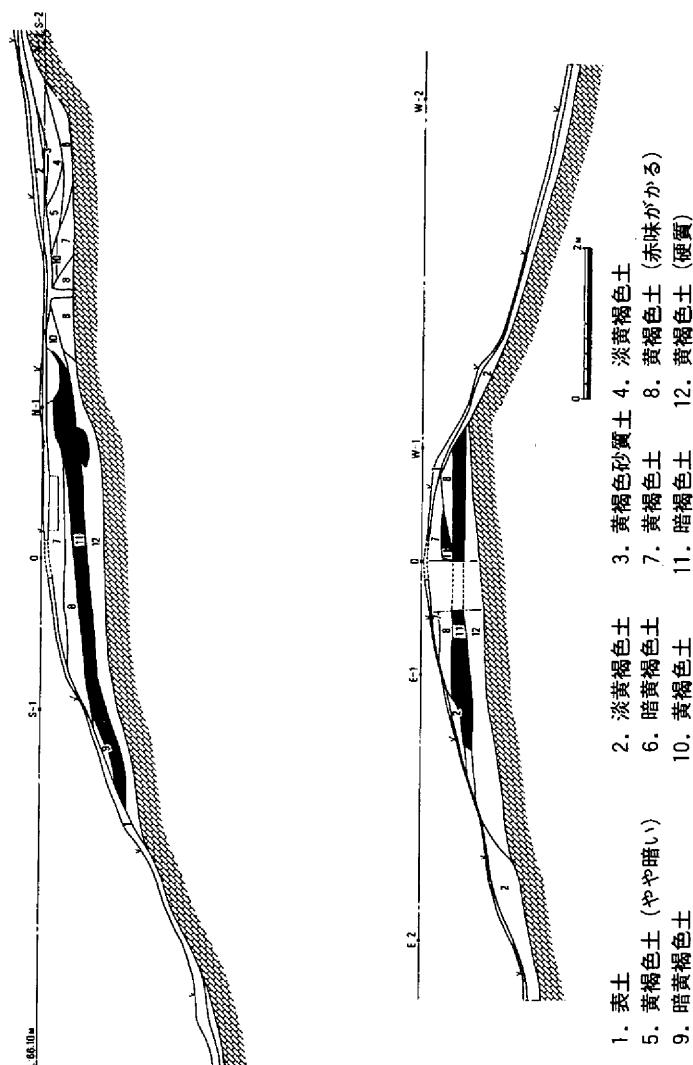
周溝は墳丘の北側、15号墳墳端に接して検出された。ほぼ東西に掘られ、両端は隅丸方形状に南にまがる。

周溝の掘削は、北側の地山を急斜に掘り込むのに対し、南側は墳丘盛土により整えられている。底部はほぼ平坦である。

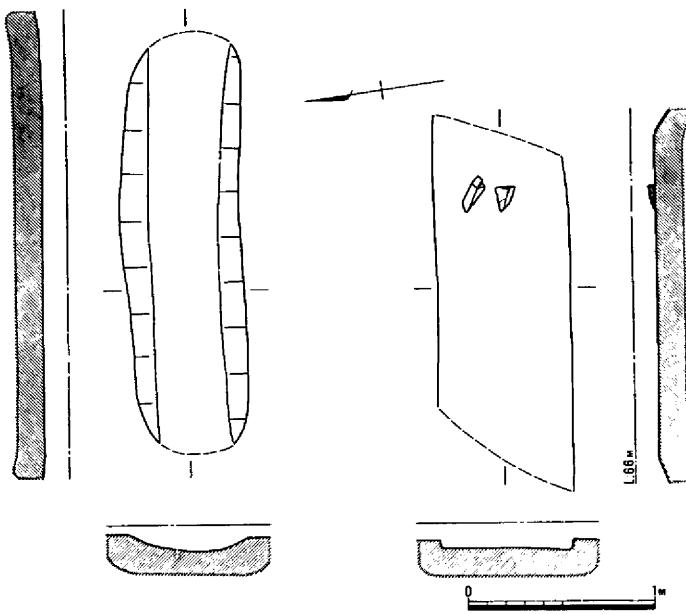
IV 埋 葬 施 設

14号墳の主体部は墳頂に2基が認められた。いずれも主軸を東西となし、南北に並ぶ。

検出は盛土上面で行なったが、表土の染込み等で輪郭が明瞭でないところから、10cm程度削平した。その結果、基底部を僅かに残し、両端が流失した墓壙が検出された。



第75図 墳丘縦横断面図



第76図 第1主体部（右）と第2主体部（左）

第1主体部

第1主体部は墳頂中心よりやや南側で、尾根に直交している。

墓壙は中心部の基底部を僅かに検出し得たのみで、両端は流失している。現存部の長さは2m、幅68cmを測る。

底面は平坦であることから箱式木棺が置かれていたとも推定される。

墓壙内には碟2個をハの字状に配した枕石が認められるのみで、副葬品

は全く出土しなかった。

第2主体部

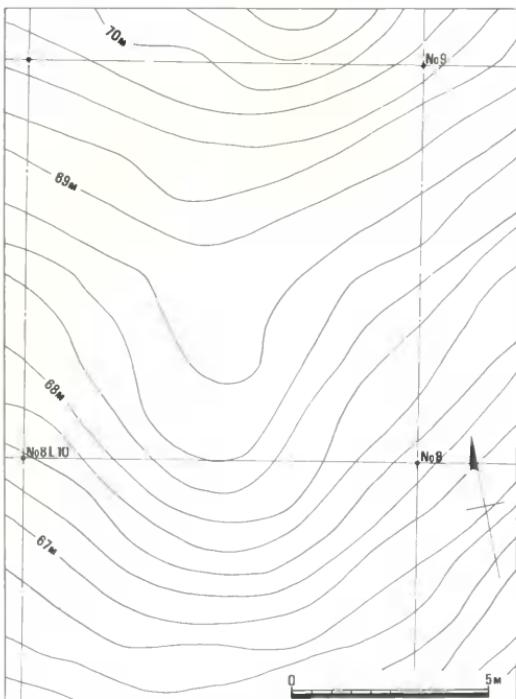
第1主体部の北側に平行して位置する。墓壙は第1主体部同様基底部が僅かに残っているのみで、両端は流失している。

墓壙の掘り込みは僅かであり断定し難いが、断面は緩やかながら弧を描いており、割竹形木棺の可能性も捨て切れない。現存長は2.1m、幅63cmを測る。

副葬品は全く出土しなかった。

第9節 15号墳の調査

I 調査前の状況



第77図 15号墳調査前の墳丘



15号墳調査風景

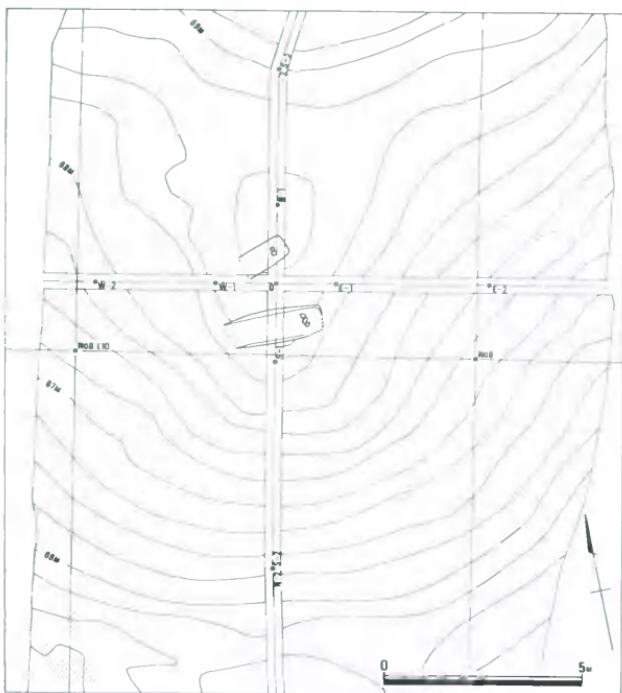
15号墳は14号墳の北側、尾根の高い方に位置し、その比高差は2.75mを測る。

墳丘は尾根筋に僅かな高まりが認められる程度である。南から見た場合はほど注意深くないとその存在に気がつかない。墳頂は舌状に僅かな平坦部が認められ、部分的に盛土が露呈している。

東西の墳端は、墳丘斜面から尾根斜面へスムーズに移行しているため推定は困難である。南は14号墳の墳頂平坦部の手前66.25mあたり、北側は16号墳墳丘斜面に移行する69m付近を墳端と考えると、だいたい南北13mの墳丘が推定可能である。

墳形は、真砂土であることから後世の流失が著しく、また墳丘東斜面は南北に通る山道等により、かなりの変貌を余儀なくされている。

II 墳丘



第78図 調査後の墳丘

墳丘上には表土除去に先立ち基準杭を設定した。基準線は14号墳のS—N線上にあるN—2から東に 2° 振って15号墳のS—N線とし、その線上の墳頂に0を設定した。ここから 90° に振り、各々に2本づつ基準杭を打った。この基線の方向がほぼ東西南北を指し、E—1, E—2……と標示した。表土除去に際してはこの基

準杭の線を中心に幅約40cmの畦を残して行なった。

墳丘は薄く堆積した表土直下で検出できるが、北側、あるいは東西の墳端は20cm前後の淡黄褐色砂質土が堆積しており、同時にこれも除去した。その結果北側では周溝が検出された。



第79図 墳丘出土の遺物

調査後の墳丘は調査前と大きくは相異ないが、墳頂部では南側が細くなる平坦面が認められる。さらに南側墳丘斜面は調査前では曲線的であったのが、直線的となり、方形に近くなった。

墳端についても東西は明確でないが、南北は14号墳の周溝からとすれば12mとなる。したがつ

て現在は盛土の流失で
墳形も崩れているが、
本来は一辺が12m前後
の方形を呈する墳丘に
相違ないと思われる。

墳丘の築造状態

墳丘は地山に手を加
えることなく、薄い所
で30cm、厚い所で50cm
の盛土を行なってい
る。盛土は地山と同じ
土を盛るが、下層には
黒褐色土層が、南北で
は地山の傾斜にそつ
て、東西ではほぼ水平
に積まれている。

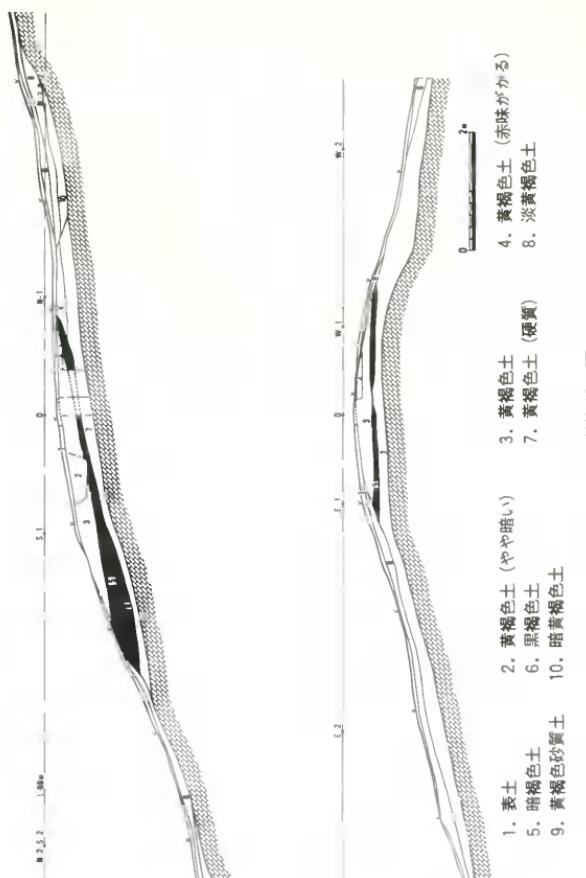
墳丘出土の遺物（第 79図、図版54—2）

墳丘からは若干の土
器片が出土したが、図
示できるものは鼓形器
台1点である。

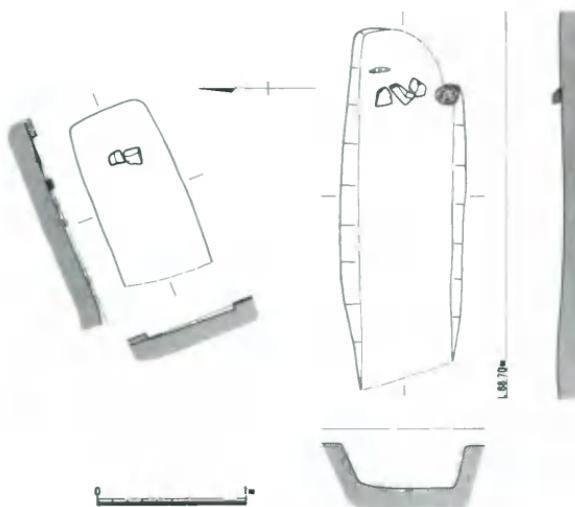
鼓形器台は脚台部の
破片で、推定脚端径は
20cmを測る。ハの字状
に開く脚部で、端部は強く外に開く。表面は丹塗りで、調整は外面と脚端内面は横ナデ、脚部
内面はヘラ削りにより仕上げられる。色調は黄褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。

III 周 溝

周溝は墳丘の北側ではば直線状に検出された。中央部は深く明瞭であるが、両端は浅く不明
瞭となる。西側は端が「」形に屈曲するとすぐ消滅するが、東側は中央部からしばらく東側
にいった所で消えてしまう。



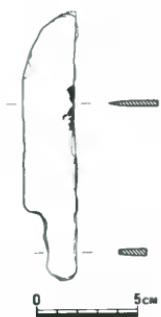
第80図 墳丘縦横断面図



第81図 第1主体部（右）と第2主体部（左）

断面で観察すると、中央部は幅が3mもあるが、幅で比較すると掘り込みは浅い。北側は地山を削っているが、南は墳丘盛土で整えられる。底は北側の掘り込み上端から徐々に南側墳頂まで低くなつてゆき、今度はこれから緩やかに高くなり墳丘に移行してゆく。

IV 埋葬施設



第82図
第2主体部副葬品

主體部は墳頂部のやや南に寄った所で、尾根と直交する第1主体部が、その北側の墳頂中央部で、ほぼ平行する第2主体部を検出した。いずれも墳丘盛土の流失が著しく、墓壙は基底部しか残存していない。

第1主体部

墓壙は両端が流失し、基底部を僅かに検出した。現存長は2.4m、幅84cmを測る。木棺痕跡は検出し得ていないが、おそらく箱式木棺が置かれたものと推定される。墓壙内東端には磧3個を配した枕石が認められ、その後方の床面には刀子が副葬されていた。

副葬品

刀子（第82図、図版54—3）

先端が若干欠損するが、ほぼ完全で全長13.6cmを測る。身幅は2.5cmと幅広である。身に布が付着している。

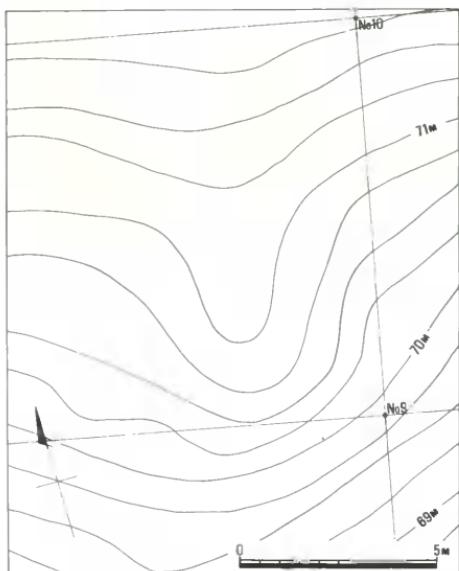
第2主体部

第1主体部の北側、ほぼ墳頂中央部に尾根と直交する第2主体部を検出した。第1主体部とは平行関係になく、主軸はやや北に振っている。

墓壙は盛土上面で検出したが、東半分が僅かに残存するのみであった。現存長は1.2m、幅62cmを測る。床面は平坦で、箱式木棺が置かれたものと推定される。東端には磧2個を配した枕石が認められた。副葬品は全く出土しなかった。

第10節 16号墳の調査

I 調査前の状況



第83図 16号墳調査前の墳丘



16号墳調査風景

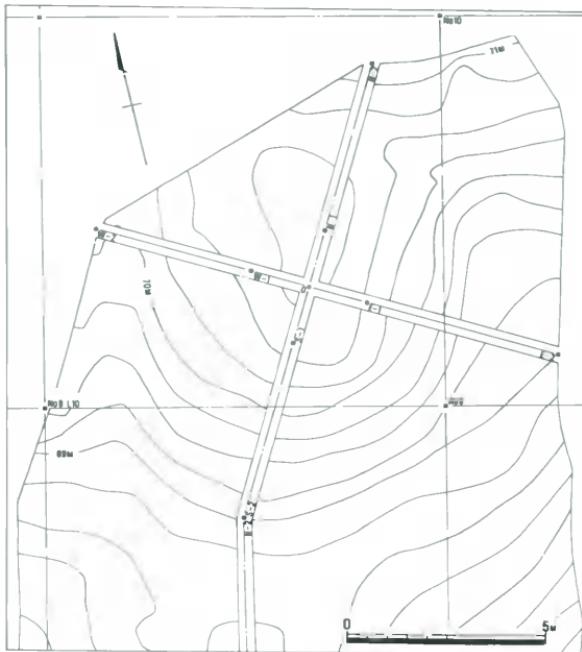
16号墳は15号墳の北側、尾根の高い方に位置する。北側は土取り計画外であるが、17号墳が位置する尾根の高まりとなる。15号墳との比高差は2.25mを測る。

古墳は樹木を伐採すると、やっと僅かに墳丘らしい高まりが認められるにすぎない。墳頂は舌状に狭い平坦部が認められ、ここから北側は緩やかな斜面となる。

II 墳丘

墳丘上には表土除去に先立ち基準杭を設定した。基準線は15号墳S—N線上のN—2から東へ17°振り、その延長線上に0を設け、これから各々に90°振った。この基準線上の杭は大略東西南北ということで、E—1, E—2……と標示した。また土層観察用の畦は各基準線を中心に幅約40cmを残した。

墳丘は墳頂部では表土直下から、墳端では表土下に厚く堆積した淡黄褐色砂質土を除去して検出した。その結果、墳丘の北側と東側、さらに西側においても周溝が検出された。南側は15号墳の周溝



第84図 調査後の墳丘

側が1.50m、北側で30cmを測る。

墳頂部は南側が狭くなる台形状の平坦面となり、すでに主体部は流失したものと思われた。

墳丘の築造状態

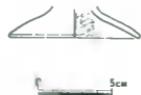
埴丘は周溝によって埴端が整えられるが、その他は厄根の自然地形に手を加えることなく盛土を行なっている。盛土は中心部で50cm積まれ、その中層には黒褐色土層が認められる。

墳丘出土の遺物（第85図、図版56—2）

墳丘からは若干の土器片が出土したが、図示できるものは1点である。

図示したものは埴丘東斜面部から出土したもので、高杯形土器の脚部である。短い脚柱部からやや内湾ぎみにハの字状に開くもので、端部は横ナデによる丸みのある面をもつ。推定底径は8.7cmを測る。

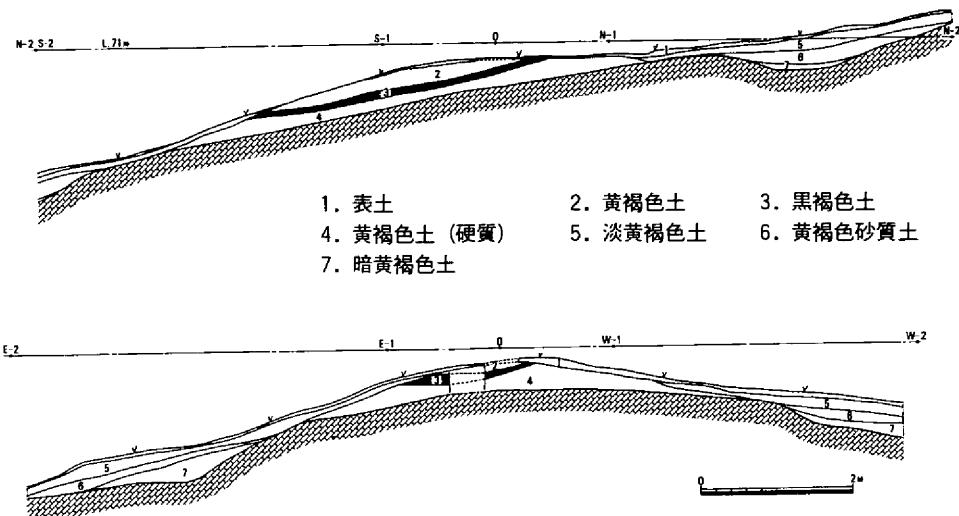
調整は外面が丁寧なヘラ磨き、内面は刷毛により仕上げられる。色調は明赤褐色を呈し、胎土は精製された粘土を用いている。



第85図 墳丘の遺物

で区画されること
から、墳形や墳丘
規模が明確にされ
た。

墳形は周溝がコの字形をなすことから方形を呈する。規模は東西について周溝の中間を測ると9.5m、南北間は、北側が溝の中心、南は14号墳周溝北端からとすると9mとなる。高さは南



第86図 墳丘縦横断面図

III 周溝

周溝は尾根の傾斜が緩やかなこともあり、これまでの古墳に比べると良く残存していた。周溝の西端は土取り計画外のため明らかでないが、東側から推定すれば「」形に屈曲すると考えられ、平面プランはコの字形を呈する。

墳丘北側はほぼ東西に直線的に地山を掘り込んでいるが、溝の北側掘り込み上端は明瞭でなく、17号墳墳丘斜面と区別することは難しい。西側は断面U字形をなし、北は浅く、南に少しづつ深く掘り込むが、底の傾斜が尾根の傾斜より緩やかなため南端では不明瞭となる。また東側の周溝は墳丘側の地山を削ることによりつくりだしており、東端で「」形に南へ屈曲した後不明瞭となっている。

周溝内の流入土は最下層に暗黄褐色土が、その上には黄褐色砂質土が厚く堆積している。遺物は全く出土しなかった。

IV 埋葬施設

墳頂部で詳細に検出を行なったが、主体部と考えられる遺構は認められず、墓擴の掘り込みが浅いことからすでに流失してしまったものと考えられた。

第11節 21号墳の調査

I 調査前の状況

21号墳は12号墳と13号墳間の東側に位置する。この場所は調査開始後、斜面が緩やかなことから休憩場所としてテントを設営していた。設営に際しては若干高い方を掘削して平坦部をつくった。

ところが発掘を開始してしばらくたった時、掘削した断面から玉砂利を発見したことから埋葬施設が推定され、21号墳とした。

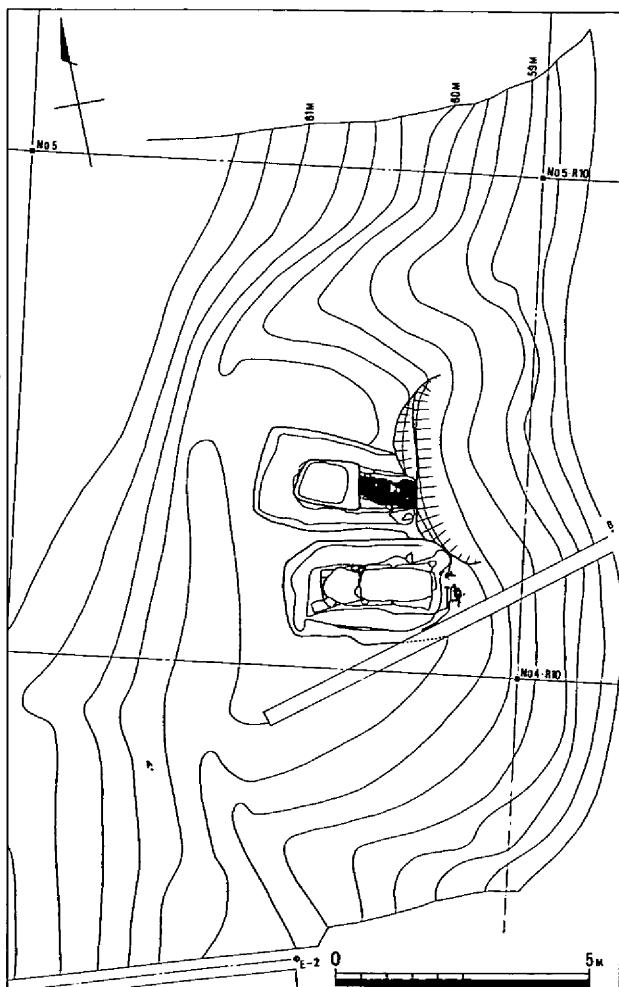
位置する所は詳細に見ると、墳丘状の緩斜面が若干東に張り出しているが、東側は標高60m付近から急斜面となる。

II 墳丘

墳丘は表土と、その下に一部堆積していた淡黄褐色砂質土を除去して検出した。北、西、南側に周溝がめぐる長方形の墳丘を呈している。

墳頂は広い平坦面となり、埋葬施設が2基検出された。東側斜面部の小さな崖は休憩所設営時の掘削によるもので、その他は急斜面となっている。

墳丘規模は南北が11m、東西については、西側は周溝により墳端が明確であるが、東側は墳丘と尾根斜面を区別する根拠に乏しい。そこで一応規模の目や



第87図 21号墳調査後の墳丘

すとして平坦面の規模を示せば東西5m, 南北は8mとなる。

墳丘築造状態

墳丘は地山に手を加えること

なく、厚い所で1.4m程度の盛土を行なっている。盛土は黄褐色土と暗黄褐色土ではほぼ墳頂部東端までの範囲を水平にし、その上に黄褐色土を盛って墳丘を整えている。

なおこれまでの古墳に認められた黒褐色土層は確認されなかった。

墳丘出土の遺物（第89図1, 2, 4, 5）

墳丘からは若干の土器片が出土した。

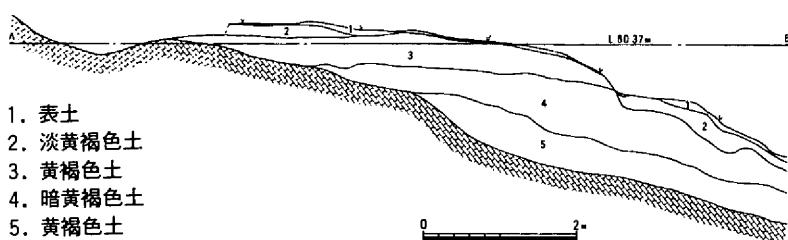
いずれも細片であるが4点が図示できた。1, 2, 4は墳頂部上に堆積している淡黄褐色土を除去する際に、盛土上面に近い所から出土した。5は第1主体部東端盛土上面から出土した。以下個々の土器について説明を加える。

1は甕形土器の口縁部である。口縁部はくの字状に外反した後、さらに端部がやや外反ぎみに立上がる二重口縁をなす。端部外面には櫛描沈線がめぐる。推定口径は16cmを測る。調整は内外面とも横ナデが施される。色調は淡褐色を呈し、胎土には細砂粒を含む。

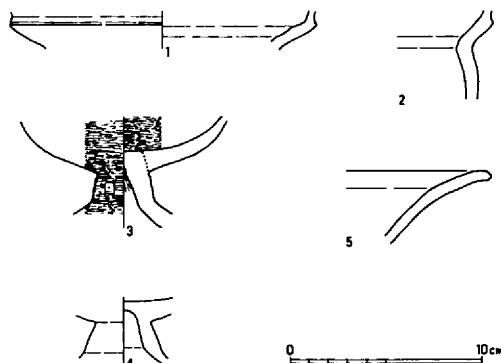
2は鉢形土器である。口縁部は胴部からくの字形に外反した後、ほぼ垂直に短く立上がる端部を有する、推定口径は28cmを測る。調整は口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は刷毛目、内面は指頭圧痕が認められる。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には細砂粒を多く含む。

4は高杯形土器の脚部である。杯部と脚柱部のつなぎは差し込みによるもので、中空で短い柱部から脚端にむかってハの字状に開くと推定される。調整は鮮明ではないが内外面とも丁寧なヘラ磨きと考えられる。色調は赤褐色を呈し、胎土は精選された粘土である。

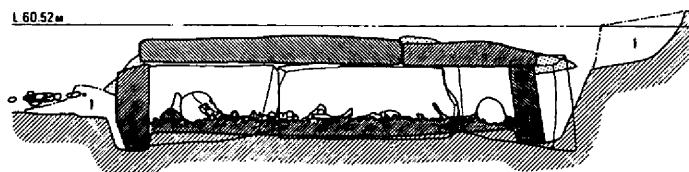
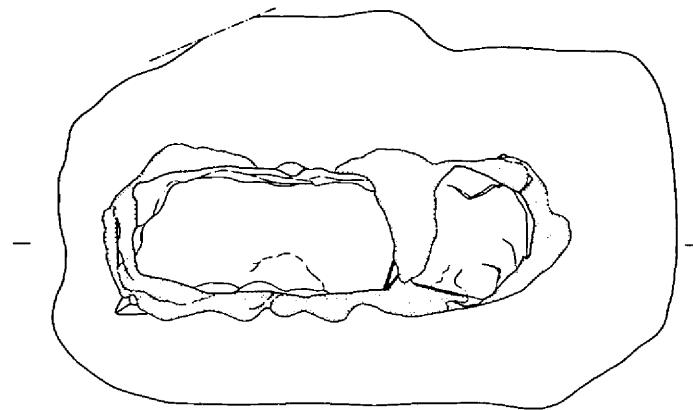
5は鼓形器台の口縁部と考えられ、内外面とも丹塗りである。調整は内外面とも横ナデが施される。色調は赤褐色を呈し、細砂粒を若干含む。



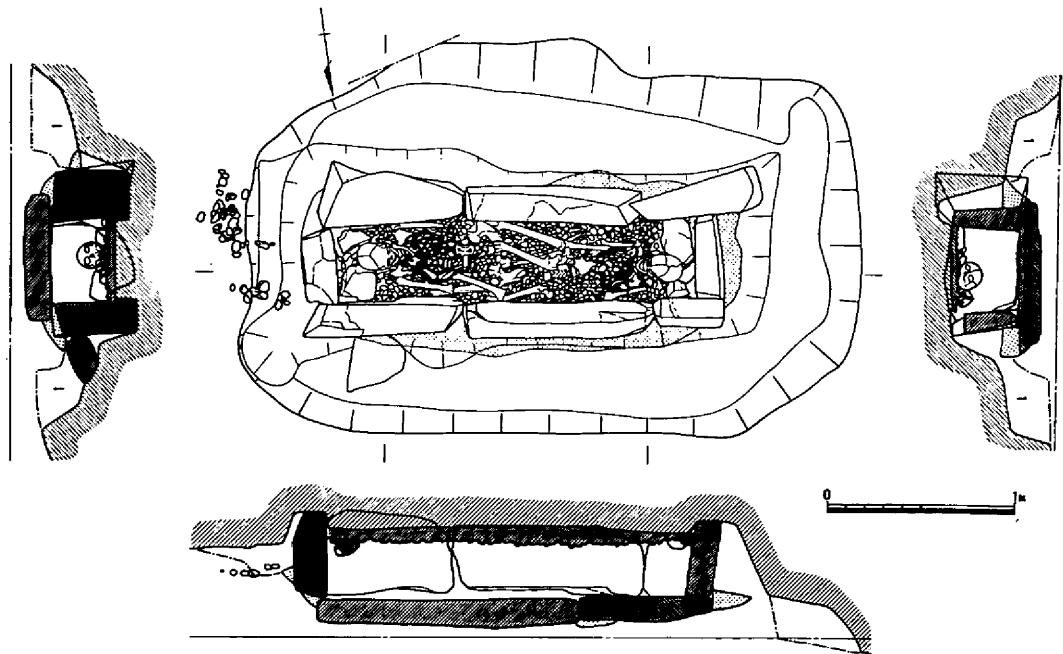
第88図 墳丘断面図



第89図 墳丘・周溝出土遺物



1. 黄褐色土



第90図 第1主体部

III 周 溝

周溝は墳丘の北、西、南側で検出され、その平面プランは東に向かって開きぎみなコの字形を呈している。

地山を掘削してつくられるが、北西端は浅く、ここから南、そして北東へは深く掘り込まれ、末端は尾根斜面と一体化して不明瞭となってゆく。

周溝の断面を見ると西側の底は丸く、壁の立上がりは緩やかであるが、南と北側はU字形に近い。これらの溝の幅は、掘り込み上端が明瞭でないことから確実な数値とは言えないが北側2m、西側1.8m、南側2mとなる。

周構内出土の遺物（第89図3）

周溝内からは丹塗りの高杯が一点出土した。口縁部と脚端部を欠損するが、ポール状の杯部に短脚がつくものと考えられる。杯部と脚部は差し込んで接合している。調整は杯部の内外面、脚部外面は細く丁寧なヘラ磨きがなされている。色調は赤褐色を呈し、胎土は精選された粘土である。

IV 埋 葬 施 設

主体部は墳頂平坦部で2基が検出された。いずれも主軸を東西に向けるもので、南北に平行している。

盛土上面で墓壙の検出を行なったが、墓壙内埋土と盛土の区別は困難を極めた。

第1 主体部

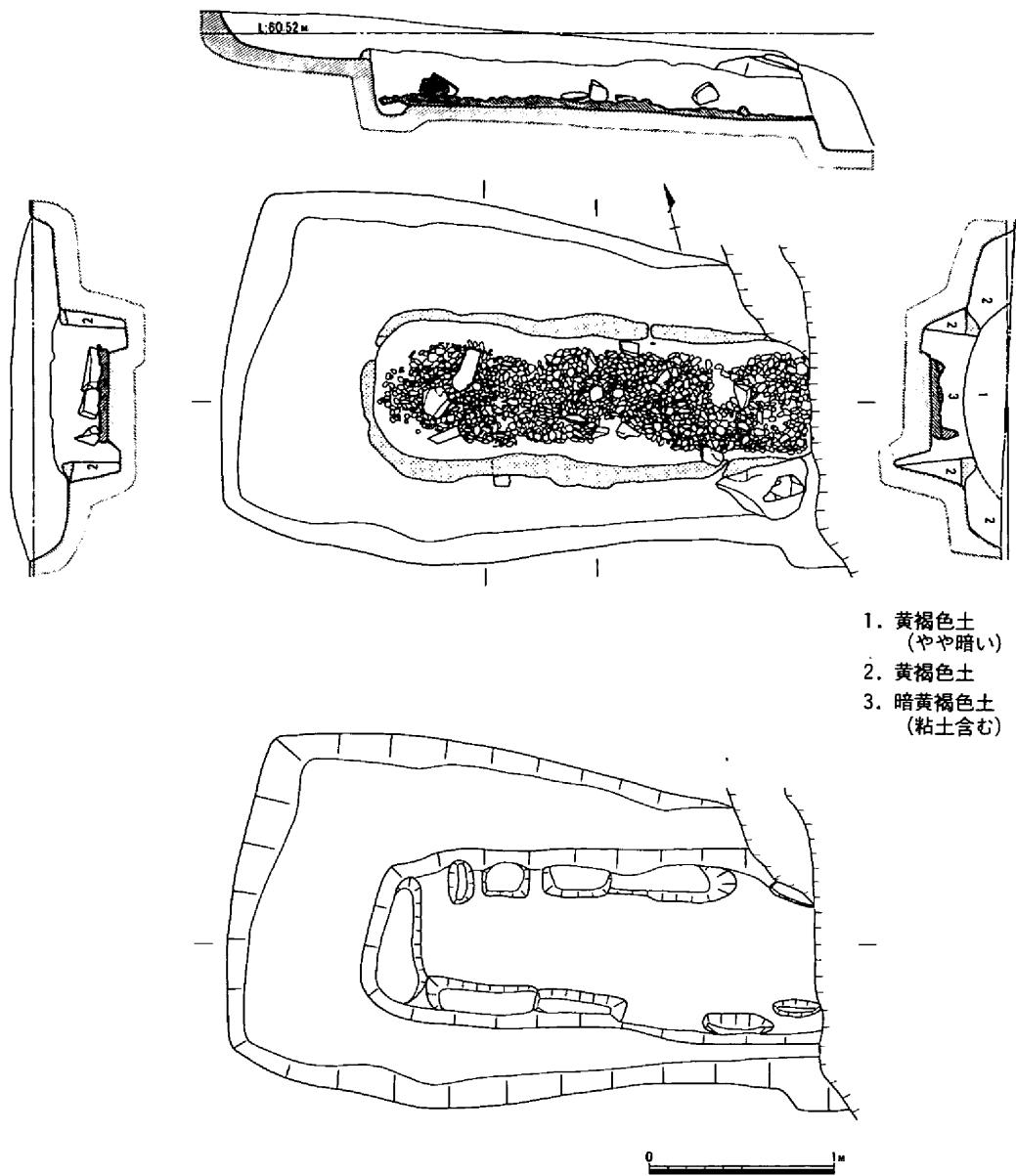
墓壙は東端が急斜面に係ることから若干旧状を留めていない所もあるが、ほぼ長方形を呈し全長3.25m、幅1.9mを測る。内部は2段掘りになっており中央の一段低い所に箱式石棺が置かれる。規模は内法で全長1.95m、幅は44cmを測る。床面には玉砂利を5~10cmの厚さで敷き、東西両端には磔を配した枕石が置かれる。

棺内には両端の枕石に頭蓋骨をのせた人骨がほぼ完全に残存している。2体の人骨は中央部で大腿骨が交錯しており、東側人骨（1号人骨）の大腿骨が西側の人骨（2号人骨）大腿骨や骨盤上に乗っている。副葬品は全く出土しなかった。

第2 主体部

墓壙は2段に掘り込まれ、その中央に箱式木棺が置かれたものと考えられる。床面には玉砂利が敷かれ、その西端には磔を配した枕石も認められる。敷石は床面の全面に認められるものではなく、墓壙の2段目の壁とは隙間があり、その下からは側壁の痕跡が検出された。

墓壙内は搅乱されておらず板石を抜き取った跡もなく、断面の観察では墓壙一段目床から枯



第91図 第2主体部

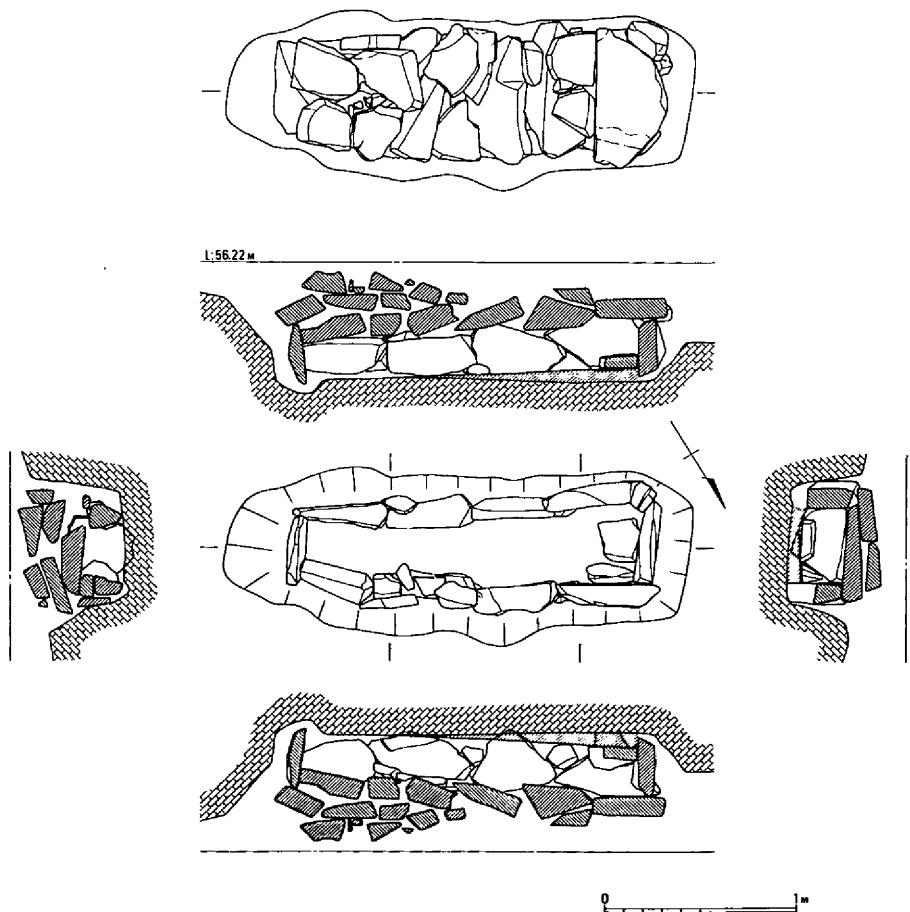
土で側壁を覆うようにしている。こうしたことから箱式石棺の破壊されたものと考えるよりは、板を組合せた木棺の可能性が強い。なお副葬品は全く出土しなかった。

第12節 古墳以外の墳墓

I 1号箱式石棺墓

1号箱式石棺墓は11号墳の南側、10号墳北東に位置する。墳丘等はなく、表土直下で検出した。墓壙は箱式石棺よりやや大きめではば長方形を呈し、長さ2.46m、幅85cmを測る。墓壙の壁立上りは東西が緩傾斜するのに対し、南北は垂直に近い。

箱式石棺は板石を組合せたもので、東側は狭くつくられる。蓋石は大きめのものを置き、間隙は小石で埋めているが、東端は三重にも覆っている。石棺の床面は西側の墓壙床面が低いことからそこだけ黄褐色土を敷いており、その上に石2個を配した枕石が置かれている。石棺の



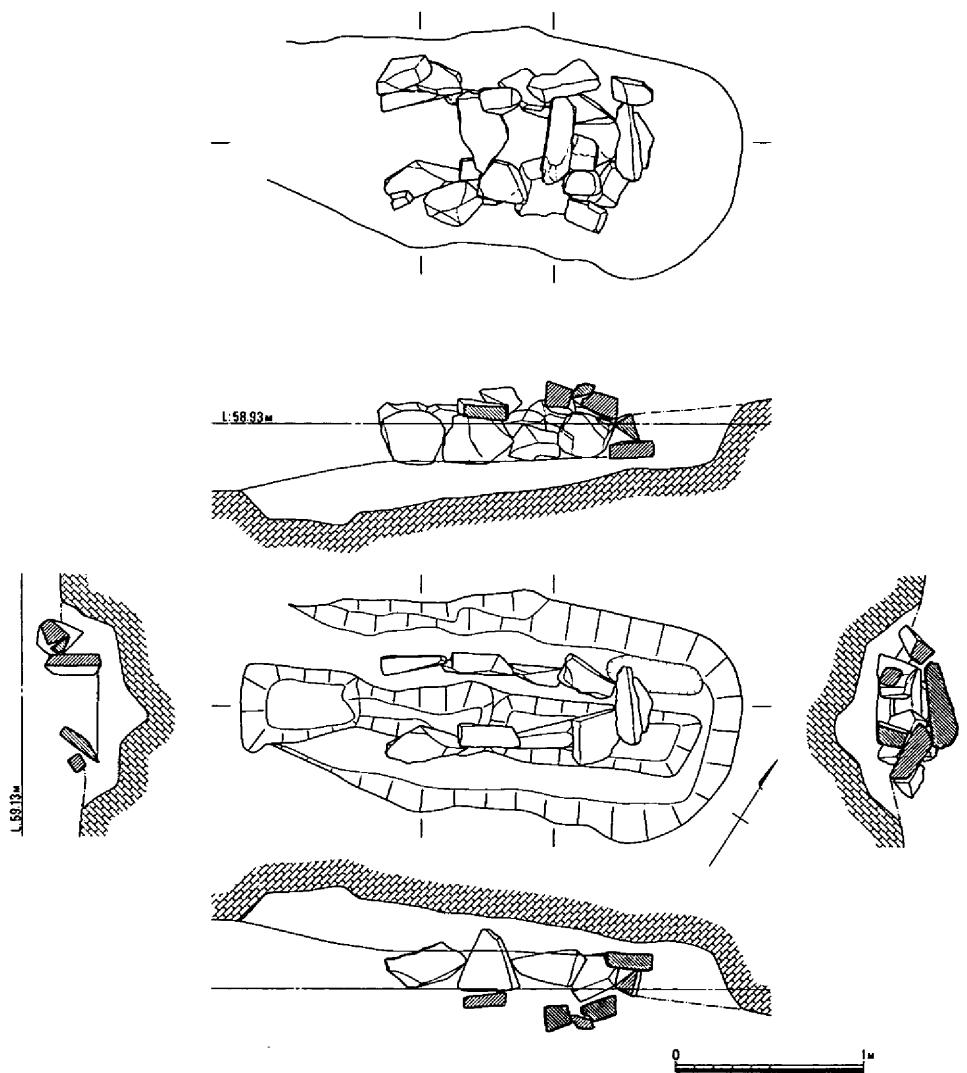
第92図 1号箱式石棺墓

内法は長さ1.75m、幅は西側で40cm、東側で28cmを測る。遺物は全く認められなかった。

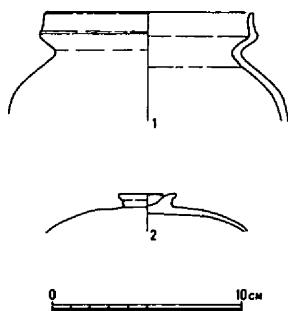
II 2号箱式石棺墓

2号箱式石棺墓は11号墳の北西側周溝の外側に接して位置する。表土直下から検出したもので西端は尾根の斜面が急なことから流失したものと考えられる。

墓壇は西側が狭くなるが、略隅丸長方形を呈し、現存部長さ2.6m、幅1.15mを測る。墓壇内は2段に掘り込まれているが、下段の掘り込みは溝状を呈している。しかし西にむかって低



第93図 2号箱式石棺墓



第94図
2号箱式石棺墓の遺物

り、2点が図示できた。

1は墓壙埋土中から出土したもので甕形土器である。胴部下半は欠損しているが、ほぼ球形を呈するものと考えられ、口縁部はくの字形に外反した後、やや内傾ぎみに短く立上る二重口縁である。口縁端部外面は強い横ナデによる凹部がめぐる。器表が荒れており調整は明瞭でないが、口縁部内外面は横ナデ、胴部内面はヘラ削りと考えられる。色調は赤褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。

2は石棺の床面下より出土したもので、一応蓋形土器と称しておく。天井部に高台状のつまみが付くもので、あるいは上下逆となり小さな脚のつく皿状の器形とも考えられる。器表が荒れており調整は不明である。色調は淡黄褐色を呈し、胎土は精良な粘土で若干の細砂粒を含む。

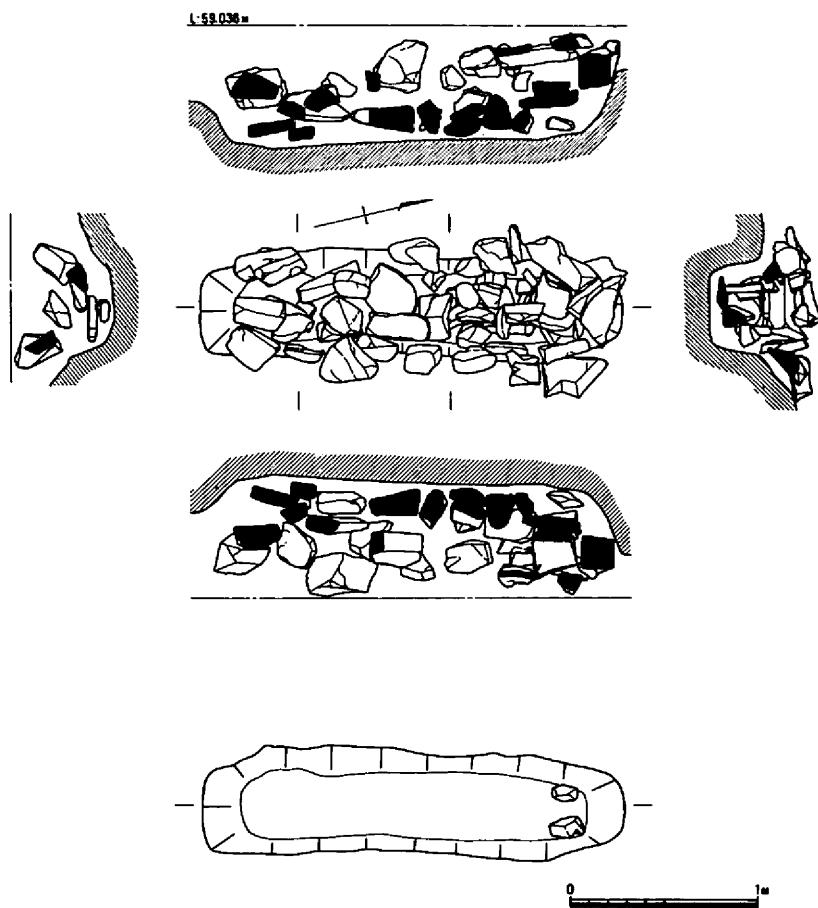
III 配石土壙墓

配石土壙墓は11号墳の西側墳端で検出されたもので、11号墳の被葬者との関係が指摘し得るが、一応分離してここで説明を加える。

墓壙は11号墳主体部と平行しており、長さ2.2m、幅55cmの隅丸長方形の平面プランである。配石は30cm大の礫あるいは板石を墓壙上面より広く置いており、さらに墓壙内にも散布する。特に石棺状に並べたものではなく、おそらく箱式木棺の側板を固定し、さらに蓋石上も礫で覆ったものが、木棺腐蝕後転落したと考えられる。あるいは蓋は当初から礫であった可能性も考えられる。

床面は平坦であるが、長軸でみると南が低くなっている。北側の高い方が頭部と考えられ、礫2個を配した枕石が認められる。副葬品は全く出土しなかった。

IV 土 壙 墓

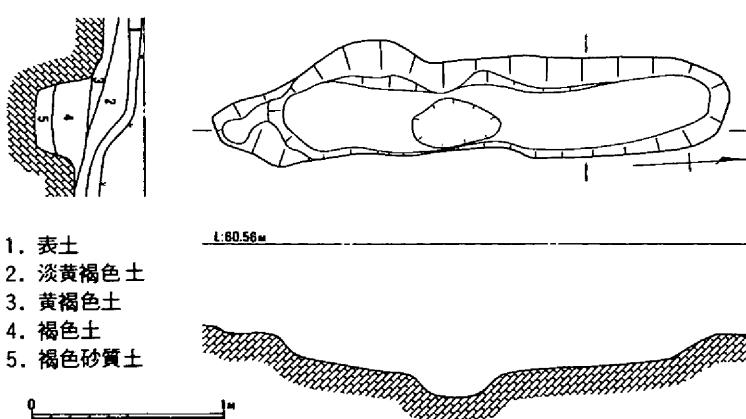


第95図 配石土塚

土塚墓は12号墳の東側墳端に接するところに位置する。表土下の淡黄褐色砂質土を除去して検出したもので、主軸をほぼ南北にむけ長さ2.7m、幅52cmを測る。平面プランは略隅丸長方形と考えられるが、南端は凹凸の著しい整わない形を呈している。おそらく本来の南端は内側の掘り込み線と推定される。また中央部には小穴が穿れている。

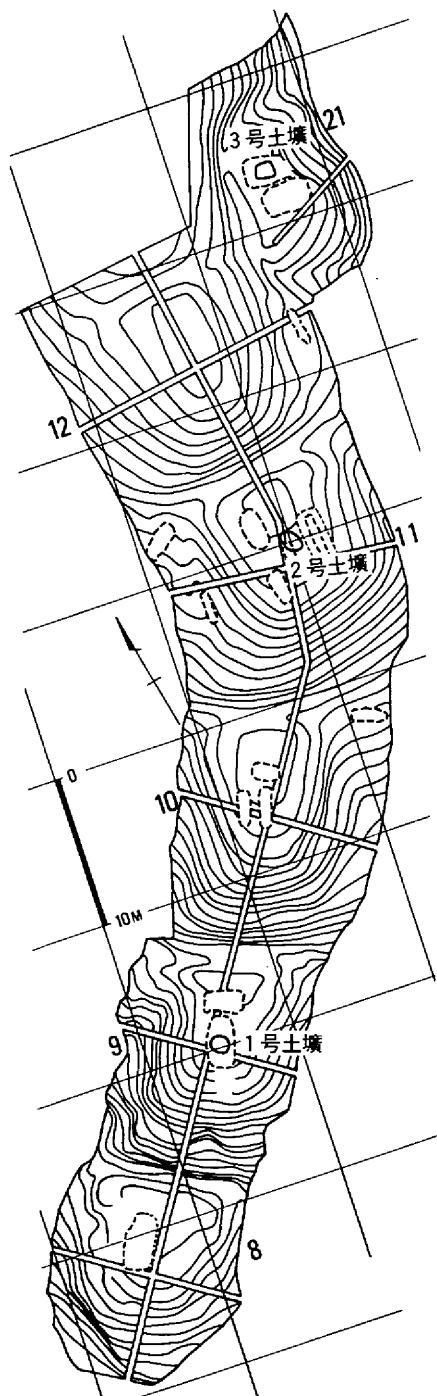
床面は東西は水平、南北は両端から中央部の小穴にむかって低くなっている。

副葬品は全く出土しなかった。



第96図 土塚

第13節 その他の遺構



第97図 土壙の位置図

I はじめに

その他の遺構としたものは古墳群の位置する尾根上の調査区内から検出された遺構で、古墳や墳墓以外の遺構を一括した。したがって時期は古墳時代以前のもの、あるいは古墳時代以後のものもある。

これらの遺構のうち、墳丘下で検出された遺構はすべて墳丘縦横断面観察用のトレンチで検出されたもので、墳丘全てを除去して検出作業を行ったものではない。

II 1号土壙

1号土壙は9号墳の墳頂、丁度第1主体部の真下にあたる墳丘下で検出された。

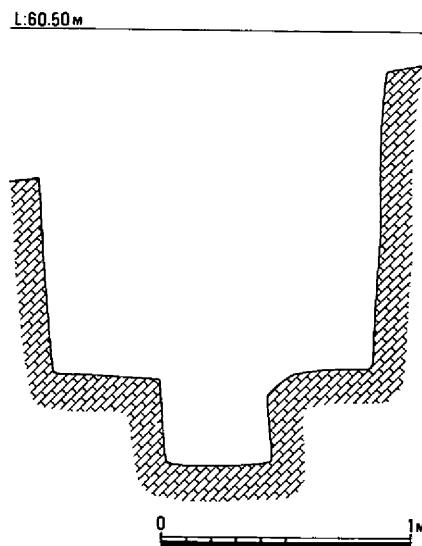
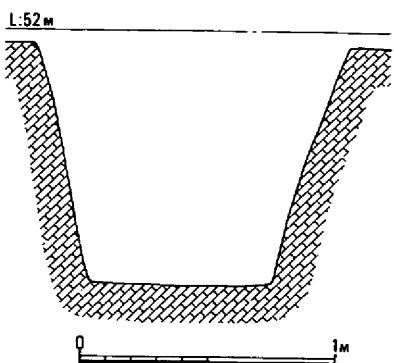
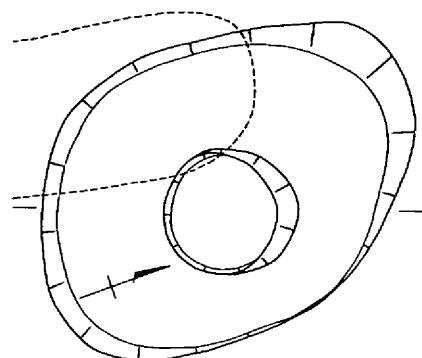
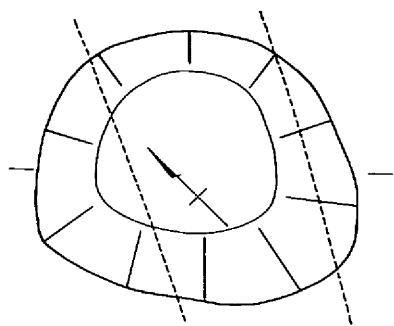
1号土壙の平面プランは南北がやや出張るが略円形を呈し、南北 $1.3m$ 、東西 $1.16m$ を測る。床面は平坦で、壁の立上りは上方がやや開く。地山面からの深さは $96cm$ を測る。

時期については遺物が全く出土しないため判断し兼ねるが、完全に古墳の盛土下より地山を掘り込んでおり、古墳造営以前であることには違いない。

III 2号土壙

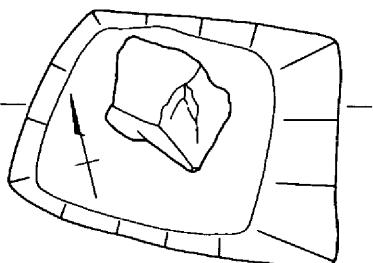
2号土壙は11号墳墳頂第1主体部の真下にあたる墳丘下より検出された。

2号土壙の平面プランは南北に長い隋円形を呈し長径 $1.66m$ 、短径 $1.18m$ を測る。床面は平坦で、中



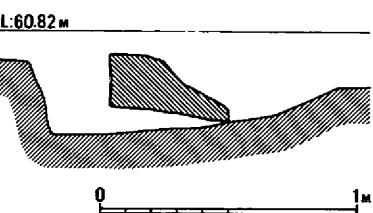
第98図 1号土壙

第99図 2号土壙



央には径50cmの円形ピットが穿たれている。壁の立上りはほぼ垂直である。遺物は全く出土しなかった。

IV 3号土壙



第100図 3号土壙

3号土壙は21号墳第2主体部墓壙内に位置する。墓壙内埋土を穿ってつくられているもので、略長方形を呈し、長辺は1.3m、短辺は88cmを測る。

土壙内には40cm大の石が置かれており、古墳時代より新しい埋葬構造を想起させる。床面はほぼ平坦で、壁の立上りは西、北、南が垂直に近く、東は緩やかである。

第VII章 古墳の考察

第1節 墳形と規模

殿山古墳群は、調査した古墳についてはそのうちの1基が円形を呈する以外はすべて方形であることが判明した。いずれも尾根の高い側を掘削して周溝となし、特に地山を成形することなく盛土を行っている。盛土の量は8号から11号までが厚く、それ以外は薄い。年代的にみれば前者が新しく、後者が古い。

規模は一辺が13m前後のものが多く、一番小規模が16号墳の9m、最大が10号、11号墳の13×15mである。こうした墳丘をわずかに有する小規模古墳は三輪丘陵には多数認められ、後期群集墳に対し前期群集墳（註1）とでも言えるような状況を呈している。このような前半期の群集小古墳は墳形を別にすれば岡山県南部には多く認められる（註2）。

このような小規模古墳は一見して岡山県に多い弥生時代後期の方形台状墓に似ている。この方形台状墓は自然の高まりを削り出して墳丘を整えたもので、周溝をめぐらすものもある。しかし全く盛土がなかったとは言い難く、方形周溝墓同様多少はあった可能性は強い。規模も同じぐらいのものが多く、埋葬施設が多いこと、時期が古いことを除けば区別する理由はなくなるほどである。こうした現象は用木古墳群（註3）においても指摘されている。また多少時期は新しくなるが岩井山古墳群（註4）も尾根上に方墳が順次つくられており、墳丘の規模は10m前後で盛土はほとんど認められない。

県外では奈良県見田・大沢古墳群（註5）が類似している。群構成は前方後円墳が含まれるなどの相異はあるが、2号から5号墳は地山を削り出すか、多少盛土を行った方墳である。時期も經向1から4式に至るもので、殿山の21号、あるいは12号から16号墳の築造時期と平行する。京都府の豊富谷丘陵遺跡（註6）では調査された24基の古墳のうち22基が方形を呈している。いずれも一辺が10m前後で、多くのものが周溝を有している。時期は庄内式併行から6世紀の前半まで認められるようである。

以上の丘陵上に位置する古墳に対し平野部での群集小古墳が発見されつつある。長原遺跡（註7）では10mにも満たない30基もの古墳が検出されている。多くが周溝を有し、やや長方形を呈している。時期は5世紀代のものである。沖積地においてもこのような方形周溝墓と何ら変わらないものが認められ、方形台状墓と丘陵上小規模古墳と同じような関係が推定される。

第2節 埋葬施設

I 棺の形式

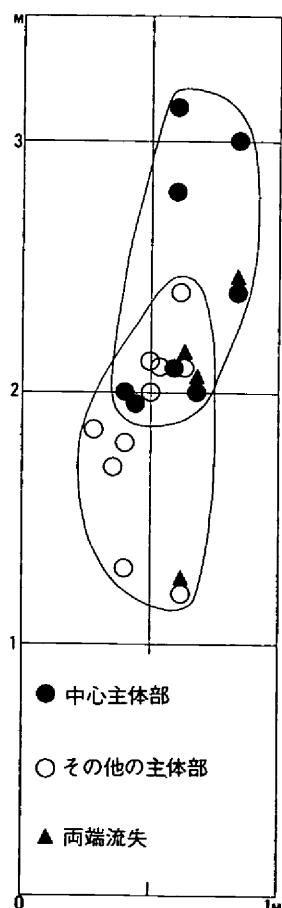
埋葬施設はすべて墓壙を穿ち、その中に箱式木棺や箱式石棺、あるいは堅穴式石室を築いたものである。このうち堅穴式石室は、いわゆる前期古墳に認められるような立派なものではなく、箱式石棺に近いものである。こうしてみると、主体部はほぼ箱式石棺と箱式木棺に限られるが、8号墳主体部と10号墳第3主体部、21号墳第2主体部はやや特異な形態である。

この3主体部はいずれも床面に玉砂利を敷いており、それを囲む石材は認められないが、側板あるいは外口の掘込み痕跡が認められる。石材は8号墳が盜掘により、9号墳第3主体部は流失したものと考えても、なお21号墳第2主体部については問題が解決されない。21号墳第2主体部では攪乱の痕跡はなく、断面では蓋が腐蝕後中心部が落込んだ状態で観察されている。このことは蓋のみが木製であったと考えるより全体が、しかも側板痕跡から考えると小板を組合せた木棺であったと推定される。

9号墳第3主体部は外口痕跡が残っており、玉砂利さえ敷いていなければ、弥生時代の土壙墓にしばしば認められるものである。側壁の痕跡もなく、箱式石棺の破壊されたものと考えるよりは21号墳同様、組合せの箱式木棺と考えた方がよいものである。

8号墳は盜掘を受けているとは言え、盜掘の目的が埋葬施設を破壊するものでない以上、すべて石材を抜き取るというのは不自然である。したがって21号墳同様、組合せの箱式木棺の可能性が強い。

かかる形態に類似したものは少なく、県内では用木古墳群（註8）中に僅かに認められるにすぎない。全く同じものではないが、土壙に側板、外口痕跡が認められる。また同第9号墳第2主体部では土壙床面に礫を敷いている。しかし側板、外口痕跡はない。以上の例は石材が認められず、木棺と考えられ、若干ではあるがこうした埋葬施設が殿山だけでは



第101図 主体部計測分布図

なく、一定の広がりをもつ傍証となろう。なおこれらを礫床と考え、この上に木棺を置いたと考えられなくもないが、外口・側板痕跡がある以上、玉砂利や礫は木棺の床として取り込まれていたと考えられる。

さて殿山古墳群では大きく箱式木棺と箱式石棺（以下木棺あるいは石棺と略す）とに分類できた。こうした2種の棺が同一墳丘上に築かれる場合、その関係には一定の約束ごとがあったに感じられる。

それは中心主体部はすべて木棺を使用していることである。21号墳についてはどちらを中心主体とするかは決め難いので除くとしても、他は墳丘中央部に位置し規模が大きく、あるいは副葬品が認められる等、石棺とは際立って優位な存在にある。

また21号墳以外の尾根稜線上に順次築造された古墳は、12号墳を境にして棺のあり方が大きく変化する。12号墳は主体部が流失しているため不明であるが、13号から16号墳まではすべて木棺が2基平行に築かれている。ところが8号から11号墳までは木棺だけ、あるいは木棺と石棺の組合せで2基から4基まで多くの主体部をもつている。こうした差は埋葬施設の変化のみにとどまらず、副葬品の差としても、さらに土器を検討すれば時間的な差としてもとらえられる。一言でいえば前者が副葬品を有し時期的に新しい一群、後者が副葬品をほとんどもたない古い一群である。

II 棺数と被葬者数

前述した木棺や石棺内には枕石を置くものが多く、その配置や人骨の残存から一棺内に複数の被葬者が認められる例がある。そこでここでは各古墳における主体部数と被葬者数を整理しておく。

8号墳は木棺のみであり、しかも搅乱を受けているため不明である。9号墳は2基検出され、第1主体部の木棺内には両端に枕石があることから2人の埋葬が考えられる。第2主体部は石棺で男性が1人である。10号墳は3基検出され、第1主体部は1人、第2、第3主体部も1人と考えられ、合計3人と推定される。11号墳は4基検出され、第1、第2主体部は1人、第3主体部は人骨も残っており確実に1人である。中心的な第4主体部は両端に枕石があり、副葬品の分布からも2人と考えて間違いない。12号墳は主体部が流失して不明であるが、13号墳は2基検出された。第1主体部は木棺で両端に枕石があることから2人、第2主体も木棺であるが、長さも短かいことから1人と考えられる。14号、15号墳はそれぞれ2基検出されておりいずれも木棺であるが、両端が流失しているため推定が困難である。ただ両方とも第1主体部が大きいことから、2人埋葬の可能性が強い。16号墳は全く流失しているので不明。21号墳は2基検出され、第1主体部の石棺内には女性二体分の人骨が残存していた。第2主体部は木

棺で一端が削平されているため確定的ではないが1人と推定される。

以上被葬者数は、埋葬施設数の多い11号墳の5人は別格として、その他はすべて3人と考えられた。その一古墳内での埋葬のされ方は、とりわけ中心主体部へはかならずと言ってよいほど2人が埋葬され、1人の場合は10号墳のごとく平行して第3主体部までつくられている。この3人の被葬者がどういう関係であり、他の地域の古墳ではどうなっているのかは十分な検討を行っていない。ただこうした同棺重葬例は各地でよく知られているところであり、小林行雄氏の研究（註9）が著名である。それによれば同棺重葬が認められるのは古墳時代中期から古墳終末期までであり、前期古墳には認められないとされている。しかし殿山古墳群はこれまで遺構遺物を検討した結果でも明かなように弥生時代後期後半から古墳時代前期の築造であり、同棺重葬が弥生時代後期にまでさかのぼるものとして注目される。

註

註1 石部正志「古墳文化論」『日本史を学ぶ1』1975年

註2 出宮徳尚「吉備地方の前半期古墳の地域的形成と展開」『古文化談叢第7集』1980年

註3 神原英郎「用木古墳群」『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報(1)』1975年

註4 則武忠直、太田耕一、国安敏樹、神原英郎『岩井山古墳群』1976年

註5 「大和を掘る<1980年度発掘調査速報展>」1981年

註6 松井忠春「豊富谷丘陵遺跡の調査」『京都府埋蔵文化財情報創刊号』1981年

註7 藤沢真依「古墳時代の遺構」『長原』1972年

註8 註3と同じ

註9 小林行雄「阿豆那比考」『古墳文化論考』1976年

第Ⅶ章 古墳出土遺物の考察

第1節 土 器

調査された古墳のうち、13号、14号墳を除いた古墳からは若干ではあるが土器が出土している。これらの土器は墳丘、あるいは周溝内から出土しているが、そのほとんどは墳丘の流出に伴い原位置を動いたものであると考えられる。しかし細片で、移動したものにもかかわらず、少なくとも本古墳群築造時期の一端を明らかにし得るものと考えられる。

8号墳出土の土器

8号墳の土器はすべて周溝内から出土した。したがって9号墳の墳丘からの転落も想定され得るが、土器は底部を下にして置かれたような状態で、しかも暗黄褐色土の中に集中していることなど、8号墳に伴う可能性は極めて強い。

出土した土器はすべて壺形土器である。すべて球形の胴部に口縁部が二段に外反する二重口縁を有するものであるが、6以外は二重口縁の屈曲部が直線的で、外側の凸帯によって段をなしている。胴肩部には円形刺突文を一段ないし2段めぐらしている。調整は胴部外面が横方向の刷毛目を主とし若干の縱方向が認められる。胴部内面はヘラ削りのものと、指頭圧痕が全面に残るものとが認められる。口縁部は内外面とも横ナデが施される。なお底部まで観察し得る資料は一点だけであるが、焼成後の穿孔が認められた。

ではこのような特徴を有する壺の編年的位置はどの辺に求められるのであろうか。まず胴部が球形を呈し、粗い刷毛目の盛行と、内面ヘラ削りが消失していく傾向など、布留式と総称される範疇であることは明らかである。この布留式は畿内ではさらに細分されているが(註1)、岡山県では良好な資料が少なく、これから課題ではある。しかし資料は蓄積されてきており、それとの比較を試みておくが、出土している土器が壺だけであり、器種のセット関係が不明であることから、詳細な検討は困難である。

岡山県では布留式に相当する時期の編年は、古くは高島王泊遺跡(註2)での成果から王泊第5層→王泊第4・3層に細分され、また間壁忠彦氏は笠岡市走出遺跡(註3)の検討から山田原→走出という編年案を発表している。また岡山県教育委員会が実施した上東・川入遺跡(註4)では亀川上層(川入大溝下層)→川入大溝上層という編年がなされた。これら編年の基準資料の中には二重口縁の壺形土器の資料は極めて少ないが、布留式の最古の段階と考えら

れる、上東遺跡亀川上層と川入遺跡大溝IV層には若干認められる。この時期の壺は胸部が球形に近いが、丸底、胸部球形化という変化から考えると8号墳出土の壺より先行するものである。また胸部内面のヘラ削りの消失化の傾向は、亀川上層より新しい王泊五層の段階で粗い刷毛目の盛行と内面ヘラ削りの消失が認められる（註5）ことを考えると、この中に含まれるものである。

これらのことから周溝内出土の壺形土器は上東亀川上層より新しく、川入大溝III層より古いと推定される。畿内では小若江北遺跡の土器より新しく、安達厚三、木下正史の編年にしたがうならば上ノ井手遺跡井戸S B 030下層の時期にほぼ比定され得るのではなかろうか。

次にこの壺形土器の性格であるが、古墳の墳丘上に立て並べられた例は奈良県の桜井茶臼山古墳（註6）が早くから知られている。全長207mの桜井茶臼山古墳では後円部の竪穴式石室をとりかこむように焼成前穿孔の壺形土器が方形にならべられていた。また畿内では特殊円筒埴輪とセットで奈良の大市墓（箸墓）（註7）、京都の元稻荷古墳（註8）からも出土している。

岡山県では都月1号墳から特殊円筒埴輪とセットで出土している。金蔵山古墳（註9）では後円部墳頂から出土しているが、前述の資料とは異なり底部に穿孔は認められない。しかし重要なことは円筒埴輪の中に入れられていたことで、やはり桜井茶臼山古墳以外の類例に認められるごとく、壺と特殊円筒埴輪のセット関係と同じものと考えられる。

殿山8号墳の壺形土器は最低6個体は確認されるが、これとセットになるものは全く出土していない。また8号墳のものとしても、当初から、溝の中に立て並べられたものか、墳頂から転落したものかは明確にし得ない。いずれにしても、焼成後ではあるが、底部を穿孔することによって儀器として古墳に置かれたものである。こうした壺形土器を並べる古墳は金蔵山古墳がほぼ下限を示すもので、古墳時代前期に多く認められ、先に検討した壺形土器の編年的位置とも齟齬をきたさない。

9号墳の土器

9号墳の土器は周溝内で出土したもので、9号墳に伴うものか、10号墳からの転落によるものかは決し難い。器種は高杯形土器と鼓形器台である。いずれも破片であり、これだけで明確な時期は判断しかねる。

あえて高杯の形態から大略の時期を比定すると、上東亀川上層式より新しい傾向が指摘し得る。亀川上層あるいは川入大溝IV層の高杯はすべて精製粘土を使用しており、杯部は底が狭く口縁部との境に明瞭な段を有する。また口縁部は斜め上方に発達している。これに対しより新しい川入大溝III層では胎土が普通の粘土になり、器表は横ナデと刷毛で調整している。また杯部は底が広くなり、段を有して口縁部はやや外反しながら立上がる。

9号墳の高杯はあまり多く認められるものではないが、普通の粘土を使用し、細長い脚柱部に、斜め上方にやや発達した口縁部を有する杯部がつく。また調整はナデと刷毛である点など、前述の亀川上層と大溝Ⅲ層との中間的位置をしめるものと考えられるが、より亀川上層に近い時期と推定される。

第七章 第二節

表5 殿山古墳群出土土器対比一覧表

島泊(註2)	倉敷考古館研究集報	新幹町(註51)	幡多寺(註5)	新幹・都計上東(川入)(註4)	畿内河内	山陰大和	高橋(註14)	殿山古墳群の土器
	グラ ド 上 層			鬼 川 市 III	第 V 様 式	↑ 九 重 ↓	VII-d	
	白 女 江 男 II 岩	雄 町 (11)	下 弥 生 後 期 末	才 の 町 I	北 下 鳥 池 層	經 向 I	鍵 尾 I	IX-a 11号墳の土器
↑ 王 泊 第 六 層 ↓	五 深 万 原 山 田 F1	雄 町 (12)	下 層 I	才 の 町 II	(上 田 町 1)	經 向 II	鍵 尾 II	XI-b 16号墳の土器? 15号墳の土器?
	D • F2	雄 町 (13)	下 層 II	下 田 所	上 田 町 2	經 向 III	小 谷	X-a X-b 12号墳の土器?
		雄 町		龜 川 上 層	(大 溝 下 層)	經 向 IV		X-c 11号墳の土器?
王泊第五層	山 田 原	(14)		下 層 III		布		10号墳の土器? 9号墳の土器 8号墳の土器
王泊第四・三層	走 出			下 層 IV		留		
				下 層 V	(大 溝 上 層)			

10号墳の土器

10号墳の墳端から出土したものである。くの字状に外反する口縁部をもつ甕形土器で、端部はやや肥厚している。細片でもあり、ここでは一応亀川上層式を含めたその前後の時期としておく。

11号墳の土器

11号墳の土器は西側と北側の周溝内から出土している。西側周溝内のものは11号墳墳丘から列石とともに転落したような状態で出土しているが、北側周溝内のものは12号墳からの転落である可能性も考えられる。

さて11号墳の土器は壺形土器と甕形土器が認められる。壺形土器はいずれも二重口縁を有するものであるが、1はハの字状の頸部が認められ、下田所式（註10）の様相を残している。しかし甕形土器は口縁端の櫛描平行沈線が薄く、かつ口縁拡張部下の稜線が明瞭でなくなっていることなど、全体としては亀川上層式に含まれる。

12号墳の土器

いずれも墳丘から出土したもので、壺形土器と甕形土器が認められる。細片であるが、壺は下田所式の様相を呈している。ところが、くの字状に外反する甕は口縁端部が肥厚しており、いわゆる布留式の範疇に含まれるものである。

15号墳の土器

墳丘から出土したもので、鼓形器台の細片である。時期については明確にし得ない。

16号墳の土器

高杯形土器の細片が墳丘上から出土した。精製された粘土を使用しており、やや内湾ぎみの脚部に短い脚柱がつくもので、器表は丁寧なヘラ磨きが施される。細片のため断定はできないがこのような高杯は酒津式（註11）に類似しており、上東遺跡の編年（註12）に従えば才ノ町Ⅱ式とその前後の間に含めて考えておきたい。

21号墳の土器

21号墳の土器は甕形土器、鉢形土器、高杯形土器、鼓形器台がある。甕形土器は櫛描平行沈線を口縁端面にめぐらすもので、12号墳からの転落と考えられる。高杯形土器は短脚で丁寧なヘラ磨きが認められ、才ノ町Ⅰ式（註13）あるいは高橋謹氏のIX-a期（註14）に相当する。

以上のこととを整理すると表5のようになり、古墳群の築造開始は弥生時代にまで溯ることになるが、この問題については後章でふれることとし、ここでは土器から考えられた年代観だけを指摘するに留める。

第2節 鋳造鉄斧

8号墳周溝内からは鋳造鉄斧が出土した。刃部と袋部を一部欠損するが、両端がやや広がる短冊形を呈し、その断面は台形である。

県内の出土例は2例あるが、金蔵山古墳（註15）出土例が著名である。金蔵山古墳からは副室内から5本が出土しており、その内の一つが8号墳のものとよく似ている。

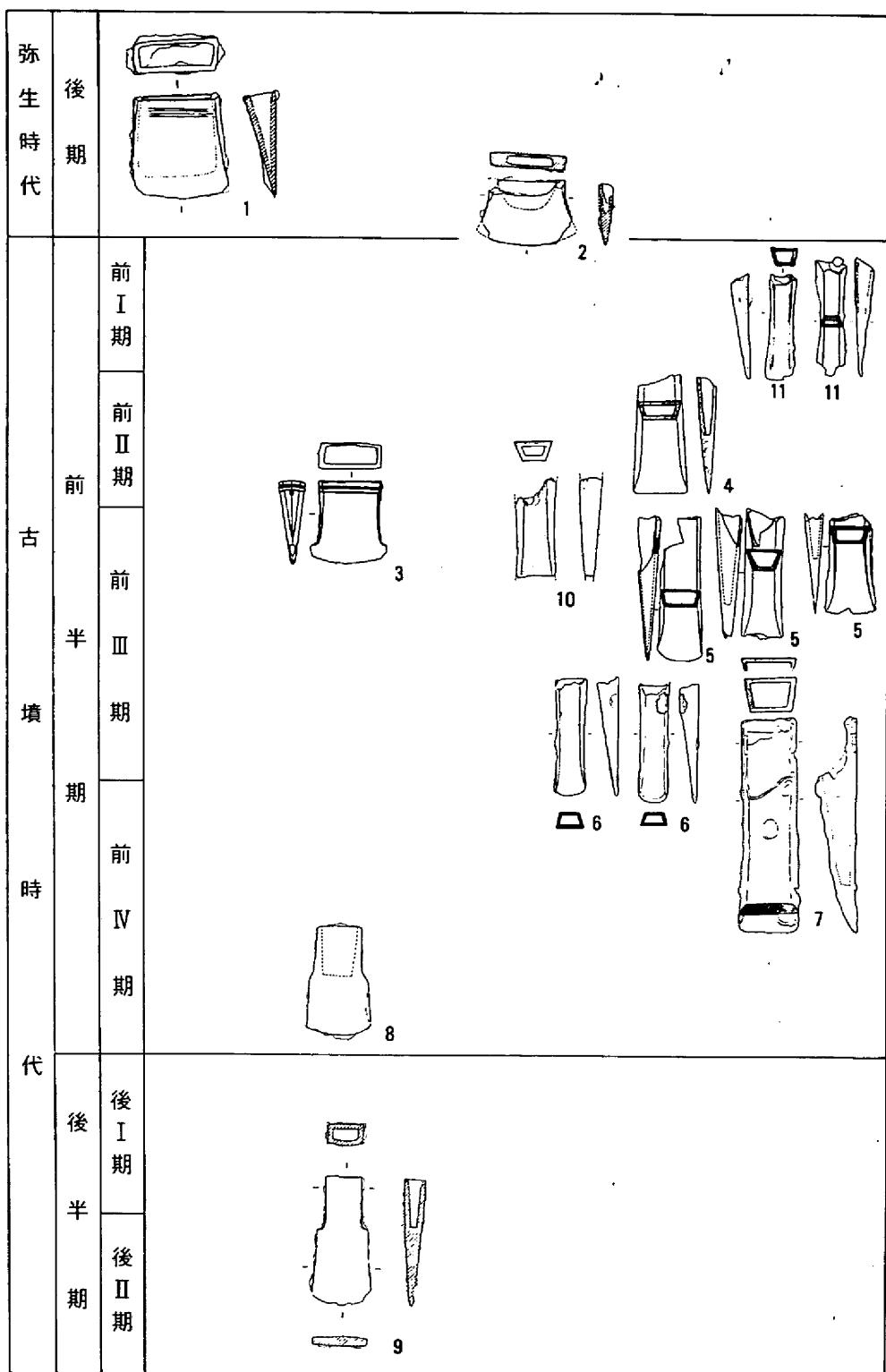
県外では三重県のわき塚1号墳（註16）から出土したものが類似する。わき塚1号墳は一辺約23mの方墳で、主体部から2本が出土している。長さは19.2cmと20.9cm、中央部幅は4.9cmと5.7cmを測る。奈良県の兵家6号墳（註17）は5世紀中葉から後半の一辺約13mの方墳と考えられ、堅穴式石室内から1本出土した。長さ18.6cm、幅4.9cmを測る。広島県の地蔵堂山第1号古墳（註18）は5世紀中葉から後半にかけての東西17m、南北14mの方墳で、墳頂の木棺内から2本が出土した。長さは16.7cmと16.6cm、幅は3.9cmと3.8cmとやや細身である。

また殿山8号墳と同様のものは朝鮮三国時代の遺物の中にも認められる（註19）。慶州110号墳や中佳邱洞古墳出土品はやや刃部の幅が広くなるがその他は全く同じである。中国のものは（註20）断面が長方形を呈しておりやや異なっている。

以上殿山8号墳出土鋳造鉄斧に類似した形態をもつ例を記したが、これらはいずれも古墳からの出土例で、しかも主体部の副葬品と考えられるものであり、殿山とは異なる点もある。ただこれらの副葬された位置が、地蔵堂山1号墳では墓壙の端でしかも上端であり、兵家6号墳においても石室内ではあるが浮いた状態であり木蓋上に置かれたものと推定されている（註21）。さらに金蔵山古墳においても副室に副葬されていた。このことから、鋳造鉄斧は副葬されてはいるが、完全に他の副葬品とは区別されて外に置かれており、鉄造鉄斧の性格を考えうえで重要なことであろう。この問題は後で論じるとして、時期について考えてみよう。

最も古い例は炭焼古墳群3号墳で4世紀後半と考えられ、その他はすべて5世紀の初頭から後半に比定される古墳から出土している。したがって殿山タイプのものは4世紀後半から出現し、5世紀代に盛行したものと考えられる。次に殿山タイプに限らず鋳造鉄斧の性格を考えてみよう。弥生時代は別にして、弥生時代終末から古墳時代初頭の例として福岡県の高島遺跡（註22）例がある。头部が大きく張り出す鉗形を呈するもので、祭祀遺構から出土している。また馬場山遺跡（註23）でも弥生終末期の溝内から出土している。ここでは周辺に土壙墓が多くあり、墳前祭祀に使用後一括埋置されたと解されている。

古墳時代の4世紀後半のものとして福岡県の炭焼古墳群3号墳出土例がある。南北5.8m、東西6mの長方形の墳丘を有する古墳で、北側の周溝内から出土した。本例は殿山の形態に近



第102図 鋳造鉄斧編年図（数字は地名表の番号）

く、また周溝内からの出土という点でも類似している。広島県の西願寺D地点第1号竪穴式石室内出土（註24）のものは刃部が両側へ張り出している。時期は4世紀から5世紀後半と考えられている。5世紀末では福岡県の乙植木2号墳（註25）例がある。古式の横穴式石室を内部主体とする径約20mの円墳である。長方形であるが、中央から刃部にかけてえら状に両側に張り出している形態で、石室内より出土した。同じく福岡県の白萩横穴2号墳（註26）例は乙植木2号墳例をやや縦長にした形態で、6世紀後半から7世紀後半の年代が与えられている。この他祭祀遺跡で有名な沖ノ島遺跡（註27）、熊本県長目塚、福岡県山ノ神古墳から出土している。

以上の例からまず第1には沖ノ島遺跡は別として、古墳あるいは墳墓への副葬とその祭祀に関係したものであることである。しかも金蔵山古墳以外は小規模な古墳で、かつ方墳（方形状）が多いことは注目される。第2には主体部以外に廃棄された状態で出土することが多く、また副葬される場合でも従属的な副葬が認められる点である。

この点は鋳造鉄斧が朝鮮からの輸入品であるにもかかわらず、他の大陸輸入製品とは異なった取り扱いをうけている。分布を見ても畿内に若干あるが北九州を中心としており、畿内を中心とした古墳祭式の中に組み込まれていないものであるだけに、従属的取り扱いを受けたものと考えられる。したがって一種の奢侈品的色彩（註28）をもっており、それを各地の小首長が九州の有力首長との交易等を通じて手に入れたものと考えられる。

表6 古墳時代の鋳造鉄斧出土地名表

番号	遺跡名・古墳名	所 在 地	墳形・規模	出土数	長さ (cm)	刃幅 (cm)	出 土 状 態	時 期
1	馬場山遺跡	福岡県北九州市八幡区大字馬場山	(墓前祭祀)	1	9.0	8.2	溝内の土器窯	弥生後期末
2	高島遺跡	福岡県北九州市小倉区高島	(祭祀遺構)	1	5.6			" "
3	西願寺遺跡群	広島県広島市高陽町矢口	不定形墳墓	1	11.0	9.9	竪穴式石室内	4C～5C前半
4	炭焼古墳群 第3号墳	福岡県筑紫郡那珂川町大字仲	6.8m×6mの 方形周溝墓	1	10.7	4.8	周溝内	4C代後半
5	金蔵山古墳	岡山県岡山市沢田	16.5mの前方 後円墳	5	13.3 15.8 15.4 14.0 10.3 11.2	5.6 5.0 4.6 5.8 5.6	副室の埴製盒子内	4C末
6	地藏堂山 第1号墳	広島県広島市高陽町	17m×14mの 方墳	2	16.7 16.6	4.3 4.1	土壌の上縁	5C中～後半
7	兵家古墳群 6号墳	奈良県北葛城郡当麻町兵家	13mの方墳	1	18.6	5.3	竪穴式石室上	5C中葉～後半
8	乙植木2号墳	福岡県柏原郡須恵町乙植木	約20mの円墳 横穴式石室	1	9.6	5.6	横穴式石室内	5C末
9	白萩横穴2号墳	福岡県北九州市小倉北区板櫃町	横穴	1	11.3	5.2	蔑道部	6C後半～7C後半
10	殿山古墳群 8号墳	岡山県総社市三輪	東西12m角北 13mの方墳	1	13.0	5.0	周溝内	前II期末～前III期初
11	わき塚1号墳	三重県上野市神戸深狭間	南北23.5m東 西22mの方墳	2	19.2 20.9	5.4 5.5	主体部内	中期初頭
12		岡山県牛窓町栗利郷	小規模な古墳	1			箱式石棺内？	古墳時代前半期？
13	長目塚古墳	熊本県阿蘇郡一の宮町大字中通	11.1mの前方 後円墳				前方部竪穴式石室 内	5C代
14	山ノ神古墳	福岡県嘉穂郡西淮町枝園	前方後円墳	6			横穴式石室内	5C後半～6C初
15	太田町遺跡	福岡県柏原郡古賀町		2	14.1 11.2	15.3 6.4	包含層	古墳時代
16	沖ノ島遺跡	福岡県宗像郡	(祭祀遺構)	48				古墳時代
17	古里古墳	長崎県上県郡上県町比田勝	円？	1			箱式石棺内	5C末～6C初
18		香川県綾歌郡綾歌町綾田村						
19	釣川川床	福岡県宗像郡宗像町		1				
20	釜蓋古墳	福岡県大野城市成屋形	円？	1	15.6		箱式石棺内	
21	双子塚古墳	鹿児島県會々郡大崎町	円？	2			工事中発見	
22	磐田寺谷67号墳	静岡県磐田市	円	2			木棺直葬内	5C初

第3節 副 葬 品

I 鏡

鏡はすべて仿製で9号墳から内行花文鏡が、10号墳は珠文鏡、11号墳は変形四獸鏡が出土した。

内 行 花 文 鏡

9号墳の内行花文鏡は第1主体部から出土したもので、径は9cmを測る。県内での出土は21例を数えるが、管見した限りでは同型あるいは同范と考えられるものは認められない。類似したものは鏡野町の妙見山古墳（註29）に認められる。古墳は全長25mの前方後円墳で主体部は粘土椁が2基検出されている。鏡は径が8.4cmと若干小さく、花文間の珠点が正三角状に配されているが、3箇しかなく花文の頂点まで連続しないなどの相異がある。

県外との対比は十分ではないが、全く同じものは知り得ない。しかし外区に櫛齒文をめぐらし、花文間に珠点を三角形に配する6花文鏡が多い。

こうした小型内行花文鏡の分類と編年については森浩一氏の研究（註30）がある。この分類に従うと9号墳の鏡は外区が櫛齒文だけであることからAⅡ式に相当する。AⅡ式の6花文鏡は類例が多く、その古墳の築造年代は古墳時代前期に集中しており、とりわけ前Ⅱ期に多い。このことは9号墳出土土器の編年観とも矛盾しない。

珠 文 鏡

珠文鏡は10号墳の第1主体部から出土した。径5.1cmで、外区には櫛齒文が、内区には珠文がめぐる。県内では、6例が出土しているが、同型、同范鏡は管見した限りでは見当らない。

従来から珠文鏡については5世紀を中心として、6世紀にいたる古墳に多く副葬されていたこともあり、珠文鏡のみが出土した場合、5世紀まで年代を下げる古墳もあると考えられる。しかし最近では福岡県の恵子若山古墳出土例（註31）のように土器から時期が判明しているものもある。それによれば墳端から出土した土器は有田工式（王泊5層併行）期であり、これまでの珠文鏡の年代観から見れば古いものである。また岡山県の光坊寺1号墳（註32）では亀川上層期あるいはその直前と考えられる壺形土器と伴出している。殿山10号墳では時期を限定し得るほどの土器は出土していないが、9号墳と11号墳の間に築造されていることから、王泊5層（註33）の中で捉えられるものと考えられる。

以上の例から珠文鏡の出現は前Ⅱ期まで溯るものと推定されるが、今後の資料的蓄積による検討に委ねたい。

変形四獸鏡

11号墳第4主体部から出土したもので、内区の怪獣が略され、乳をそえた獸毛が表現されていることから獸毛鏡（註34）とも言える。一見捩文鏡に似ているが、獸毛に尾がつくことなど、まだ四獸鏡（獸毛鏡）の範疇にあるものと考えられる。

岡山県内では変形四獸形に属するものは、13例が知られているが、管見の限りでは同型・同范鏡はない。

II 玉類

玉類の副葬は8号から11号墳までの古墳に量的な差はあれども認められた。玉類は一般的には身体を飾るものとして連鎖されて本来の機能を有すると考えられるが、副葬の状態を見ればかならずしもそのような状態では出土していないものもある。そこでまず副葬された状態を見てみよう。

8号墳の玉類については攪乱を受けていたことから副葬の状態は明らかではない。

9号墳の第1主体部では枕石の後横、すなわち被葬者の頭部に算盤玉と小玉を連鎖して鏡とともに副葬してあった。その副葬のされかたは身につけたものではなく、別に置かれた状態である。連鎖した総延長は26cmで、首飾りとしては短かすぎるものである。

10号墳の第1主体部では胸下半あるいは腕と考えられる位置に管玉1個と小玉2個が認められた。管玉と小玉はやや離れており、両腕の飾りとも考えられるが、本来連鎖されていたとも考えられる。しかしいずれにしても、1個と2個、あるいは3個を合わせても腕をめぐることは不可能であり、もしめぐらすとすれば紐ばかりが目立つことになる。

11号墳では第2、第3、第4の主体部に副葬が認められた。第2主体部は攪乱されてはいたが小玉が1個出土した。第3主体部では人骨が残存しており、その首のあたりから管玉2個が出土した。これも2個だけの首飾りであろうか。第4主体部は両端に枕石があり二人の埋葬が考えられる。南側の被葬者には首の位置と、右手の位置に玉が認められた。首の位置の玉類は勾玉2個と管玉12個からなり、総延長は15cmを測る。右手飾りは4個の管玉で構成される。北側の被葬者にも首の位置と右手の位置に認められるが、前者には小玉2個、後者は管玉2個と小玉2個の構成となる。

以上長々と副葬の状態を記したが、その状態や玉の量は古墳間のみならず同一古墳内の主体部間にも著しい格差が認められる。こうした差は何も玉類だけではなく他の副葬品全体で論じる性格のものではあるが、ここでは一応玉類にかぎってその意味を考えてみる。

弥生時代前中期の墓は特定個人の墓が卓越することなく集団墓の状況を呈している。このような集団墓の中に管玉を副葬したものが認められる。この中には九州の一部の斐槻墓や兵庫県

田能遺跡の墓のように多量の玉を副葬する例もあるが、多くは1個から数個である。こうした玉を副葬した被葬者は女性であったり、小児であったりすることから、玉を連鎖して身体を飾るというより、1個であれども玉そのものに特別な意味が感じられる。さらに大胆に言えば、玉に呪術的意味があるとすれば玉を副葬した被葬者は集落内で祭祀を司どる人、あるいはその関係者が推定される。

こうした祭祀を司どる人は当然自然に依存することの多い社会においては共同体全体の利益を代表し、共同体の守護靈と対話する人間として、またときには守護靈の代理者として大きな力をもつ。このことがやがて指導者としての立場ももち合わすようになり、やがて共同体の上に立つ首長となる。このことは古墳出現前の弥生時代後期後半の墳墓の変化から推察される。この時期にあっては玉は多くの場合岡山県和田遺跡のように（註35）集団墓の中に位置する特定の墓に認められることが多いが、玉の数は少ない。しかし一方では岡山県の楯築墳丘墓（註36）のように大型の管玉を多量に副葬するなど、特定墓へ集中化が認められる。

さて古墳時代になるとどうであろうか。現在最古的一群である備前車塚古墳をはじめ、全国的にも最古の古墳には玉を副葬しないものが多い。このことはこれまで各地で発展しつつあった玉類副葬を組み込んだ埋葬儀礼が、新たな古墳祭式首長権継承儀礼によって否定されたことを意味する。しかしながら次の段階では、当初三角縁神獸鏡に認められるような新たな身分関係をつくりあげた首長層は、首長の階級的結合を進めつつ、より広範な結集、全国的支配の系列化を行うために、各地で発展しつつあった埋葬儀礼を組み込んだ。その各地での埋葬イデオロギーの具体化したもの＜副葬品＞が幾内において一定の首長権継承儀礼の様式として確立された。特に玉はこの様式の重要な構成物として古墳時代の全期を通じて副葬されている。

特に前・中期の大型古墳には大量の玉が副葬され、首飾りだけではなく、手玉・足玉も認められる。一方こうした大量副葬、あるいは連鎖して身体に着装されたものとは異なり、殿山古墳群の副葬玉類のように少量を副葬したものもある。これは小地域首長層が連鎖できるほどではないが、古墳葬送祭式の様式として必要であったからこそ、たとえ1個であれ副葬したものにはかならない。ただここで問題となるのは管玉である。つまり竹等の竹管状製品（註37）の石製と考えれば、当然竹製品が存在しても不思議ではない。現在残存していないが、身体を飾っていた可能性は考えられなくはない。

次に各玉について見てみる。

小型算盤玉

8号墳から出土したもので、一見臼玉に類似している。外面は丁寧に磨かれており、石質は不明である。岡山県内ではこれに類似したものは出土していないが、奈良県池ノ内5号墳から同様のものが出土している。池ノ内5号墳は直径約15mの円墳で、墳頂には4基の木棺が検出

されている。算盤玉が出土したのは1棺の棺外で53個が認められる。切子玉として報告されているが、切子玉のような面はなく、明らかに算盤玉状を呈している。滑石製で、最大径は6～7mm、長さ3～5mmを測り、最大径3～4mm、長さ2～4mmを測る殿山8号墳の.2倍の大きさである。時期は5世紀の初頭頃と考えられており、殿山8号墳と極めて近い時期と考えられる。

水晶製算盤玉

9号墳第1主体部から小玉と連鎖され出土している。前述の小型算盤玉より大きく、最大径7.2mm、高さ8.1mmを測る。

岡山県では殿山以外に4例が知られている。最も時期の古い例は鴨方町の和田遺跡（註38）で、才ノ町I式期の土壙墓から勾玉、管玉、小玉と共に出土している。3個あり大きさも最大径6～8mm、長さ8～9mmで両方からの穿孔であることなど全く同じものである。倉敷市辻山田遺跡（註39）では酒津式からその直後にわたって順次作られた土壙墓の一つ（土壙墓10）から勾玉、管玉、小玉などと共に完形2個、断片1個が出土している。殿山よりやや細長く、最大径6mm、長さ8mmを測る。

後期古墳では殿山の東尾根にかけて存在した三輪山6号墳（註40）から39個が出土している。最大径22mm、長さ28mmの大型品から、最大径7mm、長さ6mmの小型品まで認められ、穿孔は1個が両方からである以外はすべて一方向からである。時期は6世紀前半である。その他にも神郷町門前中屋古墳（註41）からは6世紀後半の横穴式石室内から出土している。

こうしてみると岡山県内では水晶製の算盤玉は弥生時代後期後半から古墳時代のほぼ全期間認められる。

目を県外に転じると九州では福岡県高本遺跡（註42）例が最も古く、弥生中期前半から中葉と考えられている。その他九州では福岡県と長崎県で5例が判明しており、弥生時代後期末から古式土師器の時期が特に多い。東では奈良県の兵家11号墳東主体部から出土している。6世紀中頃の築造と考えられており、幾内でもほぼ古墳時代の全期間にわたって認められると推察される。

穿孔については古いものが両方から、新しいものは一方からと（註43）言われているが、岡山県の例で検討すると、和田遺跡、殿山10号墳のものが両方からで、辻山田遺跡、三輪山6号墳、門前中屋古墳例は一方からである。兵家11号墳例も合せて考えると後期古墳は確実に一方穿孔となるが、それ以前は両方が多いものの一方も認められる。こうした穿孔技術の転換は管玉が5世紀末をもってすべて一方向穿孔に変化するのと軌を一にする可能性がある。

これまで水晶製算盤玉の時期と分布について記してきたが、長期間にわたって使用されることから時期を確定することはできなかった。ただ島根県の平所遺跡（註44）で唯一その工房址が発見されている。時期が鍵尾I式期であることから、殿山10号墳との関係は考えられな

いと思うが、和田遺跡、辻山田遺跡との関係が注目される。

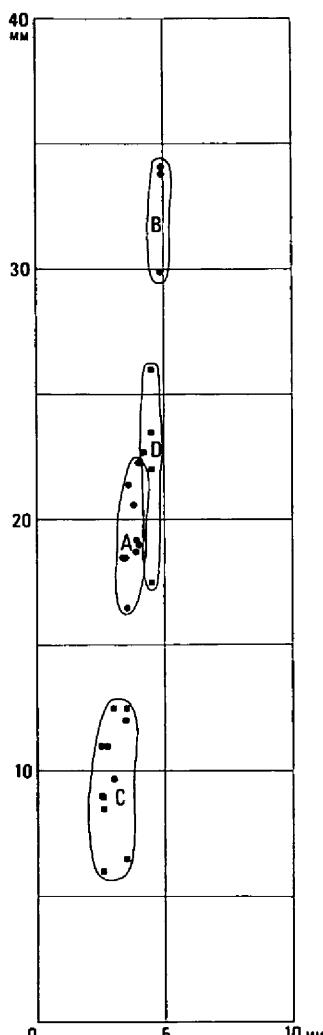
管 玉

管玉は8号、10号、11号墳に副葬されていた。材質は碧玉、緑色凝灰岩、ガラスが認められる。8号墳の管玉はすべて緑色凝灰岩製であるが、径と長さで見ると二群に分れる。径4mm前後、長さ20mm前後の一群と、それよりやや太く長大（このグループはすべて欠損しているため実長はもっと長い）な一群がある。前者をA群、後者をB群とする。

11号墳の管玉は碧玉と緑色凝灰岩とガラス製が認められる。ガラス製のもの2個を除いて径と長さを見ると、これも二群に分れる。径3mm前後、長さ10mm前後の細くて短かい一群と、これより太くて長い一群とが認められる。前者をC群、後者をD群とする。

さて管玉は径によって時期的な変化があるとされ（註45）、さらに寺村光晴氏は地域的な差も考えながら径による編年（註46）を行なっている。これらの研究によれば弥生時代の極細から古墳時代になって太くなってくる過程が径を中心とした統計処理によって示されている。

しかし著者はこうした径による細身から太身化という変化だけではなく、径と長さによる編年を試みた。ここでそのすべてを論じることは本稿の目的ではないので概略だけを記すことにする。弥生時代後期後半から古墳出現期のものは径4mm、長さ1cm内外を中心とし、長さが2cmをこえるものはない。このような細身短小型とは別に特殊な太身の一群があるがここではふれない。穿孔は両方向からが多いが、特に短かいものには一方が認められる。古墳時代前Ⅱ期ではやや太身長形化の傾向が認められる。前Ⅲ期では径の太身化にもまして長大化する傾向にある。こうした傾向は前Ⅱ期の終り頃から顕著である。穿孔はほとんど両方向である。また材質は極端に粗雑な緑色凝灰岩が多く用いられるようになる。前Ⅲ期の後半からⅣ期では特に径の統一性が認められ、4mmを中心に3～5mm内におさまる。これに反し、長さはバラツキが大きい。前Ⅳ期の後半から規画的な径の3倍の長さをもち、穿孔はすべて一方の穿孔となる後期古墳型が出現する。



第103図 管玉計測値分布図

以上ざっと管玉の変遷を見てきたが、それでは殿山のものはどうであろうか。11号墳のC群としたものは細身短小で弥生時代後期後半いらいのものに類似しているが、同時に存在するD群はすでに前II期の特徴を現しあげている。したがって11号墳は管玉から見る限り前II期に近いものと考えられるが、前I期の古墳に伴う管玉が判明していないため確定的ではない。8号墳の管玉はA群が前II期の特徴をよく現しているが、B群が5世紀前半に中心をもつ前III期型である。前III期型は前II期の終り頃から出現しており、8号墳も前II期と前III期の中間に位置するものであろう。このことは8号墳周溝から出土した土器の編年的位置とも相違することはない。

表7 岡山県の玉類一覧表

遺跡名	墳形	主体部	時期	勾玉			管玉		算盤玉	東玉	琥珀玉	丸玉	小玉	白玉	切子玉	土玉	その他		
				硬碧	メノウ	その他	ガラス	その他											
さくら山台状墓	方形	第3, 竪穴	弥生末~古墳			2													
四辻第1号墳	土壙	弥生末			2?	13									21				
便木山台状墓	方形	土壙	弥生末	1		1													
便木山36号土壙	土壙	弥生末				1									1				
便木山K-S	壺棺	弥生末				1									1				
和田遺跡	土壙	弥生末	3			7			3水晶						26				
黒宮大塚	前方後方墳	縦穴	弥生末	1		1													
辻山田遺跡	土壙	弥生末~古墳	4			7			1水晶						11				
用木4号墳	方墳	第4, 土壙	古墳初頭					1											
		第5, 土壙	"												3				
		第11, 土壙	"	2		6									2			石玉3	
鎌物師谷1号	方形	縦穴	弥生末~古墳	4		38									665				
用木5号墳	方墳	第1, 直葬	古墳前期			1ガラス									5				
用木7号墳		第2, 直葬	"			1ガラス	1								23				
用木10号墳	石積み	古墳前期?		1	1	1													
櫛津古墳	土壙	古墳前期				1									1				
金蔵山古墳	前方後円墳	主, 縦穴	古墳前II期			4													
		S, 縦穴	"			72滑石	35												
		中, 粘	5C中	2		16													
月の輪古墳	円墳 (造り出し)	南, 粘	"	4	2	32				3				311ガラス 1滑石					
岩田3号墳	方墳	造出, 粘	"			2													
野山5号墳	円墳	1, 箱式	5C中	1		1									1				
		2, 箱式	"			1滑石													
三輪山6号墳	円墳	横穴式石室	6C初			10	1水晶	39水晶 1メノウ	41						2	3			
四つ塚13号墳	前方後円墳	B, 直葬	6C前			25								1水晶	21				
寺山A1号墳	円墳	A, 直葬	"			2?									16				
北山1号墳	円墳	C, 縦穴	5C末~			6									20				
		1, 直葬	6C前																
横田東1号墳	円墳	2, 直葬	"	3	2	1水晶	22								64				
岩田14号墳	円墳	横穴式石室	6C中	1	1	2土	8								52	1	2石玉6		
		横穴式石室	6C中~			1滑石		1		1					44	21	1彩色		
岩田1号墳	円墳	5, 直葬	6C後													2木	69		
半裕8号墳	円墳	周溝	"	11		1ガラス	3								73		60		
ピワガサコ古墳	円墳	箱式石棺	6C中			2													
空古墳	円墳	横穴式石室	6C後			2													
土井2号墳	円墳	横穴式石室	6C後			3	1ガラス	3水晶	3	1水晶				9石 7ガラス		7			
万燈山古墳	円墳	横穴式石室	6C後																
横見1号墳	円墳	横穴式石室	6C後			1	1水晶	1							15				
門前中屋古墳	円墳	横穴式石室	6C後	1	2	7			1水晶						2	6	2		
クズレ塚古墳	円墳	横穴式石室	6C後			1													
中山1号墳	円墳	土壙	6C後			13										9			
安信3号墳	円墳	横穴式石室	6C中~後			3									21				

Ⅲ 鉄 製 品

鉄製品は14号、16号、21号墳を除いて出土しているが、各主体部ごとの量は少ない。種類は鉈が最も多く、剣、刀子、大刀、鐵鎌、鎌が認められる。これを武器と工具と農具という分類で分けるならば、武器には剣と鐵鎌と大刀が、工具としては刀子と鉈、農具は鎌となる。この分類で各古墳の組合せを見てみよう。

8号墳第1主体部は刀子と鉈であり工具のみで構成される。9号墳第2主体部も刀子と鉈で工具のみである。第2主体部は剣と鎌と鎌が認められ、武器と農具で構成される。10号墳第1主体部は武器（剣）と工具（鉈）をもつ。11号墳第4主体部も武器（大刀・剣）のみである。12号墳は残存したものだけで見ると武器（剣）と工具（鉈）の組合せである。

この12号墳までは遺物も比較的認められ、特に中心的な主体部に鉄製品が副葬されている。しかし13号から16号墳までと21号墳は副葬品が少なく、あっても1点、それも工具のみである。13号墳第1主体部は鉈、15号墳の第1主体部には刀子だけという具合である。

他の副葬品との組合せ関係は後に述べるが、鉄製品だけに限れば、一貫して工具、特に鉈の副葬が認められ、ついで刀子が多い。しかし武器をもつ11号墳だけには工具が伴出していない。

次に鉈と刀子と鎌について若干の検討を加えておく。

鉈

鉈は盜難にあったものも含め、全部で7本出土しているが、刃部が残っているものは僅か1本だけである。先端がやや尖りぎみの幅狭で短かい刃部をもつもので、茎は同じ幅で長いものと考えられる。岡山県内ではこれに類似するものは神宮寺山古墳（註47）から出土している。これは全長32cmと長大なもので、茎端は鉤状に曲っており、12号墳の茎端と同じものである。その他古墳時代前期の光坊寺1号墳（註48）、古墳時代前半期の山根屋12号墓（註49）、4世紀末から5世紀初頭の金蔵山古墳、4世紀末から5世紀初頭の用木古墳群第3号墳、弥生時代末から古墳時代初頭にかけての持坂4号墳等で出土している。

以上の諸例は多くが前期の古墳であり、新しくても5世紀初頭までである。古くは弥生時代にまで溯るものと考えられ、さらに詳細な年代を鉈から求めることはできないが、少なくとも殿山古墳群が弥生時代末から古墳時代前期に含まれるという傍証にはなろう。

刀 子

刀子は8号、9号、15号墳に各1本づつ副葬されていた。全長は13～15cmで、幅が2～2.6cmと、幅が広く刀闌であるのが特徴的である。岡山県内では弥生時代末から古墳時代初頭の横見墳墓群（註50）、古墳時代前半期の山根屋13号墓、古墳時代前期の用木古墳群第3号墳等の出土例がある。

以上の出土例を見る限りでは前期古墳に多く認められ、古くは弥生時代にまで溯る。新しくは検討する資料に乏しいが、後期古墳では刀子の身は細くなり、先端にむかって刃幅を狭めながら尖りきみの鋒となる。身と茎の区画はそのほとんどが両闇となり茎は細長くなる。さらに厚さがいくぶん増し、また頻繁な研直しにより刃部が内湾する例も多い。こうしてみると、前期古墳出土例は幅広で身が薄く、研直しもないなど非実用的なものが多い。

したがって殿山古墳群の刀子も弥生時代後期から前期古墳に通有の形態と言えるであろう。

鎌

9号墳の第2主体部から出土したもので、長方形に近いが、背部が刀部より短かい。短辺を鈍角に折り曲げている直刃鎌である。岡山県内で鎌を出土した遺跡や古墳は20にものぼるが、そのほとんどは刀部が内湾する5世紀後半以後普遍的に認められる形式である。

前半期のものとしては神宮寺山古墳、金蔵山古墳から出土しているが、いずれも長方形（短冊形）を呈しており、殿山のものとはやや異なっている。

註

- 註1 安達厚三、木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌第30号第2巻』1974年
石野博信「奈良県纏向遺跡の調査—三輪山麓における古墳時代前期集落の問題」『古代学研究65』1972年
- 註2 坂井清足「岡山県笠岡市高島遺跡調査報告」1956年
- 註3 間壁忠彦「岡山県笠岡市走出の祭祀遺跡」『倉敷考古館研究集報第2号』1966年
- 註4 伊藤晃、柳瀬昭彦「上東遺跡」「山陽新幹線建設に伴う調査II」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 1974年
柳瀬昭彦、江見正己、中野雅美「川入・上東」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16 1977年
- 註5 間壁忠彦、間壁義子、出宮徳尚、根木修「土師器」『幡多廃寺発掘調査報告』1975年
- 註6 上田宏範、中村春寿「桜井茶臼山古墳」「奈良県史跡名勝天然記念物調査報告19』1961年
- 註7 中村一郎、笠野毅「大市墓の出土品」「陵墓関係論文集」1980年
- 註8 京都大学文学部考古学研究室向日丘陵古墳群調査団「京都向日丘陵の前期古墳群の調査」『史林第54卷第6号』1971年
- 註9 西谷真治、鎌木義昌「金蔵山古墳」1959年
- 註10 註4に同じ
- 註11 間壁忠彦「倉敷市酒津及新屋敷出土の土器」『瀬戸内考古学2号』1958年
- 註12 註4に同じ
- 註13 註4に同じ
- 註14 高橋護「弥生土器—山陽3」『考古学ジャーナルNo179』1980年
- 註15 註9に同じ
- 註16 森浩一、森川桜男、石部正志、田中英夫、堀田啓一「三重県わき塚古墳の調査」『古代学研究66』1973年

- 註17 楠元哲夫, 伊藤勇輔「長山の古墳」「兵家古墳群」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第37冊1978年
- 註18 松村昌彦「地蔵堂山遺跡群」「高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告」1977年
- 註19 東潮「朝鮮三国時代の農耕」「櫛原考古学研究所論集第4」1979年
- 註20 川越哲志「弥生時代の鋳造鉄斧をめぐって」「考古学雑誌第65巻第4号」1980年
- 註21 註17と同じ
- 註22 小田富士雄編「高島遺跡」1976年
- 註23 川上秀秋, 栗山伸司「馬場山遺跡」北九州市文化財調査報告書第36集 1980年
- 註24 註18と同じ
- 註25 石山勲「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告X」1977年
- 註26 木太久守他「白萩横穴群」北九州市文化財調査報告書第32集 1979年
- 註27 岡崎敬「鋳造梯形斧」「沖ノ島」1979年
- 註28 註20と同じ
- 註29 土居徹「美作鏡野町土居妙見山古墳」「古代吉備第6集」1969年
- 註30 森浩一「古墳出土の小型内行花文鏡の再吟味」「日本古文化論叢」1975年
- 註31 岩崎二郎「恵子若山遺跡」1975年
- 註32 高畠知功, 福田正継「二野遺跡, 光坊寺古墳群」「中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査9」1977年
- 註33 註2と同じ
- 註34 田中琢「古鏡」「日本の原始美術8」1979年
- 註35 伊藤晃, 浅倉秀昭, 江見正己「和田遺跡の調査」「山陽自動車道建設に伴う発掘調査2」1981年
- 註36 近藤義郎「楯築遺跡」「山陽カラーシリーズ10」
- 註37 濑川芳則「竹珠考」「古代学研究94」1980年
- 註38 註35と同じ
- 註39 間壁忠彦, 間壁葭子「辻山田遺跡」「倉敷考古館研究集報第10号」1974年
- 註40 西川宏「備中三輪山第6号墳」「古代吉備第5集」1962年
- 註41 井上弘「門前中屋古墳」「中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査11」1977年
- 註42 江本義理, 石山勲, 副島邦弘「福岡県鞍手町所在高本遺跡の調査」「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告X III」1977年
- 註43 註42と同じ(121頁)
- 註44 前島己基, 松本岩雄「平所遺跡」「国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書II」1977年
- 註45 河村好光「古墳社会成立期における玉生産の展開」「考古学研究第25巻第3号」1976年
- 註46 寺村光晴「古代玉作形成史の研究」1980年
- 註47 鎌木義昌「古墳時代」「岡山市史—古代編」
- 註48 註32と同じ
- 註49 竹田勝, 岡本寛久「山根屋遺跡」「中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査12」1977年
- 註50 下沢公明, 友成誠司「横見墳墓群」「中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査9」1977年
- 註51 正岡睦夫他「雄町遺跡」「山陽新幹線建設に伴う調査」1972年

第VII章 結語

第1節 古墳の年代と墳丘墓

I 古墳の年代について

殿山古墳群の築造年代については、墳丘、あるいは周溝内出土土器の検討による方法が最もよい。副葬品に比べ形態の変化が顕著で、かつその土器編年もより精緻になっているからである。ただその際十分に検討されなければならないことは、土器がいつその古墳に置かれたかであろう。このことは副葬品同様被葬者の埋葬時に棺の中に収められたものは別として、埋葬後各種の儀式に伴うもの、あるいはかなりの時代をへた後の何らかの祭祀等、さまざまな要因が考えられるからである。

前章ではこうしたことも考慮しながら土器の年代観についての考察を加えた。また若干の副葬品についても、その年代の大略を示し得た。ここではこれらを総合的に検討を加え、その年

表8 前期古墳の時期区分と上器対比表

都出(註2)	土器	古墳	畿内の古墳	縦向(註7)	川入・上東	高橋	殿山	周辺の古墳
第V様式	中相				鬼川市Ⅲ式	VII-d		(橋築墳丘墓)
	新相			I式	才の町I式	IX-a	21号墳	
第VI様式	古相			II式	才の町II式	XI-b	16号墳 15号墳 14号墳 13号墳	鎌物師谷1号
	新相 (庄内式)			III式	下田所式	X-c	12号墳	
布留式	古相	前期古墳 I期	椿井大塚山 元稻荷	IV式	亀川上層式	X-a	11号墳	(車塚古墳)
	中相	前期古墳 II・III期	紫金山 寺戸大塚 弁天山C I 東大寺山			X-b	10号墳	天望台古墳
	新相	前期古墳 IV期	佐味田宝塚 黄金塚			X-c	9号墳	
							8号墳	三笠山古墳
					大溝上層			

代について考えてみる。

その前にまず古墳時代の時期区分であるが、ここでは『日本の考古学』（註1）に示されている区分を用いる。この時期区分は土器との対応関係が十分に示されてはいないが、前Ⅲ期はほぼ布留式と対応するようで、その実年代は4世紀の後半が与えられている。しかしこれでは前Ⅰ期の古墳、さらに前Ⅱ期の古相、あるいは新相がどの土器と対応するかは明らかでない。

この編年の不十分さを都出比呂志氏は埋葬施設や副葬品の様相から、前期古墳（前Ⅰ期、前Ⅱ期）をさらに4期に細分し、同時に土器との対応関係も示された（註2）。前述の時期区分との関係で言えば前Ⅰが前期古墳Ⅰ期、Ⅱ期、前Ⅱ期が前期古墳Ⅲ期、Ⅳ期にはほぼ相当する。したがってここでは基本的には『日本の考古学』に従い、必要に応じて都出編年を用いる。

8号墳

8号墳は周溝から出土した土器が最も有力な手掛りとなる。前章で考察した通り、大溝上層式よりやや古い様相を呈している。主体部は搅乱を受けていたため本来の副葬品の組合せは不明であるが、刀子と鉈？、そして玉類が出土している。刀子は前半期の特徴を示すものの、それ以上時期を特定することはできない。玉類は勾玉と管玉が認められる。勾玉は碧玉製で、一方からの穿孔である。この勾玉は岡山県では月ノ輪古墳で6個出土しており、県外でも奈良県宮山古墳、群馬県稻荷山古墳等から出土している。このことから前Ⅲ期を中心とした副葬が認められ、初現は大阪府黄金塚古墳から出土していることを考えれば前Ⅱ期の後半まで溯るものと考えられる。また管玉は前Ⅱ期の細身で短かいものと、前Ⅲ期の長いものとが共伴しており、前Ⅱ期末から前Ⅲ期初頭の時期が推定される。

以上それぞれの遺物の年代観から、8号墳はほぼ前Ⅱ期、都出編年の前期古墳Ⅳ期から中期初頭に求められる。

9号墳

9号墳の周溝からは若干の土器片が出土しており、その編年の位置は小若江北式より新しく、大溝上層より古いものである。副葬品は第1主体部には鏡と玉と鉈、それに刀子が、第2主体部からは剣と鎌と鏃が出土している。これらの副葬品はいずれも前半期の古墳には一般的に認められるもので、特に時期を特定できるものではない。したがってここでは土器が示す年代観と、古墳築造順序が8号墳より先であることを考慮すれば、前Ⅱ期の古相と推定し得る。

10号墳

10号墳は微量の土器であり、これだけで時期を決定するのは問題もあるが、参考として記せば大略布留式の範疇でとらえられるものである。副葬品は第1主体部が鏡と剣と玉の組合せで前半期の特徴は示せども、それ以上に特定することはできない。ただ管玉は1個ではあるが前Ⅱ期の特徴を有している。こうしてみると、古墳の築造順序が決め手となり、9号墳と11号墳

の間に位置する10号墳の年代観はおのずから決まってくる。ただこの場合、より11号墳に近いのか、9号墳に近いのかは不明のままであり、ここでは幅をもたせ前Ⅰ期の後半から前Ⅱ期の前半に推定しておく。

11号墳

11号墳の周溝内から出土した土器は亀川上層式に比定され得る。副葬品は第2主体部から小玉が、第3主体部からは小玉と管玉が出土している。第4主体部は大刀と剣と玉類、それに変形四獸鏡が一面出土した。玉類のうち勾玉は小型の硬玉製で、両面からの穿孔を施す。また管玉も細身で短かく、勾玉同様弥生時代的な様相を呈している。このことから11号墳はほぼ前Ⅰ期の築造と考えて間違いはなく、都出編年の前期古墳Ⅰに含まれる。なお仿製小型鏡の出現を都出氏は前期古墳Ⅲ期からとされているが、本墳の例とは矛盾することになる。中国製三角縁神獸鏡に遅れて仿製三角縁神獸鏡の副葬が開始され、さらに遅れて仿製小型鏡の副葬が始まるという変化が間違いとは言えるだけの検討を行ってはいないが、少なくともそれは前方後円墳（首長墓）での変化である。したがって中国製三角縁神獸鏡は前方後円墳における首長権継承祭祀の中では重要な位置を占めるが、そういった儀式はなく、より墓としての性格の強い小規模古墳は、弥生時代以来九州を中心に行われてきた小型鏡副葬同様、埋葬儀礼に際し鏡を埋納したものと考えられる。

12号墳

12号墳墳丘からは若干の土器片が出土しており、壺は下田所式に比定される。主体部は流失しているが、剣と鉗が出土した。いずれも時期を決定できうるものではない。築造順序が整然としたものであるならば、11号墳と13号墳の間に築造年代が求められる。

13号墳から16号墳

これらの古墳のうち15号と16号墳からは若干の土器片が出土したが、15号墳の鼓形器台片では時期を推定するには困難である。16号墳の高杯は才の町Ⅱ式の特徴を有している。4基の古墳は8号から11号墳までの古墳と同一条件下にあったにもかかわらず、主体部が流失しているのは、本来の埋葬位置が浅かったものと考えられ、11号以下とは区別され得るものである。このことは副葬品が極端に少なくなる現象と軌を一にしている。弥生時代後期の墳墓（方形台状墓等）は副葬品が認められないことが多く、あっても鉗1点だけという場合が多い。こうした状態が13号から16号墳までの古墳と類似しており、土器の年代観とも矛盾しない。するとこれらを古墳と言ってよいのかどうかが問題となるが、その問題は後章でふれることにする。

21号墳

21号墳出土の土器は殿山古墳群中最も古いもので、才ノ町Ⅰ式に比定される。2基の主体部には全く副葬品が認められないことから、この土器が唯一の年代を推定できるものである。墳

丘下および周辺には才ノ町Ⅰ式期の遺構は存在せず、21号墳に伴うものと考えて間違いない。

以上各古墳の年代を示したが、全体的に遺物の少なさから十分な検討が加えられていない点もある。しかし本古墳群の築造が少なくとも弥生時代にまで遡り得ることは明らかであり、以後古墳時代前Ⅱ期末あるいは前Ⅲ期初頭まで、順次丘陵の高い方から低い方にむかって形成されたことは理解いただけたものと思われる。

II 墳丘墓について

前章において古墳群の年代について若干の考察を試みたが、その結果弥生時代にまで溯る古墳があることが判明した。しかしここで問題となるのは「古墳」という名称である。筆者は調査開始から報告書作成に至るまですべて何号墳、あるいは古墳という名称を使用してきた。だからと言って弥生時代の古墳という矛盾した呼びかたでよいとは思っているわけではなく、慣習的に古墳と称していたものである。

古墳時代、その象徴的モニュメントである前方後円墳（方）成立の主体的条件は、畿内中核の部族連合を盟主とする西日本諸部族の政治的・祭祀的結集＝同族連合体の成立そのものであり、それを契機として、統一的な首長靈祭祀型式が創出されたと考えられる（註3）。したがって古墳の最も重要な意味は首長権の継承祭祀をとり行うことであり、その型式（イデオロギー）の変化が前方後円墳の変化としてあらわれる。そういう意味からすれば前方後円墳こそが古墳であり、古墳時代を前方後円墳時代として捉えるという指摘（註4）は重要である。

こう考えると普通の高塚形式の円墳や方墳が問題となるが、より墓としての性格が強い古墳と言える。この高塚形式、あるいは殿山古墳群のような墓は前方後円墳出現前から認められる。したがってこれをどこかで区別して、古墳とそれ以前の墓としなければならず、ここでは前方後円墳の出現以後のものを古墳としておく。では古墳以前のものについてはどうかと言えば、これまでこの地方では主に方形台状墓があった。ところが楯築遺跡の調査成果から近藤義郎氏は「墳丘墓」という概念を提起された（註5）。これは第1にはすべてを削り出しによって形成するものとは異なり、主に盛土によって墳丘を築いたものであり、第2にはすでにどこかで前方後円墳（方）が発生していてその影響により成立したものを古墳とよび、在地性を基本的に残すものを墳丘墓としようということである。

この説に従えば殿山古墳群は13号から16号までと21号墳は墳丘墓と称されるものであり、11号から8号墳までが古墳である。前者・後者とも墳丘規模においては大差はないが、前者は墳丘盛土が少なく埋葬施設は浅い。また副葬品は全くないか、あっても鉈か刀子1点である。後者は墳丘盛土が多く埋葬施設は深い。また一定の組合せをもって副葬品が認められる。

第2節 殿山古墳群と地域集団

殿山古墳群は弥生時代後期終末から築造が開始され、ほぼ古墳時代前Ⅲ期初頭まで順次形成されたものである。8号墳から下にはすでに消滅した3基の古墳が所在したものと思われ、8号墳に続く時期と推定される。これも破壊されているが17号墳の位置する所から東に派生した尾根稜線上にも4基程度の古墳が所在したようで、円筒埴輪の検討から6世紀中葉から後半の古墳と推定される。また殿山の南端には鋳物師谷1号墓、2号墓が所在する。1号墓は方形の墳丘を呈し、墳丘内には4基の主体部が検出された。墳頂にあるA主体部からは爬龍鏡（中国製）と玉類が出土している。時期はD主体部出土の土器からオノ町Ⅱ式と考えられ、殿山16号墳にほぼ相当する。2号墓は一号墓の東に位置し、土墳墓や堅穴式石室が一定の墓域内に集まっている。特殊器台も出土しており、時期は鬼川市Ⅲからオノ町Ⅱ式まで認められ、集団墓の様相を呈している。

こうしてみると殿山には弥生時代後期後半の集団墓から、多少の重複はあるが古墳時代前半期まで継続的に墳丘墓および古墳が築造されたことになる。では殿山にこのような墓を形成した集団の集落はどこにあったのであろうか。殿山の南西に三因という所があり、そこには微高地が認められる。この微高地に遺跡が存在するかどうかは確認はされていないが、こうした微高地上に集落が存在したであろうことは考えられる。

このような微高地と弥生時代の墳墓、そして古墳へという関係は一つ殿山にとどまらず、三輪丘陵には最低もう二単位が確認できる。一つは下三輪の微高地と、そのすぐ東丘陵上に所在する柳坪遺跡の関係である。柳坪遺跡は特殊器台が表採されており（註6），方形の墳丘を有すると言うことから、弥生時代終末の墳丘墓の可能性が強い。この墳丘墓はやがて東側の前半期の古墳へと続いてゆく。

もう一つは宮山墳墓群と真壁の微高地との関係である。宮山墳墓群は弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけて形成されたが、集団墓地内には特殊器台を樹立した宮山墳丘墓も築造されている。この墳墓群にも古墳が継続して築造されている。さらに船山からも特殊器台が表採されたと言われており、船山古墳群を中心にもう一単位存在する可能性も考えられる。

かかる三輪丘陵に所在する3ないし4単位の古墳群は、さらに全体としてより大きな地域集団としての結合を深めていたと考えられ、この上位の首長こそ、宮山墳丘墓から天望台古墳、三笠山古墳の被葬者でなかろうか。こう考えると殿山古墳群の築造者は小地域集団の首長、あるいは首長層であると思われるが、そこでは首長権継承儀礼は展開され得ない。むしろ死者靈の鎮魂を目的とした送葬祭祀がとりおこなわれるのではなかろうか。

註

- 註1 近藤義郎、藤沢長治「古墳時代上」『日本の考古学IV』1967年
- 註2 都出比呂志「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究第26巻第3号』1979年
- 註3 近藤義郎「前方後円墳の成立と変遷」『考古学研究第15巻第1号』1968年
近藤義郎「前方後円墳の成立」『考古論集』1977年
- 註4 近藤義郎、今井堯「前方後円墳の時代について」『考古学研究第19巻第1号』1972年
- 註5 近藤義郎「古墳以前の墳丘墓」『岡山大学法文学部学術紀要37』1977年
- 註6 高橋護氏により表採されたもので、同氏より御教示を得た。
- 註7 石野博信、関川尚功『纏向』1976年

表9 殿山古墳群調査結果一覧表

古墳番号	墳形	規模(m)	外部施設	埋葬施設			鏡	武器			工具		玉類		主体部以外の遺物	
				主番	体番	棺		刀	劍	箭	刀子	鎌	鉈	勾玉	管玉	
8号墳	方形	東西12 南北13	周溝			箱式木棺?	長約2m 幅約40cm			1		3 (内2? は?)	1	14	25	周溝…土師器の壺 铸造鉄斧1
9号墳	方形	東西12 南北14	周溝	第1主体	箱式木棺	長幅60cm	1		1		2				28	1
				第2主体	箱式石棺	長幅40cm		1	1	1						周溝…土器片
10号墳	方形	東西13 南北15	周溝	第1主体	箱式木棺	長幅60cm	1	1			1		1	2		墳端…土器片
				第2主体	小空穴式石室	長幅40cm								1		
				第3主体	箱式木棺?	長幅50cm										
11号墳	方形	東西13 南北15	周溝 列石	第1主体	箱式木棺	長幅60cm										周溝…土器片
				第2主体	豎穴式石室	長幅28cm								1		
				第3主体	箱式石棺	長幅35cm							2			
				第4主体	箱式木棺	長幅3.13m 60m	1	1	1			2	18	4		
12号墳	方形	一辺13	周溝	流失	木棺?				1			1				墳丘…土師器片
13号墳	円形	東西12 南北15	周溝	第1主体	箱式木棺	長幅84cm						1				周溝…土器片
				第2主体	箱式木棺	長幅54cm										
14号墳	方形	東西13 南北12.5	周溝	第1主体	箱式木棺	長幅68cm										
				第2主体	箱式木棺?	長幅63cm										
15号墳	方形	一辺12	周溝	第1主体	箱式木棺	長幅84cm										墳丘…土器片
				第2主体	箱式木棺	長幅62cm										
16号墳	方形	東西9.5 南北9	周溝	流失												墳丘…土器片
21号墳	方形	東西? 南北11	周溝	第1主体	箱式石棺	長幅44cm										周溝…土器片
				第2主体	箱式木棺?	長幅50cm										

付載 1

殿山古墳群出土人骨について

川中健二（岡山理科大学人類学教室）

I 9号墳第2主体部人骨

保 存 状 態

頭蓋骨：顔面部、頭蓋底および後頭部は比較的よく保存されているが、頭蓋冠の保存状態はよくない。左頭頂骨の前頭縁、側頭縁、頭頂結節に囲まれた部分、および右頭頂骨の頭頂結節を中心とした矢状縁から鱗縁にかけての部分が欠損している。また残存している前頭骨と右頭頂骨の一部でも、外板が割れ、はがれかけている。下頸骨は左右の下頸角と右下頸頭を欠くだけで、他はよく保存されている。顔面部に淡く赤色顔料が付着している。

胸骨：椎骨は頸椎6、胸椎7、腰椎5が残っている。仙骨はほぼ完全な姿を保っており、その下端に第6仙椎が認められる。肋骨はすべて破片になっており、胸骨はない。

上腕骨：左鎖骨は胸骨端を欠き、右鎖骨は肩峰端を欠いている。肩甲骨は左右とも外角の部分だけが残っている。上腕骨は左右とも近位端を欠く骨体の上部 $\frac{1}{2}$ が残っている。前腕の骨では右の橈骨と尺骨のみが残存しているが、その橈骨は遠位端を、尺骨は茎状突起を欠いている。手骨はない。

下肢骨：左寛骨は上前腸骨棘と下後腸骨棘を結ぶ線から上の腸骨を欠き、右寛骨は腸骨の後部と仙骨盤面の後半を欠いている。左大腿骨は近位端では頭の後面と大、小転子を欠き、遠位端では内外両側顆の後半を欠いている。またその骨体は中央部で二分し、後面が欠けているが、復元は可能である。右大腿骨は大転子と遠位端を欠いている。左脛骨は外側顆と遠位端を、右脛骨は遠近両位端を欠いている。左腓骨は骨体だけが残り、右腓骨はない。膝蓋骨と足骨もない。

性・年令の推定

寛骨や下頸骨の形状は、本資料が男性であることを明らかに示している。頭蓋冠の保存状態が悪く、縫合の癒着の進行程度は不明であるが、歯の咬耗の程度は弱いので、壮年と推定することができる。

計測的、非計測的特徴（表10、11、図版67—1～3）

脳頭蓋：長幅示数は中頭形、長高示数と幅高示数はともに高頭型に属する。特記すべき非計測的特徴はない。

顔面頭蓋：コルマン顔面示数とコルマン上顔面示数は低型、ウイルヒョー上顔面示数は過低

型である。眼窓示数は左が低型、右が中型で、鼻示数は低型に属する。上顎歯槽示数は中型、口蓋示数は広型、全側面角と歯槽側面角はともに突頸型である。左眼窓の上に眼窓上縁孔がある。

下顎骨と歯：下顎体は中程度の大きさであるが、下顎枝の部分がやや大型である。咬合は鉗状咬合である。上顎右第1大臼歯と下顎右第2大臼歯にムシ歯があり、前者は歯根を残すだけである。上顎右第3大臼歯が歯槽突起の外側（頬側）に向って崩出を開始しているが、他の第3大臼歯は未崩出である。

四肢骨：大腿骨上骨体断面示数は左が広型、右が超広型で、脛示数は正脛である。左大腿骨最大長からピアソン式を用いて算出した推定身長は159.5cmである。

II 21号墳第1主体部第1号人骨

保存状態

頭蓋骨：全体に保存状態はよく、大後頭孔後縁、左後頭頸の一部、左右の下顎角、左下顎枝後縁と左下顎頭を欠くだけである。上顎右第2小臼歯、上顎左右第1・2大臼歯が歯槽から脱落し粉失している。下顎左第1・2大臼歯、右第2大臼歯の歯槽は閉鎖している。

赤色顔料が、冠状縫合のやや後方から下顎骨前面にいたる顔面と、眼窓下壁に濃く付着している。

胸骨：椎骨は頸椎7、胸椎11、腰椎4が残り、仙骨は上半分が残っている。肋骨は左が10本、右が11本残っているが、その多くは破片になっている。胸骨は体の下半を欠いている。

上肢骨：左右鎖骨はほぼ完全であるが、肩甲骨は左右とも上縁、外角、外側縁が残っているだけである。上腕骨は左の頭の後面と遠位端を欠いているが、右は完全である。右橈骨は茎状突起だけを、右尺骨は近位端を欠いている。しかし、左尺骨はなく、左橈骨は遠位端だけが残っている。手骨はない。

下肢骨：左寛骨は腸骨上半、右寛骨は腸骨後端だけを欠き、他はよく保存されている。大腿骨は左右とも遠位端を欠いている。左脛骨は栄養孔より下方の骨体だけが残存し、右脛骨は両位端を欠いている。腓骨と膝蓋骨はなく、足骨では左右の踵骨、左立方骨、左第1中足骨、右第5中足骨が残在している。

性、年令の推定

寛骨や頭蓋骨の形状から、本質料は女性である可能性が強いと考えられる。頭骨の三主要縫合の癒合は進行してはいないが、歯の咬耗はやや進行し、下顎骨に歯槽の閉鎖が認められる。また胸椎と腰椎の椎体前縁に軽度の骨増殖がおこっている。したがって壮年後年から熟年前半にかけての年代だと推定することができる。

計測的、非計測的特徴（表10. 11, 図版68—1～4）

脳頭蓋：長幅示数は中頭型、長高示数と幅高示数は高頭型に属する。左右の頭頂孔と左頸管が欠如している。蝶前頭縫合の部分の右側に1コ、左側に2コの縫合骨があり、後頭骨と右頭頂骨の間にも1コの縫合骨がある。

顔面頭蓋：コルマン顔面示数、コルマン上顔面示数、ウイルヒヨー上顔面示数、鼻示数はいずれも低型で、眼窩示数は中型、上顎歯槽示数と口蓋示数はともに広型である。全側面角と歯槽側面角は突顎型で、歯槽性突顎の程度が強い、右眼窩の上に眼窩上縁孔がある。

下顎骨と歯：下顎骨は中程度の大きさである。下顎右第1大臼歯にムシ歯があり、近心側の歯根だけが残っている。咬合は鉗子状咬合である。

四肢骨と胴骨：大腿骨上骨体断面示数は左が超広型、右が広型で、脛示数（左）は平脛である。右肋骨の1本に、骨折後に治癒した痕が認められるが、この肋骨は破片になっているため部位は不明である（図版68—4）。

III 21号墳第1主体部第2号人骨

保 存 状 態

頭蓋骨：後頭鱗の大半と、左頭頂骨の頭頂結節より後から後頭縁までの部分、右乳様突起、左側頭骨頬骨突起を欠いているが、頭頂部と顔面部の保存状態はよい。下顎骨では左右の下顎角と下顎頭を含む下顎枝後顎が欠損している。上顎左第2大臼歯、右第2小臼歯、右第1、2大臼歯の歯槽が閉鎖している。

本資料の頭蓋骨には、赤色顔料の付着はまったく認められず、第1号人骨のそれに濃く付着しているとの対照的である。

胴骨：椎骨は胸椎9、腰椎4が残存し、仙骨は前面だけが残っている。肋骨と胸骨はすべて破片になっている。

上肢骨：左鎖骨は両端を、右鎖骨は肩峰端を欠いている。肩甲骨は左右とも外角の部分だけが残っている。左上腕骨は近位端を、右上腕骨は三角筋粗面より上の部分を欠き、前腕の骨では、右橈骨と右尺骨の下部をが残存しているだけである。手骨はない。

下肢骨：左寛骨は腸骨の上後部と坐骨結節を欠き、右寛骨は腸骨の上部を欠いている。左大腿骨は頭と頸の前面、大転子、内外両側頸の一部を欠き、右大腿骨は頭、大転子、外側頸のそれぞれ一部を欠くだけで、保存状態はよい。左膝蓋骨は膝蓋骨尖の後面を欠くだけであるが、右膝蓋骨はない、左脛骨は内側頸後面と外側頸および遠位端外側部を欠くが、右脛骨は全長にわたってよく保存されている。左腓骨は遠近両位端が欠けているが、右腓骨は完全である。足骨では右舟状骨と3本の中足骨が残存している。

性、年令の推定

寛骨の形状は本資料が女性であることを明らかに示している。上顎の臼歯部の歯槽は閉鎖しているが、歯の咬耗の程度は強く、頭骨の三主要縫合の癒合も進行していないので、壮年と推定することができる。

計測的、非計測的特徴（表10、11、図版69—1～4）

脳頭蓋：長幅示数は短頭型に近い中頭型で、長高示数は高頭型、幅高示数は中頭型に属する。前頭縫合が、前頭鼻骨縫合から冠状縫合にいたるまで、明瞭に認められ、左頭頂孔が欠如している。

顔面頭蓋：コルマン顔面示数は中型、コルマン上顔面示数とウイルヒョー上顔面示数はともに低型である。眼窩示数は高型、鼻示数は低型、上顎歯槽示数は中型に属する。全側面角は中頭型で、歯槽側面角は突頭型である。顔面頭蓋には特記すべき非計測的特徴はない。

下顎槽と歯：下顎骨は中程度の大きさである。咬合は鉗子状咬合で、上顎右第1大臼歯にムシ歯がある。

四肢骨：大腿骨上骨体断面示数は超広型、脛示数は正脛に属する。左上腕骨骨体の遠位端に近い部分に、骨折後に治癒した痕がある（図版69—4）。大腿骨最大長からピアソン式を用いて算出した推定身長は144.2cmである。

本資料を調査する機会を与えていただいた岡山県教育庁平井勝氏と、資料の計測、観察に当って御教示いただいた京都大学池田次郎教授に感謝の意を表したい。

表10 頭蓋骨計測値および示数

	男性		女性			男性		女性	
	9号墳	21号墳 1号人骨	9号墳	21号墳 2号人骨		9号墳	21号墳 1号人骨	9号墳	21号墳 2号人骨
1 最大長	177	173	178	—	46 中顎幅	104	96	96	—
2a ナジオン・イニオン長	162	162	—	—	47 顎高	111	111	111	—
3 グラベロ・ラムダ長	174	169	(178)	—	48 上顎高	62	64	64	—
5 頭骨底長	101	95	96	—	49 後眼窩間幅	22	21	25	—
7 大後頭孔長	31	—	—	—	50 前眼窩間幅	17	15	20	—
8 最大幅	(137)	135	142	—	F 鼻根横弧長	20	16	22	—
9 最小前頭幅	(88)	87	99	—	51 眼窩幅	左 40	41	39	—
10 最大前頭幅	(111)	110	124	—	右 40	42	39	—	—
11両耳幅	121	127	122	—	52 眼窩高	左 30	32	32	—
12 最大後頭幅	100	102	(110)	—	右 32	33	32	—	—
13 乳突幅	94	103	—	—	54 鼻幅	24	27	25	—
17 バジオン・ブレグマ高	141	136	135	—	55 鼻高	46	50	46	—
20 耳ブレグマ高	117	110	118	—	57 鼻骨最小幅	6	6	9	—
22 カロッテ高	112	105	—	—	57(1) 鼻骨最大幅	—	—	17	—
23 頭骨水平周	507	495	518	—	60 上頸齒槽長	56	49	54	—
24 横弧長	312	298	330	—	61 上頸齒槽幅	63	60	57	—
25 正中矢状弧長	374	(357)	—	—	62 口蓋長	48	45	44	—
26 正中矢状前頭弧長	131	121	130	—	63 口蓋幅	41	41	—	—
27 正中矢状頭頂弧長	130	123	(133)	—	64 口蓋高	14	10	—	—
28 正中矢状後頭弧長	111	(113)	—	—	68(1) 下頸骨長	78	76	—	—
28(1) 正中矢状上鱗弧長	71	73	—	—	69 オトガイ高	30	30	29	—
29 正中矢状前頭弦長	112	108	113	—	69(3) 下頸体厚	15	13	13	—
30 正中矢状頭頂弦長	118	111	(118)	—	70 下頸枝高	右 —	(53)	—	—
31 正中矢状後頭弦長	93	(93)	—	—	71 下頸枝幅	左 41	(37)	—	—
31(1) 正中矢状上鱗弦長	67	69	—	—	右 39	36	—	—	—
32(1) 前頭頸斜角	52	50	53	—	70a 下頸頭高	58	51	48	—
32(5) 前頸弯曲角	125	135	128	—	72 全側面角	75	79	81	—
33(1) ムラダ・イニオン角	100	96	—	—	73 鼻側面角	77	86	85	—
33(4) 後頭頸弯曲角	119	—	—	—	74 齒槽側面角	69	54	71	—
34 大後頭孔傾斜角	0	—	—	—	79 下頸枝角	130	126	—	—
8/1 長幅示数	(77.4)	78.0	79.8	—	Vertex Rad. (VRR)	(122)	118	130	—
17/1 長高示数	79.7	78.0	75.8	—	Nasion Rad. (NAR)	89	84	90	—
17/8 幅高示数	102.9	100.0	95.1	—	Subsq. Rap. (SSR)	96	88	92	—
20/1 長耳ブレグマ高示数	66.1	63.6	66.3	—	Prosth. Rad. (PRR)	102	94	98	—
20/8 幅耳ブレグマ高示数	85.4	81.5	83.1	—	—	—	—	—	—
22/2a 穹頂示数	69.1	64.8	—	47/45 コルマン顔面示数	82.8	82.2	(86.0)	—	—
9/10 横前頭示数	(79.3)	79.1	79.8	—	47/46 ウイルヒヨー顔面示数	106.7	115.6	115.6	—
9/8 横前頭頭頂示数	(64.2)	64.4	69.7	—	48/45 コルマン上顔面示数	46.3	47.4	(49.5)	—
27/26 矢状前頭頭頂示数	99.2	101.7	(102.3)	—	48/46 ウイルヒヨー上顔面示数	59.6	66.7	66.7	—
29/26 矢状前頭示数	85.5	89.3	(85.0)	—	52/51 眼窩示数	左 75.0	78.0	82.1	—
30/27 矢状頭頂示数	90.8	90.2	(88.7)	—	右 80.0	78.6	82.1	—	—
31/28 矢状後頭示数	83.8	(82.3)	—	—	50/44 前眼窩間示数	17.9	15.8	21.5	—
31(1)/28(1) 矢状上鱗示数	94.4	94.5	—	—	54/55 鼻示数	52.2	54.0	54.3	—
28/26 矢状前頭後頭示数	84.7	(93.4)	—	—	61/60 上頸齒槽示数	112.5	122.4	105.6	—
28/27 矢状頭頂後頭示数	85.4	(91.9)	—	—	63/62 口蓋示数	86.4	91.1	—	—
40 顎長	102	91	98	—	71/70 下頸枝示数	右 —	(67.9)	—	—
42 下顎長	117	101	103	—	45/8 橫頭顎示数	(97.8)	100.0	90.8	—
43 上顎幅	100	101	102	—	9/43 前頭両眼窩示数	(88.0)	86.1	97.1	—
44 両眼窩幅	95	95	93	—	9/45 頬前頭示数	(65.7)	64.4	(76.7)	—
45 頬骨弓幅	134	135	(129)	—	57/57(1) 橫鼻骨示数	—	—	52.9	—
				—	50/F 鼻根弯曲示数	86.0	93.8	90.9	—

表11 四肢骨計測値および示数

	男性				女性				男性				女性			
	9号填 左 右		21号填 1号人骨 左 右		21号填 2号人骨 左 右				9号填 左 右		21号填 1号人骨 左 右		21号填 2号人骨 左 右			
	頭骨								頭矢状径	(26)	25	23	24	—	22	
1 最大長	—	—	138	135	—	—	17	頸周	—	94	91	88	—	80		
6 中央周	—	—	32	30	—	—	18	頭垂直径	44	45	41	40	—	37		
6/1 長厚示数	—	—	23.2	22.2	—	—	19	頭横・矢状径	43	44	41	41	—	—		
肩甲骨							20	頭周	139	140	131	129	—	—		
12 関節窩長	37	(34)	35	37	30	—	21	上頸幅	—	—	—	—	—	67		
13 関節窩幅	28	27	23	23	23	—	23	外頸最大長	—	—	—	—	—	53		
13/12 関節窩長幅示数	75.7	(79.4)	65.7	62.2	76.7	—	24	内頸最大長	—	—	—	—	—	53		
上腕骨							25	外頸後高	—	—	—	—	—	32		
1 最大長	—	—	—	306	—	—	26	内頸後高	—	—	—	—	35	35		
2 生理長	—	—	—	300	—	—	27	骨体彎曲	—	—	7	7	6	7		
3 上端幅	—	—	—	42	—	—	28	捻軸角	—	—	—	—	—	38		
4 下端幅	—	—	—	51	—	48	29	頭骨体角	145	136	136	125	132	125		
5 中央最大幅	—	—	(19)	19	(19)	—	30	頸骨体角	96	—	—	—	—	103		
6 中央最小幅	—	—	(13)	14	(15)	—	8/1	8/2	長厚示数	—	—	—	—	(19.3)	19.0	
7 骨体最小周	—	—	52	53	53	52	6/7	中央断面示数	—	(116.0)	—	—	95.7	100.0		
7a 中央周	—	—	52	54	58	—	6+7/2	頸丈示数	—	—	—	—	(12.5)	12.3		
8 頭周	—	—	—	118	—	—	10/9	上骨体断面示数	78.7	73.5	69.7	80.0	73.3	64.5		
9 頭最大横径	—	—	—	36	—	—	7/21	上頸体示数	—	—	—	—	—	32.8		
10 頭最大矢状径	—	—	40	39	—	—	16/15	頸断面示数	(78.6)	78.1	74.2	80.0	—	81.5		
16 頸骨体角	—	—	—	80	—	78	19/18	頭断面示数	97.8	97.8	100.0	102.5	—	—		
17 頸骨体角	—	—	—	36	—	—	27/22	弯曲示数	—	—	2.4	2.4	2.4	2.6		
18 捻軸	—	—	—	162	—	—										
6/5 骨体断面示数	—	—	(68.4)	73.7	(78.9)	—										
7/1 長厚示数	—	—	—	17.3	—	—										
7a/1	—	—	—	17.6	—	—										
9/10 頸断面示数	—	—	—	92.3	—	—										
桡骨																
1 最大長	—	—	—	(224)	—	—			1 最大高	—	—	—	—	34	—	
2 生理長	—	—	—	215	—	—			2 最大幅	—	—	—	—	36	—	
3 最小周	—	41	—	33	—	—			3 最大厚	—	—	—	—	20	—	
4 骨体横径	—	16	—	15	—	—			1/2 高幅示数	—	—	—	94.4	—		
4a 中央横径	—	—	—	12	—	—										
5 骨体矢状径	—	10	—	10	—	—			脛骨							
5a 中央矢状径	—	—	—	10	—	—			1 全長	—	—	—	—	291		
5(3) 頭周	—	—	—	64	—	—			1a 最大長	—	—	—	—	294	293	
5(5) 中央周	—	—	—	36	—	—			2 頸距離長	—	—	—	—	272	272	
7 頸骨体角	—	—	—	169	—	—			3 最大上端幅	—	—	—	—	65		
3/2 長厚示数	—	—	—	15.3	—	—			4a 上内関節面深	—	—	—	—	40		
5(6)/1	—	—	—	(16.1)	—	—			4b 上外関節面深	—	—	—	—	35		
5/4 骨体断面示数	—	62.5	—	66.7	—	—			6 最大下端幅	—	—	—	—	42		
尺骨									7 下端矢状径	—	—	—	—	30		
3 最小周	—	36	—	28	—	—			8 中央最大径	—	—	—	—	24	23	
11 前後径	—	(12)	—	10	—	—			8a 栄養孔部最大径	32	31	—	28	26	27	
12 横径	—	(17)	—	15	—	—			9 中央横径	—	—	—	—	17	18	
11/12 骨体断面示数	—	(70.6)	—	66.7	—	—			9a 栄養孔部横径	25	26	—	14	20	21	
大脛骨									10 骨体周	—	—	—	—	67	65	
1 最大長	(416)	—	—	—	(367)	368			10b 最小周	72	—	—	—	62	61	
2 自然長	(414)	—	—	—	(360)	359			12 後傾角	—	—	—	—	111		
4 自然位軸子長	—	—	—	—	—	340			14 捻軸	—	—	—	—	+36		
6 中央矢状径	—	(29)	—	—	22	22			9a/ba 脛示数	78.1	83.9	—	50.0	76.9	77.8	
7 中央横径	—	(25)	—	—	23	22			9/8 中央断面示数	—	—	—	—	20.8	20.3	
8 中央周	—	(83)	—	—	71	70			10/1a 長厚示数	—	—	—	—	22.8	22.2	
9 骨体上横径	33	34	33	30	30	31			腓骨							
10 骨体上矢状径	26	25	23	24	22	20			1 全長	—	—	—	—	287		
13 上端幅	108	105	98	91	—	80			2 中央最大径	—	—	—	—	14		
14 前頸・頭長	67	71	71	73	—	51			3 中央最小径	—	—	—	—	9		
15 頸垂直径	33	32	31	30	27	27			4 中央周	—	—	—	—	39		
									4(l) 上端幅	—	—	—	—	26		
									3/2 中央断面示数	—	—	—	—	64.3		
									4/1 長厚示数	—	—	—	—	13.6		

付載 2

殿山東尾根表採の埴輪について

I はじめに

殿山古墳群発掘調査中の昭和55年7月、土取り計画区域内の一部ブルドーザーが削平した地点から、偶然にも多量の埴輪片が採集された。

採集地点は、殿山古墳群17号墳の位置するところから東に派生する小さな尾根上で、殿山遺跡の北側にあたる所である。既に土地削平のことなので、その埴輪が本来樹立されていたであろう古墳の位置・規模、さらに内部主体等についての詳細は一切不明である。ただ、埴輪の存在により、その古墳の築造された時期についての言及は可能である。以下、この採集した埴輪を観察したうえで、さらに若干の検討を加え、この古墳の位置づけを行ってみたい。

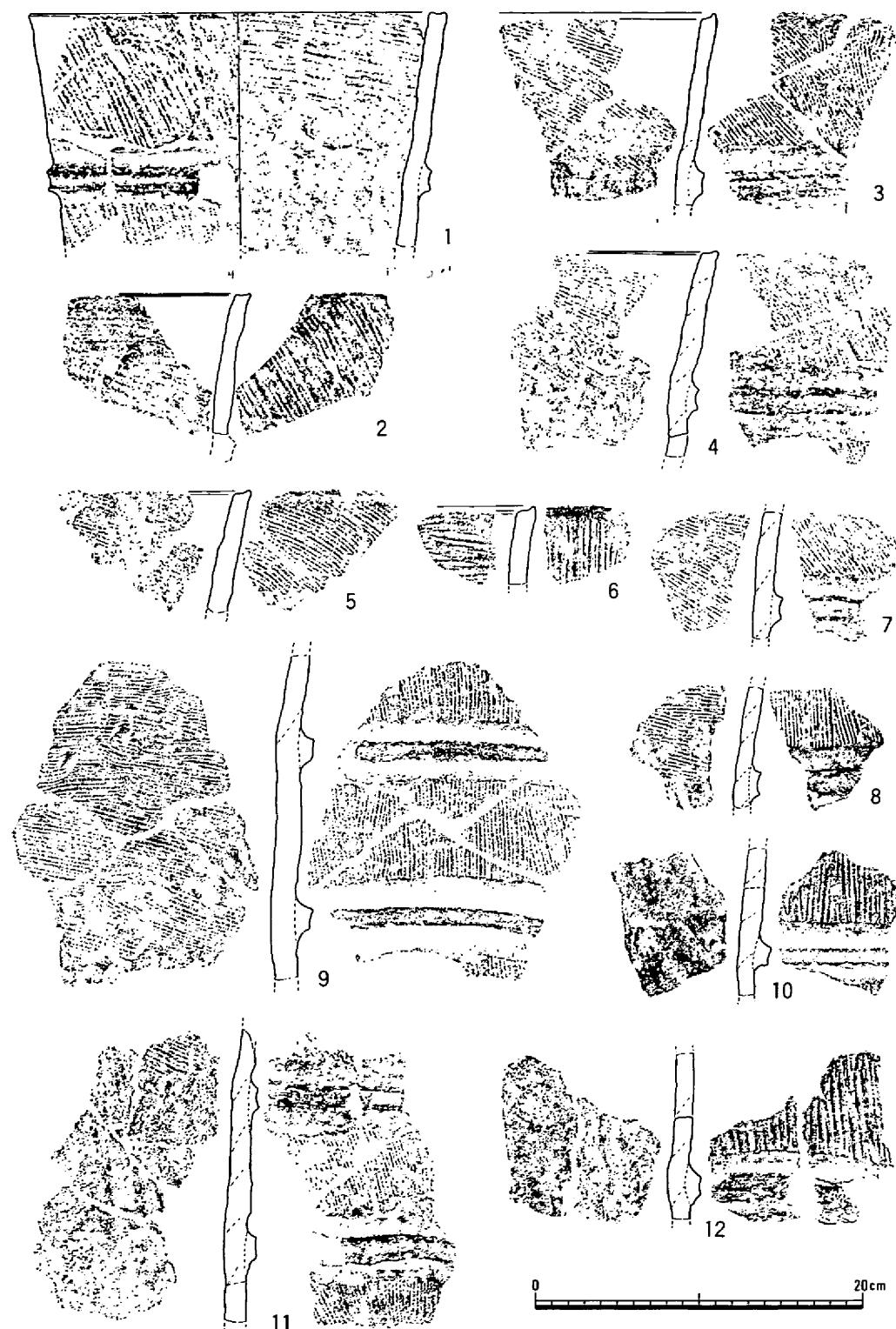
II 遺物

採集された遺物は、すべて埴輪である。埴輪には、円筒形埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪等の器種が認められた。

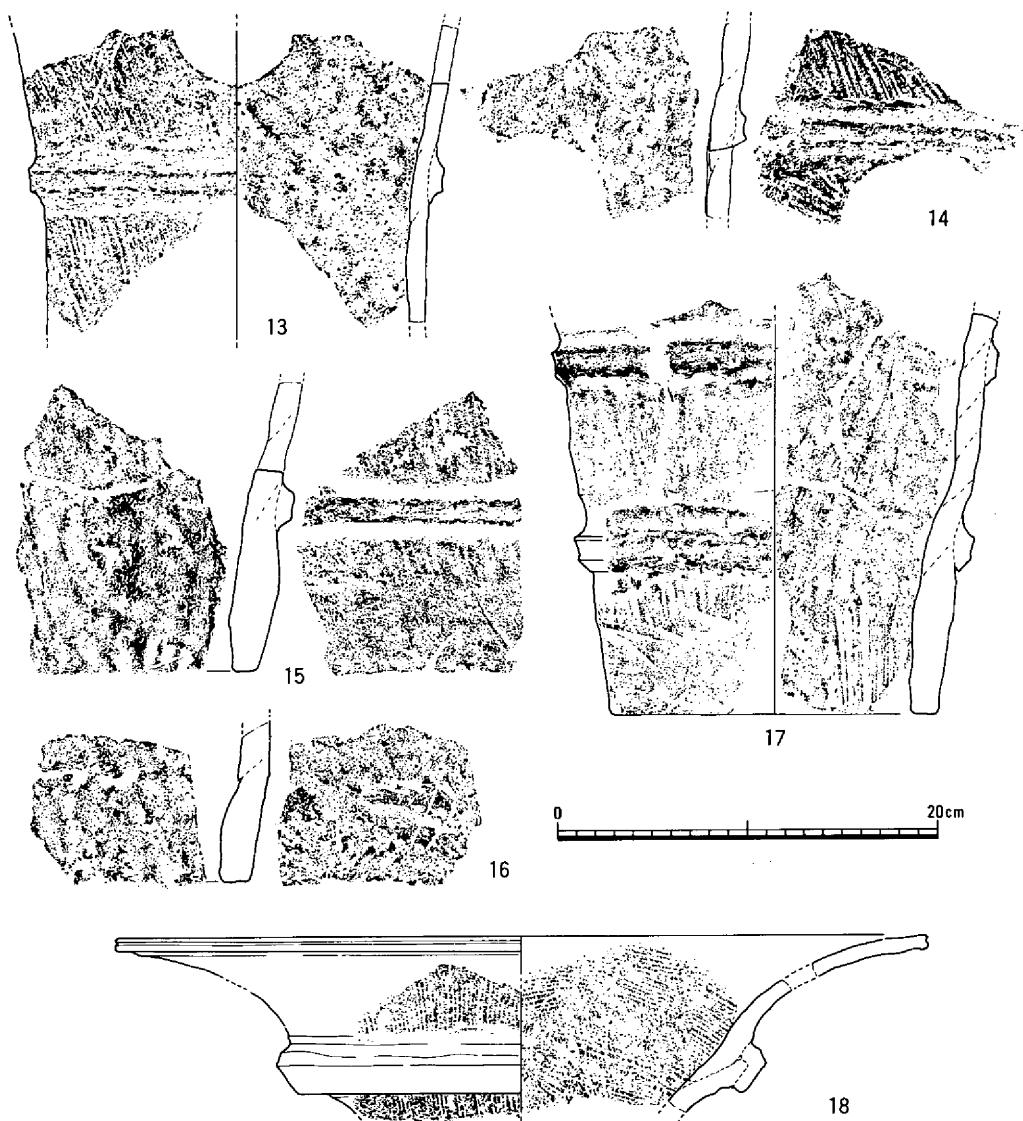
円筒形埴輪は、そのいずれもが口径25cm、底径20cm前後の小型品である。

(1)は、胴部から口縁部にかけて外に直線的に開くものである。口径25cm、口縁部高約10cmを測る。口縁端部は、上面がほぼ平坦につくられる。外面には、斜、もしくは縦方向の刷毛目が下から上方へと施される。さらに、タガ貼付・調整後には、口縁部外面にヘラ先による「○」印が描かれる。タガの調整は、指頭による左方向の横ナデにより行われる。外面に施された刷毛目は、その条線幅が太く荒い。内面の調整は、口縁部が斜方向の刷毛目で、胴部が指頭による下から上へのナデ上げである。

(2)は、(1)の内・外面調整に類似する。(3)～(5)・(7)は、(1)・(2)の刷毛目が条線幅の太いものであったのに対して、比較的条線幅の細いものである。(3)・(4)の口縁部外面には、「×」印のヘラ記号が描かれる。口縁部高は、(3)が9cm、(4)が8cmを測る。内面の刷毛目は、口縁部にのみ斜方向のものが施される。タガは突出度の低い幅の広いものであるが、稜線はシャープである。(6)は、前述のものより、さらに刷毛目の条線幅が広く、器壁も厚い。刷毛目の方向は、外側が縦で、内面が横である。(7)・(8)は、(3)～(5)の調整に類似する。ただ、(7)の外面に施された刷毛目調整には、下からのものと上からの行為の二者が認められる。内面の刷毛目調整は、口縁部のみで胴部は縦方向にナデられている。(9)は、胴部から口縁部にかけての部分である。口縁端部は、欠損する。外面は、粘土紐巻き上げ後、外面第1次調整の縦方向の刷毛目行為によ



第104図 殿山東尾根採集の埴輪実測図(1)



第105図 殿山東尾根採集の埴輪実測図(2)

り調整される。行為は、下から上向に行われる。その後、比較的突出度の高いタガが貼付される。その際の調整は、向って左方向の横ナデによる。内面は、ほぼ全面横方向の刷毛目調整により仕上げられる。(10)は、胸部である。外面の縦刷毛目は、(6)に酷似する。タガは、比較的長く突出する。内面は、斜・もしくは縦方向のナデにより仕上げられている。(11)は、(9)と同じく胸部から口縁部にかけてのものである。外面は、縦刷毛目調整後、幅広く突出度の低いタガが貼付・調整される。その稜線は、(3)・(4)・(7)・(8)同様にシャープである。内面は、口縁部の斜

方向の刷毛目調整以外はすべて縦方向のナデにより調整される。(12)は、(6)・(10)に酷似する。タガは、(10)より大きめである。(13)は、内・外面ともに器表が剥落している。しかし、わずかに外面に第1次調整の縦刷毛目痕が認められる。刷毛目は、比較的条線幅の広いもので、(1)・(2)に酷似する。(14)は、外面縦刷毛調整後、タガが貼付・調整される。その後、円形の透窓が穿孔される。内面は、主に上・下方向のナデにより調整される。(15)～(17)は、基底部、もしくは基底部から胸部にかけての部分である。基底部外面は、外面縦刷毛調整後、板状工具により押圧され器壁の調整がなされている。内面は、指頭により押圧調整される。基底部の端部から胸部にかけては、下から上方向のナデにより仕上げられている。(17)の外面第1次調整の縦刷毛目は、比較的条線幅の太いものである。刷毛目調整後、タガが貼付されるが、最下段のものは二段目のものに比べて突出度が高い。基底部外面の板状工具による押圧は、その次の工程である。内面は、底部端が指頭による押えで、胸部以上は同じく指頭による下から上方向へのナデ等で調整・仕上げられる。

朝顔形埴輪(18)は、頸部以下を欠損するが、上方には大きく外反する口縁部を有するものである。頸部と口縁部との境外面には、タガが幅広く貼付されている。タガの貼付は、頸部外面に縦方向の刷毛目を施し、さらに口縁部が接合された後に行われる。口縁部外面の刷毛目は、タガ貼付後の行為で縦方向に施される。口縁部内面の刷毛目は、斜方向のものである。その行為は、口縁部外面の刷毛目調整に並行する。

形象埴輪は、小破片で判然としないため割愛したが、おそらく家形埴輪の屋根の一部分と考えられるものである。

III 結 語

以上、個々の埴輪について説明を行ってみた。その結果、これらの埴輪には、内・外面の成形。調整痕等に4種類程の差異が認められた。これを仮に、a・b・c・dと4分類し、さらにこれに若干の説明を加えてみよう。

a類 (1・2・13・14・15・17)

概して刷毛目の条線幅が広いものである。内面の刷毛目は、横・もしくは斜方向のもので、主に口縁部上半に施される。タガは、幅が広くて突出度の低いものである。

b類 (3・4・5・7・8・11)

a類の刷毛目に比べて条線幅が狭い。刷毛目の方向は、内・外面ともに斜である。内面の刷毛目行為は、口縁部に限られる。タガは、a類のものに類似する。しかし、端部のつくりは、a類に比べよりシャープである。

c類 (6・10・12)

内・外面ともにa類以上に条線幅の広い刷毛目を有する。タガは、次のb類に似て比較的長く外に突出する。

d類（9）

刷毛目の条線幅は、b類に類似する。施文方向は、縦である。内面の刷毛目調整は、a～c類のものが口縁部のみに限られていたのに対してd類のそれは胴部にまで及んでいる。タガは、突出度が高く、概して強固に貼付される。

以上、簡単に分類整理してみた。しかし、結局これらには、時期差を想定しなければならない程の差異は認められなかった。むしろ、ここでの差異は、同時期の複数工人による技術差と考えたい。つまり、この資料にみる限りでは、古墳に埴輪を樹立させるためにその埴輪作成に最低4名の工人の存在が推定されるのである。

次に、この埴輪の時期であるが、一体いつ頃のものであろうか。今日、円筒形埴輪の時期判断の手がかりとして、埴輪の形状はもちろんとして黒斑の有無・透窓の形状・刷毛目の施文状況等があげられる。そして、その中でも最も普遍的にみられ、最も型式差を反映するのが刷毛目である。したがって、ここでは、幾多の要素の中から刷毛目の施文状況を例示して論を進めてみよう。刷毛目には、縦と横方向のものがあり、これは製作時期の早晚によっては縦のみであったり、最初縦で後横のものが施されたりする。傾向としては、5世紀前半頃までは基底部から口縁部にかけて外面第1次調整（縦）の後、タガ貼付後の外面第2次調整として横刷毛目が施されていた。ところが、5世紀前半頃須恵器が日本で初めて生産を開始する頃を境に外面第2次調整の横刷毛目が基底部からしだいに省略されはじめめる。そして、ついに6世紀前半以降の円筒形埴輪外面には、横方向の刷毛目が全くみられなくなるのである。当該資料がそのうちでも後者の範中に属することはいうまでもない。さらに、この6世紀以降の埴輪について県下全域を対象に、より詳細にみていくと、6世紀前半から後半の間には、大きく二通りのものが認められる。それは、口縁部の高さが10cm以上のものと、10cm以下のものである。しかも、総じて前者には後者より古い須恵器が、後者には前者より新しい須恵器が伴うことが認められる。この点に着目すれば、口縁部の高さにも1つの時期判断の指標が与えられてしかるべきであろう。これにしたがうならば、当該資料はいずれも口縁部高が10cm大きく越えないことから、当然後者への位置づけが可能である。ちなみに、ここで10cmに満たない口縁部高の円筒形埴輪を有する古墳の具体例を県下に限って提示するならば、備中の半俵3号墳（註1）。備前の便木山7号墳（註2）。岩田1号墳（註3）・弥上古墳・美作の美和山4号墳（註4）等があげられる。弥上古墳・美和山4号墳を除いては、須恵器との共存関係が比較的明瞭である。伴出する須恵器は、いずれもがII型式第3段階（註5）のものを上限とする。したがって、殿山採集の埴輪の時期は、6世紀後半頃に比定でき、ひいてはかつて存在したであろう古墳の築

造時期もちょうどその頃に位置づけが可能である。すると、この古墳は、近接する三輪山第6号墳（註6）に若干後出するものと考えて差支えなかろう。

註

- 註1 藤田憲司・小野一臣・間壁蘿子「半伎古墳群3号」『倉敷考古館研究集報』第10号 1974年11月
- 註2 岡山県教育委員会「便木山7号墳」「門前池遺跡」 1975年
- 註3 山陽町教育委員会「岩田第1号墳」「岩田古墳群」 1976年3月
- 註4 岡山県教育委員会「二宮遺跡発掘調査報告」 1978年9月
- 註5 中村 浩「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」「陶邑」Ⅲ 大阪府教育委員会 1978年
- 註6 西川 宏「備中三輪山第6号墳」「古代吉備」第5集 1963年



殿山遺跡・殿山古墳群全景（南から）

図版 2



1. 三輪丘陵遠景（西から）



2. 三輪丘陵遠景（南から）



1. 殿山遺跡・殿山古墳群遠景（東から）



2. 殿山遺跡近景（東から）

図版 4



1. 殿山遺跡調査風景（北から）



2. 殿山遺跡全景（北から）

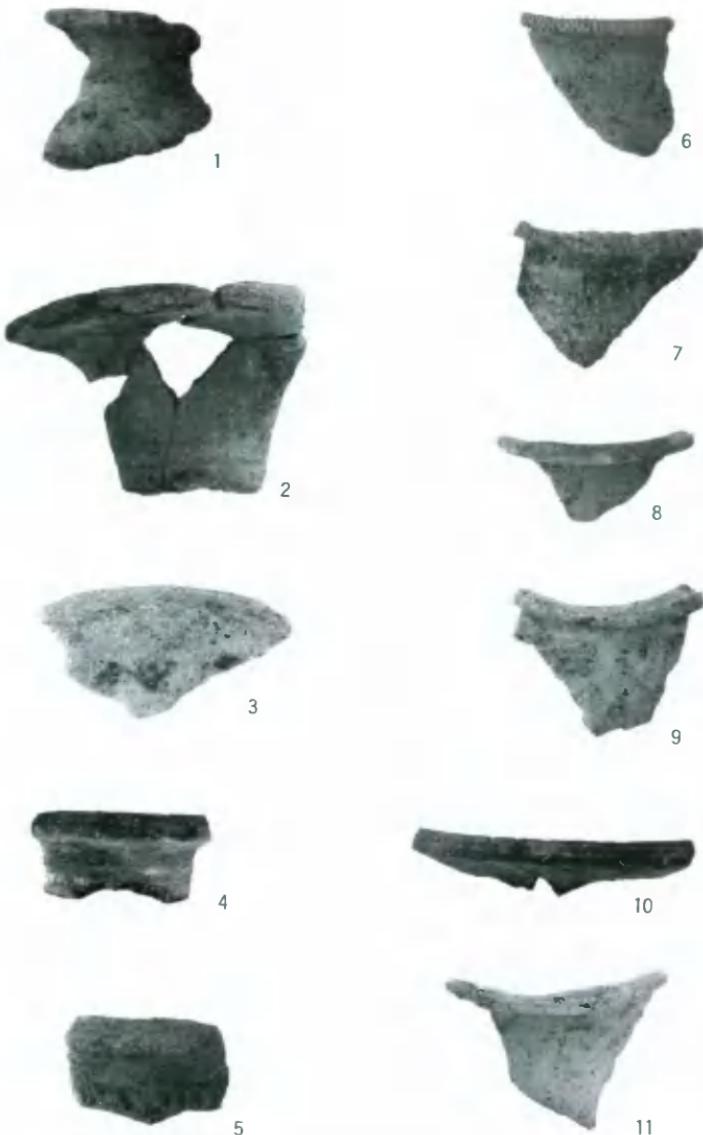


1. 1号住居址（南から）



2. 1号住居址（南西から）

図版 6



1号住居址出土の土器（1）

図版 7



12



14



13



21



23



25



22



24



26

1号住居址出土の土器(2)

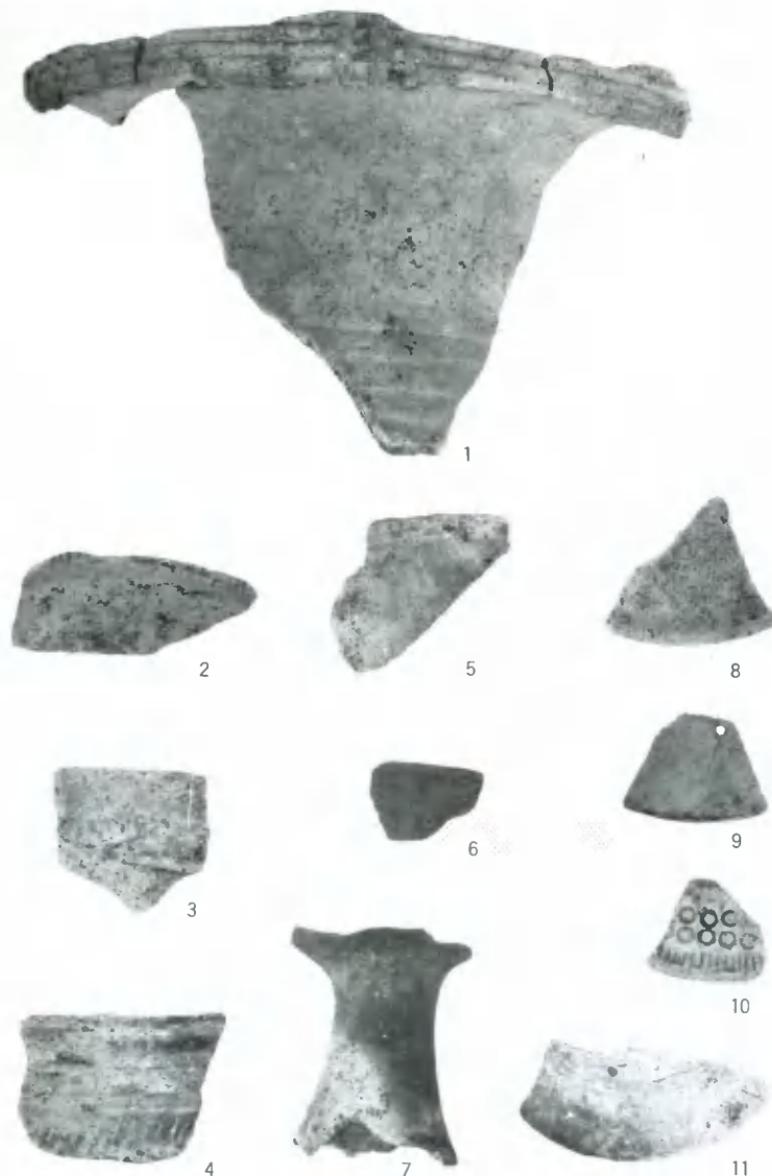
図版 8



1. 2号住居址（西から）

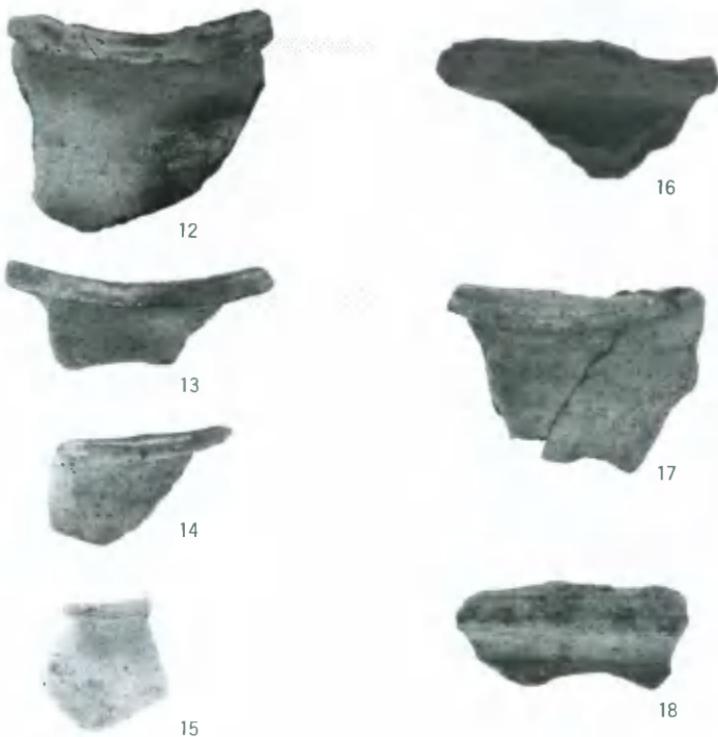


2. 土 壤（西から）



2号住居址出土の土器(1)

図版10



1. 2号住居址出土の土器 [2]



2. 土壌出土の土器

図版11



1. 1号住居址出土の石器



2. 2号住居址出土の石器

図版12



1. 殿山古墳群昭和55年度調査風景（13号墳墳丘測量）



2. 昭和55年度調査風景（8号墳表土剥ぎ）



1. 昭和55年度調査風景（21号墳主体部検出作業）



2. 昭和55年度調査風景（11号墳第2主体部の実測）

図版14



1. 昭和56年度調査区全景（南から）



2. 昭和56年度調査完了後の全景（北から）



1. 昭和56年度調査風景 (14号墳)



2. 昭和56年度調査風景 (13号墳周溝)

図版16



1. 8号墳調査前の墳丘（北東から）



2. 主体部（北東から）



1. 調査後の墳丘（北東から）



2. 周溝断面（東から）

図版18



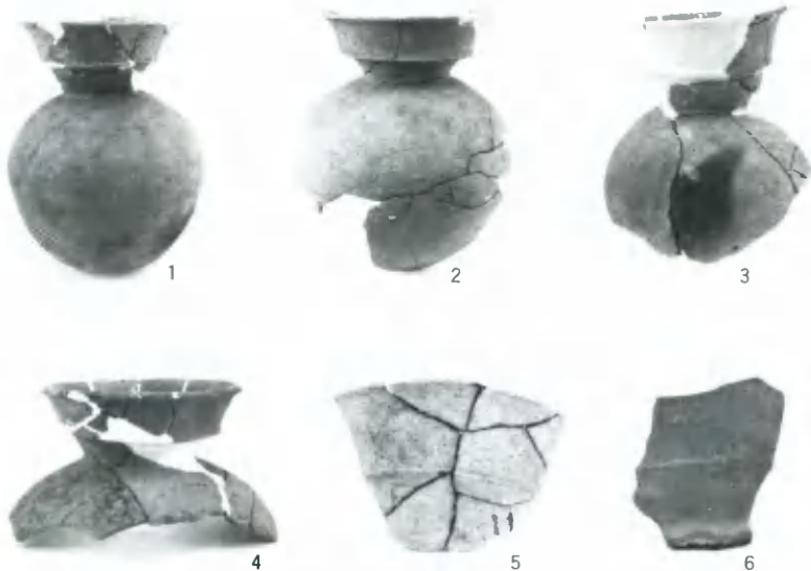
1. 周溝内土師器出土状態（北東から）



2. 周溝内鋳造鉄斧出土状態（南東から）



1. 8号墳周溝内出土の鋳造鉄斧



2. 8号墳周溝内出土の土師器

図版20



副葬品（鉄製品 上、玉類 下）



1. 9号墳調査前の墳丘（北東から）



2. 第1主体部 向う側 と第2主体部 手前（北東から）

図版22



1. 第1主体部の鏡出土状態（東から）



2. 第1主体部（北から）



1. 第1主体部北端遺物出土状態（西から）



2. 第2主体部検出状態（東から）

図版24



1. 第2主体部蓋石除去後（南西から）

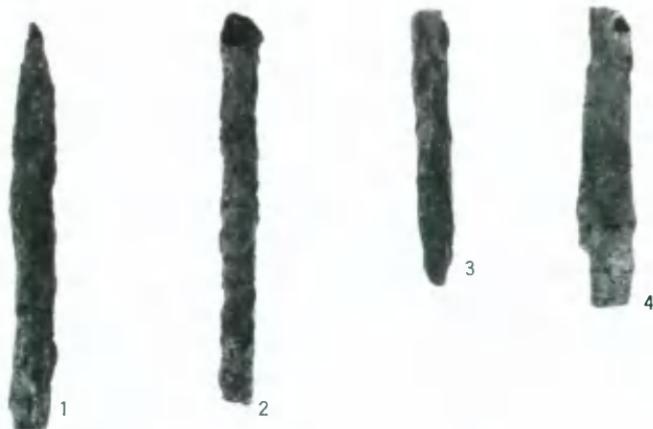


2. 調査後の墳丘（北東から）



第1主体部の副葬品（鏡 上、玉類 下）

図版26



1. 第1主体部の副葬品（鉄製品）



2. 第2主体部の副葬品



1. 10号墳調査前の墳丘（北東から）



2. 第1主体部 右 と第3主体部 左（南から）

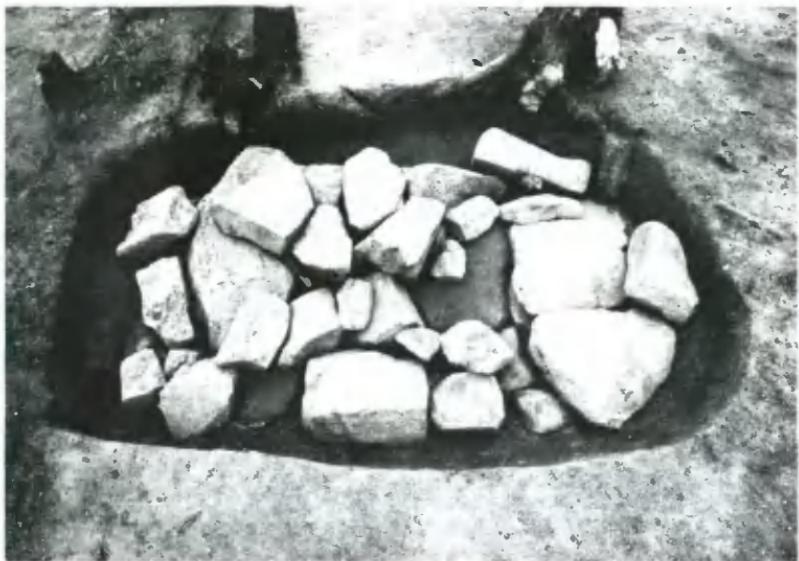
図版28



1. 第1主体部（南から）



2. 第1主体部北端遺物出土状態（東から）



1. 第2主体部検出状態（北東から）



2. 第2主体部蓋石除去（北東から）

図版30



1. 第3主体部（南西から）



2. 調査後の墳丘（北から）



第1 主体部の副葬品

図版32



1. 11号墳調査前の墳丘（北から）



2. 調査後の墳丘（北から）



1. 周溝（東から）



2. 列石と西側周溝（北から）

図版34



1. 第1主体部検出状態（北から）



2. 第1主体部（北から）



1. 第2主体部（南から）



2. 第3主体部検出状態（北西から）

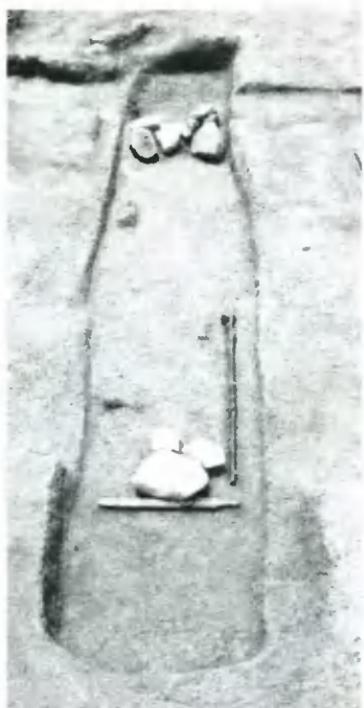
図版36



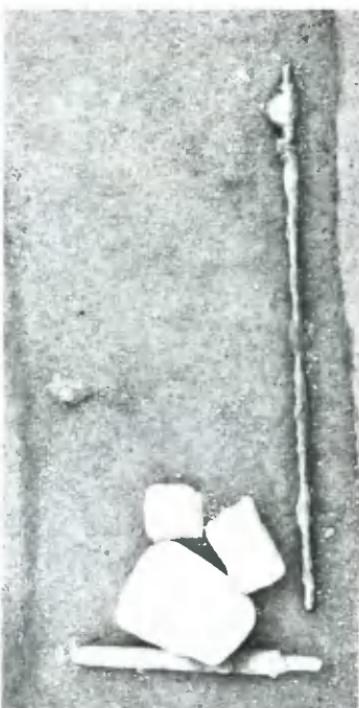
1. 第3主体部蓋石除去（東から）



2. 第3主体部床面（南から）



1. 第4主体部（北から）



2. 第4主体部北端（北から）

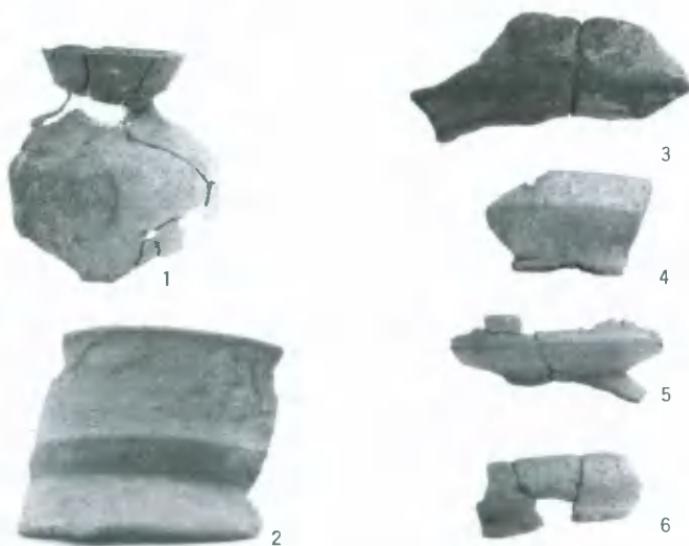


3. 第4主体部南端（東から）

図版38



1. 西側の周溝と配石土壙



2. 周溝内出土の土器

図版39



1. 第2主体部副葬品



1
2



2. 第3主体部副葬品



3. 第4主体部副葬品 1

図版40



第4主体部副葬品 2



1. 12号墳調査前の墳丘（北から）

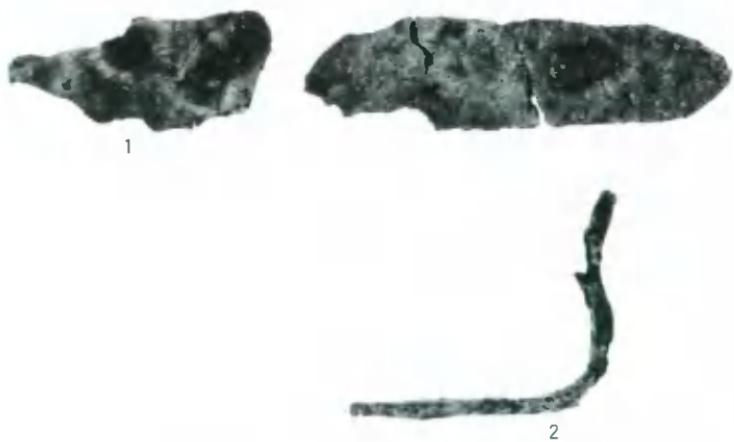


2. 調査後の墳丘（北から）

図版42



1. 墓頂部の枕石と副葬品出土状態



2. 副葬品



1. 13号墳調査前の墳丘（北から）



2. 表土除去後の墳丘（北から）

図版44



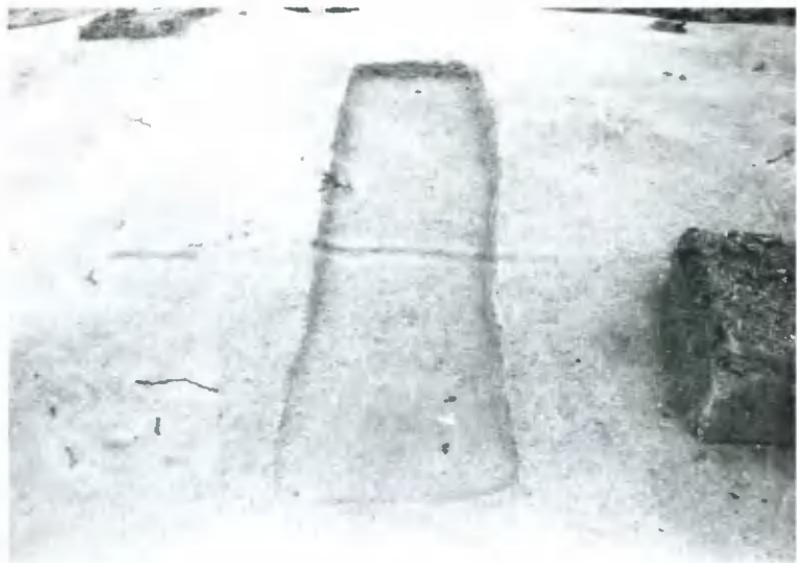
1. 調査後の墳丘（北から）



2. 第1主体部 向う側・第2主体部 手前（北から）



1. 第1主体部（東から）



2. 第2主体部（東から）

図版46



1. 墳丘断面 S線 (北東から)



2. 墳丘断面 N線 (北東から)



1. 周溝断面（東から）



2. 第1主体部副葬品

図版48



1. 14号墳調査前の墳丘（北から）



2. 14号墳調査前の墳丘（南から）



1. 表土除去後の墳丘（南から）



2. 調査後の墳丘（北から）

図版50



1. 第1主体部 向う側 と第2主体部 手前 (北から)



2. 周溝断面 (東から)



1. 15号墳調査前の墳丘（北から）



2. 15号墳調査前の墳丘（南から）

図版52



1. 表土除去後の墳丘（南から）



2. 調査後の墳丘（北から）



1. 第1主体部と墳丘断面 S線 (北東から)



2. 第2主体部 (北東から)

図版54



1. 周溝断面（東から）



2. 墳丘出土の土器



3. 第1主体部副葬品



1. 16号墳調査前の墳丘（南から）



2. 調査後の墳丘（南から）

図版56



1. 周溝 北側 断面（東から）



2. 墳丘出土の土器



1. 21号墳全景（北から）

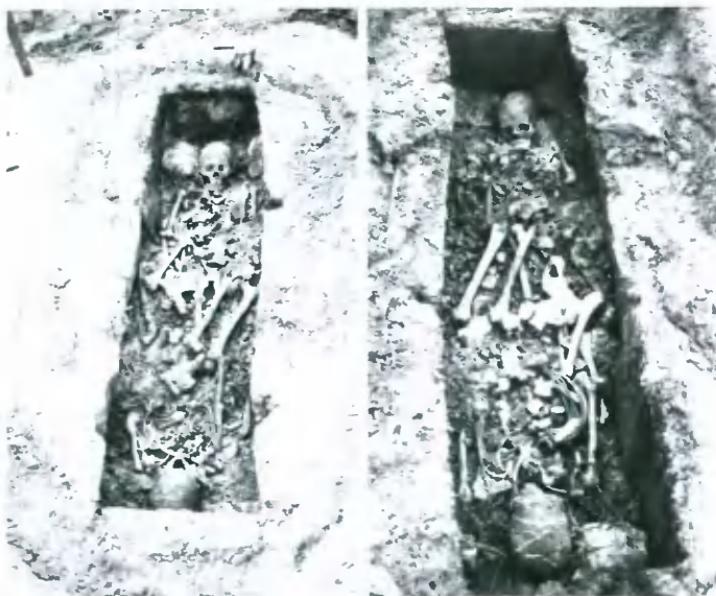


2. 第1主体部 右と第2主体部 左（西から）

図版58



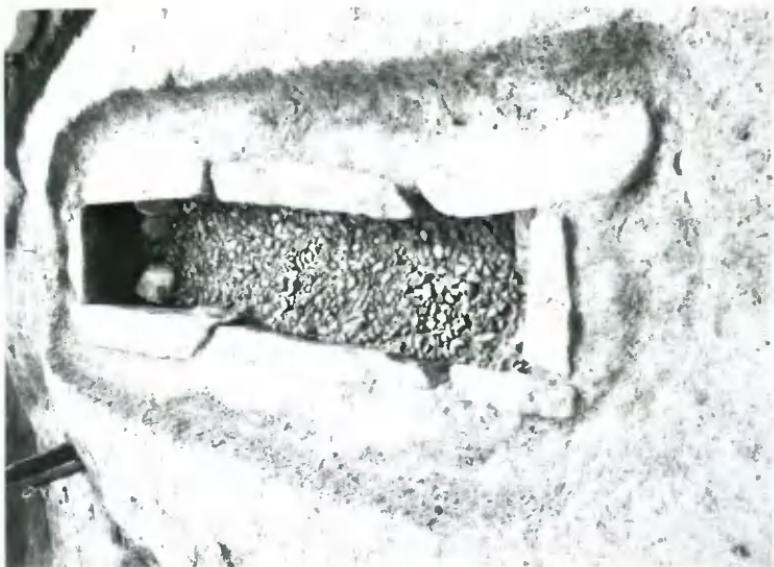
1. 第1主体部検出状態（西から）



2. 第1主体部蓋石除去直後（右は東から、左は西から）

図版59

2. 床面の状態（西から）



1. 人骨出土状態（西から）



図版60



1. 第2主体部横断面（西から）



2. 第2主体部（北から）



1. 第2主体部墓壙（西から）



2. 調査後の墳丘（北西から）

図版62



1. 1号箱式石棺墓検出状態（北東から）



2. 蓋石除去後（北西から）



1. 2号箱式石棺墓検出状態（北から）



2. 蓋石除去後（北から）

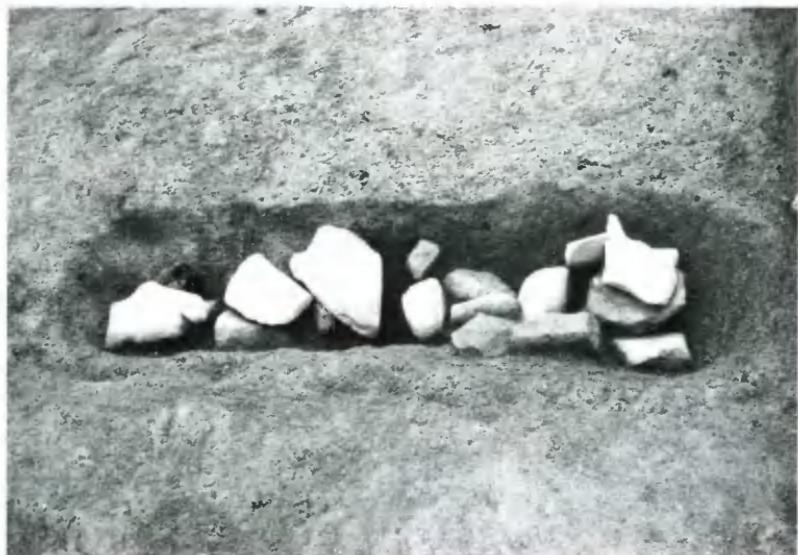
図版64



1. 墓 塚 (北から)



2. 墓塚内出土遺物



1. 配石土壤墓検出状態（東から）



2. 配石除去後（東から）

図版66



1. 1号土壤

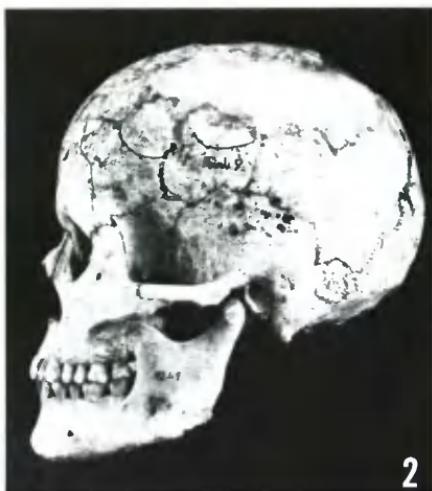


2. 2号土壤



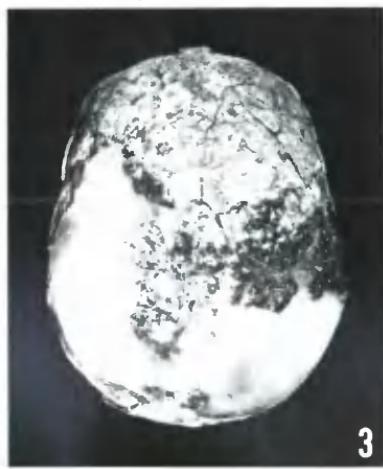
1

前面觀



2

側面觀



3

上面觀

9号墳第2主体部出土頭蓋骨

図版68



1

頭蓋骨前面觀



2

頭蓋骨側面觀



3

頭蓋骨上面觀



4

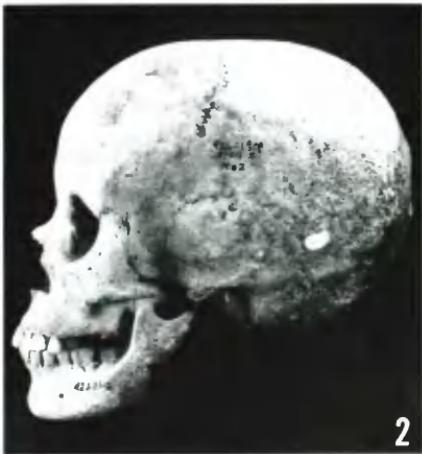
治癒骨折痕のある肋骨（外面）

21号墳第1主体部第1号人骨



1

頭蓋骨前面觀



2

頭蓋骨側面觀



3

頭蓋骨上面觀



4

上腕骨（前面）

21号墳第1主体部第2号人骨

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 47

殿山遺跡・殿山古墳群

1982年 3月 20日 印刷

1982年 3月 30日 発行

編集発行 岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6

印 刷 西尾総合印刷株式会社
岡山市津高651